

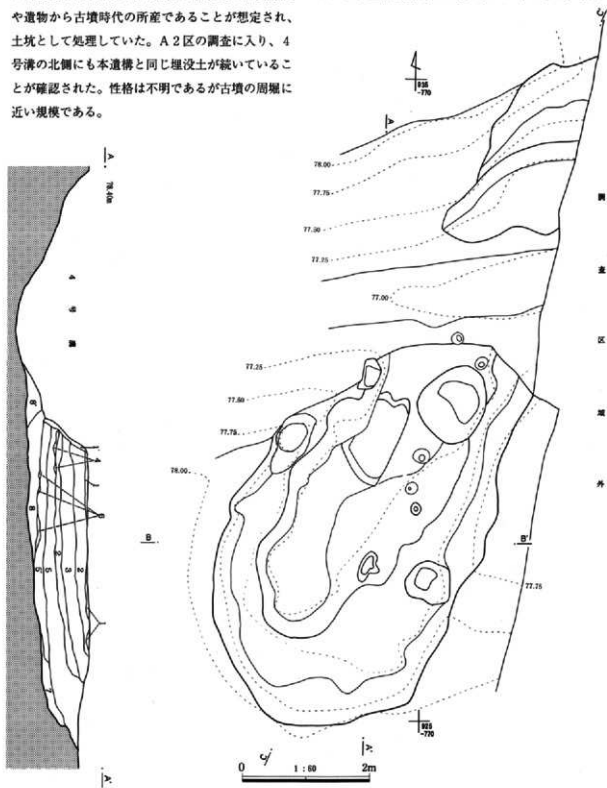
第214図 A2区1号溝出土遺物

A1区111号土坑 (第215~217図 PL-26)

As-Bの順層が堆積する落ち込みとして確認された遺構であり、当初は竪穴住居を想定していた。掘り下げ段階で床面がなく、底部は不整であるが埋没土や遺物から古墳時代の所産であることが想定され、土坑として処理していた。A2区の調査に入り、4号溝の北側にも本遺構と同じ埋没土が続いていることが確認された。性格は不明であるが古墳の周堀に近い規模である。

位置 925・930-765G。竪穴住居が途切れる一画である。北東隅は調査区域外になっている。

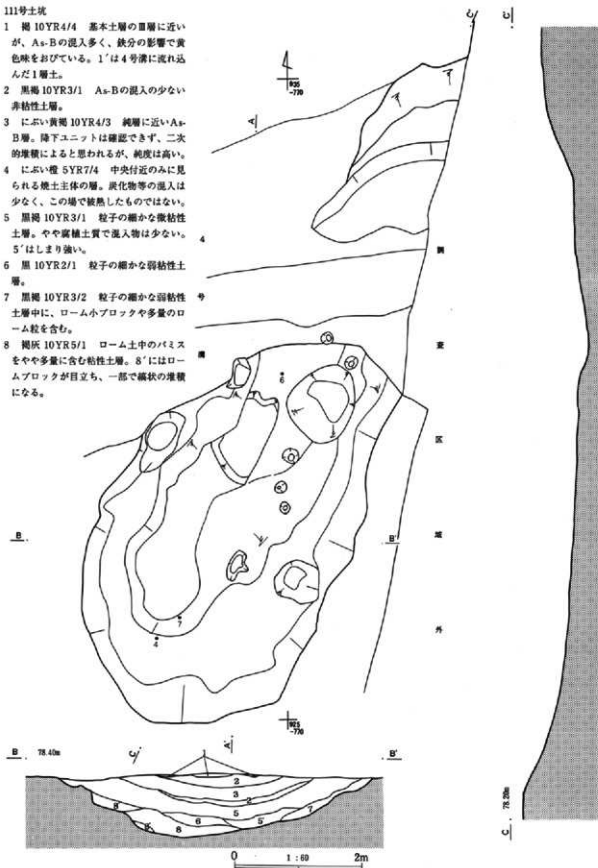
形状 調査範囲では直線的に伸びているが、北側へはこれ以上、直線的には続かないようである。北東



第215図 A1区111号土坑(1)

111号土坑

- 1 層 10YR4/4 基本土層の目層に近いが、As-Bの混入多く、鉄分の影響で黄色味をおびている。1'は4号溝に流れ込んだ1層土。
- 2 黒褐色 10YR3/1 As-Bの混入の少ない赤粘性土層。
- 3 ぶい質褐色 10YR4/3 純層に近いAs-B層。降下ユニットは確認できず、二次的堆積によると思われるが、純度は高い。
- 4 ぶい質 5YR7/4 中央付近のみに見られる機土主体の層。炭化物等の混入は少なく、この場で被熱したものではない。
- 5 黒褐色 10YR3/1 粒子の細かな微粘性土層。やや腐植土質で混入物は少ない。5'はしまり強い。
- 6 黒 10YR2/1 粒子の細かな弱粘性土層。
- 7 黒褐色 10YR3/2 粒子の細かな弱粘性土層中に、ローム小ブロックや多量のローム粒を含む。
- 8 褐色 10YR5/1 ローム土中のパミスをやや多量に含む粘性土層。8'にはロームブロックが目立ち、一部で織状の堆積になる。



第216図 A1区111号土坑(2)

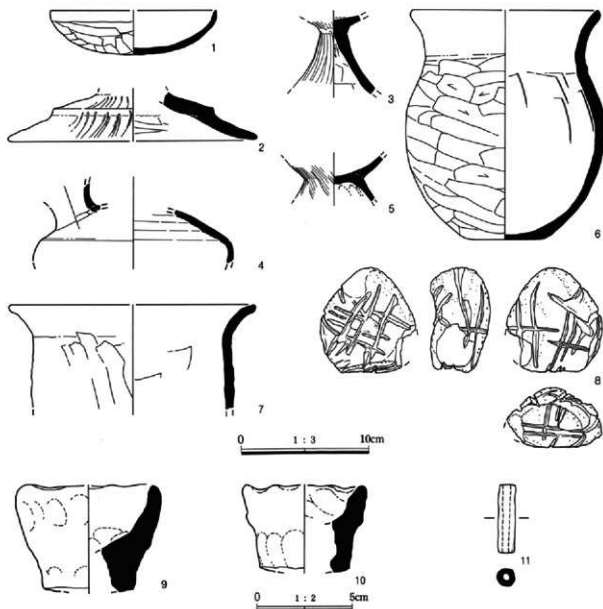
隅で屈曲し東側に続く可能性がある。断面は逆台形状を呈し、底面は狭くやや不整でピット状の窪みがある。柱痕は確認できない。古墳時代の他の溝とは形状が異なる。古墳周掘を想定した場合、東側の傾斜が緩やかで東方に墳丘を想定することも可能だが、掘り込み面は南側で明らかに途切れている。
 規模 確認できた範囲内で長さは11.5mある。確認面からの深さは最大80cmであるが、ピット状や土坑状の窪みがあって底面から10～15cm深くなっている部分がある。

重複 4号溝に先出している。

備考 A2区1号溝は本土坑と合流するはずである。

遺物 11点を図示した。平安時代末まで窪んでいた遺構としては、遺物は古墳時代のものに傾斜している。手捏ね9・10や管玉11などの特殊遺物の出土が目される。不明経石製品8は中世以降の遺物の混入品であろう。

その他の遺物 古墳時代前期から平安時代までの約400片を出土している。



第217図 A1区111号土坑出土遺物

5 中世館と溝

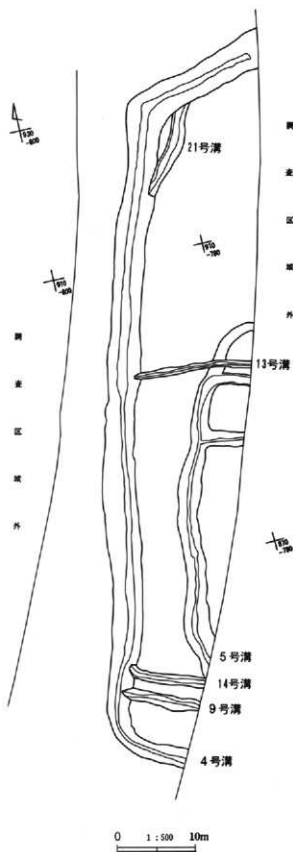
A1区の東側約50mにある下滝館については『新編 高崎市史 資料編3』に記されている。この中で本遺跡調査範囲にまで続く西側外郭の散在が想定されていた。今回の調査では想定された位置からは北側に外れていたが、その類推を表付ける遺構が確認されている(本文10頁、第9図参照)。

4号溝が外側を区画する中心的遺構となり、深さ・幅・長さとも群を抜く規模となっている。ただし、南側では規模を減じているが、9・14号溝は4号溝南側と並行して開削されている。同溝と併せて二重・三重の区画を作る可能性または、作り直しの溝となる可能性がある。4号溝の西側では掘り直しの痕跡が、平面・断面の両方から確認できる。北西隅内側付近では21号溝が隅部分を近回りするよう開削されているが、4号溝に先出する施設である。

5号溝は4号溝の内側にある溝で、二重区画をつくる溝と思われるが、出土遺物量や埋没土に大きな差が見られる。南西隅のすみも大きく4号溝とは趣向が大きい。西側は4号溝と並行している。また、北側に規模二重以上の区画または規模の変更を行なった溝がさらに2条開削されている。

4・5号溝は中世館の外郭を作る溝であるが、中世遺物の出土はきわめて少ない。1783(天明三)年段階では両溝とも開口していたことが確認されているが、その後比較的短期間に埋め戻されている。遺物は周辺の堅穴住居から流れ込んだ古代の土器と、廃絶時期に近い江戸時代後期の遺物が中心である。

13号溝も中世の館屋の区画に沿ったもので、5号溝の北側に平行して開削され、4号溝とは垂直に合流している。



第218図 方形館と溝の配置

4号溝 (第219~238回 P L-27・28)

発掘調査前は畑の地境の道であった部分である。重機による試掘調査がいきなり本溝の中央にあたるという不運から、底面を壊している部分がある。土層の観察から1783(天明三)年のAs-A降下以降にも埋没しきっていないことがわかる。

位置 調査区域に並行するようにして西側区画部分の溝の全容が現れている。北東側の境界は930-765Gに、南東側の境界は845-795Gにあり、これ以東は調査区域外になっている。

形状 南西隅はやや丸みがあり鈍角気味だが直角に近く、北西隅は120°近い鈍角だが整った角を保って曲がっている。その間はほぼ直線的につながっているが、南隅付近は外反するように小さく曲がっている。壁は緩やかに立ち上がっている部分が多く、旧状はあまり留めていないようである。底面は比較的平坦であるが一律でない。底面レベルは緩やかな凹凸があって一定していない。北側の方が深い部分が多く、井野川へ向って排水するような機能は備えていない。埋没土の断面観察からは水が溜まっていた痕跡が確認できる。発掘調査が終了する冬期まで溝内は水が切れることはなく、開削直後から水を溜えた溝であったと思われる。

規模 西側部分で長さ82mある。北側で16.5m・南側で10mが調査範囲内にあり、全長は調査範囲内だけでも110m近くになる。

上幅は3.8m前後だが、南隅では狭く2.2m前後になっている。ただし、西側溝の南側半分は掘り直しによって上幅の規模が拡大しているの、当初は南側半分で2m台上幅だったと推測される。下幅は北側で0.8~1.2mある。南側では0.8m下の部分が多く、幅30cmほどの2段底状部分も見られる。

軸方向 N-11°-E前後。北側はN-75°-E、南側はN-57°-W前後になる。

重複 A1区13・14・17・25号住居をはじめとする古墳時代から平安時代までの多数の住居に後出している。14・21号溝にも後出している。

備考 CからE断面で掘り直しの痕跡が顕著に見ら

れる。14号溝との合流部分から南側はやや外反するように曲がっており、14号溝が方形区画当初の南側区画溝であったものと考えられる。4号溝南側部分は区画を拡張した際の溝と考えられるが、9号溝との新旧は不明である。

西にある調査区域隣の断面2地点で土塁の痕跡の確認に努めたが見つかっていない。埋没土にも土塁の存在を想定させるような一方からのローム土混じりの層は確認できない。

As-Aの堆積は上面にのみ見られ、その後の沈降を考えれば天明三年段階では本溝はかなり埋没していたと推測される。特に北側で見られる混入物の少ない部分は復旧作業の灰掻きの痕跡であろう。

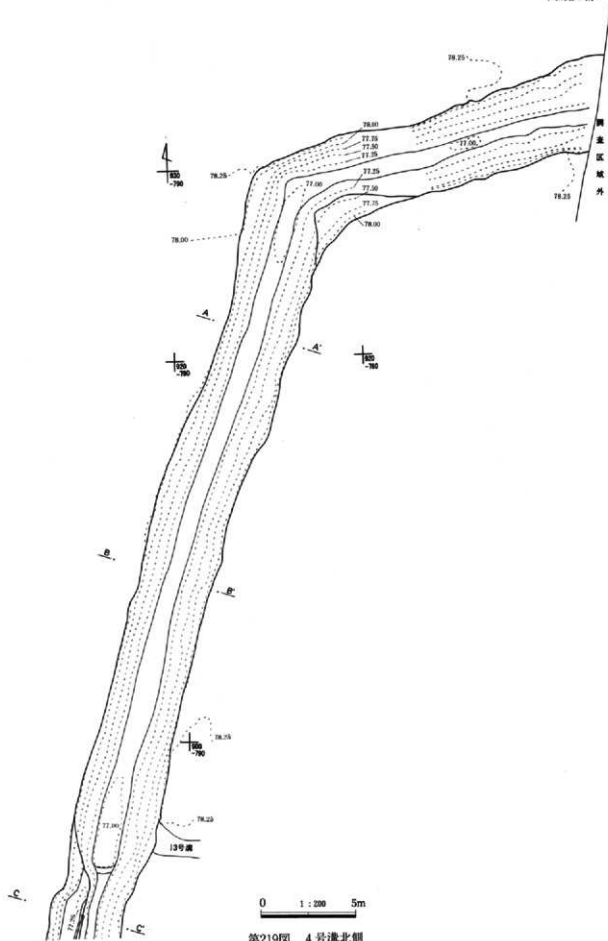
遺物 膨大な量の遺物が出土している。近世の陶磁器や土器類が中心で、中世の遺物は散在する程度である。古代の遺物の流れ込みも多い。近世の遺物は下層には見られないが古代の遺物は上層にも多数見られる。これらのうち210点を図示した。

陶磁器碗皿類が最も多く、1~74がある。1区から4区の間で出土したものが大半である。磁器では6~10や16~19に示した意匠の染付けが他にも多数出土している。陶器では31~46に示した釉の掛け分けの碗が特に多いが、完形近くまで復元できるものが多いのが特色である。

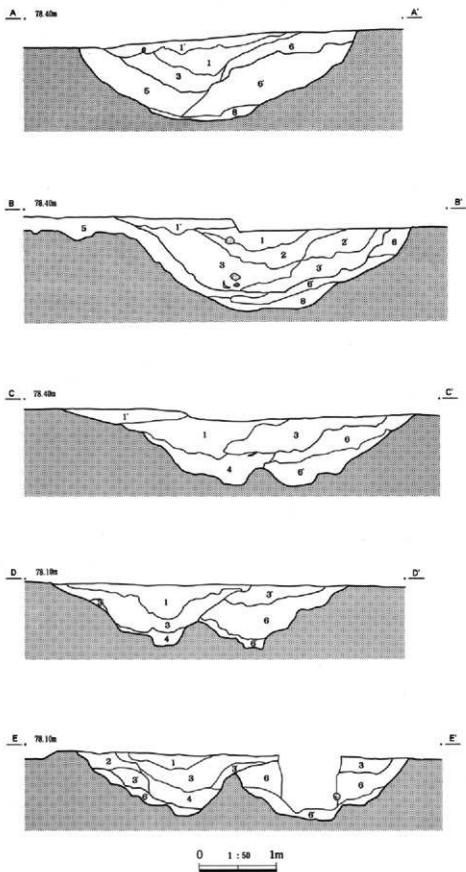
北方にある慈眼寺との関連で仏具類の出土には注視し、出土したものは全点図示したが数は多くない。仏飯器82~85や仏花器86などは、寺院用のものではなく、一般向けのサイズであろう。土製の人形2点が恵比寿111と大黒112である点は、むしろ商家を連想させられる。

数少ない中世遺物には焼締陶器壺109・110の口縁小破片がある。口縁破片の出土はこの2点のみで、これ以外にも胴部小片がわずかに見られるのみである。かわかけ類の出土もきわめて少なく、図示できたのは106~108の3点で、鉄軸の灯明皿類には102~105以外にも破片の出土が多く、素焼きの小皿より多く見られる。

素焼きの遺物では焙烙類が顕著で、135~144を因



第219図 4号溝北側



第220図 4号溝断面

示したがこれ以外にも破片の出土は多い。瓦類146～156は近世末以降のものとなるが、これについては紙石類166～187とともに14章で別途説明を加えている。石臼や石鉢類の出土も少なく、石臼小破片3点194～196を図示できたのみである。

古代遺物は14点を図示した。土師器杯198と壺207が下層出土である。須恵器円面硯の脚部破片204があり、注目される。

その他の遺物 総数で約7000点の遺物を出土している。破片数では土師器・須恵器が中心となっているが、大破片は焙烙や銅網など中世以降の土器類が多い。溝内をセクションベルトに沿って区で分け、出土地点を図示しなかった埋没土内遺物をこの区を使って取り上げている。地区別の出土傾向の概要は以下のとおりである。

1区 18世紀代の陶器碗類を中心に陶磁器は25片、焙烙等の土器が約40片ある。これらには大破片が多い。土師器約470片と須恵器約30片が混入している。土師器は高杯や厚手甕等の5世紀代の遺物が中心で、平安時代の小破片が若干混じっている。明確な中世遺物は見られない。

2区 陶磁器はいずれも小片で15片、焙烙・火鉢等の土器約40片がある。18世紀とそれ以降の遺物がほとんどで、明らかな中世遺物は見られない。土師器約460片と須恵器約40片が混入している。土師器は細片が中心である。須恵器は叩きのある甕に中破片サイズが混じっている。

3区 陶磁器30片、焙烙等の土器約70片がある。陶磁器は陶器碗・壺・香炉・摺鉢等器種豊富で大型破片がある。18世紀以降の遺物が中心である。明らかな中世遺物は見られない。土師器約650片・須恵器約60片が混入している。土師器は台付甕・器台など古式土師類に大破片が目立つ。

4区 瀬戸美濃系の碗を中心に陶磁器約30片、焙烙を中心とする土器約90片がある。18世紀代の遺物がほとんどだが、須恵器か中世焼き締め陶器か区別のできない胴部片が数片混じっている。土師器が約700片、須恵器が約80片混入している。土師器は大

半が小片や細片で、大破片は高杯など5世紀代の遺物が中心となる。刷毛目は2%ほどである。須恵器は壺・甕類など厚手のものが多く杯類は少ない。

5区 陶磁器は約40片出土しているが、明治時代以降の磁器碗がほとんどで、江戸時代の遺物は瀬戸美濃系の碗皿類が少量混じる程度である。焙烙等の土器類は江戸時代のものを中心に約20片で、16・17世紀頃の播り鉢が混じる。土師器約650片、須恵器約30片が混入している。土師器はほとんどが小片・細片で古墳時代の土器が中心である。刷毛目は1%ほどしか含まれない。須恵器は厚手の壺・甕類が多く、杯類はほとんど見られない。

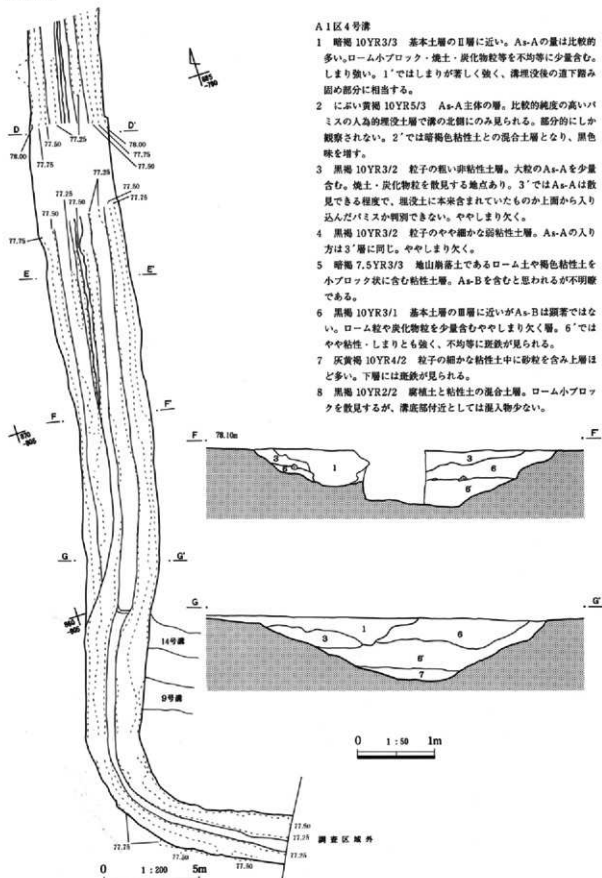
6区 陶磁器類の出土が少なく、焙烙等の破片と併せても10片ほどで、いずれも小破片である。5区に多かった明治時代以降の遺物は見られない。土師器約36片、須恵器約50片が混入している。遺物の傾向は5区に近いが、須恵器には奈良時代の壺や鉢が見られる。

7区 陶磁器類は13片でほとんど磁器碗類である。明治以降のものも混じっている。焙烙は1点のみである。中世の遺物は含まれない。土師器は約220点、須恵器は約40片混入していて、傾向は5区に同じである。

8区 陶磁器は碗類の5片のみで、明治時代以降のものが混じる。焙烙等の出土はない。土師器約360片、須恵器約30片が混入している。古墳時代前半から平安時代までの雑多な遺物が混在しているが、大破片は含まれない。

9区 陶磁器は13片で碗類が中心である。明治時代以降の遺物も混じる。焙烙等の土器類は約20点で、やはり明治時代以降の遺物が混じる。明治時代以降の瓦片も4片混じる。羽口細片が3片あるが、図示に耐えられるものではなかった。土師器約1080片、須恵器約110片が混入している。小破片が中心で点数に比べてポリウムはないが、同一個体の土師器甕胴部大破片が多数出土している。刷毛目のある甕類が3%ほど混じっている。

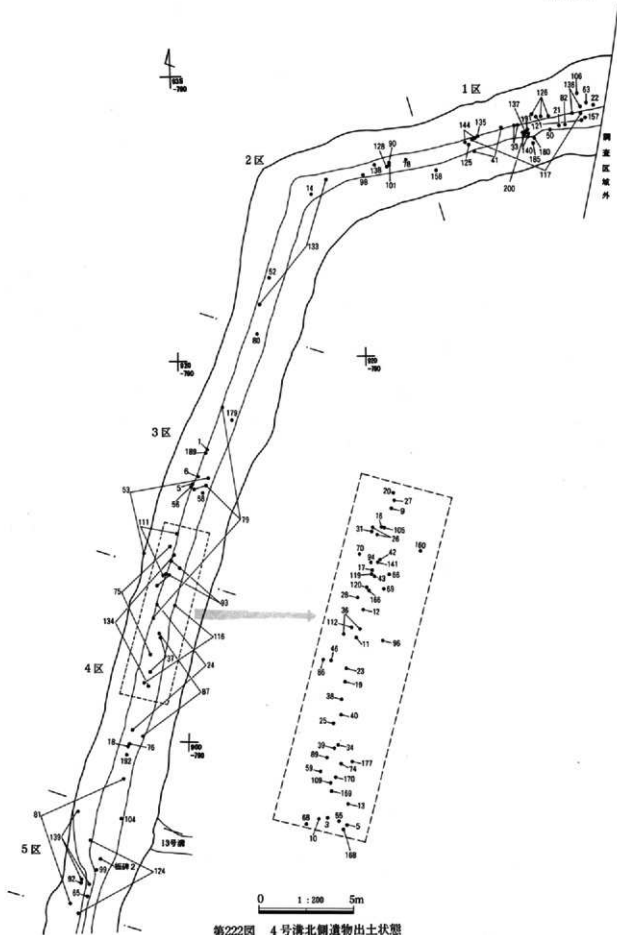
10区 陶磁器は12点で碗皿類が中心である。明治時



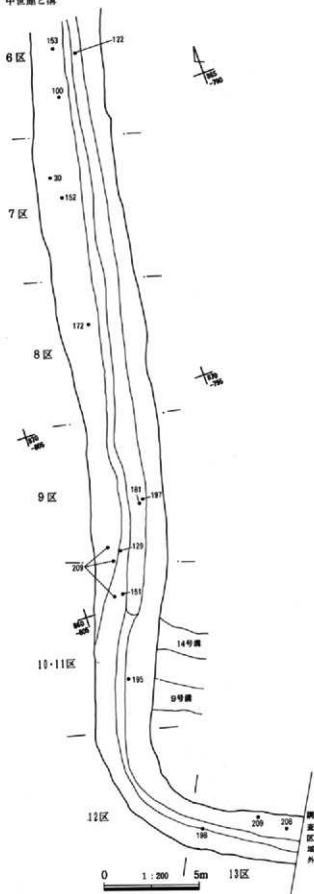
A1区4号溝

- 1 暗褐色 10YR3/3 基本土層のII層に近い。As-Aの量は比較的多い。ローム小ブロック・焼土・炭化物粒等を不均等に少量含む。しまり強い。1'ではしまりが著しく強く、溝埋没後の道下踏み固め部分に相当する。
- 2 にぶい黄褐色 10YR5/3 As-A主体の層。比較的純度の高いバミスの人為的埋没土層で溝の北側にのみ見られる。部分的にしか観察されない。2'では暗褐色粘性土との混合土層となり、黒色味を増す。
- 3 黒褐色 10YR3/2 粒子の粗い非粘性土層。大粒のAs-Aを少量含む。焼土・炭化物粒を散見する地点あり。3'ではAs-Aは散見できる程度で、埋没土に本来含まれていたものか上面から入り込んだバミスかと判別できない。ややしまり欠く。
- 4 黒褐色 10YR3/2 粒子のやや細かな非粘性土層。As-Aの入り方は3'層に同じ。ややしまり欠く。
- 5 暗褐色 7.5YR3/3 地山崩落土であるローム土や褐色粘性土を小ブロック状に含む粘性土層。As-Bを含むと思われるが不明瞭である。
- 6 黒褐色 10YR3/1 基本土層のIII層に近いがAs-Bは顕著ではない。ローム粒や炭化物粒を少量含むややしまり欠く層。6'ではやや粘性・しまりとも強く、不均等に炭鉄が見られる。
- 7 灰黄褐色 10YR4/2 粒子の細かな粘性土中に砂粒を含む土層はど多い。下層には炭鉄が見られる。
- 8 黒褐色 10YR2/2 腐植土と粘性土の混合土層。ローム小ブロックを散見するが、溝底部付近としては混入物少ない。

第221図 4号溝南側



第222図 4号溝北側遺物出土状態



第223図 4号溝南側遺物出土状態

代以降の遺物も混じる。焙烙は6点でやはり明治時代以降の遺物が混じる。中世の遺物は見られない。土師器約660片、須恵器約140片が混入している。土師器は小破片が中心で、刷毛目のある甕類から平安時代の甕類まで雑多である。須恵器は叩きのある甕類が中心だが、平安時代の杯類も多い。

11区 近世遺物は陶器揃り鉢片1片のみである。土師器約140片、須恵器18片が混入している。どちらも大破片は含まれない。土師器は薄手の甕胴部片が多く、奈良平安時代のものが中心である。須恵器も同時代の杯類の破片が多い。

12区 16・17世紀ころの無軸の鉢片が1点あり、他は10片の土師器・須恵器の混入品のみである。

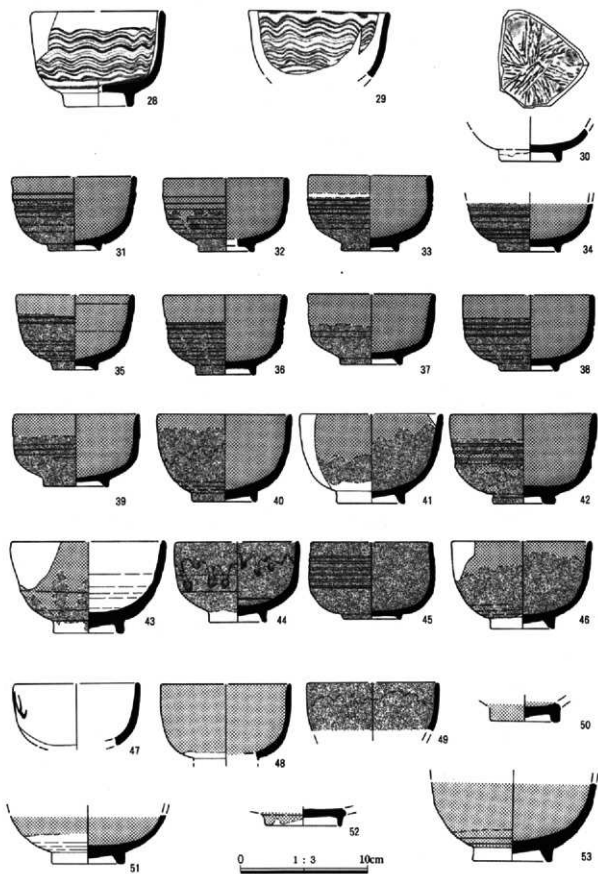
13区 中世以降の遺物は見られない。土師器約230片、須恵器10片が混入している。土師器はほとんどが小破片・細片で刷毛目のあるものからコの字状口縁の甕まで雑多である。須恵器は叩きのある壺の胴部破片である。

4・9溝 土師器約100片、須恵器約10片がある。小破片中心で、土師杯類は平底である。陶磁器は小片15片、焙烙等の土器類約50片で18世紀代が中心である。

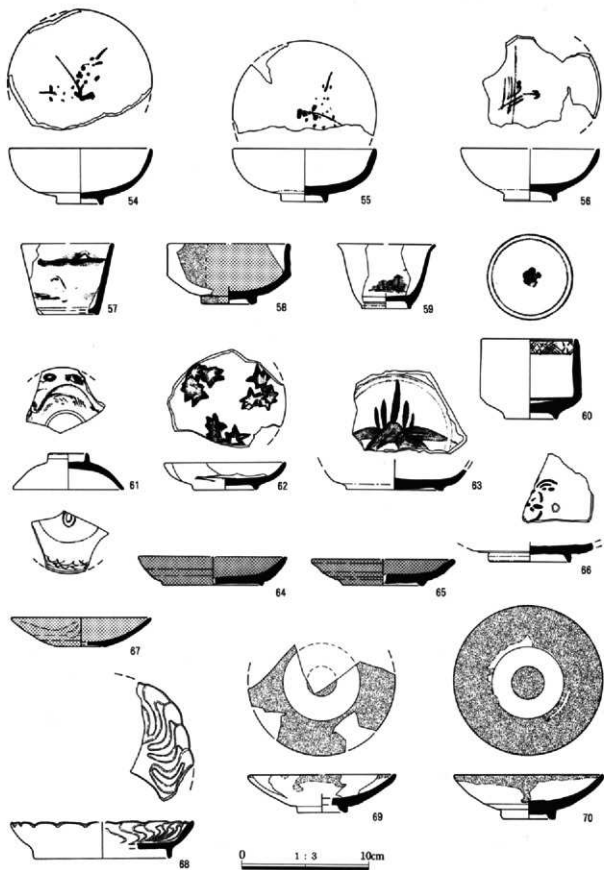
その他 陶磁器等近世遺物約20片、土師器約960片があるが、雑多な時期のいずれも小破片である。



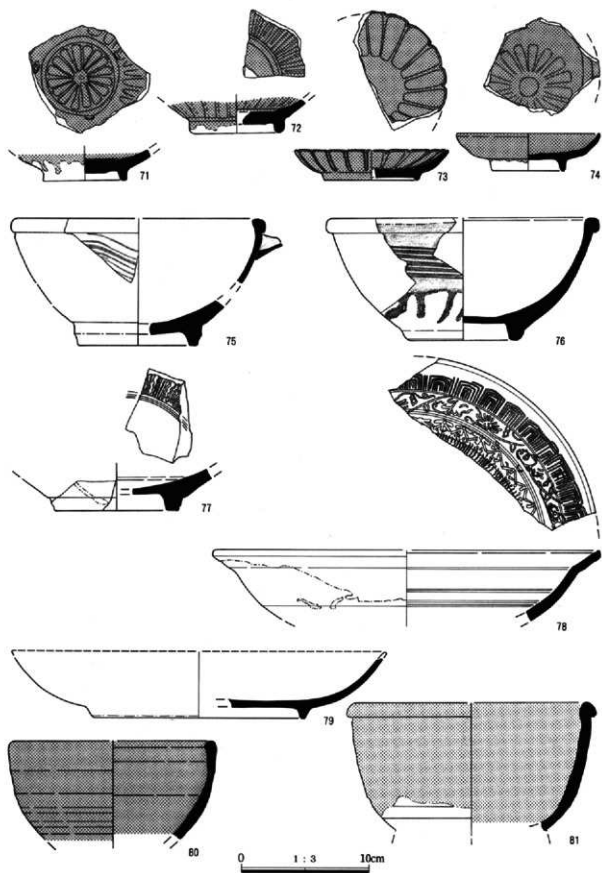
第224图 4号溝出土遺物(1)



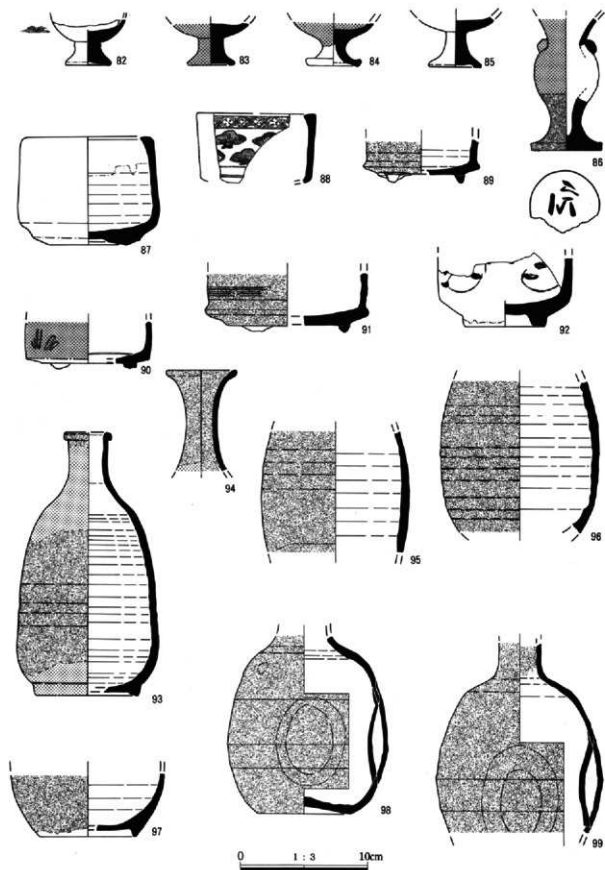
第225図 4号溝出土遺物(2)



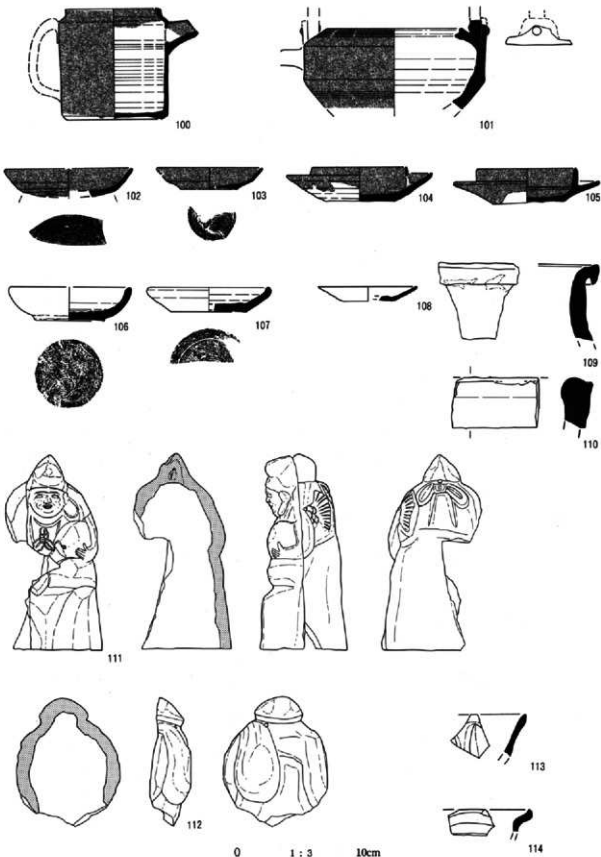
第226图 4号溝出土遺物(3)



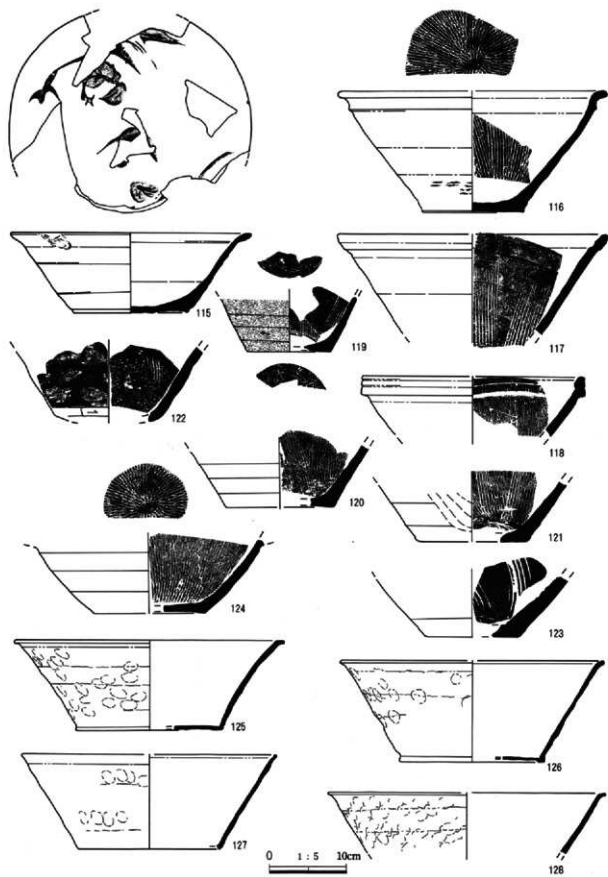
第227图 4号清出土遺物(4)



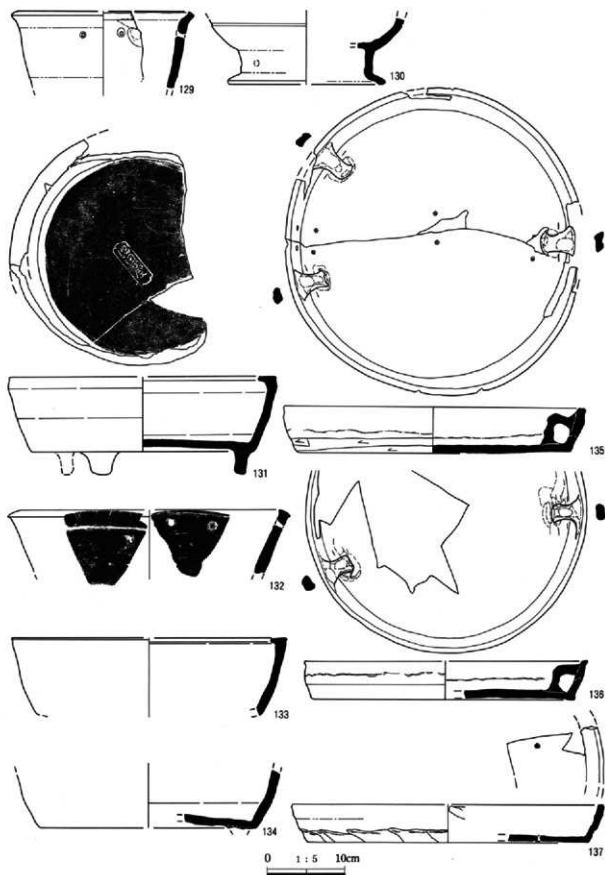
第228图 4号溝出土遺物(5)



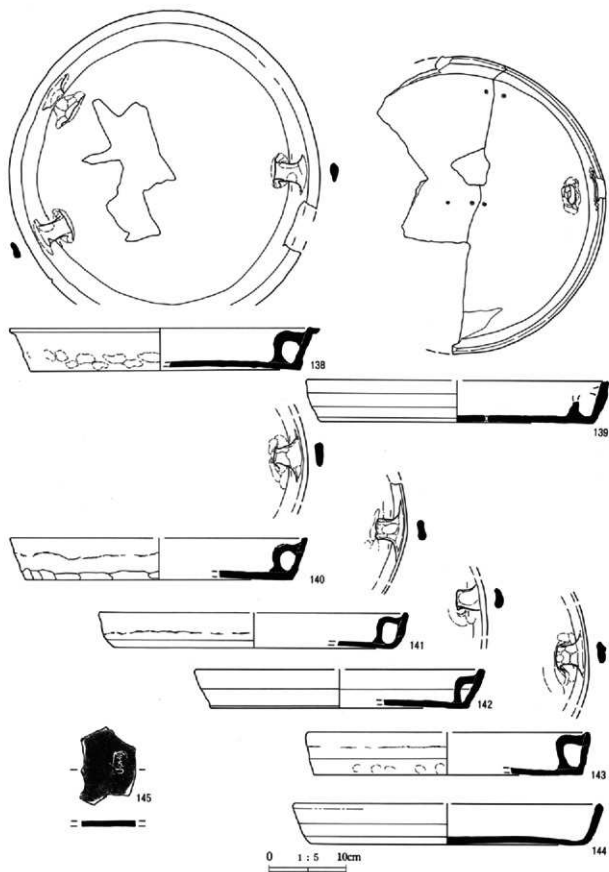
第229図 4号溝出土遺物(6)



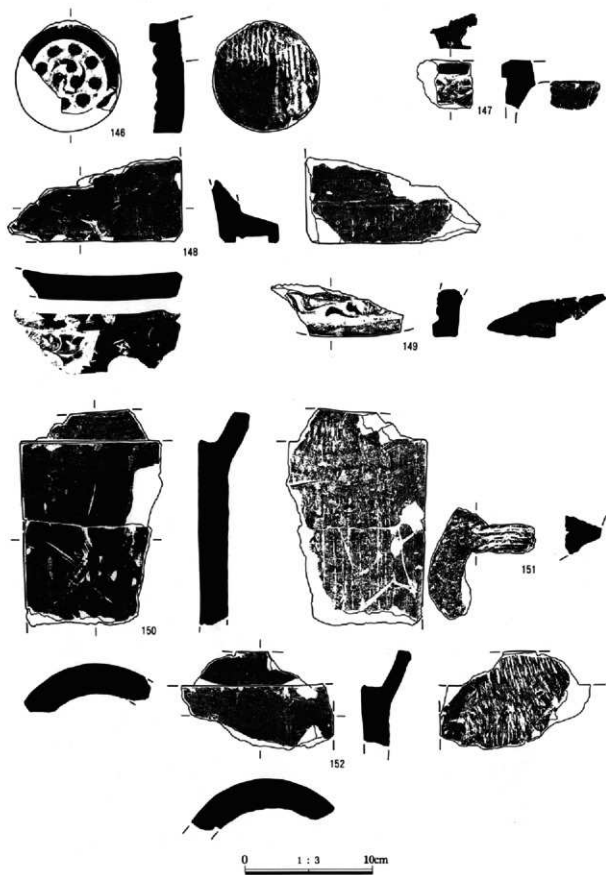
第230图 4号溝出土遺物(7)



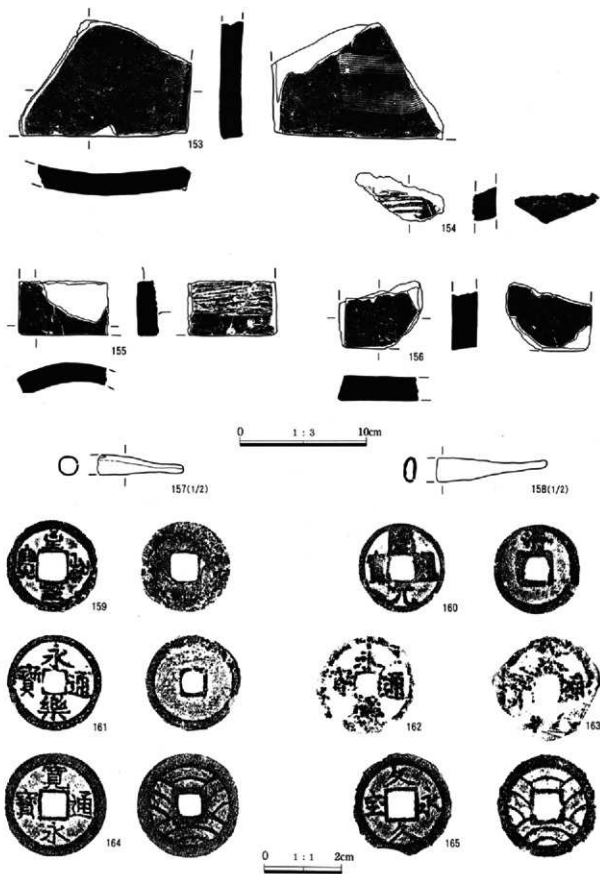
第231図 4号溝出土遺物(8)



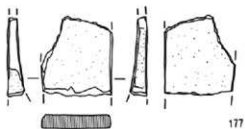
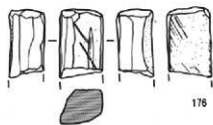
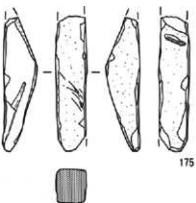
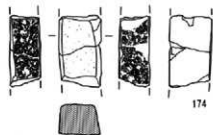
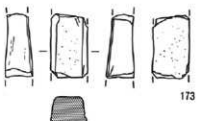
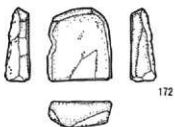
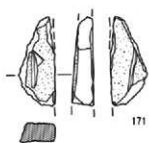
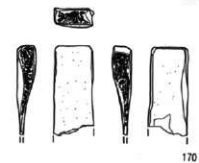
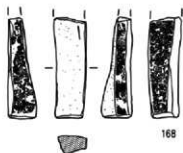
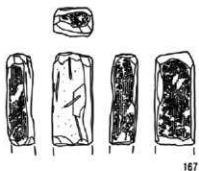
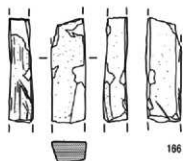
第232图 4号溝出土遺物(9)



第233图 4号溝出土遺物(10)

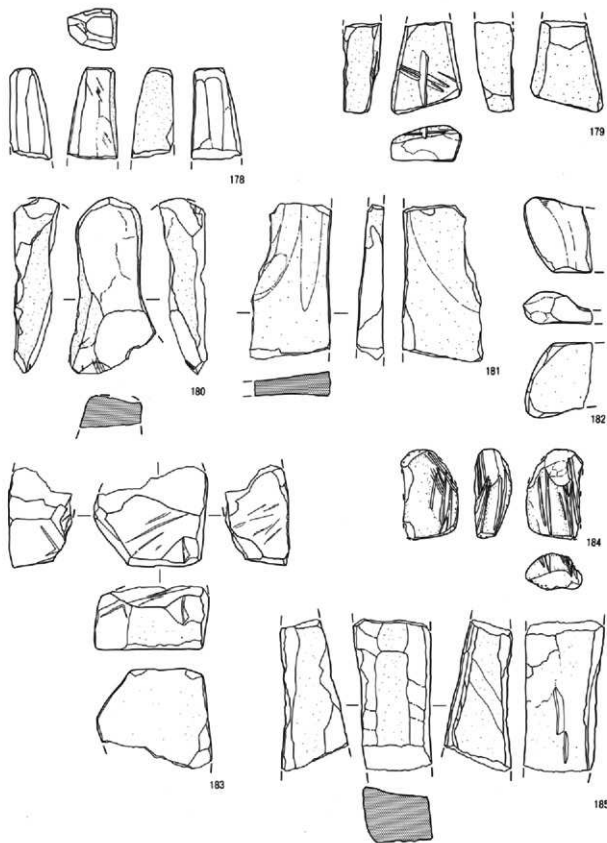


第234图 4号溝出土遺物(11)

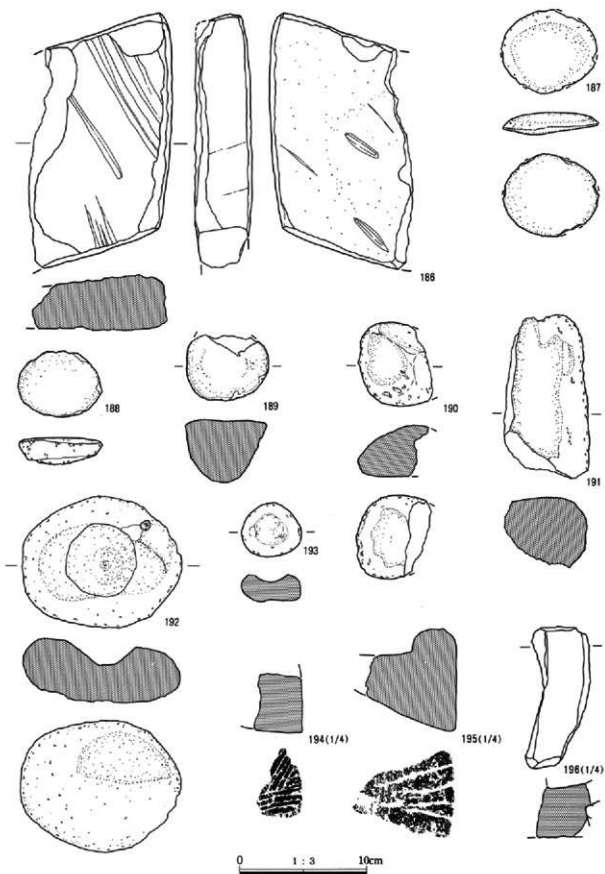


0 1 : 3 10cm

第235图 4号溝出土遺物(12)



第236図 4号溝出土遺物(13)



第237图 4号溝出土遺物(14)



第238図 4号溝出土遺物(15)

5号溝 (第239~241図 PL-28)

天明三年の浅間山火山性噴出物(As-A)が中層以上に多量に埋められている。災害復旧時の灰掻き作業によって短期に埋没した溝である。4号溝の内側にあり、下滝館西側外郭が二重堀であったことを覗かせる遺構である。ただし、4号溝に近接して平行に並ぶのは西側だけで、溝の規模や規格性・断面の形状などはかなり異なっている。

南北側に向って2回、規模の縮小のための新しい溝の開削を行なっているようで、北側より4B溝・4C溝と名付けている。

位置 855-790Gから895-775Gにかけて。

形状 北西隅は直角に近く、南西隅は鈍角に曲がっている。その間の直線部分は直線気味に伸びているが、歪みが大きい。4号溝との間隔も北側では5m前後なのに対し、南側では11m近く離れていて、平行しているとは言いがたい。

底面は皿底状に窪む部分が多いが、一定していない。底面レベルにも凹凸が多く、どちらか一方に傾斜するような傾向は認められない。

規模 西側は当初部分の4C溝までが長さ約43m、最終段階の4A溝までが長さ約28mになる。上幅はD断面以南では2.6m前後で、南隅付近では4m以上になる部分がある。4B溝では1.5m前後・4C溝では1.3m前後と幅狭になる。

軸方向 N-18°-E前後。4A溝部分はN-82°-W、4B溝部分はN-74°-Wになる。

重複 2・13号溝に後出している。

備考 As-Aが多量に含まれているのはD断面以南で、災害復旧のための灰掻き作業でこの溝は完全に埋没している。底面直上近くまでAs-Aの見られる部分もあり、天明三年段階では4号溝より深く窪んでいた。D断面以北は天明三年以前に埋没しているが、D断面付近にもAs-Aがみられることから最終的にA溝部分が開削された段階でも北側に向って溝後の窪みが残っていたことがわかる。

4号溝に比べて西側の溝は直線的でない。中世方形館の外郭溝としては歪みが多く、2重の堀であっ

たとするには疑問点も多い。

遺物 図示できたのは7点のみである。底面直上の出土遺物はない。陶磁器・土器類の1~3は小破片からの復元実測である。宝篋印塔4は本遺跡出土の唯一の墓石である。

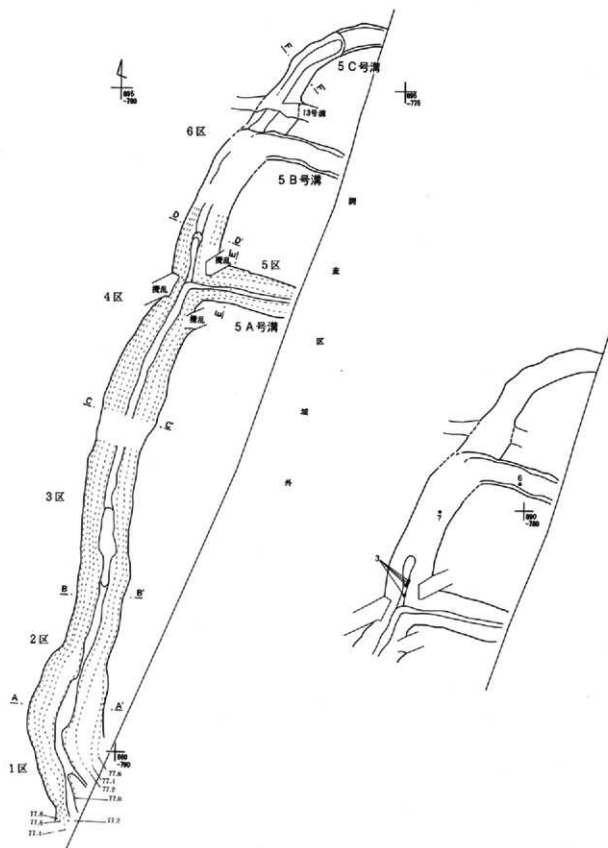
その他の遺物 総数で約1500片の土器が出土している。ほとんどが土師器・須恵器の小破片で焙烙や鍋類など中世以降の土器は少ない。4号溝に比べるとポリウムは2割に満たない。その他にも礫の出土はきわめて多く、最大で人頭大の大きさのものが含まれていた。4号溝同様に溝内をセクションベルトに沿って区を設定し、出土地点を図示しなかった埋没土内遺物をこの区を使って取り上げている。区毎の出土傾向の概略は次のとおりである。

1区 陶磁器や焙烙類は3片のみで、江戸時代後期と明治時代のものである。土師器約130片、須恵器約30片が混入している。土師器は小破片が中心で甕類が多い。刷毛目のある甕類も僅かに混じる。須恵器は叩きのある甕類が中心で、平安時代の杯が若干混じっている。

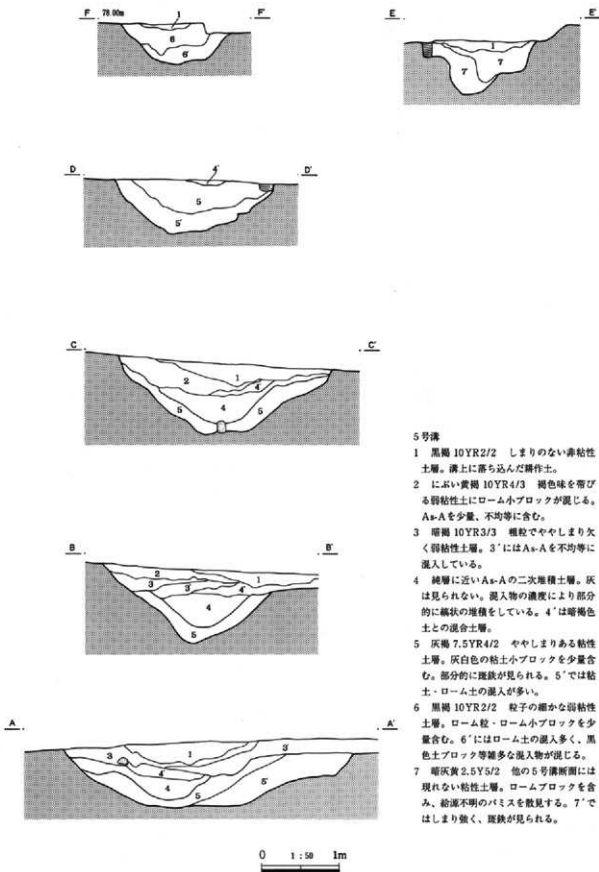
2区 陶磁器は18世紀ころの碗皿類4点と、中世の可能性のある焼き締め陶器甕胴部1片が出土している。焙烙類は10片で、江戸時代のもと思われる。土師器小片約300片、須恵器約60片が混入している。土師器は模倣杯がやや目立つ。刷毛目のある甕類はほとんど見られない。須恵器は甕類が中心だが、平安時代の有台杯も多い。

3区 陶磁器は3片出土していて、1点の中世の可能性のある焼き締め陶器甕胴部の大破片である。焙烙等の土器は6片で中世から江戸時代にかけての播り鉢大破片が混じっている。土師器約200片、須恵器約30片が混入している。土師器は小片・細片が中心で摩滅しているものが多い。須恵器は甕類胴部が中心で、平安時代の有台杯が少量混じっている。

4区 陶磁器は江戸時代以降の播り鉢1片のみである。焙烙・播り鉢や鉢などの近世土器類は10片ある。明治時代以降の遺物はなく、江戸時代前期頃の可能性のある遺物が混じる。土師器約400片、須恵器約



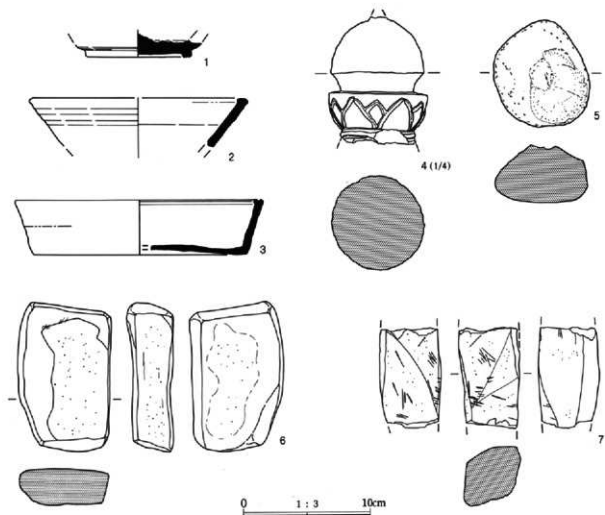
第239图 5号溝



5号溝

- 1 黒褐 10YR2/2 しまりのない非粘性土層。溝上に落ち込んだ耕作土。
- 2 におい黄褐 10YR4/3 褐色味を帯びる弱粘性土にローム小ブロックが混じる。A_s-Aを少量、不均等を含む。
- 3 暗褐 10YR3/3 粗粒でややしまり欠く弱粘性土層。3'にはA_s-Aを不均等に混入している。
- 4 純層に近いA_s-Aの二次堆積土層。灰は見られない。混入物の濃度により部分的に縞状の堆積をしている。4'は暗褐色土との混合土層。
- 5 灰褐 7.5YR4/2 ややしまりある粘性土層。灰白色の粘土小ブロックを少量含む。部分的に隆起が見られる。5'では粘土・ローム土の混入が多い。
- 6 黒褐 10YR2/2 粒子の細かい弱粘性土層。ローム粒・ローム小ブロックを少量含む。6'にはローム土の混入が多く、黒色土ブロック等種多な混入物が混じる。
- 7 暗灰黄 2.5Y5/2 他の5号溝断面には見れない粘性土層。ロームブロックを含み、起源不明のバミスを見える。7'ではしまり強く、面鉄が見られる。

第240図 5号溝断面



第241図 5号溝出土遺物

40片が混入している。土師器は小破片がほとんどで、刷毛目のある甕類から平安時代の甕まで雑多である。須恵器は甕類が中心で、杯類は奈良時代以前のものである。

5区 陶磁器や焙烙などの近世遺物が6片出土している。土師器約160片、須恵器約30片が混入している。土師器は小破片中心で刷毛目のある甕類から平安時代の甕まで雑多である。須恵器は叩きのある甕の他、瓶類が混じっている。

6区 近世遺物は焙烙1片のみである。土師器約110片、須恵器約20片が混入している。土師器は甕類の小片・細片がほとんどだが、須恵器には叩きのある甕の大破片が混じっている。

5C溝 中世の遺物の出土はない。土師器約280片、須恵器13片が混入している。いずれも小破片が中心で、土師器は模倣杯がやや目立つ。刷毛目のある甕類も5%ほど混じる。須恵器は甕類小片で時期を想定できるものは少ないが、奈良時代頃の杯が混じっている。

その他に土師器・須恵器併せて30片ある。

9号溝 (第242図 P L-29・30)

東側は調査区域外になり、西側は4号溝につながっている。4号溝南側の走行に平行している。

位置 850-795G。重複が多く、覆土の浅い一面で遺構の残存状態はきわめて悪い。

形状 小さな屈曲があるが、全体ではほぼ直線的に伸びている。底面は凹凸が多く、中世方形館の区画溝としては不自然であろう。底面レベルは西側に低く傾き、東隅と6cmの比高差を生じている。

規模 確認できた範囲の長さは10.2mある。上幅は1.4~1.9mで差が大きい。下幅は形状が一定していないが0.4m前後の部分が多い。確認できた壁高は17~28cm前後である。

重複 44・45号住居に後出し、141号土坑・15号溝には先出している。

軸方向 N-63°-W前後

備考 断面には掘り返し痕のような不整な堆積が見られる。上面に見られるAs-Aの薄い堆積は、本溝の埋没後に堆積したAs-Aが後に沈降したものであろう。調査段階でAs-Aと推定した下層に見られる軽石には疑問点が多い。

遺物 図示できる遺物はなかった。破片では土師器約300片、須恵器約30片出土している。2区からの出土が多い。中破片サイズの遺物が多いが大破片はまれである。古墳時代末から奈良時代にかけての遺物が目立ち、平安時代の遺物も多い。古墳時代中期以前と確認できる遺物は少なく、刷毛目のある甕類はわずかである。

14号溝 (第242・243図 P L-30)

東側は調査区域外になり、西側は4号溝につながっている。9号溝とはほぼ平行している。

位置 850-795Gから855-790Gにかけて。

形状 ほぼ直線的な溝で、西側の4号溝に合流する直前に北側に向けて直角に近い屈曲をしていたものと思われる。底面レベルは凹凸があるが、全体では西側4号溝に向けて低く傾斜しそうである。

規模 確認できた範囲では全長10.5mある。上幅は1.4m前後、下幅は0.5m前後で比較的一定している。確認面からの深さは最大で50cmである。

軸方向 N-67°-W

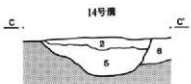
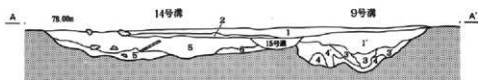
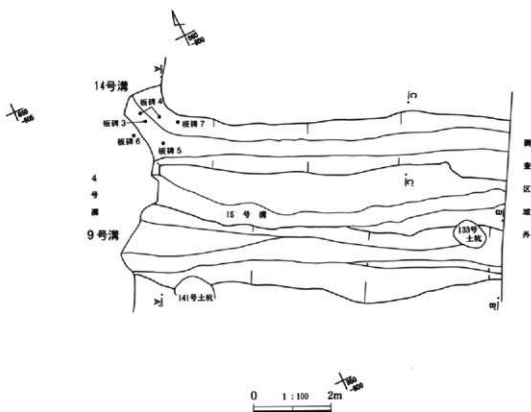
重複 43・45号住居に後出ししている。15号溝・134号土坑などには先出している。

備考 9号溝は4号溝南辺に平行して4号溝西辺に直行するように合流するが、本溝は直角に曲がっていたことが確認できる。埋没状態も9号溝と本溝では異なる部分が多い。

4号溝は中世の方形館外郭と推測されるが、本溝はこの区画の当初段階での南辺を構成していたものと考えたい。

遺物 多量の板破片の出土が特筆される。ほとんどが底面付近からの出土である。五輪塔などの中世石製品の出土がきわめて少ない本遺跡にあって、14号溝からはまとまって板破片だけが出土している。大形破片が多いが完形まで復元できたものはなかった。4個体以上の板破片があったことが確認できる。年号や人名等の判読できるものはなかった。

その他の遺物 土師器約590片、須恵器約60片出土している。また、中世以降の銅類・陶器等も6片混入している。小片中心で、破片数に比してボリュームはやや少ない。時期が明確な遺物も少ないが、古墳時代末から平安時代初葉にかけての土器がほとんどのものである。この他に拳大以上の自然石の出土がきわめて多い。



9・14号溝

- 1 暗褐色 10YR 5/3 A_s-A 混じりの耕作土層。基本土層の I 層。堅くしまっている。1' では A_s-A が不均等で量も少ない。黒色味が強く、やや腐植土質である。
- 2 暗褐色 7.5YR 3/3 A_s-A が部分的に薄層状だが密度の高い状態で堆積している。
- 3 黒 7.5YR 2/1 混入物の少ない弱粘性土層でややしまり欠く。腐植土質の層である。3' にはローム小ブロックが混入し縺まりやや強い。
- 4 灰黄褐色 10YR 4/2 0.5~3cm 大のロームブロックを不均等にやや多量に含む。A_s-A は不明瞭だが主となる土は 1' 層土に近い。4' では 1' 層土と 3 層土がブロック状に混じる。
- 5 黒褐色 10YR 2/2 A_s-B を含み、基本土層の層層に近いが、A_s-A も若干混じっている。焼土粒・ローム粒等の雑多な混入物やや多い。縺まり強く、5' 内では踏み固め面が層状に観察できる部分がある。
- 6 基本土層の層層。地山。

第242図 9・14号溝



第243图 出土板碑

13号溝 (第244図 P L-30)

位置 893-775Gから893-790Gにかけて。

東側は調査区域外になる。西隔は4号溝につながっている。

形状 ほぼ直線の、東隔は南方へ緩やかに曲がっている。底面は狭く、平坦な部分もある。

規模 確認できた長さは約15.0mある。確認面からの深さは40cm前後、底面は幅25cm前後で、比較的平坦である。中段から開口部に向かって開く傾向があり、中世的な溝の特徴が残っている部分もある。

軸方向 N-88°-W前後

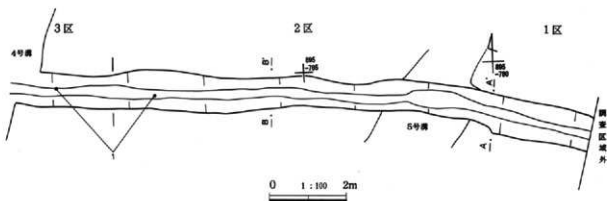
重複 20・21号住居に後出している。5号溝には先

出すると思われるが確認できなかった。

備考 断面の観察からは水の流れた痕跡は認められない。4号溝の作る区画内部の間仕切りの溝と考えている。

遺物 図示できたのは西隔から出土した陶器1点のみである。

その他の遺物 小片中心に土師器約180片、須恵器9片が出土している。焙烙底部らしい細片が混入している。古墳時代の遺物が中心で、模倣杯破片がやや目立つ。甕類は厚手胴部片が多いが、時期の明瞭なものは少ない。刷毛目のある甕類も少ない。



A. 7810m A'



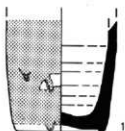
B. B'



0 1:50 1m

13号溝

- 1 灰褐色 7.5YR4/2 しまりやや欠く粘性土層。IV層と関連する可能性があるが、F Pは見られない。1'ではローム小ブロックの混入多い。
- 2 黒褐色 10YR3/1 弱粘性土で上層にはローム粒・下層にはローム小ブロックを含む。2'にはローム粒多く、黒色土がブロック状に混入している。
- 3 暗褐色 10YR3/3 壁崩落のローム土中心の土層。



0 1:3 10cm

第244図 13号溝および出土遺物

21号溝 (第245・246図)

基本土層のⅡ層とⅢ層の間に黒色土層が挟まっているのが確認できた一画にあり、本溝の存在はローム状土の上面まで下げるまで確認されなかった。

位置 915-785Gから925-775Gにかけて。両隅は4号溝と合流した先で不明となっている。

形状 東側に影らむようにして緩やかに湾曲しているが、両端はそれぞれ4号溝の走行方向側に屈曲気味となっている。底面は皿底状に窪んでいる。断面は緩やかに立ち上がっていて、中世溝特有の薬研状にはならない。

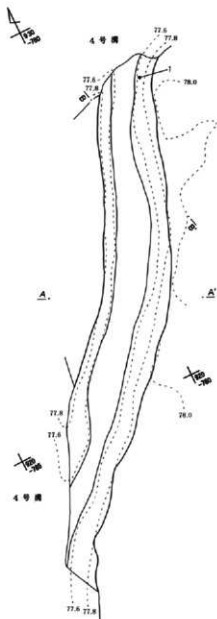
規模 全長14.5mある。上幅は1.5~1.8mではほぼ一定している。下幅は0.5~0.9mと安定していない。深さも凹凸があって底面レベルには10cm前後の比高差がある。深さは50cm前後だが最大では80cm以上になっている。

軸方向 全体ではN-30°-E付近となる。

重複 4号溝に先出している。36・40号住居などには後出している。

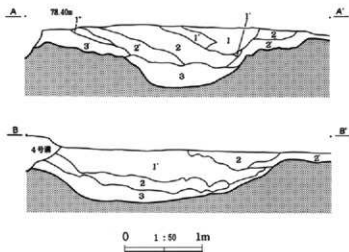
備考 断面に白色粘土小ブロックが見られ、西側から流れ込んでいる。4号溝掘り下げ時に本溝が掘められた可能性を示すものと考えたが、4号溝の深さから土量を推定すると4号溝の掘削が白色粘土層に達する前に本溝の埋め戻しは完了してしまう。西側から人為的に埋め戻されていることだけは指摘できそうである。

4号溝の当初段階では本溝が北西隅部分を構成し、後に隅部分を整えて開削し直された時に埋め戻されたと想定される。



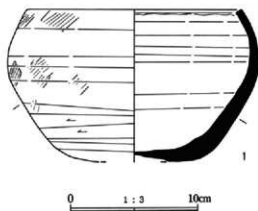
0 1:100 2m

第245図 21号溝



21号溝

- 1 において黄褐 10YR 5/4 ローム状土主体で、ローム土中のパミスを多量に含む弱粘性土層。黒色土や白色粘土がブロック状に混じる。1'では黒色土が多く、1''では白色粘土の混入がきわめて多い。
- 2 黒褐 10YR 2/2 やや粒子の粗い非粘性土層。A-Cの可能性のあるパミスを見出す。焼土粒を見出す。2'は3層土との漸移層でローム小ブロックを少量含む。
- 3 黒褐 10YR 3/2 粒子の粗い非粘性土層で、混入物をほとんど含まない。底面付近のみローム小ブロックが混じる。A断面に見られる3'には一部に窪みあり。



第246図 21号溝断面および出土遺物

遺物 図示できたのは北隅から出土した須恵器鉢のみで、混入品であろう。

その他の遺物 土師器約450片・須恵器15片出土している。中破片サイズの遺物が多く、ボリュームもある。古墳時代後期頃の遺物がほとんどで、古式土師も若干混じっている。中世以降の焼締陶器割部小片が1片出土する以外に時期を推定できそうな遺物は見られない。4号溝で多量に出土した近世陶磁器類が1点も出土しないことから、本溝が早い時期に埋め戻されたことが示唆されよう。

7 その他の溝

5章・6章で扱ったA区古墳時代の溝、および中世の館とそれに関連する溝以外の溝については、この章で一括して記載する。性格や年代について異なるものが同時に扱われている。時期決定できる遺構は少ないが、中世以降の施設が多いと思われる。調査時につけた溝番号をそのまま使用しているので欠番を多く含んでいる。

A区の溝

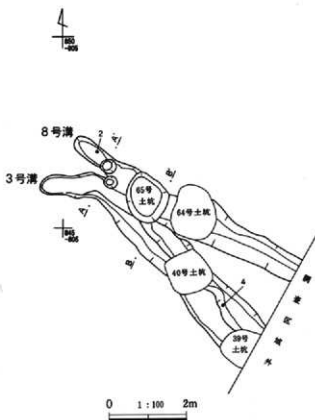
5・6章で扱った溝以外には、A1区で10条・A2区で12条の溝がある。A1区の溝はすべて中世以降のものである。規模の小さな不明瞭なものが多い。A2区では北隅の窪地部分に中世以前と思われる溝が集中しており、古代の遺構となる可能性のあるものが含まれている。水路状の長大なものがあるが不明瞭なものが多い。

3・8号溝 (第247・248図 PL-29)

位置 840-795Gから845-800Gにかけて。付近は上面が大きく削平されているため耕作土は浅く、遺構上面の痛みが激しい。さらに重複が著しい一画にあたり、不明瞭部分が多かった。3号溝は4号溝南側と平行して開削されているが、上端で30cmしか離れていない。

重複 3号溝は8号溝に後出している。65号土坑は両溝に先出するようで、39・40号土坑が8号溝に後出している。64号土坑との新旧関係は不明である。

形状 2条の溝が西隅で「X」字上に交差している。東側は両溝とも調査範囲外となり全容は不明である。両溝の重複部分が不明瞭であるが、3号溝はほぼ直線的な溝で西側で小さく屈曲している。8号溝は掘り直したまたは重複する溝であった可能性がある。両溝とも西隅では緩やかに立ち上がっている。

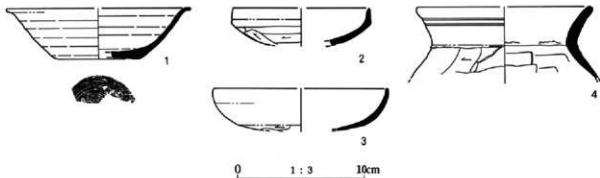


3・8号溝

- 1 黒褐色 7.5YR3/1 As-Aの混じる粒子の粗い非粘性土層。ローム小ブロックや焼土粒の混じる3号溝埋込土。
- 2 黒 7.5YR2/1 灰褐色粘性土ブロックや焼土等雑多な混入物の混じる弱粘性土層でしなり強い。2'では黒色土の混入が多い。
- 3 黒褐色 7.5YR2/2 黒色土中にロームブロック・焼土・炭化物粒を不均等に含む。
- 4 黒褐色 10YR2/2 黒色土中にローム粒を霏降り状に含む弱粘性土層。ビット状の腐みの埋込土か。4'にはロームブロックが混じる。



第247図 3・8号溝



第248図 8号溝出土遺物

規模 3号溝の調査できた範囲は全長6.8m分である。東側の直線部分では上幅85cm、確認面から最大30cmの深さがある。西隅は8号溝の調査できた範囲は全長7.0m分である。東側では二段底状で浅い南側底面は確認面より15cmの深さがあり、北側底面はさらに10cm深くなっている。

軸方向 3号溝 N-67°-W前後

8号溝 N-40°-W前後

備考 3号溝は中世の館区画をつくっている4号溝南辺の南側30cmの位置に平行している。ただし、西隅では屈曲し、底面も著しく不整になる。地表面が削平されている分を差し引けば上端では重複するほど近接していたと思われる。4号溝が埋没した近世以降の施設と思われる。4号溝は埋没後に上面が道となっているので、道脇の側溝的な施設が想定されよう。

なお、4号溝の外側にある不明瞭な溝として17号溝がある。3号溝の北西5mの地点から表れ、北側に断続的に伸びると想定される溝であるが、3号溝につながる可能性がある。

出土遺物 3号溝と8号溝の交差部分から出土した4点を図示した。いずれも埋没土内の遺物で、厳密にどちらの溝に帰属する遺物であるか識別できていないが両溝の先後関係から3号溝に伴う可能性が高い。1と3は平安時代、2と4が古墳時代の土器だが、付近は遺物包蔵の密度が高い地点で、図示した土器が溝の時期を決定しうるものではない。

その他の遺物 3号溝は規模に比して出土遺物は極めて多い。図示した以外に古墳時代後期から奈良時代にかけて土師器・須恵器が約500片出土し、比較的大破片も混じっている。溝周辺として取り上げた破片類も100片以上あるが、溝埋没土と同時期のものであり、周辺が密度の濃い遺物包蔵地点であったことと合致している。幕末から江戸時代にかけての磁器片も少量混じる。8号溝からは古墳時代前期から奈良時代にかけての土師器中心に約60片出土している。小破片主体となっている。

6号溝 (第249図 PL-29)

橋梁工事の際に掘削された擾乱坑を挟んで9mの間隔がある2条の溝であるが、溝の形状や埋没土が共通することから同一の溝と判断し、南東側を6A溝・北西側を6B溝とした。

位置 6A溝→825-800Gから830-810Gまでで、西隅は調査区域外となる。6B溝→835-815Gから840-820Gまで。

重複 6A溝は1号住居に後出している。

規模 6A溝は確認できた長さ4.5m・上幅80~90cmで、底面は南東側へ低く傾斜して北西隅と20cmの比高差を生じている。6B溝は全長6.0m・上幅40~58cmで、底面に細かな凹凸はあるがレベルはほぼ一定している。

形状 6A溝はほぼ直線的な溝である。軸方向はN-48°-Wである。6B溝は小さく蛇行する溝で形状は一定でない。

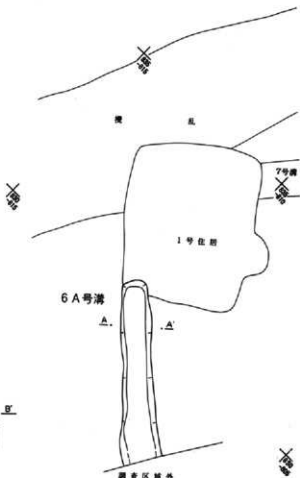
備考 遺跡の南隅の、井野川へ向かって下がっていく傾斜変換点付近にある。古墳時代の1号溝とほぼ平行した走行であるが、地形的な性格によるもので、1号溝と直接関連するものではない。流水や貯水の痕跡は見られない。耕作土の流出を防ぐ畝境界の溝と想定した。As-Aの混入する天明三年以降に埋もれた溝である。

遺物 図示できる遺物はなく、A溝で奈良・平安時代の土師器・須恵器7片、B溝で古墳時代の土師器が13片出土したのみである。両溝とも投げ込まれたような小礫の出土が多い。

6B号溝



2号土坑



6号溝

1 暗褐色 10YR4/2 As-Aの混入やや多い

しまり強い土層。基本土層1層に近い。

2 黒褐色 7.5YR2/2 As-Aを少量含む基本

土層Ⅱ層に近い土層。締まり強い。ロ

ーム小ブロックを少量含む。

3 暗褐色 2.5Y4/2 ローム土の混入の多い

弱粘性土層。As-Cを含む。3'ではロ

ーム土の混入さらに多い。



第249図 6号溝

7号溝 (第250図 PL-29)

橋梁工事の砕石填圧のため北側に不明な部分を挟んだ溝である。27号住居に重複する部分で途切れる溝と同一の溝と推定したが、不確定である。

位置 830-805 Gから北上し、途中不明になるが850-805 Gまで続くと思われる。

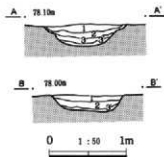
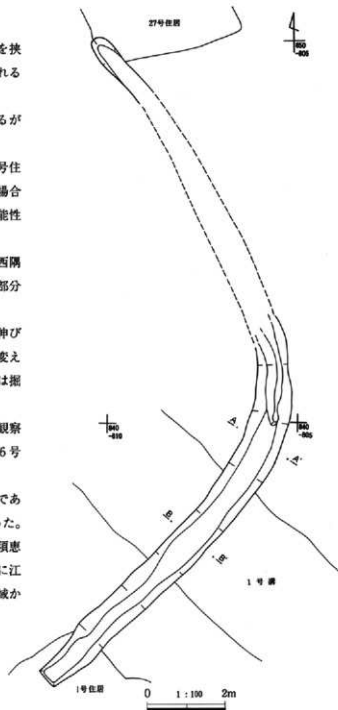
重複 1号・27号住居、1号溝に後出する。1号住居上で6号溝とも重複する可能性がある。その場合はほぼ直角に交わるものと思われ、同時存在の可能性がある。

規模 西側の北上部分で11.8mの長さがあり、西隅までさらに9m伸びている。上幅は90cm前後の部分が多い。確認面からの深さは18-25cmである。

形状 東側では軸方向N-49°-Eで直線的に伸びきわめて緩やかに屈曲後N-25°-Wに方向を変えている。底面は比較的平坦である。東隅部分では掘り直しのような痕跡が見られる。

備考 断面の観察からは自然に埋没した状況が観察されるが、流水・貯水の痕跡は認められない。6号溝同様の、島地境的な区画溝と思われる。

遺物 竪穴住居や古墳時代の溝に後出する遺構であるが出土遺物は少なく、図示できた遺物はなかった。古墳時代前期から奈良時代にかけての土師器・須恵器が小破片中心に約80片出土している。この中に江戸時代の陶器破片が3片出土している。また全城から不均等に小礫が出土している。



7号溝

- 1 黒縄 10YR3/2 A-Aを不均等にやや多量に含む基本土層のII層土。しまり強い、ローム粒・炭化物粒を少量含む。
- 2 黒縄 2.5Y3/2 粒子の細かい非粘性土層。ローム土を霜降り状に含む。2'ではローム粒の混入が少ない。
- 3 暗灰黄 2.5Y4/2 混入物の少ないローム土と黒色土の混合土。3'ではローム土の代わりにシルト質土が混入している。

第250図 7号溝

その他の溝 (A1区)

11号溝 (第251図 PL-30)

北側は3号井戸および30号土坑につながり、南側は13号溝につながっている。南隅で二股状に別れ、規模を異にしており、別遺構の可能性もある。

位置 890-775Gから905-777Gにかけて。

重複 3号井戸・30号土坑および5号溝に後出している。13号溝にも後出すると思われる。

規模 確認できる部分では全長9.8mある。上面幅は40-58cm、深さは7-10cmであるが、南端の分離した部分は幅30cmと細くなっている。

軸方向 細かな蛇行はあるが、概ねN-5°-E前後にあり中世の溝とはかけ離れている。

形状 底面は比較的広く平坦で、レベルも全域でほぼ一定していてどちらか一方に水を流すような施設ではない。

備考 3号井戸とつながることから、井戸に水を貯めるための送水溝を想定したが、断面に流水の痕跡は見られない。

遺物 図示できる遺物はなかった。小片・細片のみで須恵器1片、土師器11片が出土している。奈良時代を中心とする時期の杯が大半で、台付甕が混入している。

12号溝 (第251図 PL-30)

11号溝の西側2mほどの位置に、ほぼ平行している。埋没土が近似しており、調査中の所見では11号溝と同時存在を想定している。

位置 900-775Gから905-775Gにかけて。

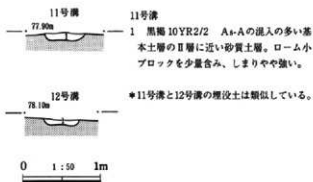
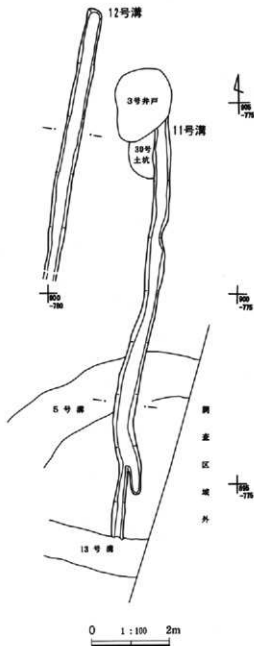
形状 直線的に伸びる溝である。底面は広く平坦だが南北両端に比べ中央は3cmほど窪んでいる。北隅は途切れるが、南隅は緩やかに立ち上がって不明瞭になっている。

軸方向 N-11°-E。

規模 調査できた範囲では全長7.0m、上幅42cm前後、深さは6-11cmである。

備考 11号溝と類似した埋没土で、軸方向や形状も類似している。

遺物 出土遺物はなかった。



第251図 11・12号溝

15号溝 (第252・253図 P L-30)

中世の溝で扱った9号溝・14号溝の間にあって、これらの溝に後出している。両溝とは埋没土や出土遺物が明らかに異なり、分離して報告する。

東側は調査区域外となるが、調査範囲の東隅は底面が緩やかに立ち上がっていて、付近で途切れる可能性がある。西隅は4号溝と重複する。

位置 850-790Gから855-800Gにかけて。

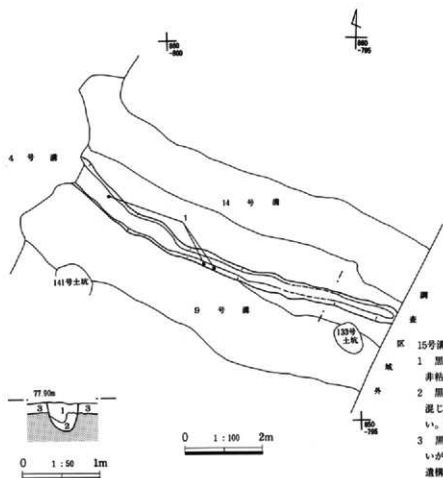
規模 確認できた範囲は長さ9.6m、上面幅35-60cm、深さ11-26cmである。

形状 小さく蛇行するやや不規則な溝である。底面も10cm前後の凹凸がある。軸方向はN-70°-W前後であるが、西隅ではN-45°-W付近まで屈曲している。

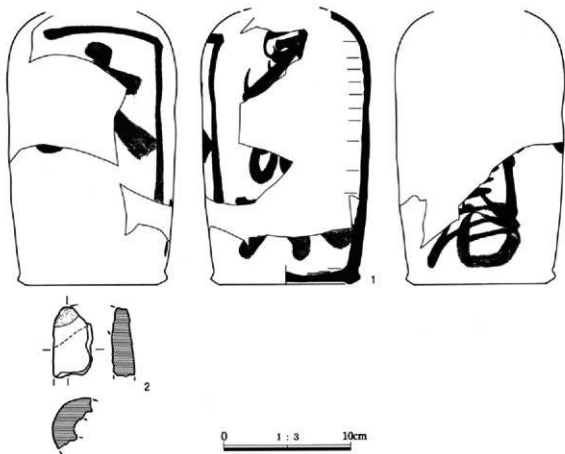
備考 蛇行があるものの島の地境的な溝と思われるが、性格不明の施設である。天明三年以前に開削され、それ以降に埋没している。

遺物 陶器製徳利1は溝西半に広く散乱していた破片から復元したもので、底面から浮いた状態ではあるが本溝の時期を決定する遺物であろう。羽口2は混入品と思われる。

その他の遺物 土器約720片、須恵器約60片出土している。小片・細片が中心で、破片数に比してポリウムは少ない。時期の明確な遺物は少ないが、奈良時代の土器が中心のようで、9・14号溝の傾向に似ている。その他に準大の礫が底面から浮いた状態で不均等に出土している。



第252図 15号溝



第253図 15号溝出土遺物

17号溝 (第254図 P L-31)

4号溝の西側に平行して隣接している溝で、当初は長い溝を想定していた。掘り下げ段階で北側は土坑状に途切れ、13号土坑および44~46号土坑として処理し、南側だけが溝として残存した。13号土坑北隅から本溝の南隅までは28mの規模になるのだが、不明瞭な遺構である。

位置 850-805Gから855-805Gにかけて。

規模 全長4.8m、上幅48~80cm、深さ10cm前後で、土坑のような規模である。

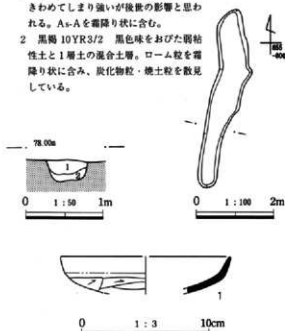
形状 やや屈曲するが軸方向はN-11°-E前後で、壁は垂直に近い立ち上がり、底面は平坦である。

備考 3号溝と関連する可能性がある。

遺物 図示できたのは埋没土中の土師器杯1点のみである。その他に土師器小片のみ19片出土している。丸胴気味の寛胴部や平底の杯が含まれている。

17号溝

- 1 暗灰黄 2.5Y4/2 砂質の非粘性土層。きわめてしまり強いが後世の影響と思われる。A~Aを露降りに含む。
- 2 黒褐色 10YR3/2 黒色味をおびた弱粘性土と1層土の混合土層。ローム粒を露降りに含む。炭化物粒・焼土粒を散見している。



第254図 17号溝および出土遺物

18・19号溝

確認段階では4号溝と5号溝の間にある1本の溝に見えたが、掘り下げ後、東側は2条の溝に、西側は117号土坑となった。

18号溝 (第255図 P.L.-31)

東側は緩やかに立ち上がり、5号溝直前で途切れる可能性がある。

位置 865-790Gから865-795Gにかけて。

規模 確認できた範囲で全長4.6m、上幅は75cm前後の部分が主体となる。深さは20-25cmとなる。

形状 軸方向は概ねN-82°-E前後であるが、小さな屈曲があり直線的ではない。底面は狭いが底部レベルはほぼ一定である。

備考 天明三(1783)年以降に埋没した溝である。

遺物 図示できる遺物はなかった。中世以降の銅類等10片、江戸時代の陶器細片1片を出土している。土師器約200片、須恵器約20片が混入している。大破片は少ない。土師器・須恵器には古墳時代前期から平安時代まで雑多な土器が含まれている。

19号溝 (第255図)

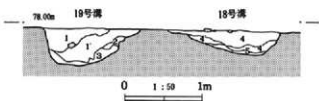
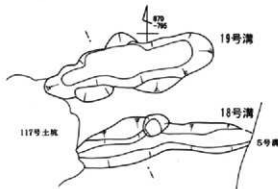
位置 870-790Gから870-795Gにかけて。18号溝の北側80cm前後の位置に、軸方向をほぼ同じにして並んでいるが埋没土は異なっている。

形状 確認面でのプランの歪みが大きいのが壁の崩れではなく当初からの不整部分のようである。底面は比較的平坦である。東西両側では緩やかに立ち上がり、途切れてしまう可能性がある。

規模 確認できた範囲で全長4.5m、上幅1m前後だが、壁の崩れによる幅広部分がある。深さは40cm前後である。

備考 埋没土には18号溝に見られたAs-Aは確認できない。天明三年以前に埋没したものと思われる。土坑に類する規模でもある。

遺物 その他の遺物 中世以降の銅類1片、土師器約260片、須恵器15片出土している。大破片は少ない。土師器は土付甕等の古式土師がやや目立つ。須恵器には平安時代の有台杯が含まれている。



第255図 18・19号溝

18・19号溝

- 1 黒褐色 10YR3/1 粒子やや細かな微粘性土層。As-Aと思われるバミスを不均等に少量含む。層の混入はこの層の中にあたる。1'ではローム小ブロックの混入やや多い。
- 2 黄褐色 7.5Y5/3 ロームブロックやローム状土主体の土層。
- 3 灰黄褐色 10YR4/2 ローム状土・暗褐色粘性土が不均等に混じりしまり欠層。
- 4 にぶい黄褐色 10YR4/3 ローム状土中心の弱粘性土中に多量の黒色土が混入、ややしまり欠層。As-Aは見られない。4'は5層への崩移層で、ローム小ブロックが混入する。
- 5 黒褐色 10YR3/2 やや締まり欠く微粘性土層。ローム粒を露降り状に含む。

20号溝 (第256図 PL-31)

5号溝から北東方向に分かれ、軸方向を多少東側に
向けて並んでいるが、北側は途切れている。この間
の5号溝との距離は20~50cm程しかなく同時存在は
考えにくい。

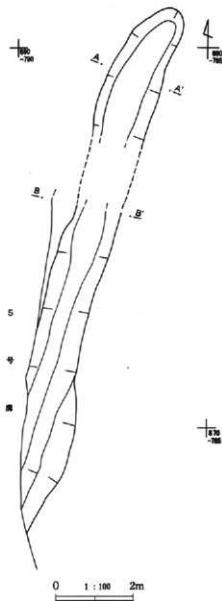
位置 865-785Gから880-785Gにかけて。

規模 確認できた範囲で全長14.0m、上幅1.2~1.5
m、深さは15~45cmである。底面は南に向かって低
く緩やかに傾斜していて、北側と20cmの比高差を生
じている。

形状 軸方向はN-18°-Eでほぼ直線である。

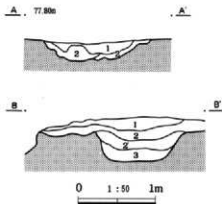
備考 5号溝上面に見られるAs-Aがなく、同溝に
先行して埋没していると思われる。本溝北側付近に
近接している109・110号土坑は軸方向が本溝にほぼ
同じで、関連する施設の可能性があろう。

遺物 図示できる遺物はなかった。中世以降の銅類
小片2片、土師器約90片、須恵器7片出土している。
小破片が多く、ボリュームは少ない。須恵器は壺類
中心で、時期を特定できる資料はない。土師器は古
墳時代の物が多い。底面直上からは不揃いの礫の出
土もやや多い。



20号溝

- 1 におい黄褐 10YR5/4 粒子の細かな
粘性土層。ローム状土を水田床土として
客土したものと考えられる。
- 2 灰黄褐 10YR5/1 粒子の細かな粘性
土層。焼土・炭化物粒・細礫等種多な混
入物を含む。2'では灰白色粘土粒の混入
やや多い。
- 3 褐灰 10YR4/1 灰白色粘土小プロク
と、2層土の混合土層。



第256図 20号溝

A2区2号溝 (第257図 P L-31)

東・西両隅とも調査区域外に延びていて、全容は確認できない。

位置 950-765Gから960-785Gにかけて。

重複 いずれも古式土師器の段階である7・10・25号住居に後出している。1号溝に後出していると思われるが、記録を残せなかった。底面のレベルが異なり同時存在はあり得ない。

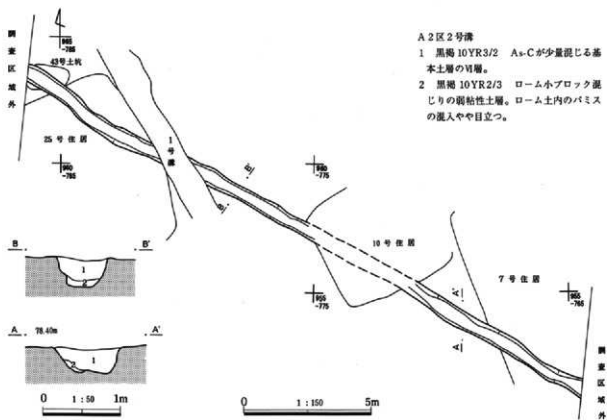
規模 調査できた範囲では全長25.3mあるが、上幅40~50cm前後で比較的近似している。深さは両隅付近では10cm前後だが、中央付近では30cm以上の箇所もある。

形状 軸方向はN-60°-Wで、ほぼ直線的にA2区を横断する溝である。断面は逆台形に近い形状で、底面も比較的平坦である。底面レベルは全体では西側に低く傾斜していて、東隅と10cm以上の比高差を生じているが、途中には緩やかな凹凸があり、規則

的な傾斜は見られない。

備考 溝の形状や埋没土など古墳時代の溝に共通する部分が多い。ただし古墳時代の溝が作る区画・方向性からは逸脱している。出土遺物も他の古墳時代の溝に比べて少なくなっている。断面では流水や貯水の痕跡は観察できず、区画的な性格が考えられるが、古墳時代の区画規制が残っている古代末以降の溝と考えたい。

遺物 図示できる遺物はなかった。竪穴住居との重複が多い遺構としては出土遺物は少なく、土師器のみ小破片を中心に75片が出土しただけである。約半数が刷毛目のある変類で、台部が3個体分ある。杯類には横俵杯片が若干混じっている。



第257図 2号溝

A2区北隅の溝群

A2区北隅からB1区南西隅にかけては、現在は平坦な地形であるが、古代にあっては南側の集落が立地する自然堤防状の台地より低くなっている、基本土層のIV層・V層に相当すると思われる洪水層が堆積する一画である。ここで3号溝から12号溝まで、縦横に走る10本の溝を調査している。位置関係を分かりやすくするため、一部の溝の平面図と共に、この一画の溝配置図を併せて掲載した。

A2区3号溝 (第258図 PL-31)

10本の溝の中では一番上面から確認できた溝である。北東隅付近で二股に分かれており、北東側に続く狭い溝を3'号溝とした。3号溝南東側は攪乱で途切れ、その他の隅は調査区域外となっている。

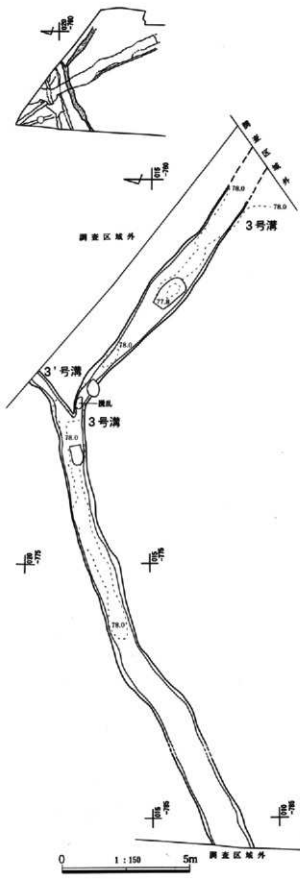
位置 010-760Gから015-785Gにかけて。

規模 調査できた範囲で全長29.5m、上幅1.0~1.2m前後である。深さは6~30cmで一定でない。3'号溝としたのは2.2m分だけで、上幅45cm前後、深さ7cmほどで小規模である。

形状 北東隅の交差点地点以西では軸方向はおおよそN-60°-E前後だが細かな蛇行がある。以東ではN-55°-W前後で、比較的直線的に続いている。底面は特に東側で凹凸があり、ビット状に窪む部分も多いが全体としては東側に低く傾斜している。

備考 泥流上に作られた中世以降の溝である。

遺物 図示できる遺物はなかった。出土破片は総数20片でいずれも小片・細片である。中近世の須恵質の鉢片が1片出土しているが、本溝の時期を示唆するものかもしれない。他は土師器で時期決定できるものはいずれも古式土師器である。赤彩された破片が目立つ。



第258図 3号溝

A2区4・5号溝、B区24号溝

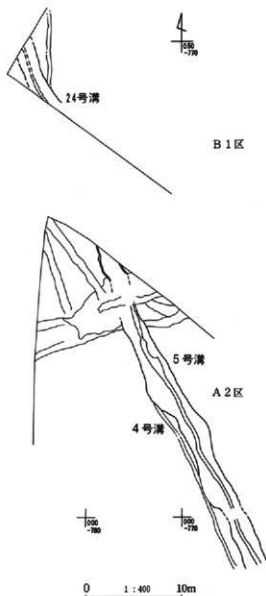
A区北隅からB区西隅にかけて見られる規模の大きな溝で、B区では当初古墳の周堀を想定し、A2区に移っても自然流路を検討したほどである。直線的に伸びる溝で、軸方向は古墳時代の溝と近似しているが、規模が大きなこと、遺物がほとんど出土しないことなど相違点が多い。4・5号溝は当初1条の溝を想定して掘り下げたものが、2条の別個の溝であると判明したもので西側の小規模な溝を4号溝・東側の幅太の溝を5号溝とした。また5号溝とB区24号溝は同一の溝である。

B区24号溝 (第259・260図 PL-34)

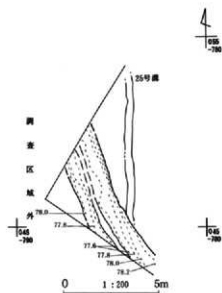
A2区5号溝に先行して調査した。同溝は連続する同一の溝である。

位置 040-780Gから050-785Gまで。B1区の西隅を斜めに横切るようにして確認されている。

規模 確認できる範囲で長さ8.3m、上幅2.1m、深さ80cm前後である。底面のレベルは調査範囲の中央が窪み、南に向かって低くなる傾斜傾向は、この区間に限っては確認できない。



第259図 4・5号溝およびB1区24号溝



第260図 B1区24号溝

形状 上面プランは直線的な輪郭が確認できたが、壁の中段以下は崩落部分が多く、歪んでいる。底面も狭く不整である。全体ではN-23°-W前後の軸方向である。

備考 泥流で一気に埋れた溝である。底面は調査した9月の湧水点以下まで達している。

遺物 図示できる遺物はなかった。土師器のみ約130片出土している。古式土師器が大半を占めているのは、周辺に包蔵遺物が多いことが原因であろう。赤彩土器が10%含まれている。

A2区5号溝 (第259・261図 PL-32)

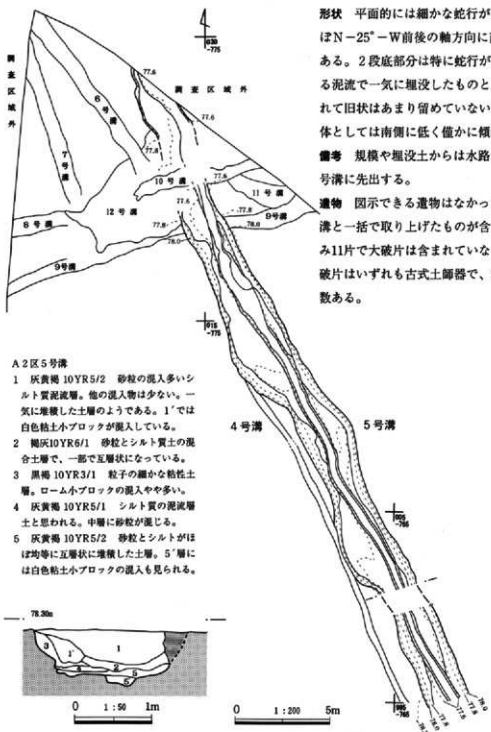
泥流層 (基本土層のIV・V層にあたるラハール層) 上面では遺構の輪郭は南隅のみでしか確認できなかった。泥流層を剥ぎながらプラン確認を行っている。位置 995-760Gから025-775Gまで。北隅はB1区へ続き、南隅は大規模な攪乱の先で不明となる。

規模 5号溝として確認できた部分は長さ38mあるが、北側に続くB1区24号溝まで含めると全長60mを超える規模になる。上幅は2.1~3.2mと差が大きい。深さは50cm前後である。B区部分では不明瞭であったが底面は2段底状になっていて、幅50cm前後、深さ10cm前後の窪みがある。

形状 平面的には細かな蛇行が多いが、全体ではほぼN-25°-W前後の軸方向に直線的に伸びる溝である。2段底部分は特に蛇行がきつい。数次にわたる泥流で一気に埋没したものと思われ、壁面は削られて旧状はあまり留めていないと考えた。底面は全体としては南側に低く僅かに傾斜している。

備考 規模や埋没土からは水路が想定されよう。4号溝に先出する。

遺物 図示できる遺物はなかった。出土破片は4号溝と一括で取り上げたものが含まれるが、土師器のみ11片で大破片は含まれていない。時期決定できる破片はいずれも古式土師器で、赤彩された破片が半数ある。



A2区5号溝

- 1 灰黄褐 10YR5/2 砂粒の混入多いシルト質泥流層。他の混入物は少ない。一気に堆積した土層のようである。1'では白色粘土小ブロックが混入している。
- 2 褐灰 10YR6/1 砂粒とシルト質土の混合土層で、一部で互層状になっている。
- 3 黒褐 10YR3/1 粒子の細かい粘性土層。ローム小ブロックの混入やや多い。
- 4 灰黄褐 10YR5/1 シルト質の泥流層土と思われる。中層に砂粒が混じる。
- 5 灰黄褐 10YR5/2 砂粒とシルトがほぼ均等に互層状に堆積した土層。5'層には白色粘土小ブロックの混入も見られる。

第261図 4・5号溝

A2区4号溝 (第259・261図 PL-32)

位置 995-765Gから015-770Gまで。北側は5号溝と区別できなかった。

規模 確認できた範囲で長さ26.3m、上幅30-35cmで、比較的一定している。

形状 小さな蛇行があり、北側ではN-12°-W、

南側ではN-23°-W前後の軸方向となっている。底面は緩やかな凹凸があるが、全体では南側へ低く僅かに傾斜している。

備考 5号溝に沿って後出して掘られている。

遺物 図示できる遺物はなかった。

A2区6号溝 (第262・263図 PL-32)

北西側は調査区域外となる。南東側は12号溝を境に不明となる。4号溝につながる可能性があるが、この場合、不明瞭な部分で若干屈曲することになる。

位置 020-775Gから030-780Gにかけて。

規模 確認できる範囲では全長9.4m、上幅70-90cm、下幅45-58cm、深さ20cm前後である。

形状 ほほ直線的に伸びる溝で、軸方向はN-39°-Wである。底面は平坦で、壁の立ち上がりは溝としては垂直に近く、近似した形状が続いている。底面は全体では南西側に低く緩やかに傾斜していて、両側には10cm近い比高差を生じているが、凹凸があり、滑らかに水が流れる状態ではない。断面にも流水や溜水の痕跡は観察できない。

備考 基本土層のIV層に相当する奈良・平安時代の洪水層に先出しているようである。

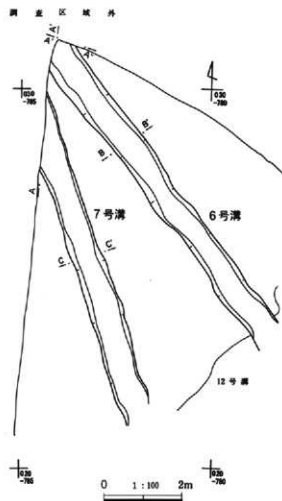
遺物 出土遺物はなかった。

A2区7号溝 (第262・263図 PL-32)

北西側は調査区域外となる。南東側は8号溝直前で緩やかに立ち上がり、その先は不明である。このまま延長すれば8・9号溝とは直角に近い角度で交わることになるが、底面レベルは本溝のほうが10cm近く深くなっている。また6号溝とも鋭角で交わり、同時存在はないであろう。

位置 020-780Gから025-780Gまで。

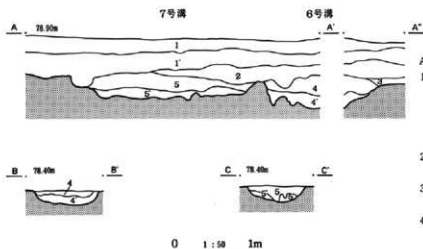
規模 調査できた範囲では全長9.0m、上幅75-85cm、下幅52-60cm、深さ17cm前後である。



第262図 6・7号溝

形状 軸方向N-19°-Wでほぼ直線的に伸びる溝である。底面は比較的平坦だが緩やかな凹凸があり、6号溝に類似している。埋没土の状態も6号溝に近い。底面レベルはほぼ水平でどちらか一方へ傾斜する傾向は見られない。

備考 水平に近い堆積をしているが、断面観察から流水・貯水の痕跡は確認できない。



第263図 6・7号溝断面

A2区6・7号溝

- 1 暗褐色土層 基本土層のI層に相当するAs-Aの混入の多い層。しまりがきわめて強いのは機械工事の際の車両通行によるもの。1'ではAs-Aはやや少なくなる。
- 2 暗褐色土層 1層土と基本土層III層土の混合土。粘性をおびる。
- 3 褐灰色土層 基本土層のII層に相当する泥炭層。
- 4 黒色土層 基本土層のIV層に類似する弱粘性土層。しまりあり。給源不明のバミスを含み、F Pの可能性あり。4'にはローム小ブロックが混じる。
- 5 黒褐色土層 褐色味の強い粘性土の混入多い弱粘性土層。ローム粒を露降り状に含む。5'では黒色味を増し、黄色味の強い粘性土ブロックが混じる。

遺物 図示できる遺物はなかった。出土時は土師器のみ24片で、壺底部の大破片1片以外は小片・細片である。時期の決定できる破片はいずれも古式土師器である。

A2区8号溝 (第264図 PL-32)

西側は調査区域外となる。東側は12号溝直前で立ち上がり、途切れてしまう。7号溝とは直角に交わる直前で両溝とも立ち上がり気味に途切れていて、類似した形状となっている。

位置 015-780Gから020-785Gまで。

規模 調査できた範囲は全長3.0m部分のみである。上幅は75~90cm、深さ10~18cmになる。

形状 軸方向はN-80°-Eで、ほぼ直線的に伸びる溝である。西壁直前で深くなっており、凹凸のきつい底面になる可能性があるが、全容は不明瞭である。調査範囲内では西側に低く傾斜している。溝の

規模の他にも、底面が広く平坦なこと・壁が直に近い立ち上がりをするることなど、6~9号溝に共通する特徴を備えている。

備考 上面にAs-A混じりの土層が観察できる。6~9号溝の中では最後に埋没した可能性があるが、埋没土であるか、上方からの填圧で沈み込んだ層であるかは判別できない。

遺物 図示できる遺物はなかった。出土土器は土師器6片と縄文土器らしい厚手の胴部片3片のみである。古式土師器とわかるものが2片ある以外、時期は不明である。

A2区9号溝 (第264図)

西側は調査区域外となる。東側は12号溝の南端に沿って伸びて調査区域外に至るようだが、不明瞭になる。

位置 010-785Gから020-765Gまで。

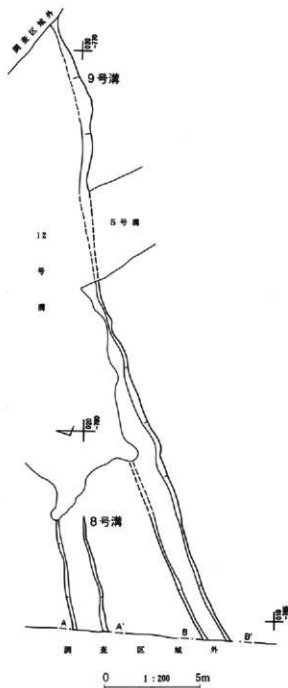
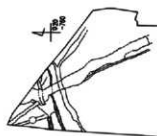
重複 5・12号溝に先出すると思われるが記録できなかった。11号溝に後出することが東壁の断面で確認できる。

規模 西隅で確実に確認できる長さは3.6mだが、本溝が12号溝に沿って東側調査区域外までつながれば、全長17.0m以上になる。西隅での上幅は58-65cm、下幅42-55cmとなる。深さ5-10cmのやや不明瞭な溝である。

形状 西隅では軸方向N-70°-E前後ではほぼ直線的だが、東側では緩やかに南へ曲っており、緩やかな蛇行も見られる。底面には凹凸があり西側の確実な部分だけでも8cmの比高差を生じている。

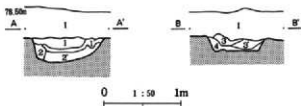
備考 断面には下層部分に人為的な埋め戻しと思われる混土層が見られる。

遺物 出土遺物はなかったが、12号溝と混在した可能性がある。



A2区8・9号溝

- 1 ぶい貴縄 10YR4/3 A_s-Aを霜降り状に含む基本土層のII層。1'ではA_s-Aは少ない。
- 2 黒 10YR2/1 ローム粒を含む弱粘性土層。2'ではロームは小ブロック状になる。
- 3 黒褐 10YR3/2 やや粒子の粗い非粘性土層。3'では粘性土とブロックとの混合土層。
- 4 黒縄 10YR2/3 弱粘性土ブロックとローム状土との混合土層。



第264図 8・9号溝

A2区10・11・12号溝

A2区北隅にあって、窪地全体が掘り上がるまで形状を確認できなかった不明瞭な一群の溝である。

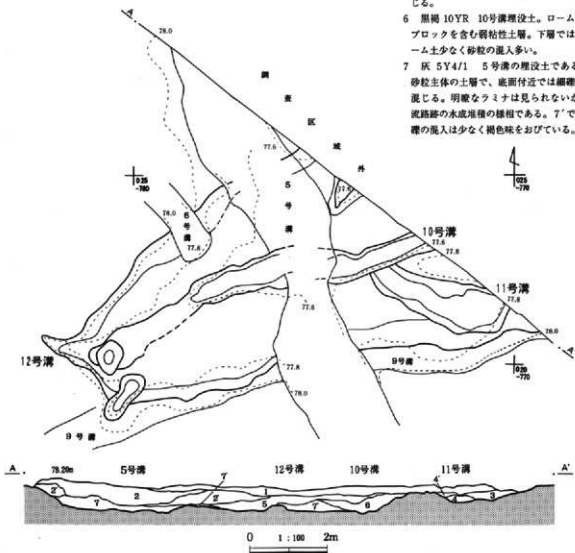
A2区10号溝 (第265図)

東側は調査区域外となる。黒色味の強い埋没土の遺構として捉えられている。西側は緩やかに立ち上がった12号溝の中で途切れてしまう。さらに西側へ続く可能性がある。A2区北隅の溝群中、最も深い溝である。

位置 020-770Gから020-780Gまで。

A2区10・11・12号溝

- 1 灰黄褐色 10YR5/2 シルト質泥炭土をブロック状に含む粘性土層。
- 2 暗灰黄褐色 2.5Y5/2 シルト質泥炭土主体の粒子の細かい粘性土層。基本土層のIV層に対応すると思われる。2'では灰白色味をおびて、明度・彩度とも高い。基本土層のV層に対応する可能性があるが、他の地点に近似的な土層はなく不明瞭。
- 3 褐灰 10YR5/1 2層に対応するが、被押を受けていて、混入物が多い。2層に後出する土層である。
- 4 褐灰 10YR4/1 11号溝埋没土。3層に比べローム状土の混入多いが黒色味おび、4'では黒色味さらに強い。
- 5 褐灰 10YR5/1 主に12号溝の埋没土に相当すると思われる。粒子の細かい粘性土で、泥流起源の土層だが、砂粒の混入多く、下層ではローム小ブロックが混じる。
- 6 黒褐色 10YR 10号溝埋没土。ローム小ブロックを含む弱粘性土層。下層ではローム土少なく砂粒の混入多い。
- 7 灰 5Y4/1 5号溝の埋没土である。砂粒主体の土層で、底面付近では細礫が混じる。明瞭なラミナは見られないが、流路跡の水成堆積の様相である。7'では礫の混入は少なく褐色味をおびている。



第265図 10・11・12号溝

規模 比較的深さのある東側の明瞭な部分は長さ6.6mまで確認でき、西側に不明瞭な部分が2.8m続いている。確認面での上幅は東側で1m前後あったが、掘り上がりでは55~80cmである。下幅は40~60cmで上幅にそった大きさになっている。深さは5cm前後しかない。

形状 平面は歪みがあるが全体では概ねN-77°-Eの軸方向である。平面にあわせて底面の歪みも大きい。底面レベルには5cm前後の凹凸があって、不規則な遺構である。

重層 4・5号溝に先出する。12号溝にも先出すると思われるが明確ではない。

備考 配置から8号溝とつながる可能性があるが、直線的な8号溝と不整な本溝とをつなげるには違和感もある。埋没土も異なっている。

遺物 出土遺物はなかった。

A2区11号溝 (第265図)

10号溝から南東方向へむかって分岐するような遺構で、東隅は幅を細めながら調査区域外となってしまふ。埋没土は周辺に比べてやや黒色味をおびていて10号溝にやや近い。不明瞭な遺構で、溝として扱うには問題もある。

位置 020-770G

規模 確認できた範囲では長さ3.4m、上幅0.9~1.2mある。下幅は不明瞭で0.5~1.0mあるが上幅の広さは一致していない。深さは5~14cmと差がある。

形状 平面・底面とも凹凸が多く不整である。断面形状も一様ではない。

備考 南東隅は明確に立ち上がっており、この位置で途切れれば土坑的な落ち込みであろう。北東側へ直角に近く屈曲する可能性もある。

遺物 出土遺物はなかった。

A2区12号溝 (第265図)

窪地のなかで、個別の溝番号を付けられなかった部分を一括して12号溝として扱った。複数の溝に細分できる可能性が残る。同時に溝として扱うには問題もある。

位置 020-765Gから020-780Gにかけて。北東側は調査区域外となる。

規模 東西12m以上、南北7m以上の長さがあり、溝というより窪地と称したほうが適切な落ち込みである。最大で50cmの深さがある。

形状 北東方向に向かって低く傾斜しているが、不規則な窪地で、人為的な溝とは考えにくい。反面、洪水で削られたとするなら、ウォーターホールのような底面の凹凸は少ないように思われる。

備考 他の溝との新旧関係が分かりにくい一面である。5号溝の関前後に洪水等の原因で削られた窪地と考えたが、5号溝とはほぼ直交する位置にあり、不自然である。埋没土は基本土層のIV・V層に該当するラハールであるが、埋没土に細粒サイズ以上の混入物は少なく、粗砂クラスの堆積土が最も粗粒である。

遺物 出土遺物はなかった。

その他の溝 (B区)

B区の溝

B区では23条の溝を調査した。このうち最も規模の大きな24号溝についてはA2区5号溝に続く溝として本文267頁に記載済みである。他の溝はいずれも小規模な遺構である。

1号溝 (第266図)

B2区で調査した唯一の溝であるが、B1区の溝群と関連する施設ではなさそうである。

位置 060-755Gから065-760G。B2区の南隅にあり、東西の両側とも調査区域外となる。

規模 調査範囲では長さ8.0mまで確認できる。上幅は1.6~1.1m、下幅0.8~0.5m、深さは17~32cmである。

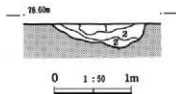
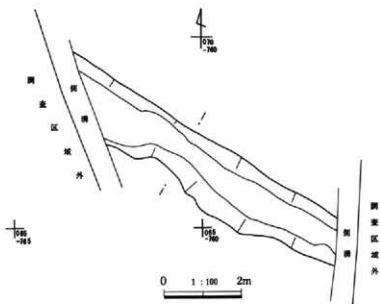
形状 北辺は直線的だが、南辺は不規則である。底面も波打つような凹凸があり、10cm近い比高差があ

るうえ、不整である。水を滑らかに流すことはできない。

軸方向 N-57°-W前後になる。

備考 掘削時の残土を底面付近に放置してあるようで、幅広い耕作痕のようでもある。断面に水が流れたり溜まったりした痕跡も認められない。上面埋没土に見られるAs-Bは二次的堆積土であるが、降下に比較的近い時期の堆積と思われる。古代の遺構となる可能性のある溝である。

遺物 時期不明の土師器小片が1片出土したのみで、図示できる遺物はなかった。



B区1号溝

- 1 黒褐色 10YR3/2 As-Bと思われるバミスを多量に含む非粘性土層。粒径は比較的均一でアッシュは含まない。
- 2 暗灰黄 2.5Y4/2 バミスの混入は少ない1層土と、最大10cm近い不揃いの地山褐色粘性土ブロックの混合土層。2'では粘性土ブロックが主体となる。

第266図 1号溝

B区2～5号溝はB1区南東隅付近で確認された溝群である。確認面は基本土層VI層 (As-C混じりの黒色土) 上であるが、埋没土にはIV・V層土の再堆積土が見られる。

2号溝 (第267・268図 PL-33)

位置 025-755 G から025-760 G。両隅は調査区域外になる。

規模 調査範囲では長さ6.2mまで確認できる。上幅は35cm前後、下幅12cm前後で一定しているが、確認面からの深さは4～9cmの浅い遺構である。

形状 直線的に伸びている。底面はほぼ平坦だが、最大5cmの比高差のある緩やかな凹凸があり、水平にはならない。

軸方向 N-87°-Eで、本遺跡内では数少ないほぼ東西方向に近い走行の溝である。

備考 3号溝と西隅で重複するが、新旧は確認できなかった。

遺物 図示できる遺物はなかった。土師器細片が6片出土したのみである。器形のわかるものはすべて古式土師器である。

3号溝 (第267・268図 PL-33)

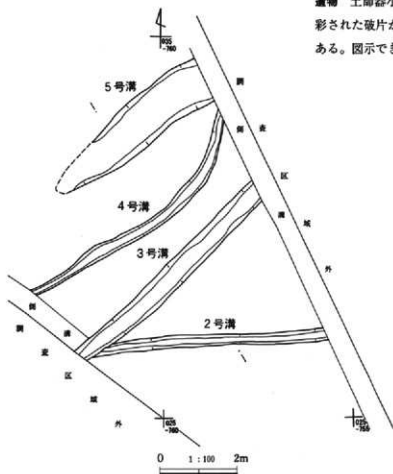
位置 025-755 G から030-755 G。両隅は調査区域外になる。

規模 調査範囲では長さ6.4mまで確認できる。上幅は60cm前後あるが、西隅付近では狭くなっている。確認面からの深さは8～13cmである。

形状 ほぼ直線的に伸びている。底面はほぼ平坦だが、細かな凹凸が多い。調査範囲内では南西側に低く僅かに傾斜しているようである。

軸方向 N-47°-E

遺物 土師器小破片が6片出土したのみである。赤彩された破片が混じっている。すべて古式土師器である。図示できる遺物はなかった。



第267図 2・3・4・5号溝

その他の溝 (B区)

4号溝 (第267・268図 PL-33)

位置 025-755Gから035-755G。両隅は調査区域外である。

規模 調査範囲では長さ7.1mまで確認できる。上面幅は20~40cmで一定しない。確認面からの深さは3~11cmで、西側ほど浅くなっている。

形状 緩やかに蛇行している。底面は比較的平坦である。北東方向へ低く傾斜して西隅と10cmの比高差を生じ、地山の傾斜とは逆行している。

軸方向 西側ではN-61°-E前後にあるが、東側は大きく屈曲して北側を向いている。

備考 5号溝と重複するはずである。

遺物 器形も判別できないような土師器微細片が8片出土したのみで、図示できる遺物はなかった。

5号溝 (第267・268図 PL-33)

位置 030-760Gから025-755G。北東側は調査区域外になる。

規模 南西側の立ち上がりは不明瞭で、本溝が途切れるのか判断できなかった。調査範囲では長さ4.8mまで確認できる。上幅は最大120cmある。底面は広いが確認面からの深さは8cm前後しかない。

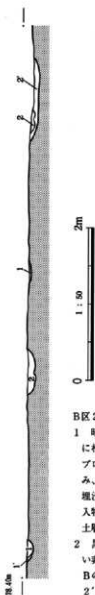
形状 東側でやや南向きに屈曲する可能性があるが、ほぼ直線的に伸びると思われる。底面には細かな凹凸がある。

備考 土坑状の遺構の可能性もあり、溝とするには問題もあろう。

軸方向 N-50°-E前後となろう。

遺物 出土遺物はない。

6・22号溝 1号井戸を挟んで東西に伸びる1本の溝を想定して6号溝と名付けたが、掘り上がった段階で1号井戸西側に2本の溝になる部分のあることが判明した。北側にある細い溝を22号溝としたが、効果的な位置にセクションベルトが設定されず、両溝の新旧が不明瞭になってしまった。



B区2・3・4・5号溝

- 1 暗灰黄2.5Y4/2 基本土層のIV・V層に相当するシルト質土層だが、黒色土小ブロックやローム土中のバミス少量を含み、純粋なフール層ではない。4号溝埋没土で最も純層に近く、2号溝では混入物多くなる。1'は地山黒色土との混合土層。
- 2 黒褐10YR3/2 基本土層のIII層に近い赤粘性土層だが、1層土が混じる。A-Bの混入は不明瞭でF.P.を散見する。2'は地山黒色土との混合土層。

第268図 2・3・4・5号溝断面

6号溝 (第269図)

040-770G 枕付近は上面からの填圧が著しく、遺構確認ができなかった一面であるが、この地点をまたいで調査区を東西に横断する溝と思われる。西隅を6A号溝・東隅を6B号溝とした。

位置 035-760Gから040-780G。

規模 A溝は長さ8.5m、B溝は長さ6.0m分までが確実に確認できる範囲である中央の未確認部分を併せると全長20.3m以上の溝になる。確認面での上幅はA溝40cm前後、B溝は50cm前後でB溝の方が広めだが、深さはA溝15~19cmに対しB溝は6~12cmとなる。底面は緩やかで小さな凹凸があり、井戸際がやや高くなっている。

形状 確認範囲内では、各溝がほぼ直線的に伸びている。ただし、A溝は井戸を挟んでやや食い違いがある。

軸方向 A溝はN-74°-W、B溝はN-82°-W。

備考 1号井戸には先出、または同時存在である。

遺物 図示できる遺物はなかった。土師器15片のみで壺類を中心とした大型破片や赤彩土器が目立つ。時期決定できる土器はすべて古式土師器である。

22号溝 (第269図)

1号井戸西側で6A号溝の北側に重複する部分を22号溝としたが、走行方向から見れば6B号溝とつながる可能性があるが、規模が異なる。

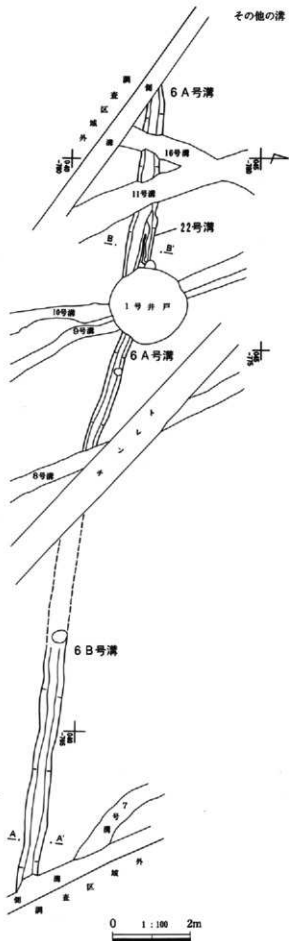
位置 040-775G付近。

規模 長さ1.4m部分のみで、上幅20cm、深さ4cmの不明瞭な部分である。

形状 ほぼ直線的に伸びている。底面は狭い。

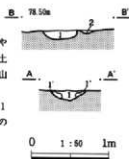
軸方向 N-76°-W。

遺物 土師器のみ11片出土している。いずれも薄手の小破片で、時期決定できるものはすべて古式土師器である。図示できる遺物はなかった。



B区6・22号溝

- 1 暗褐色土層 6号溝埋没土。粒子のやや細かい弱粘性土層。砂粒やシルト質土小ブロックを不均等に含む。1'には堆山黒色土が多量に混入する。
- 2 暗褐色土層 22号溝埋没土。土質は1層に同じ砂粒混じりの層。ローム土内のバミスの混入が多い。



第269図 6・22号溝

7・12・14・17・18・19号溝

B1区東隅で平行に近い方向に並んでいる、幅狭で形状の類似した6本の溝を一括して扱った。途中、調査区域内に張り出した電柱アンカーのため不明瞭な部分を残している。

7号溝 (第270・271図 PL-33)

東側溝群の中央にある遺構である。南北両隅とも調査区域外となっている。

位置 040-760Gから070-775Gにかけて。

規模 長さは27.0m以上となるが、この間上幅は40~58cm、下幅18cm前後、深さ20~30cmでほぼ一定している。

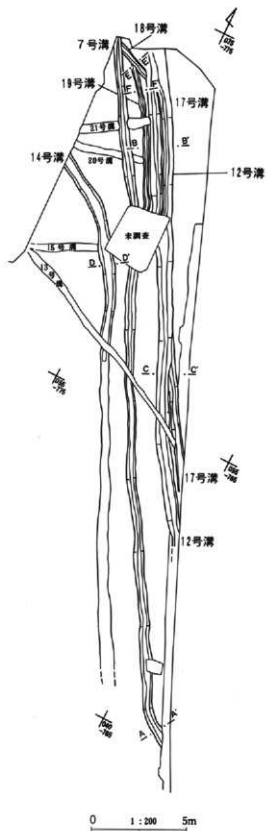
形状 直線的な部分が長いが、未調査部分で小さく蛇行し、南隅付近は東に向かって大きく屈曲している。底面には緩やかな凹凸があるが、全体ではほぼ水平になっている。

軸方向 N-28°-W前後である。

重複 1号住居に後出している。13・18・20・21号溝とも重複しているが、先後関係は確認できなかった。

備考 泥流層で一気に埋没している。未調査地点の屈曲が推定される部分で15号溝と直交するように交差すると思われるが、この溝が本溝とつながる可能性もあろう。

遺物 土師器のみ約40片出土している。壺類に大破片があるが弱いローリングを受けている。その他は刷毛目のある甕類小破片が中心で、時期決定できるものはいずれも古式土師器であった。図示できる遺物はなかった。



第270図 7・12・14・17・18・19号溝

12号溝 (第270・271図 P L-33)

南北両側とも調査区域外になっている。17号溝と重複する部分も多い。

位置 040-760 Gから070-775 G。7号溝の東側0.7-1.3mの間隔ではほぼ平行して並んでいる。

規模 全長25.8m以上になる。上幅は58-70cm、深さ25cm前後で一定している。

形状 僅かな屈曲があるがほぼ直線的な溝である。南隅付近から東側へ屈曲がはじまる可能性がある。

軸方向 N-25°-W前後である。

重複 17号溝に先出している。7号溝を埋めた泥流土の下にあるようだが、泥流は数次にわたって流れているようで、本溝上の土層と7号溝埋没土との直接対比はできていない。

備考 7号溝同様に底面全体はほぼ水平だが、レベルは7号溝より8cm前後低くなっている。

遺物 土師器のみ約60片出土している。刷毛目のある変類が目立ち、S字状口縁部や台部にやや大型の破片がある。その他の破片も時期決定できるものはすべて古式土師器である。図示できる遺物はなかった。

14号溝 (第270・271図 P L-33)

北東隅は調査区域外となる。南側の大半は溝底面痕跡と思われる変色部分として捉えられたのみで、南隅は途中で途切れてしまう。

位置 040-765 Gから065-775 Gにかけて。溝群の中では最も西側にある。

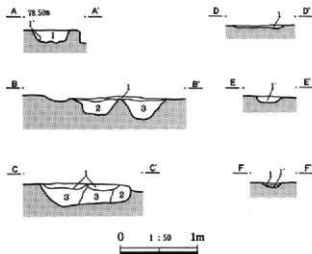
規模 北側の確実な部分は長さ11.3mだが、南側の痕跡部分を含めると約28mになる。上幅は46-62cmで、南側の痕跡部分でもあまり変わらない。深さは最大でも5cmしかない。

形状 7号溝の西側に並んでいるが、北側は途中で大きく西側へ曲がっている。底面は弱い起伏があるが、全体では僅かに南側に低く傾斜している。

軸方向 N-25°-W前後である。

備考 1号住居に後出している。13・15号溝に重複しているが先後関係は確認できなかった。

遺物 図示できる遺物はなかった。土師器のみ約30片出土している。大破片は含まれない。古式土師器が大半を占めていて、刷毛目のある変類破片が目立っている。



第271図 7・12・14・17・18・19号溝断面

B区 7・12・18号溝 地

- 1 灰褐色土層 基本土層のIV層に相当すると思われる泥流層。しまり強い。混入物は少ない。1'は地山の黒褐色土との混合土層でやや締まり欠く。
- 2 暗褐色土層 12号溝埋没土。ややしまり強い粘性土層。砂粒を混入する。
- 3 暗褐色土層 17号溝埋没土。ややしまり強い粘性土層。混入物少ない。3'には地山黒褐色土の混入多い。

17号溝 (第270・271図)

南北両隅とも調査区域外である。12号のすぐ東側にあり、同溝と重複する部分も長い。

位置 050-765Gから070-770Gにかけて。

規模 調査範囲では長さ23m分が確認できる。上幅は50cm前後、深さ25cm前後で一定している。

形状 弱い蛇行部分がある。底面レベルは12号溝とはほぼ同じだが、南側では徐々に上がっていて、南隅では同溝より8cm前後高くなっている。

軸方向 N-27°-W前後である。

備考 12号溝とは重複部分が長く、同溝の掘り直しの可能性もあろう。また、18号が本溝の北隅部分となって西方へ屈曲することも考えられる。この場合、14号溝と対になる溝となって、道路両側溝のような施設も想定されよう。

遺物 薄手の土師器甕胴部片2片のみで、1片には刷毛目がある。図示できる遺物はない。

18号溝 (第270・271図)

7号溝と12号溝の狭い間を斜めに横切るように確認されている。

位置 070-775G。

規模 確認できる長さは1.9m部分のみである。上幅は30cm前後あるが、深さは5cmしかない。

形状 ほほ直線的な溝である。底面は東側に向かって低く、わずかに傾斜している。

軸方向 N-67°-W前後である。

備考 底面レベルは19号溝にほぼ同じで、連続する可能性のある17号溝底面より20cm近く高くなっている。19号溝と重複するが、断面観察でも新旧関係は確認できなかった。

遺物 時期不明の薄手土師器甕小破片2片のみで、図示できる遺物はない。

19号溝 (第270・271図)

未調査部分の北側に確認できる溝である。南側隅の延長部分として連続する可能性があるのは、溝が未調査部分から西側に現れる15号溝しかなく、直角に近い屈曲をする同一の溝となる可能性がある。北側は18号溝と重複した先で不明になる。

位置 065-770Gから070-775Gにかけて。

規模 確認できた範囲で長さ7.7mある。底面のレベルは周辺の溝より10cmほど高くなっている。

形状 小さな屈曲が多い。北隅ではやや西側に傾いているが、他の溝の屈曲ほど強くない。

軸方向 N-27°-W前後で、北隅での西側への屈曲は10°ほどである。

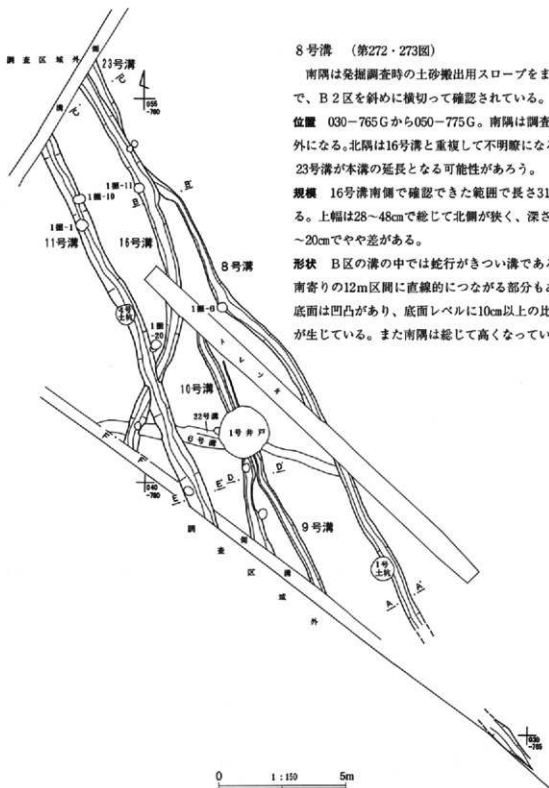
備考 7号溝と12号溝の間にある幅0.7-1.2mの狭い区画に同溝とほぼ平行するように並んでいるが、12号溝とは上幅で5cmしか離れていない部分も長くあり、旧地表面では重複していたと思われる。

遺物 土師器甕小破片6片が出土している。いずれも古墳時代の土器と思われる。図示できる遺物はない。

8～11・16・23号溝

B2区東隅にあって、おおよそ南北方向に軸方向があるが、細かな蛇行が多く、形状も一定でない

群である。中世の遺構と想定される1号掘立柱建物と重複するものが多い。A2区北隅の溝群につながるものが含まれるはずである。



第272図 8～11・16・23号溝

8号溝 (第272・273図)

南隅は発掘調査時の土砂搬出用スロープをまたいで、B2区を斜めに横切って確認されている。

位置 030-765Gから050-775G。南隅は調査区域外になる。北隅は16号溝と重複して不明瞭になるが、23号溝が本溝の延長となる可能性がある。

規模 16号溝南側で確認できた範囲で長さ31mある。上幅は28～48cmで総じて北側が狭く、深さは4～20cmでやや差がある。

形状 B区の溝の中では蛇行がきつい溝であるが、南寄りの12m区間に直線的につながる部分もある。底面は凹凸があり、底面レベルに10cm以上の比高差が生じている。また南隅は総じて高くなっている。

軸方向 全体ではN-33°-W前後になっている。

備考 6号溝・1号土坑など重複遺構が多い。

遺物 図示できる遺物はなく、土師器小片が7片出土したのみである。いずれも古式土師器である。

9号溝 (第272・273図)

1号井戸の中央を横切っていて、6号溝に類似している。1号井戸を挟んで9号溝と10号溝が入り組んでいるが、溝の走行方向や形状から井戸上で交叉し、井戸の北方では10号井戸の西側にあると判断した。南隅は調査区域外となる。北隅は途切れるようで、試掘時のトレンチを挟んで確認できなくなるが、16号溝に合流する可能性もある。

位置 035-770Gから045-775Gにかけて。

規模 確認できる範囲では長さ11.3m、上幅30~40cm、深さ5~10cmである。

形状 8号溝の直線部分西側2.5mの位置にほぼ平行に並んでいる。北隅では東側に弱く蛇行している。

軸方向 N-26°-W前後である。

備考 8号溝と11号溝の間にほぼ平行している。また北側の延長線上には16号溝があり、1号井戸に関連した遺構ではなく、周辺の溝群と密接な施設であることが分かる。1号井戸の断面に本溝は確認できず、同溝に先行すると思われる。

遺物 出土遺物はなかった。

10号溝 (第272・273図)

北側では9号溝との区別が難しい。南隅は調査区域外になる。北隅はトレンチ付近で立ち上がり、その先は分からなくなる。

位置 035-775Gから040-775Gにかけて。

規模 確認できる範囲で長さ7.5m、上幅36~58cmで、深さは1~2cmの部分が多く、最大でも7cmである。

形状 やや蛇行がきつい。底面に凹凸があり、断面の形状は一定していない。

軸方向 全体ではN-12°-W前後になる。

備考 9号溝との新旧関係は確認できなかったが、埋没土から得られる所見からは同溝に先行する可能性が高い。65号ピットなどとも重複している。

遺物 図示できたのは須恵器杯1の1点のみで、南側埋没土内の出土である。

その他の遺物 土師器小片・細片が13片出土したのみである。刷毛目のある甕類が中心で、その他の遺物もすべて古式土師器のようである。

11号溝 (第272・273図 P L-34)

西側溝群の西隅にある。南北両隅とも調査区域外となる。

位置 035-775Gから060-780Gにかけて。

規模 確認できる範囲では長さ16.1m、上幅62~88cm、深さ35~51cmで一定している。幅・深さは西側溝群では最も大きい。

形状 小さな蛇行はあるが、西側溝群の中では直線的な溝である。底面レベルは南側に低くほぼ一定に緩やかに傾斜しており、両端では10cmの比高差を生じている。

軸方向 N-25°-W前後である。

備考 6・16号溝と重複している。1号掘立柱建物に先出している。

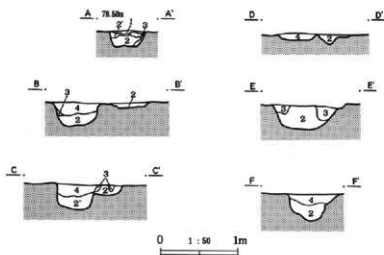
遺物 土師器壺底部1を1点図示できたのみである。北側埋没土内の出土で付近は古式土師器の包含層であり、混入品の可能性が高い。

その他の遺物 土師器壺・甕類で19片出土している。赤彩壺底部にやや大破片がある。時期決定できるものはすべて古式土師器である。

16号溝 (第272・273図 P L-34)

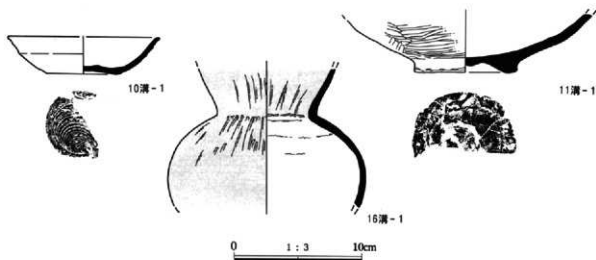
南側では大きく屈曲し、他の溝とは様相を異にしている。北隅・西隅は調査区域外になる。また北隅は23号溝と重なっている。

位置 040-780Gから055-780Gにかけて。



B区 8・10・11号溝 他

- 1 暗褐色土層 基本土層III層に近いと思われるが、A_s-Bは不明瞭。しまり強い。
- 2 灰褐色土層 基本土層のIV層に近いと思われるシルト質土層。2'には砂粒やローム土内のバミスが混じる。
- 3 黒褐色土層 粒子の細かい弱粘性土層。地山土がブロック状に混入したもの。
- 4 暗褐色土層 シルト質土と細砂の混合土層。砂粒はラミナ状にはならないが、攪拌を受けた状態ではない。



第273図 8～11・16・23号溝断面・出土遺物

規模 確認できた範囲では長さ15.6m、上幅60cm前後、深さ30cm前後で一定している。

形状 底面は緩やかな凹凸があり、底面レベルは一定でない。全体の傾斜にも傾向は読み取れない。

軸方向 北半部はN-28°-Wで一定だが、南西側は屈曲してN-24°-E前後になっている。

備考 北側直線部分の南側延長線上に9号溝がある。この2条の溝と西隣の11号溝の間隔が2.0mでほぼ一定していて、道路状の空間を構成している。

遺物 埋没土内出土の土師器壺1を図示した。混入品と思われる。

その他の遺物 土師器のみ16片出土している。刷毛目のある甕類が過半を占めている。

23号溝 (第272・273図)

16号溝掘り下げ中に、2条の溝となるのがわかり、東側を23号溝とした。北側は調査区域外となり、南側は16号溝の中で不明となる。

位置 050-780 Gから055-780 Gにかけて。

規模 調査範囲では長さ2.5m、上幅50cm以上が確認できるだけである。

形状 ほほ直線的な溝である。

軸方向 N-26°-W前後と思われる。

備考 底面レベルは16号溝より10cm以上高くなっていて、別の溝と判断した。8号溝よりやや規模が大きいが、同溝の延長部分となる可能性がある。

遺物 出土遺物はなかった。

その他の溝 (B区)

B区13・15号溝

東側溝群と軸方向を交える2本の溝である。レイアウトの都合で2本の溝を同一図に示したが、両溝間に関連はなさそうである。

13号溝 (第274・275図 PL-33)

位置 050-765Gから060-775Gまで。北西隅は調査区域外になる。南東隅は17号溝内で不明になるが、調査区域外まで延びると思われる。

規模 調査範囲では長さ12.7m、上幅28~48cm、深さ16~21cmである。

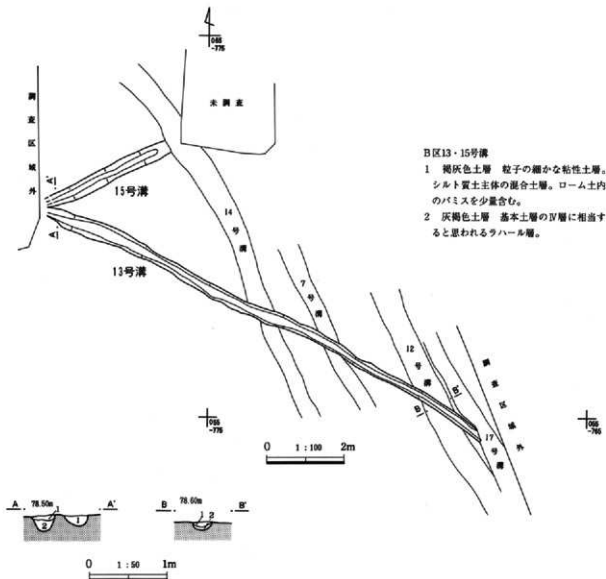
形状 はほぼ直線的な溝である。底面のレベルは凹凸があり、傾斜の傾向は読み取れない。

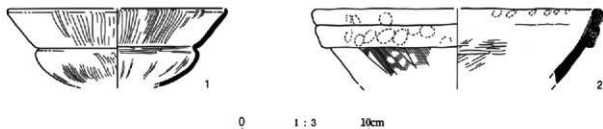
軸方向 全体ではN-63°-W前後である。

備考 1号住居のほか、7・12号溝等に後出している。15号溝には先出すると思われる。

遺物 2点の土師器を图示している。いずれも混入品で、重複する1号住居の時代の遺物である。

その他の遺物 土師器のみ20片出土している。壺類にやや大型破片があるが、他は細片である。器形が分かるものはすべて古式土師器である。





第275図 13号溝出土遺物

15号溝 (第274・275図 PL-33)

As-C混土層(基本土層第VI層)上にある。西側は調査区域外、東側は14号溝と未調査部分の先で分からなくなる。

位置 060-775G。

規模 確認できるのは長さ3.3m部分のみで、上幅40cm前後、深さ22cm前後で一定している。

形状 平面は直線的に伸び、底面は不整で丸底気味である。底面レベルはほぼ水平だが、東隅でやや浅くなっている。

軸方向 N-64°-E。

備考 未調査部分で北側へ直角に曲がり、19号溝へ続く可能性があるが、東隅は底面が立ち上がり気味であり、このまま途切れる可能性もある。7号溝他の東側溝群と垂直な配置で、これら溝群と関連する施設であろう。

遺物 図示できる遺物はなく、土師器が3片出土したのみである。壺肩部片1片以外は部位不明の細片である。

20号溝 (第276図)

As-C混土層(基本土層第VI層)上にある。西側は調査区域外となる。東側は19号溝と重複して、その先が分からなくなる。

位置 065-775G。

規模 調査範囲では長さ3.7m、上幅45cm前後、深さ5cm前後で一定である。

形状 浅く不明瞭だが、ほぼ直線的に伸びる溝である。底面の形状は不規則だが、底面レベルはほぼ水平である。

軸方向 N-76°-E前後である。

備考 7号溝に後出している。19号溝とは底面レベルに近いが、軸方向からは同溝と同時存在は考えにくい。やや規模の大きな耕作痕であった可能性もあろう。

遺物 図示できる遺物はなく、出土したのは土師器小片・細片6片のみである。時期決定できるものはいずれも古式土師器である。

その他の溝 (B区)

21号溝 (第276図)

A_s-C混土層(基本土層第VI層)上にある。南西側は調査区域外となる。北東側は7・19号溝を直交するように横切り、12号溝と重複してその先は不明になる。

位置 065-775G。

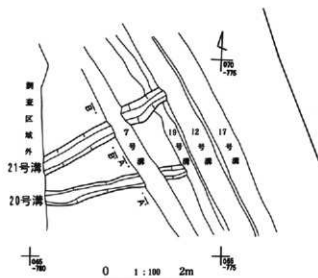
規模 調査範囲では長さ3.7m、上幅47cm前後、深さ8cm前後である。

形状 ほほ直線的な溝である。底面の形状は一定していないが、底面レベルはほほ水平である。

軸方向 N-60°-E。

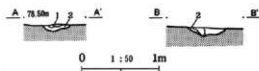
備考 7号溝に後出している。15号溝の北側5.8mの位置にあり、同溝とはほぼ平行している。

遺物 時期不明の土師器細片1片のみで、図示できる遺物はなかった。



B区20・21号溝

- 1 暗褐色土層 粒子の細かな弱粘性土層中に多量の砂粒を含む。
- 2 黒褐色土層 粒子の細かな粘性土で地山黒色土の混入多い。



第276図 20・21号溝

25号溝 (第277図)

基本土層のIV層に相当するラハール層下で確認した溝である。北隅は調査区域外になり、南側は24号溝と重複し、その先は分からなくなる。

位置 045-780Gから050-780Gにかけて。

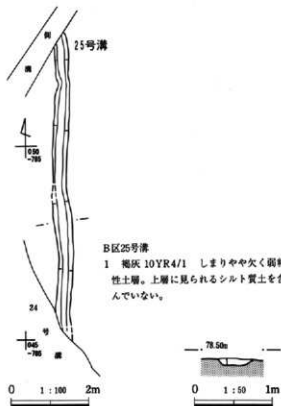
規模 調査範囲では長さ7.7m、上幅45cm前後、深さ7~10cmでほほ一定している。

形状 小さな蛇行があるがほほ直線的な溝である。底面レベルは南へ低く緩やかに傾斜していて、北隅と南隅では5cmほどの比高差を生じている。

軸方向 N-2°-Wで、ほほ真北を向いたB区唯一の溝である。

備考 B区の溝群にあっては軸方向や埋没土が他の溝と異なっている。24号溝に先出する最も古い溝と考えたが用途は不明である。2号溝とは直角の配置になる。規模は近似するが埋没土は異なり、同一時期の遺構とは想定しにくい。

遺物 土師器のみ約130片出土している。古式土師器が大半を占めていて、赤彩土器が10%含まれている。図示できる遺物はなかった。



B区25号溝

- 1 相沢 10YR4/1 しまりややく弱粘性土層。上層に見られるシルト質土を含んでいない。

第277図 25号溝

C区の溝

複数面の調査となり、溝も調査面ごとに確認されている。ただし、年度をまたいで2回に別けての調査であったため溝番号は連続せず、途中欠番を多数含んでいる。古墳時代から江戸時代以降までの遺構が調査されている。

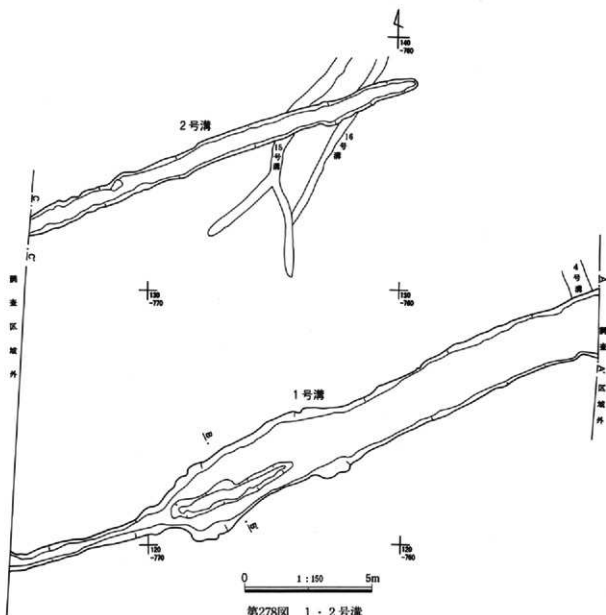
古墳時代以降、奈良・平安時代の一時集落となった以外は水田として利用され続けた地点であり、水路として使用されたものが多数含まれると思われる。

1号溝 (第278・279図 P L-34)

位置 115-770Gから125-750Gにかけて。両隅は調査区域外となっている。

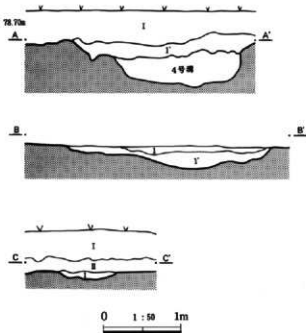
重複 4号溝に後出している。

形状 全体では直線的だが、西隅のみ細くなっている。幅の異なる2本の溝が重複する可能性があるが、断面から重複は確認できない。西側細幅部分の続きと思われる窪みが太幅部分の西側底面に見られ、掘り直しの様相である。底面は緩やかに波打つような凹凸があり、水路のような規則的傾斜はない。



第278図 1・2号溝

その他の溝 (C区)

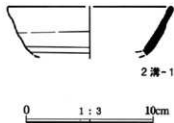


C区1号溝

1 昭和10YR3/3 やや大粒のAs-Aを露降り状に含む、基本土層のII層に近い。1'ではシルト質で砂壤土となる。流水の痕跡は認められない。

C区2号溝

1 昭和10YR3/3 As-Aを少量含むシルト質土層。斑紋が僅かに見られる。地山の灰褐色粘性土をブロック状に含む。



第279図 1・2号溝断面および出土遺物

規模 調査できた範囲は全長25.7m、このうち西側の細幅部分は6.5mである。太幅部分は幅2.2m、深さ10~15cm前後となり、西側の窪み部分はさらに最大10cm深くになっている。

軸方向 N-70°-E。細幅部分は若干北にふれ、N-73°-E付近になる。

備考 上半ではAs-Aが埋没土に混入するが、下半ではほとんど見られない。天明三年(1783)以前に埋没した溝をその後も掘り直して使用したものと思われる。水の流れた痕跡は確認できない。

重複 4号溝に後出している。

遺物 約300片の土器が出土しているが、ほとんど土師器小破片である。時期決定できる土器は古墳時代後期から奈良時代頃に集中している。口径の広い杯類が目立ち、これにはやや大型破片が含まれているが、弱いローリングを受けている。近世の素焼きの鉢と思われる破片が2片見られる。

2号溝 (第278・279図 P L-34)

位置 130-770Gから135-755Gにかけて。西側は調査区域外となっている。

重複 15・16号溝に後出している。

形状 直線的な溝だが、東隅はわずかに南方へ曲がり、途切れている。1号溝の細幅部分と類似した規模で、同溝北側12mの位置にはほぼ平行するように並んでいる。底面には緩やかな凹凸があり、水路のような傾斜はない。

規模 調査できた範囲は全長16.5m、上幅90cm前後、深さ7~13cmである。

軸方向 N-69°-E。

備考 As-Aを埋没土全面に含む、天明三年(1783)以降に埋没した溝である。

遺物 埋没土出土の須恵器杯1を图示したが、混入品である。图示した以外に土師器・須恵器が17片出土している。東隅周辺の出土が多い。やや大型の破片が混じっている。古墳時代中期頃と奈良時代の土器が混在しているが、古手の土器はローリングを受けている。

4号溝 (第280図 PL-34)

位置 155-770Gから160-765G付近で鈍角に屈曲し、130-750Gにかけて。西隅と南東隅は調査区域外となる。

規模 2・4号溝に先出している。6号溝にも先出すると思われる。

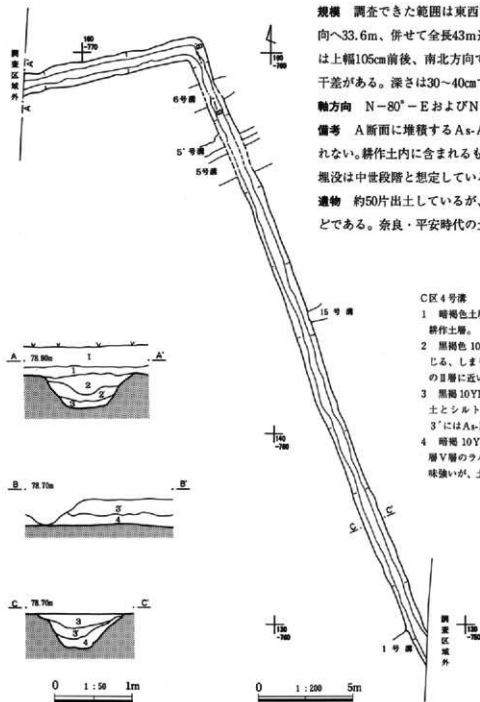
形状 直線的な溝が途中で105°前後のやや鈍角に屈曲し、ふたたび直線的につながっている。底面レベルは比高差3cm前後の弱く波打つような凹凸があって規則的ではないが、南側に向かって低くわずかに傾斜する傾向がありそうである。断面は逆台形状で底面は比較的平坦になっているが、A区古墳時代の溝ほど規則的ではない。

規模 調査できた範囲は東西方向で9.1m、南北方向へ33.6m、併せて全長43m近くある。東西方向では上幅105cm前後、南北方向では上幅95cm前後で若干差がある。深さは30~40cmで均一になる。

軸方向 N-80°-EおよびN-19°-W。

備考 A断面に堆積するAs-Aは他の断面には見られない。耕作土内に含まれるものが沈降したもので、埋没は中世段階と想定している。

遺物 約50片出土しているが、細片・小片がほとんどである。奈良・平安時代の土器が中心になる。



C区4号溝

- 1 暗褐色土層 基本土層I層に相当する耕作土層。
- 2 黒褐色10YR2/3 As-AやAs-Bの混じる、しまりの強い砂質土層。基本土層のII層に近い。2'はほぼ同じ。
- 3 黒褐色10YR2/2 ブロック状のAs-B混土とシルト質土からなる弱粘性土層。3'にはAs-Bの量が増し砂質となる。
- 4 暗褐色10YR3/3 シルト質土。基本土層V層のラハル層に比べはるかに黒色味強いが、土質は類似する。

第280図 4号溝

5・6号溝

1.8~2.1mの間隔で、2本はほぼ平行に並んで確認された溝で溝脇の側溝が想定される。2本の溝の間は周辺より若干固くなっているが、道跡と断定できるほど顕著ではない。大溝に後出している。

5号溝 (第281・282回 PL-34)

東側半分では掘り直しの痕跡が顕著で、底面は2本の溝状になっている。このため、後出する北側部分を5'溝として区別した。

位置 145-770Gから155-750Gにかけて。両隅は調査区域外になる。

重複 5'溝は5号溝がかなり埋没した後に掘り直している。4号溝に後出すると思われる。7号溝に先出している。

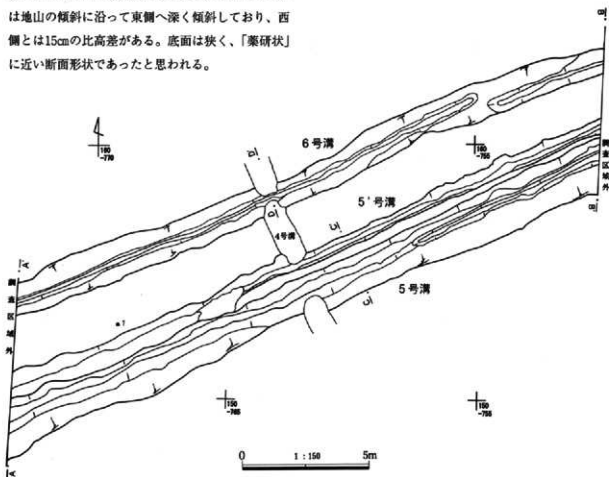
形状 ほぼ直線的な溝である。西側では不明だが、東側では掘り直しの痕跡が顕著である。底面レベルは地山の傾斜に沿って東側へ深く傾斜しており、西側とは15cmの比高差がある。底面は狭く、「薬研状」に近い断面形状であったと思われる。

規模 調査できた範囲は全長約26mになる。上幅は最も狭い西側で2.3m、掘り直し痕のある東側では広めで2.8m前後となる。深さは西側で50cm前後、東側で55cm前後である。

軸方向 N-65°-E。

備考 埋没土や出土遺物破片から中世以降に開削された施設と想定している。最終的には天明三(1783)年以降まで開口している。

遺物 図示できた須恵器1は西側下層の南壁際からの出土であるが、混入品であろう。埋没土出土の播鉢2から溝の時期を想定できそうである。これ以外に約100片が出土している。土師器・須恵器は古墳時代前期から平安時代までであるが、ほとんどが小片・細片である。播鉢等の中世軟質陶器類が20片あり、これらにはやや大型破片が混じっている。また板碑と思われる緑色片岩片が1点含まれている。



第281回 5・6号溝

6号溝 (第281・282図 PL-34)

位置 150-770Gから160-750Gにかけて。

重複 4号溝に後出している。

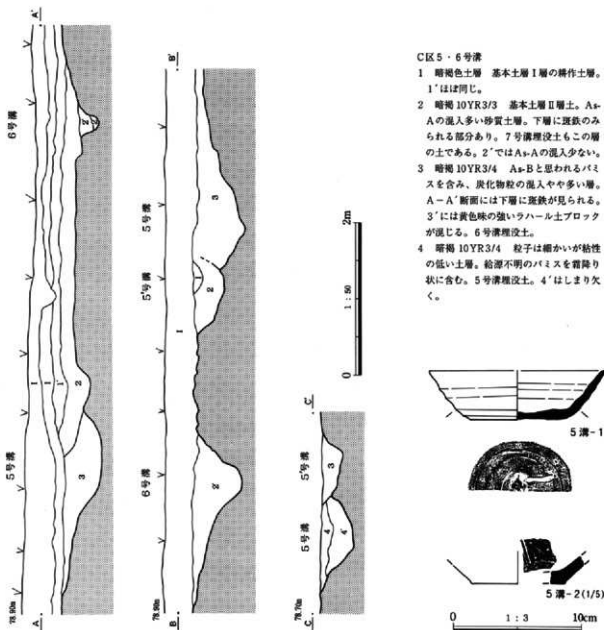
形状 5号溝に比べると小規模だが底面レベルはあまり差がない。底面は東側で段差があり、掘り直しの痕跡が観察できる。底面レベルは全体で見ると東側が深い、中央付近が浅くなっている、5号溝のような規則的な傾斜は見られない。底面が狭く、「薬研状」に近い断面である。

規模 調査できた範囲は全長25.3mになる。上幅は1.1~1.5mで、深さは西側で40cm前後、東側で50cm前後になる。

軸方向 N-66°-E。

備考 埋没土は5号溝に類似している。掘り直しのためAs-A混じりの埋没土となっているが、5号溝と対になる中世以降の溝と思われる。

遺物 土師器・須恵器の細片が少量出土しただけで、図示できる遺物はなかった。



第282図 5・6号溝断面および出土遺物

その他の溝 (C区)

7号溝 (第283図)

6号溝の上面に新たに掘った細い溝である。埋没土より期的にも性格も全く異なる別遺構と判断し、7号溝とした。

位置 155-750G。東側は調査区域外。

重複 5'溝に後出している。

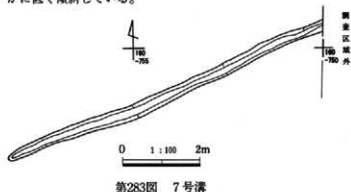
形状 ほゞ直線的な溝で、底面レベルは東側へわずかに低く傾斜している。

規模 調査できた範囲は全長9.0m、上幅30~40cm、深さ3~12cmである。

軸方向 N-68°-E。

備考 埋没土はAs-Aが純層に近いもので、天明三年(1783)直後に埋め戻された溝であろう。近世の水田に関連した施設と想定している。

遺物 出土していない。



第283図 7号溝

11号溝 (第284図 PL-35)

位置 190-745Gから200-755Gにかけて。北隅と東隅は調査区域外になる。

重複 42・43号溝に後出している。

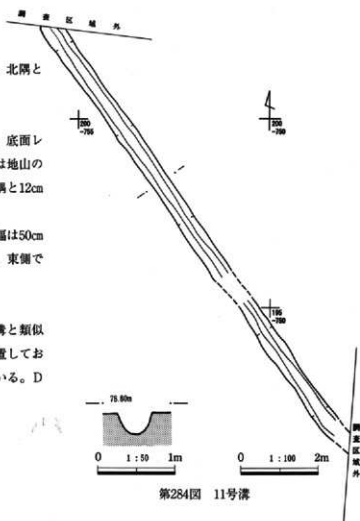
形状 直線的な溝である。断面はU字状で、底面レベルは波打つような高低があるが、全体では地山の傾斜とは逆に北側へ低く傾斜している、東隅と12cmの比高差がある。

規模 調査できた範囲では全長13.6m、上幅は50cm前後ではほぼ一定し、深さは北側で20cm前後、東側で30cm前後である。

軸方向 N-34°-W。

備考 As-Aを多量に含む埋没土で、7号溝と類似点が多い。大溝北東側の溝群の最上面に位置しており、溝群が埋没しきった状態で開削されている。D区では本溝の延長部分は確認できない。

遺物 出土していない。



第284図 11号溝

14号溝 (第285図 P L-35)

位置 105-770Gから105-755Gにかけて。C区の南東隅にあたり、南隅・西隅は調査区域外になる。B区では本溝の続きと考えられる溝は見つかっていない。

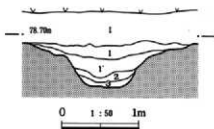
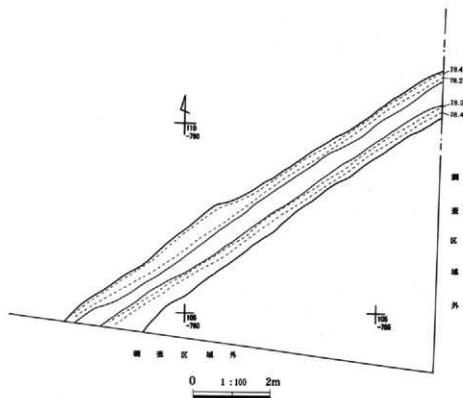
形状 壁面の崩落が見られるが、開削当初は直線的な溝であったと思われる。底面は比較的広く平坦で、調査範囲では底面レベルはほぼ水平である。断面は壁の崩落がすすんでいるようだが、「葉研状」が想定できるような中段の陵が残っている。

規模 調査できた範囲は全長11.3m、上幅1.1~1.4m、深さ45cm前後で、全域ではほぼ一定している。下幅は30~48cmでやや差が大きい。

軸方向 N-58°-E。

備考 軸方向は本遺跡内に類例が少ない。北東側に延長すれば大溝と直交しそうである。埋没土には中層以下に洪水層、上層にAs-Bの混じる耕作土の堆積する溝であるが、壁崩落土の混入と思われる。As-Bの降下した天仁元年(1108)以降に開削された溝と考えたい。下層埋没土には砂の混入が多く、水性堆積が想定されるが、ラミナ状の堆積と表せるような顕著な痕跡はない。

遺物 刷毛目のある台付甕底部と器形不明の微細片2片のみで、図示できるものはなかった。



C区14号溝

- 1 暗褐色土層 As-Bの混じる砂質土層。基本土層の目層に近い。1'には地山のシルト質土ブロックが混じる。
- 2 暗褐色土層。砂質土主体でシルト質土がブロック状に混入する土層。
- 3 暗黄褐色土層 弱粘性土。砂をブロック状に混入する。

第285図 14号溝

その他の溝 (C区)

15号溝 (第286図 PL-35)

位置 170-760 Gから130-765 Gにかけて。C区の中央を屈曲しながら横切っている。両隅は調査範囲の中で分からなくなっている。

重複 4～6号溝に先出している。

形状 小さな蛇行があり、直線的な部分は少ない。南隅は3方向へ分岐し、隅は立ち上がって不明になる。底面レベルは緩やかに波打つような凹凸があるが、全体では南側が若干深くなる傾向にある。

規模 全長は44m以上になる。上幅は40～50cm、深さ4～9cmである。

軸方向 北隅でN-10°-W、南隅でN-25°-E、南隅では一様でない。

備考 As-Bの混じる耕作土下から見つかった溝である。天仁元年(1108)以前に埋没した水路的な施設が想定されるが、不明瞭である。

遺物 総数21片の土師器・須恵器小片が出土している。奈良・平安時代を中心とする土器である。

16号溝 (第286図 PL-35)

位置 140-755 Gから130-760 Gにかけて。15号溝の東側70～110cmの位置に並んでいる。北隅は4号溝の中で、南隅は15号溝と重なって、それぞれその先は不明になる。

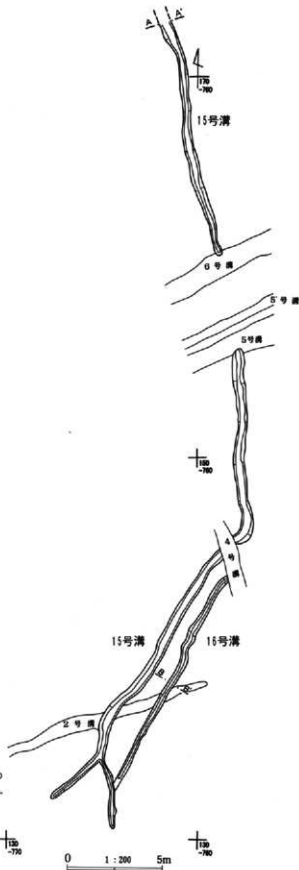
重複 4号溝に先出している。

形状 細かな蛇行が多いが全体ではほぼ直線的な走行である。底面レベルには凹凸があり、どちらか一方に向かって傾斜しているということはない。



C区15・16号溝埋没土

- 1 黒褐色土層 シルト質土。基本土層のN層に近い。表面付近にわずかにAs-B混土が見られる。



第286図 15・16号溝

規模 調査できた範囲は全長12.4m、上幅20~40cmで総じて南側が細い。深さは4~9cmである。

軸方向 全体では概ねN-28°-E付近である。

備考 性格不明だが、水路にはならないであろう。

遺物 薄手の土師器微細片5片が出土したのみで、図示できる遺物はなかった。

17号溝 (第287図 P L-35)

位置 145-765Gから145-755Gにかけて。西側は5号溝に重複した先で不明になる。東側は大溝につながっている。

重複 4・5号溝に先出している。15号溝や大溝とも重複するが新旧関係は確認されていない。

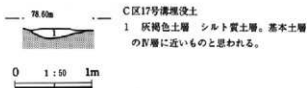
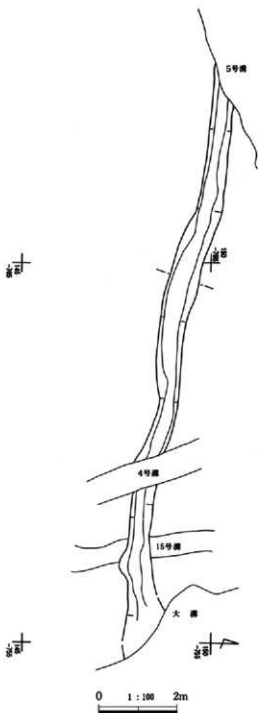
形状 弱い蛇行があるが、ほぼ直線的に伸びる溝である。底面の形状は一定していない。断面は皿底状で、溝としては不明瞭なものである。上面が大きく削られたものと思われる。底面レベルは中央付近がやや深くなっているが、全体では地山の傾斜に沿って東側に低く傾斜していて、西隅と5cm前後の比高差がある。

規模 調査できた範囲は全長約15m、上幅45~80cmである。深さは4~5cmの部分がほとんどだが、中央付近のみ10cm近くある。

軸方向 蛇行があるがN-80°-W前後にある。

備考 As-B混じりの耕作土下で確認できた溝である。大溝へ向かう排水路を想定しているが、断面に水の流れた痕跡は確認できない。条里期の水田畦畔の軸方向とも合致していない。

遺物 出土していない。



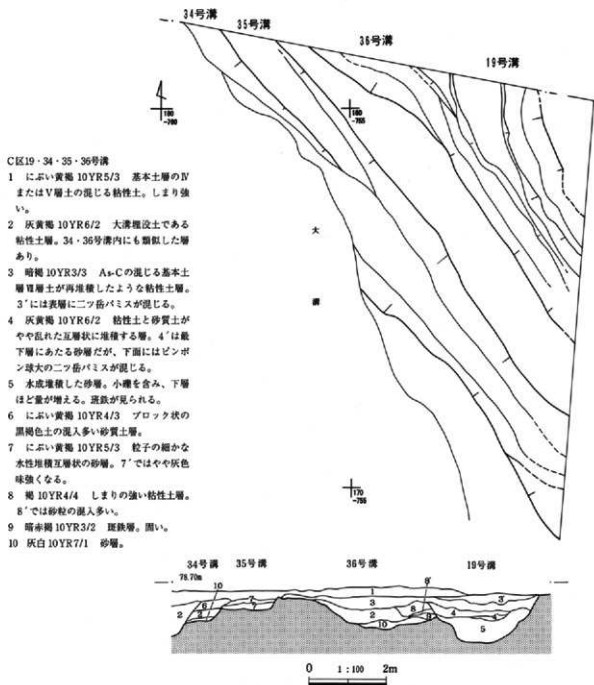
第287図 17号溝

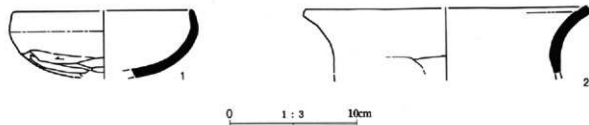
19・34・35・36号溝

大溝の東側にある溝群のうち、平成11年度の調査で確認した部分である。ここで確認できるのは、35・36号溝を中心とする本来2条の溝を掘り直した遺構と思われる。この溝群の延長はD区南端や取付道路A区南端にも見られ、全長80m以上の規模でつながることが想定される。

19・36号溝 (第288・289図 P L-35)

2条の溝群の東側に位置するもので、北隅で二股に分かれており、先出する西側部分を36号溝とした。北側にある平成14年度に調査したC・D区溝群につながっている。19→44号溝、36→50号溝という延長を考えたいが、形状が異なる部分も多く不明瞭である。





第289図 19号溝出土遺物

位置 180-755Gから175-745Gにかけて。東隅は調査区域外となる。北側は未調査部分を越えて第298図へつながっている。

重複 36号溝先出→19号溝後出となる。

形状 調査範囲では19号溝は東側を中心とした弧を描くように蛇行している。36号溝は南東側では直線的だが、北西側では19号溝とは反対に西側へ曲がっている。36号溝の壁の立ち上がりは緩やかで、傾斜は一様ではない。壁は崩落や浸食により、旧状はあまり止めていないようである。19号溝は東壁が比較的鋭い立ち上がりを留めている。

規模 調査できた範囲は19号溝部分では全長約6m、36号溝部分は約8mである。底面のレベルは19号溝は南東へ向かって低く傾斜しているが、36号溝は凹凸が多く全体の形状が分からない。19号溝のほうが深く、10-50cmの比高差を生じている。

軸方向 19号溝はN-31°-W前後、36号溝はN-33°-W前後である。

備考 両溝とも水性堆積の痕跡が確認できる。36号溝が埋没しきった後に19号溝を開削している。先行する35号溝の方が底面が浅く広いので、19号溝の掘り直しては深さを得ることを目的としたことが想定できる。

遺物 19号溝埋没土中の土師器2点を図示した。これ以外に総数160片の土器が出土しているが、須恵器は5片で、他は土師器である。古式土師器から平安時代頃までの土器が混在しているが、古墳時代末から奈良時代が中心である。口径の大きな杯類の破片が目立っている。

34・35号溝 (第288図 PL-35)

大溝と19号溝の間にある。ごく鋭角に交差する2本の溝と考え、北溝部分で西から34・35号溝としたが、南側部分は分かりにくい。調査範囲以北は大溝に切られて不明になると思われる。

位置 170-745Gから180-755Gにかけて。南東隅は調査区域外となる。北西隅は未調査部分にかかり、大溝にも壊され不明瞭になるが、D区に延長して第309図に示した溝群に続く可能性がある。

重複 35号溝先出→34号溝後出となる。34号溝は大溝の上層より先に埋没している。

形状 両溝とも西側に中心を置く緩やかな弧状になる可能性があるが、調査範囲では比較的直線的となっている。34号溝の底面レベルは凹凸が大きいが、全体では南東側へ低く傾斜している。34号溝は35号溝より北西側で30cm前後、南東隅で25cm前後深くなっている。残存状態の良い北西側では両溝とも底面は広く平坦になっている。

規模 調査できた範囲では34号溝は全長14m以上となる。35号溝で確実なのは北西側4.5mのみであるが、南側部分を含めれば15m以上となる。

軸方向 34号溝はN-34°-W前後、35号溝はN-28°-W前後になるとと思われる。

備考 両溝とも水成堆積の痕跡が認められる。確認できる範囲では35号溝が埋没しきってから34号溝が開削されている。

遺物 図示できる遺物はなかった。厚手の壺・甕類を中心に土師器9片を出土している。

32号溝 (第290図)

位置 130-755Gから135-750Gにかけて。北東隅は調査区域外となる。

重複 4号溝・11号ピットに先出している。

形状 南西隅は途切れている。この南西隅付近で蛇行するが、比較的直線的な溝である。底面レベルは南側へ低くわずかに傾斜しているが、隅付近は浅くなっている。

規模 調査できた範囲は全長9.8m確認できる。上幅は24~28cmで規則的だが、南西隅付近のみ幅広で40cm近くになる。深さは10~17cmになる。

軸方向 全体ではN-42°-E前後をさしている。

備考 堅穴住居のある一面にあり、住居を避けるようにして開削されている。埋没土も住居と近い部分があるが、古代の遺構となる確証は得られていない。走行からは古代の遺構とのつながりは想定しにくい。埋没土は水平に近い堆積状態だが、水成堆積の痕跡は認められない。

遺物 図示できる遺物はなかった。南西隅付近を中心に土師器片が少量出土している。



第290図 32号溝

38号溝 (第291図 PL-36)

位置 160-760Gから160-770Gにかけて。西隅は調査区域外で、東隅は大溝に合流している。

重複 泥流層下の耕作痕に先出している。大溝の上面埋没土よりも先出している。

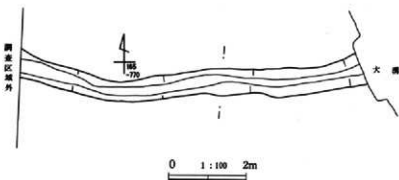
形状 南側に張り出すように湾曲している。底面には凹凸が強く、底面レベルには5cmの比高差がある。

規模 調査できた範囲は全長9.2m、上幅55~75cm、深さ20~25cmである。

軸方向 西隅を除くとN-86°-E前後となる。

備考 配置からは大溝へ続く排水路状であるが、水成堆積の痕跡は認められない。

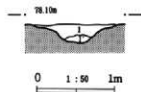
遺物 出土していない。



第291図 38号溝

38号溝

1 層状 10YR3/4 褐色土小ブロックの混じる粘性土。37号溝埋没土に類似する。1'では粘性・しまり増す。



33号溝 (第292図 PL-36)

位置 135-770Gから145-755Gにかけて。西側は調査区域外となり、東側は大溝につながる。

重複 4号溝・2号掘立柱建物に先出するほか、15・17号溝等にも重複すると思われる。

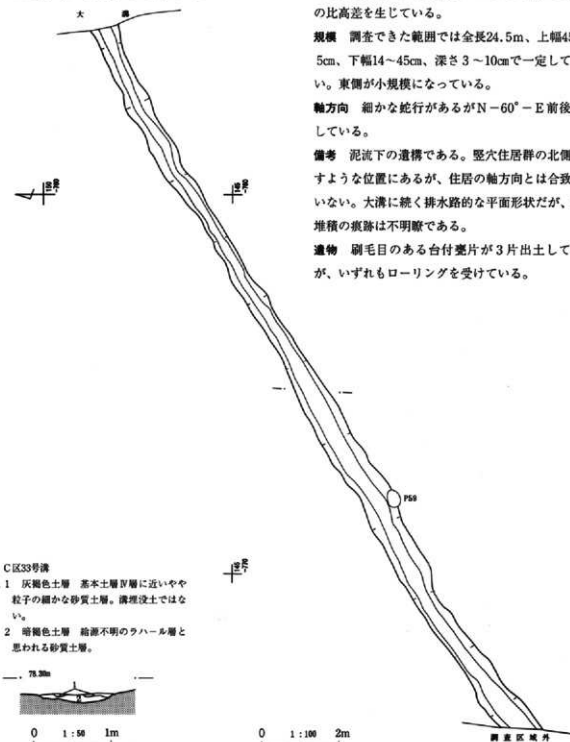
形状 ほぼ直線的な溝である。壁は崩落がすすみ、プランの歪みを大きくしている。底面は一定せず、壁の立ち上がりも不明瞭である。底面レベルは全体では東側に向かって低く僅かに傾斜する傾向があるが、東西両隅より中央付近のほうが低く、3cm前後の比高差を生じている。

規模 調査できた範囲では全長24.5m、上幅45~85cm、下幅14~45cm、深さ3~10cmで一定していない。東側が小規模になっている。

軸方向 細かな蛇行があるがN-60°-E前後をさしている。

備考 泥流下の遺構である。竪穴住居群の北側を画すような位置にあるが、住居の軸方向とは合致していない。大溝に続く排水路的な平面形状だが、水成堆積の痕跡は不明瞭である。

遺物 刷毛目のある台付壺片が3片出土しているが、いずれもローリングを受けている。



C区33号溝

- 1 灰褐色土層 基本土層IV層に近いやや粒子の細かい砂質土層。溝埋没土ではない。
- 2 暗褐色土層 給源不明のラハル層と思われる砂質土層。

第292図 33号溝

37号溝 (第293図)

位置 105-765Gから115-750Gにかけて。C区の南隅にあり、南と東の両側は調査区域外となっている。

重複 泥流下の調査で確認されている。調査範囲内に重複する遺構はない。

形状 比較的直線的な溝が108-765グリッド付近で鈍角に曲がっている。南側部分が直線的に南下すればB区で続きが確認されるはずだが、該当する溝は調査されていない。底面が比較的平坦で断面は「葉研状」に近く、上方へ大きく開いている。遺構確認段階で上面の土を削り込んで現状の上幅となっているが、本来は80cm前後の上幅が確認されるはずである。底面は断面では平坦だが底面レベルは

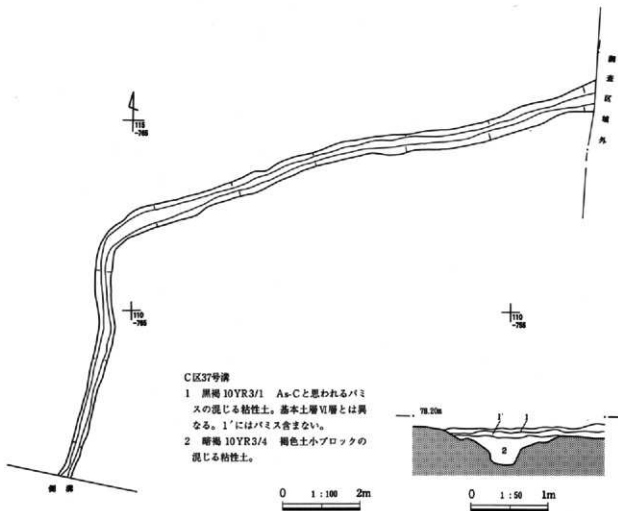
凹凸が強く、最大10cmの比高差を生じている。どちらか一方に傾斜するような傾向は視えない。

規模 調査できた範囲は南北方向に6.4m、東西方向に13.1mの長さがある。上幅は南側で30-42cm、その他では40-50cmで、東西方向のほうが幅広である。下幅は20cm前後の部分が大半となっており、想定される上幅に比べてかなり狭い。確認面からの深さは18-29cmである。

軸方向 南北方向へはN-15°-E、東西方向ではN-80°-E前後である。

備考 埋没土から古代の遺構となる。断面に水成堆積の痕跡は観察されない。性格不明の施設であるが区画溝的な性格の遺構を想定している。

遺物 出土していない。



第293図 37号溝

大溝 (第294~297図 P L-36)

当初、北西方向から流下する河道を想定したため、溝番号が付かなかった。遺構と想定された後でも調査中に呼称されていた「大溝」の名をそのまま遺構名とする。

C区北隅は用地の関係で2次に分けた調査となったが、本溝も分断された調査となり、全体の威容を示す写真を残すことができなかった。

位置 145-750Gから205-790Gにかけて。C区の北側から一部取付D区東隅にかかる。北西と南東隅は調査区域外であるが、取付A区南隅にかかっている可能性がある。

重複 小区画水田は軸方向が近似しているが、本溝を意識した畦が見られず、本溝が後出すると思われる。5・6号溝に先出している。33・38号溝等、本溝に直角に近い角度で交差している溝が多い。

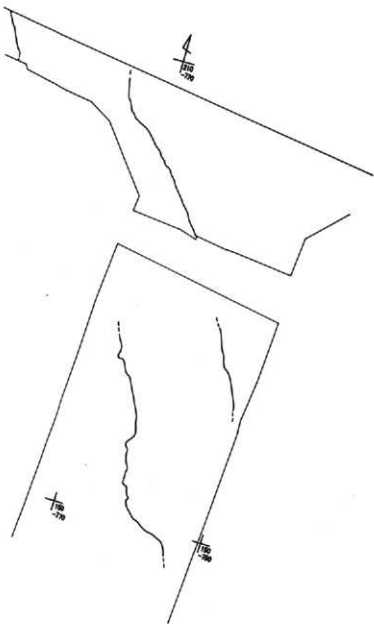
形状 上面は崩落のため不整となっているが、下層は比較的直線的なプランである。激しい湧水のため底面は不明瞭な部分が多いが、幅広かつ平坦になっている。壁の立ち上がりは緩やかだが、直線的な走行や底面形状から人工的な流路と判断できよう。

規模 C区と取付D区間で未調査部分があるが、両者をつなげると全長65m以上が確認されている。取付道A区を加えると総延長130mの直線的な溝になる。全容の確認できるC区で溝上幅13m前後、下幅9.7m前後である。深さは1m前後である。

軸方向 N-28°-W前後。取付道A区南隅まで直線的につながっている。

備考 埋没土は砂質土主体でラミナ状の部分も多い。規模の大きな溝だが、拳大以上の礫の混入は下層にも見られない。また、溝の中で瀬換えを行ないながら徐々に埋没していくような痕跡も看取できず、比較的短期間に埋没し、その後掘り直しなどの手が加えられぬまま廃棄されたようである。古墳時代の小区画の水田とほぼ同じ軸方向にあるが、本溝の現状の規模での上端に大畦などの区画はなく、水田面がそのまま大溝上端に接している。水田が廃棄された後の開削と考えるのが妥当であろう。ただ

し、この水田に伴う小規模な水路が大溝に先行して開削されていた可能性はある。開削時期は不明であるが、埋没時期は8世紀以降と考えたい。



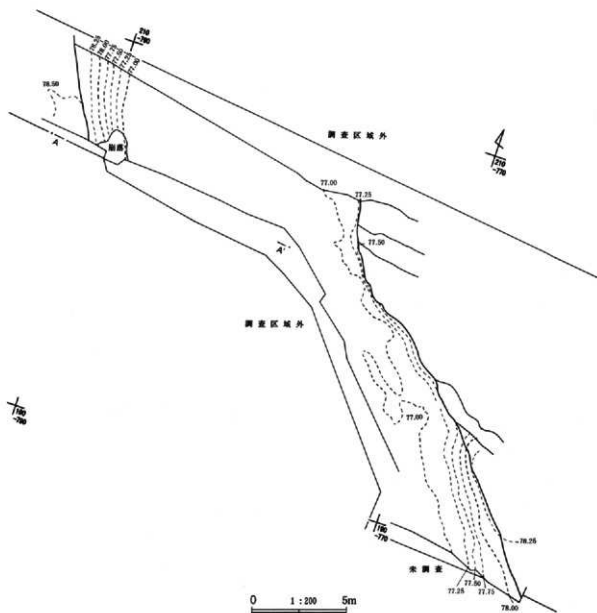
第294図 大溝模式図

その他の溝 (C区)

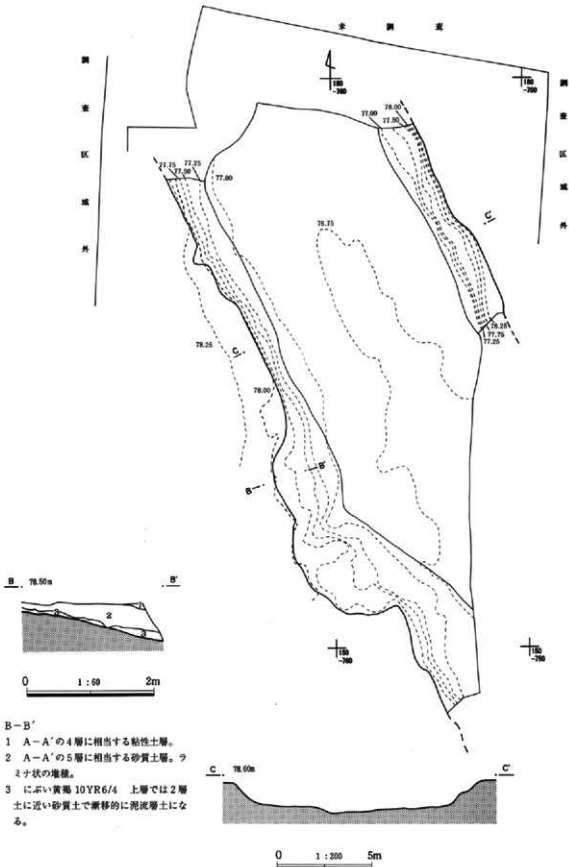
遺物 須恵器 2点、土師器 1点を図示した。下層埋没土の出土で若干ローリングを受けている。直接本溝の時期決定を行なえる資料ではないが、近接した時期の土器群である。

図示した以外に土師器約390片、須恵器70片が出土している。土師器は杯類が多く、7割以上を占め、大型破片も含まれる。平底に近いものが多い。

甕類には刷毛目のある時期のものから薄手の長胴甕まで含まれるが、小片が主体である。須恵器は叩きのある大型甕類に大破片が多い。杯類は奈良時代以降が中心となる。総じて古い時期の土器ほどローリングを強く受けている。中世以降の遺物の混入は見られない。

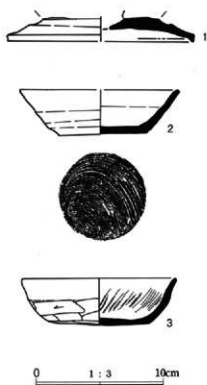


第295図 大溝(取付道D区付近)



第296図 大溝(C区)

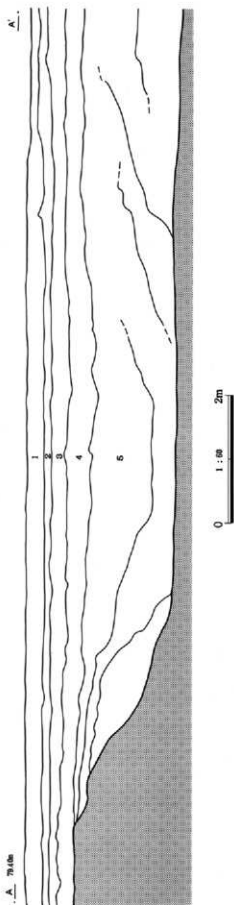
その他の溝 (C区)



大溝

- 1 寄土および残存土。
- 2 黒縄 10YR3/1 基本土層Ⅱ層。
- 3 黒縄 10YR3/1 基本土層のⅢ層に近いA・B混じりの粗粒土層。下層ではA・Bの量が増す。
- 4 褐灰 10YR5/1 シルト質の粘性土層。上層には断続が見られる。
- 5 基本土層のV層に近いと思われるラハール層。いくつものユニットに細分できる。色調はにぶい黄褐色10YR7/4～6/3前後にある。シルト質土・細粒砂・粗粒砂がラミナ状に堆積しているが、比較的短期に堆積したと思われる。以下未注記も同質。

第297図 大溝断面および出土遺物



大溝東側の溝群

C区北隅の大溝の東側に隣接して数条の小規模の溝を確認できる。C区では第288図の溝群をすでに扱っているが、D区第309図や取付道E区第324図の溝群も一連の溝群にあたる。第298図に示した溝群は平成13年度調査地域にかかる溝群である。他の地区の溝と比べて特に蛇行・合流・分流が著しい一画となっており、本図に示した部分だけを見ると自然流路の様相を呈している。

泥流層下の調査時に確認できた溝群で、古墳時代の小区画水田上にあり、遺物の出土の多い点も他の地区とは異なった特徴である。

42・43号溝 (第298・299図)

206-757G付近で2本の溝が合流している。全体を42号溝としたが、合流点の北側にある規模の小さな溝を43号溝として別けた。

位置 190-745Gから200-760Gにかけて。

重複 北隅は51号溝から分岐しているが、新旧関係は確認できていない。51号溝よりやや浅くなっている。

形状 溝群にあっては比較的直線的な溝である。特に43号溝からの走行には屈曲が少ない。底面は一様でなく、丸底状の部分が多い。底面レベルには凹凸があり10cm以上の比高差を生じている。全体ではほぼ水平になっている。43号溝部分は10cm近く浅くなっている。

軸方向 43号溝から続く直線部分でN-34°-W前後になる。

規模 調査できた範囲は全長16.5mある。42号溝では上幅1.2~0.8m前後であるが、0.9m前後の部分が大半である。下幅は45~12cmで差が大きくなっている。深さは45~33cmである。43号溝は0.6m上幅前後で、深さ27~20cmである。

備考 形状や深さから、当初は43号溝から続く直線的な溝であり、42号溝の蛇行部分は後出すると考えたい。

遺物 出土していない。

44・51・52・53号溝 (第298・299図)

溝群の中心にあり50号溝と並んで規模も大きい。蛇行や合流・分岐も多く不明瞭である。203-770G付近で南側の52号溝と北側の53号溝が合流し、ここからを44号溝とした。52号溝と44号溝の走行に齟齬はなく、同一の溝としたほうが良さそうである。197-758G付近で北側から合流する溝を51号溝とした。44号溝より25cm浅い溝であるが、44号溝南半分とつなぐと直線的な走行になる。197-762G付近では分岐した後に50号溝に合流する部分もある。

位置 本流部分は185-750Gから200-775Gにかけて。51号溝が200-760Gを中心に、53号溝が200-772G付近にある。

重複 52号溝は大溝と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 蛇行がやや多く、全体では弧状に屈曲している。南側に向かって合流を繰り返す度に規模を大きくしており、この地点のみの平面からは自然流路の様相が特に強く感じられる。44号溝の底面レベルは北側に低く傾斜していて、南隅と20cm近い比高差を生じている。地山の傾斜や想定される水の流れとは逆行している。また、44号溝南西側の東壁には段があり、比高差20cmの二段底状になっている。

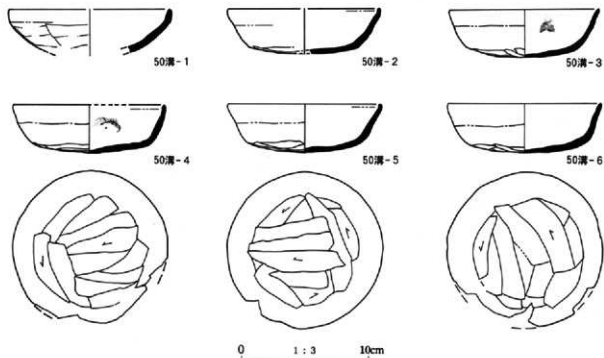
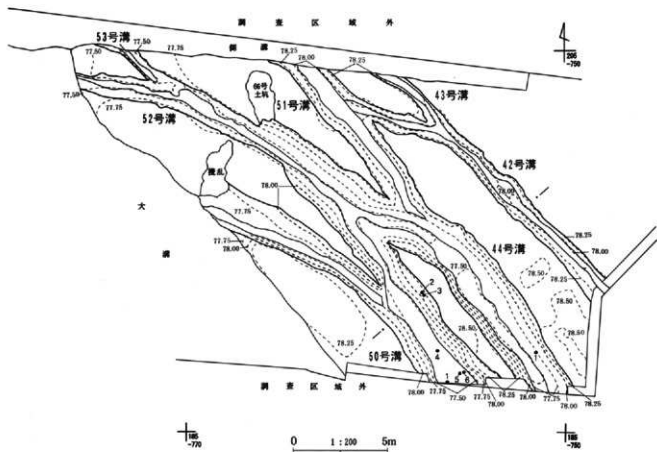
規模 52号溝から44号溝までは調査できた範囲で全長31mになる。51号溝が9.8m、53号溝が2.7m分調査されている。上幅は44号溝が1.7~2.4m、51号溝が1.6m前後、52号溝が1.2m、53号溝が0.6mである。

軸方向 北西側ではN-58°-W前後、南東側ではN-35°-W前後になる。

備考 大溝北西側溝群中、特に蛇行がきつい溝である。大溝埋没過程の流路の一部となり、他の溝と分離される可能性も考慮されるべきであろう。

遺物 44号溝の南側下層埋没土内出土のほぼ完形の土師器杯1を図示した。50号溝出土の土器群に近接する時期のものと思われる。

その他の溝 (C区)



第298図 42～44・50～53号溝および出土遺物

50号溝 (第298・299図)

溝群の南西隅にある。西隅は大溝に重なる。191-759G付近で44号溝から分岐した溝に合流する。

位置 185-755Gから195-765Gにかけて。

重複 7号住居に先出している。

形状 弧状に屈曲しているが、44号溝分岐部分とは直線に近い状態で合流する。底面レベルにも段差が見えない。

規模 調査できた範囲は全長16.2m、上幅は南側で2.6m前後、西側で1.7m前後になる。深さは南側で最大90cmになる。

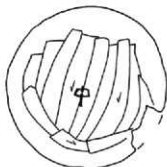
軸方向 南側でN-33°-W前後で、44号溝とはほぼ平行して並んでいる。

備考 底面レベルから本来の流路は44号溝北半から続く溝であったと思われる。本溝北半は大溝埋没過程の流路にあたり、本溝南半と合流しているようである。

遺物 土師器杯のみ6点を図示した。南隅付近から集中して出土した土器だが、7号住居との重複部分にあたり、同住居に伴う可能性がある。他に土師器杯を中心に17片、須恵器2片が出土している。



44溝-1



0 1:3 10cm



第299図 42・44・50号溝断面および出土遺物

40号溝 (第300図)

大溝西隅から幅約30mある溝群の東隅に位置する小規模な溝で、泥流上面で確認されている。

位置 195-740Gから200-745Gにかけて。C区北東隅で取付道路B区にかかる部分にある。南東隅は調査区域外になる。北西側はD区との境の未調査部分にあたり、B区側では不明瞭になる。

重複 古墳時代の小区画水田に後出している。

形状 直線的な溝である。底面にはやや凹凸があるが、底面レベルは南東側が低く傾斜していて、北隅とは5cmの比高差を生じている。

規模 調査できた範囲では全長5.3m、上幅55~70cm、深さは10~19cmである。

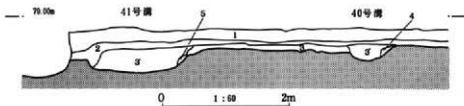
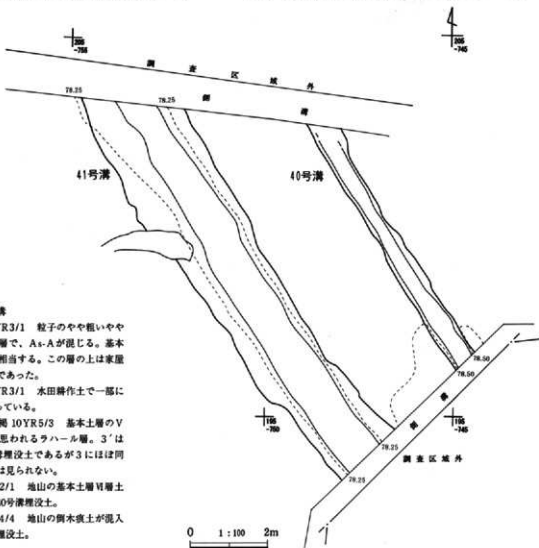
軸方向 N-31°-E。

備考 水の流れた痕跡は認められない。

遺物 土師器約50片、須恵器5片が出土している。

C区40・41号溝

- 1 黒褐色 10YR3/1 粒子のやや粗いややしまり強い層で、As-Aが混じる。基本土層II層に相当する。この層の上は家屋土台の寄土であった。
- 2 黒褐色 10YR3/1 水田耕作土で一部にAs-Bが覆っている。
- 3 にぶい黄褐色 10YR5/3 基本土層のV層に近いと思われるラハール層。3'は40・41号溝埋没土であるが3には同じ。ラミナは見られない。
- 4 黒 10YR2/1 地山の基本土層VI層土が混入した40号溝埋没土。
- 5 褐色 10YR4/4 地山の黄褐色土が混入した41号溝埋没土。



第300図 40・41号溝

41号溝 (第300図)

40号溝同様に泥流上面で確認された溝で、同溝西側2.7mに平行して並んでいる。

位置 190-745Gから200-750Gにかけて。

形状 直線的な溝である。底面は比較的平坦で、底面レベルもほぼ水平である。

規模 調査できた範囲は全長11.3m、上幅2.0m前後、下幅1.1m、深さ25cm前後である。

軸方向 N-31°-E。

備考 泥流で一気に埋れた溝である。

遺物 出土していない。

46・47号溝

取付道D区に位置するが、C区北隅と同時に調査した一画で、C区の項で扱った。どちらも泥流上面で確認され、畝サク状耕作痕に後出している。

46号溝 (第301図)

位置 205-790・795Gにかけて。北西側は調査区域外になる。

形状 調査範囲では直線的である。

規模 調査できた範囲は全長6.3m、上幅1.3m前後である。底面には不規則な凹凸があり、深さは7~16cmで一様でない。

軸方向 N-41°-W。

備考 C区南側では本溝の延長部分は確認できない。大溝内に入り込むものと思われる。溝と呼ぶのに相応しいか疑問である。出土遺物はない。

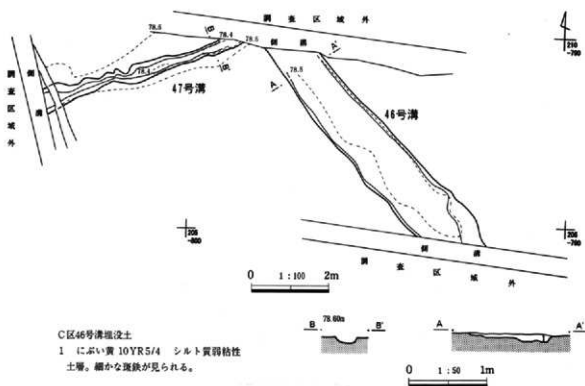
47号溝 (第301図)

位置 205-795・800Gにかけて。

形状 蛇行が多く、底面は凹凸がきつく、形状は一定していない。底面レベルも10cmの比高差がある。

規模 調査できた範囲は全長5.0m、上幅は4.7~2.2m、深さ2~7cmである。

備考 調査段階で、近世以降の施設との所見がある。耕作痕に似ているが、付近のサクとは軸方向がやや逸れている。遺物は出土していない。



第301図 46・47号溝

D区の溝

C区同様に複数面の調査となったため、溝も調査面ごとに確認されている。古墳時代から江戸時代以降までの遺構が調査されている。古墳時代以降、水田として利用された地点であり、水路が多数含まれると思われる。2条で対になる長い溝が多いのも特徴である。

1～3号溝

D区北隅部分からE区にかけては微高地状の高まりとなっている。この微高地の南側縁辺に、軸方向を描いて3条並んでいる溝である。3条ともAs-B下の水田を掘り込んでいるが、As-Aの混入は見られない。各溝の間隔は狭く、道の側溝になるとは考えにくい。また、掘設土に水性堆積の痕跡は確認できず、地境的な性格を想定している。

1号溝 (第302・303図 PL-37)

位置 280-760Gから290-740Gにかけて。3本の溝のうち北側に位置している。東西の間隔は調査区域外になっている。

重複 2号溝に先出か。

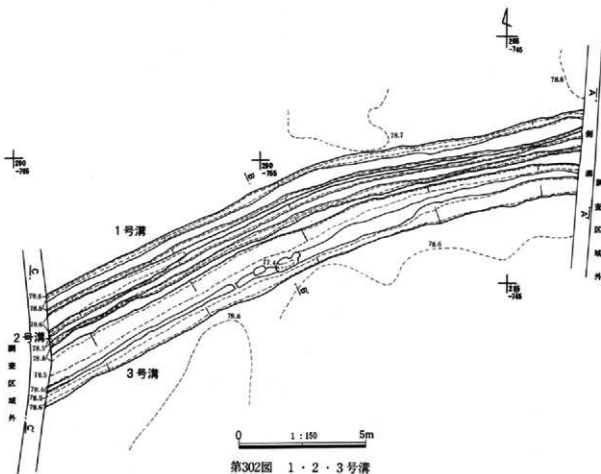
形状 調査範囲の中央付近で小さく屈曲している。底面は比較的平坦で、断面は逆台形状を呈している。底面レベルは概ね西側に低く傾斜していて、東隅と5cmの比高差を生じている。

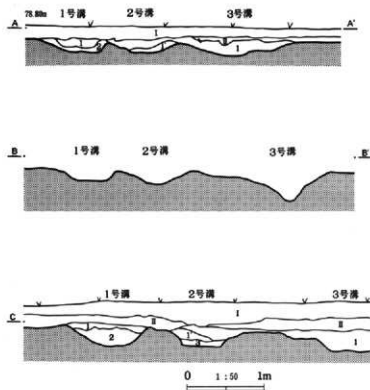
規模 調査できた範囲は全長23.7mある。上幅は80～90cm、深さは20cm前後ではほぼ一定している。

軸方向 西半でN-65°-E、東半でN-80°-E前後になる。

備考 3条の溝の内、唯一泥流と思われる土を埋没土に含む溝であり、単独で存在していたことが想定できる。

遺物 出土していない。





第303図 1・2・3号溝断面

1・2・3号溝

- 1 におい實掘 10YR5/3 基本土層のⅢ層に近い。A-Bの風入は下層ほど密になる。1'には地山粘性土が混入する。
- 2 灰黄褐10YR6/2 基本土層のⅣ・Ⅴ層に近い粘性土層。細砂の混入やや多く、A-Bを散見する。
- 3 褐 10YR4/3 粒子の粗かな粘性土層。斑鉄やや目立つ。

2号溝 (第302・303図 PL-37)

位置 280-760Gから290-740Gにかけて。東西の両側は調査区域外になっている。

重複 1号溝に後出し3号溝に先出か。A断面の精査で両溝の新旧を把握することに努めたが、明瞭な重複ではない。

形状 1号溝に並行するように調査範囲の中央付近で小さく屈曲している。底面レベルはほぼ水平で全体でも2cm前後の比高差しかない。

規模 調査できた範囲は全長23.5m、上幅60-80cm、深さ15cm前後である。

軸方向 西半でN-63°-E、東半でN-78°-E前後である。

備考 1号溝と規模が近似している。同溝と近接しながらも完全に重複する部分がなく、近い時期の掘り直しを想定できよう。

遺物 出土していない。

3号溝 (第302・303図 PL-37)

位置 280-760Gから285-740Gにかけて。東西の両側は調査区域外になっている。確認面の上部では2号溝上端と20-30cmの間隔を保っている。

重複 2号溝に後出か。

形状 全体に北側に若干張り出すように湾曲しているが、調査範囲中央東寄りでわずかに屈曲し、東隅でさらに大きく屈曲する可能性がある。西側底面には掘り直し痕のような窪みがあるが、断面には表れていない。東半の底面レベルはほぼ水平で、西半の窪みの深さは3cm前後である。

規模 調査できた範囲では全長23.6m、上幅1.5-1.8m、深さ15-21cmである。

軸方向 西半でN-62°-E、東半でN-74°-E前後となろう。

備考 3条の溝の中では最も規模が大きいが、断面の形状は一定していない。

遺物 出土していない。

その他の溝 (DK)

4号溝 (第304図 PL-37)

位置 260-760Gから265-740Gにかけて。東西の両隅は調査区域外になっている。

重複 5号溝に後出している。

形状 小さな蛇行があり、東隅で北側に屈曲する可能性があるが、概ね直線的な溝である。底面レベルはほぼ水平で、比高差は2cmしかない。

規模 調査できた範囲は全長22.6mである。上幅は0.6-1.3mと差が大きいが、深さは12cm前後で一定している。

軸方向 西隅を除けば $N-88^{\circ}-E$ 前後となる。

備考 As-B層を掘り込んでいる。

遺物 出土していない。

6号溝 (第304図)

位置 260-760G。西隅は調査区域外となり、東隅は途切れている。

重複 埋没土の対比より、4号溝に後出か。

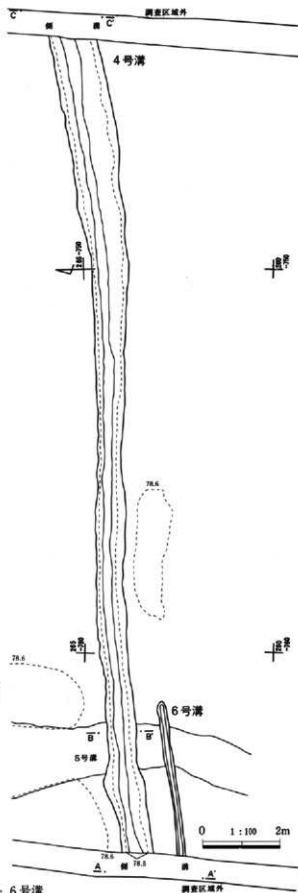
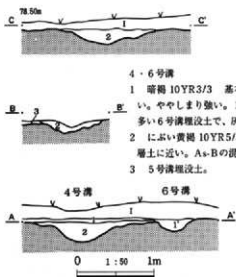
形状 狭く浅いが直線的な溝である。

規模 調査できた範囲は全長4.1mあり、上幅25cm前後、深さ5cm前後で一定である。

軸方向 $N-82^{\circ}-E$ 。

備考 As-B層を掘り込んでいる。

遺物 出土していない。



第304図 4・6号溝

5号溝 (第305図 PL-37)

位置 255-765Gから270-760Gにかけて。西側の大半は調査区域外になる。

重複 4号溝に先出している。

形状 弧状に曲がる溝で、平面外観は円墳のようにも見えるが、浅く不明瞭な遺構である。北側は幅広く二段底状の部分があるが、断面からは掘り直し痕は観察できない。

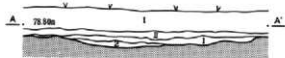
規模 調査できた範囲は全長約17mある。上幅は南側で1m前後だが、北半では2mを超える部分もあり一様でない。深さは5cm前後ではほぼ一定だが、二段底状の部分ではさらに5cmほど深くなっている。このまま円形を呈する施設となれば半径10mほどの規模と想定される。

備考 A_s-B層を掘り込んでいて、円墳とはなり得ない。断面にも盛土は観察できない。

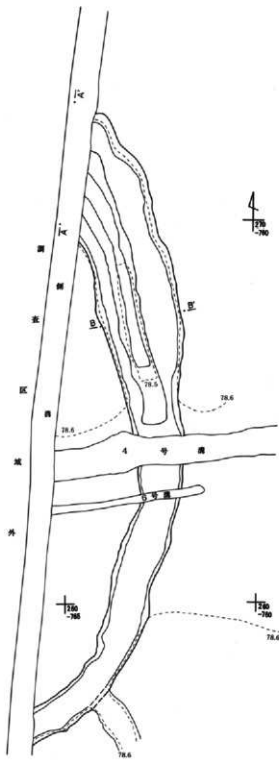
遺物 出土していない。

5号溝

- 1 暗褐色 10YR3/3 シルト質土と黒色土がブロック状に混合する粘性土層。A_s-Bの混入もやや多い。
- 2 黒褐色 10YR3/1 A_s-B混じりの粘性土ブロック。水田耕土に近い。
- 3 純層に近いA_s-B層。



0 1:50 1m



0 1:100 2m

第305図 5号溝

7・8号溝

D区中央付近に約3m間隔で並ぶ溝である。道脇の側溝状であるが、道上の硬化面は確認できない。両溝ともA_s-B層を掘り込んでいる。

7号溝 (第306図 P L-37)

位置 235-765Gから240-745Gにかけて。東西の両溝は調査区域外になっている。

重複 9・14号溝に後出するはずだが、新旧は確認できない。24号溝と調査区西隅で重複しているが、土層観察からは新旧を判断できなかった。

形状 ほぼ直線的な溝と思われるが、調査区中央付近で不明瞭になる。

規模 調査できた範囲は全長約23m、上幅30~40cm、深さはほとんどの地点で5cm以内である。

軸方向 N-84°-E前後である。

備考 8号溝と対にするには規模が小さい。

遺物 出土していない。

8号溝 (第306図 P L-37)

位置 235-765Gから240-745Gにかけて。東隅は調査区域外になり、西隅は24号溝に合流して途切れている。

重複 9号溝に後出している。14号溝との新旧は確認できていない。24号溝とは同一の埋設土となる。

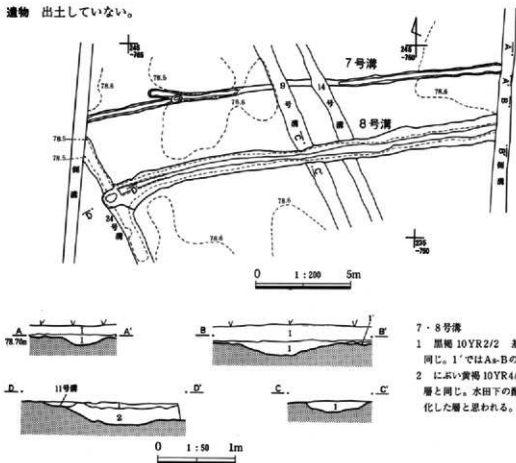
形状 西隅はやや湾曲気味だが、全体ではほぼ直線的な溝である。調査区中央付近が東西両隅より3cm前後高くなっている。

規模 調査できた範囲では全長20.6m、上幅75~110cm、深さ13~21cmである。

軸方向 西隅を除けばN-82°-E前後である。

備考 24号溝に比べ底面レベルが5cmほど高くなっている。同時存在が想定される両溝だが、開削時期には差があると思われる。

遺物 出土していない。



7・8号溝

- 1 黒埴 10YR 2/2 基本土層層にはほぼ同じ。1'ではA_s-Bの量がきわめて多い。
- 2 におい黄埴 10YR 4/3 A_s-Bの量は1層と同じ。水田下の酸化鉄分の影響で硬化した層と思われる。

第306図 7・8号溝

9・14号溝

D区中央を斜めに横切るように2条並んで確認された溝である。両溝の間隔は1~2.2mで北側ほど開いている。道脇の側溝状であるが、道状の硬化面は確認できない。埋没土にA+Bを含んでいる。底面レベルは緩やかに南へ低く傾斜している。

9号溝 (第307図)

位置 220-745 G から255-760 G にかけて。北隅は5号溝に合流し、南隅は調査区域外になる。

重複 8号溝に先出している。

形状 直線的であるが南隅はやや屈曲している。

規模 調査できた範囲は全長38.5m、上幅60~90cm、深さ6~10cmである。

軸方向 南隅を除くとN-26°-W。

遺物 出土していない。

14号溝 (第307図 P L-37)

位置 225-745 G から255-760 G にかけて。北隅は途切れ、南隅は調査区域外になる。

重複 7・8号溝に先出すると思われる。

形状 北側は一部で不明瞭になったあと、9号溝に並ぶように途切れている。

規模 調査できた範囲は全長36.8m、上幅60cm前後、深さ6cm前後である。

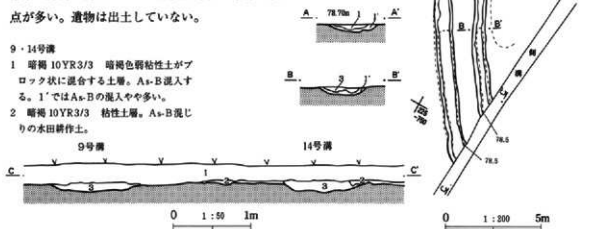
軸方向 南隅を除くとN-22°-W。

備考 規模・底面レベル・埋没土等、9号溝に類似点が多い。遺物は出土していない。

9・14号溝

1 暗褐色弱粘土がブロック状に混合する土層。A+B混入する。1'ではA+Bの混入やや多い。

2 暗褐色10YR3/3 粘土層。A+B混じりの水田耕作土。



第307図 9・14号溝

10・11号溝

大溝東側に隣接している溝群にあるが、短いうえに直線的でなく、様相を異にする遺構である。

10号溝 (第308図)

位置 230-760 Gから235-765 Gにかけて。24号溝(第313図)の西脇に開削されている。北側は調査区域外になり、南側は途切れている。

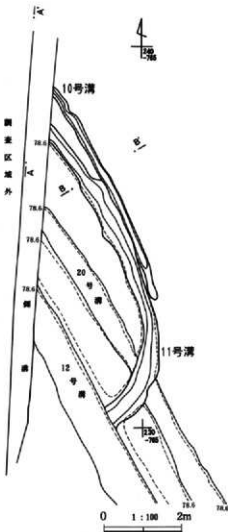
重横 24号溝に後出している。11号溝に先出か。

形状 全体では緩やかな弧状に歪んでいる。

規模 調査できた範囲は全長6.9m、上幅20cm前後、深さ8cm前後である。

軸方向 全体ではN-28°-W前後になる。

遺物 出土していない。



11号溝 (第308図 P L-37)

位置 230-765 Gから235-765 Gにかけて。北隅は調査区域外になり、南隅は12号溝に合流して途切れている。

重横 20号溝に後出すると思われるが、新旧は確認できていない。12号溝とは同時に存在か。

形状 北側では直線的に伸びて周辺の溝群と近似した軸方向にあるが、南隅で大きく弧状に湾曲している。底面形状は皿底状だが一定していない。

規模 調査できた範囲は全長9.2m、上幅は40cm前後の部分が多い。深さは10cm未満の部分が大半で、明瞭な溝ではない。

軸方向 直線部分でN-29°-W前後になる。

備考 埋没土より、中世以降の溝である。

遺物 出土していない。



0 1:50 1m

10・11号溝

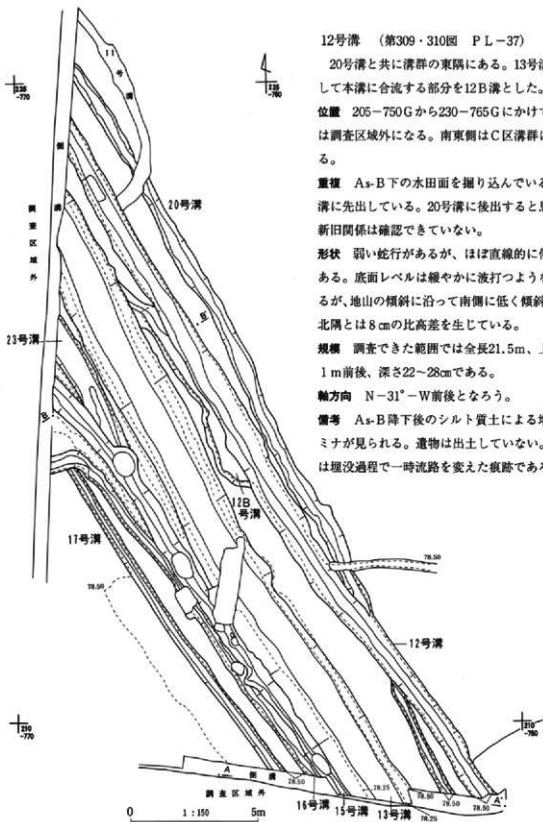
- 1 暗褐色 10YR3/3 基本土層のII層にはば同じ。遺鉄が見られる。
- 2 暗褐色 10YR3/3 A-A'をわずかに含むやや砂質土。10号溝埋没土。
- 3 黒褐色 10YR2/2 11号溝埋没土。基本土層のII層に近いがA-Bは少ない。やや砂質。B-B'断面では黄色味をおびる。
- 4 24号溝埋没土。

第308図 10・11号溝

12・13・15・16・17・20・23号溝

大溝東側に密集して並ぶ溝群でC区第298図北側

にあたる。As-B混土層(基本土層Ⅲ層)下で確認した遺構だが、As-Aの混入する溝も含まれている。



第309図 12・13・15~17・20・23号溝

12号溝 (第309・310図 PL-37)

20号溝と共に溝群の東隅にある。13号溝から分岐して本溝に合流する部分を12B溝とした。

位置 205-750Gから230-765Gにかけて。北西側は調査区域外になる。南東側はC区溝群に続いている。

重複 As-B下の水田面を掘り込んでいる。12B号溝に先出している。20号溝に後出すると思われるが新旧関係は確認できていない。

形状 弱い蛇行があるが、ほぼ直線的に伸びる溝である。底面レベルは緩やかに波打つような凹凸があるが、地山の傾斜に沿って南側に低く傾斜しており、北隅とは8cmの比高差を生じている。

規模 調査できた範囲では全長21.5m、上幅は概ね1m前後、深さ22-28cmである。

軸方向 N-31°-W前後となろう。

備考 As-B降下後のシルト質土による堆積で、ラミナが見られる。遺物は出土していない。12B号溝は埋没過程で一時流路を変えた痕跡であろう。

その他の溝 (D区)

13号溝 (第309・310図 P L-37)

位置 205-750Gから230-765Gにかけて。北西側は調査区域外になる。南東側はC区溝群に続いている。

重複 A s-B下の水田面を掘り込んでいる。15号溝に先出している。

形状 溝群の中央にあり、これらの中では最も幅太である。直線的だがわずかに西側に膨らむような湾曲がある。底面は幅1m前後と広く平坦になっている。底面レベルは水平に近く、南側へ低くわずかに傾斜し、北隅との比高差は4cmである。

規模 調査できた範囲では全長26.5m、上幅1.7~2.3m、深さ45cm前後である。

軸方向 N-30°-W前後である。

備考 底面付近にA s-Bの混入が多いが、開口部付近の地山バミスが二次堆積したもので、本溝の開削時期とは直接つながらないとする。

遺物 出土していない。

15号溝 (第309・310図)

位置 205-755Gから220-765Gにかけて。北西側は調査区域外になる。13号溝と16号溝の極めて狭い間にあり、上端は両溝と重複している。

重複 16号溝に先出し、13号溝に後出している。

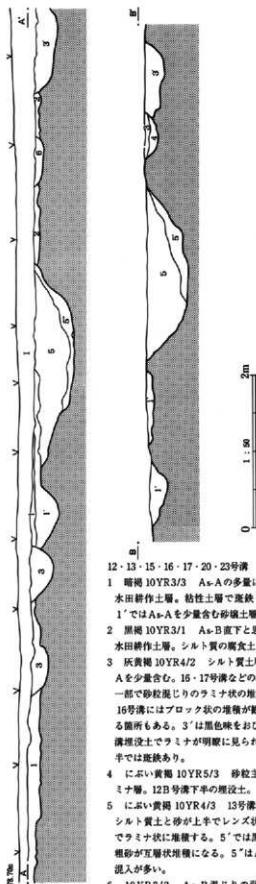
形状 上面・底面とも全体に小さな蛇行があり、北隅は西側へ弱く曲がっている。12・13号溝などこの地点の溝群とは逆な湾曲である。底面は規則的に南に低く傾斜していて、北隅とは8cmの比高差を生じている。底面にはピット状の窪みが多数あるが水流を示す窪みではない。

規模 調査できた範囲では全長19.6m、上幅70~90cm、深さ10~24cmである。

軸方向 N-34°-W前後で、北隅では約10°西側へ屈曲している。

備考 埋没土にA s-Aを含み天明三(1783)年以降まで開口していた。

遺物 出土していない。



第310図 12・13・15・17・20・23号溝断面

12・13・15・16・17・20・23号溝

- 1 暗褐色 10YR3/3 A s-Aの多量に混じる水田耕作土層。粘性土層で底鉄も多い。1'ではA s-Aを少量含む砂礫土層。
- 2 黒褐色 10YR3/1 A s-B直下と思われる水田耕作土層。シルト質の腐食土質の層。
- 3 灰黄褐色 10YR4/2 シルト質土層。A s-Aを少量含む。15・17号溝などの埋没土。一部で砂粒混じりのラミナ状の層積だが、16号溝にはブロック状の堆積が観察できる箇所もある。3'は黒色味をおびる12号溝埋没土でラミナが明瞭に見られる。北半では底鉄あり。
- 4 におい黄褐色 10YR5/3 砂粒主体のラミナ層。12号溝下下の埋没土。
- 5 におい黄褐色 10YR4/3 13号溝埋没土。シルト質土と砂が上半でレンズ状、下半でラミナ状に堆積する。5'では黒色土や粗砂が互層状堆積になる。5'ではA s-Bの混入が多い。
- 6 10YR3/2 A s-B混じりの弱粘性土層。ブロック状の堆積。

16号溝 (第309・310図)

位置 205-755Gから215-765Gにかけて。西隅は調査区域外になる。

重複 As-A混じりの水田耕作土を掘り込んでいる。15号溝に後出している。17号溝との新旧関係は確認できていないが埋没土は類似している。

形状 細かな屈曲があるうえ、北隅が西側に鋭く屈曲している。底面レベルはほぼ水平である。

規模 調査できた範囲では全長17.5mでこのうち1.5m部分が屈曲から西方である。上幅は両隅付近で70cm前後、中央付近は45cm前後となる。深さは20~27cmである。

軸方向 N-37°-W前後。北隅はこれから約60°西側に屈曲している。

備考 周辺の溝に比べて屈曲が大きく、水路的でない。北側は調査区域外で大溝に達するはずである。

遺物 出土していない。

17号溝 (第309・310図)

位置 205-760Gから215-765Gにかけて。北隅は16号溝と合流して途切れている。

重複 As-A混じりの水田耕作土を掘り込んでいる。16号溝との新旧関係は確認できていない。

形状 幅狭だが直線的である。西側に膨らむようにわずかに湾曲するのは、この地点の他の溝群と共通している。底面レベルはほぼ水平で、南隅は北隅より2cm低いみである。

規模 調査できた範囲は全長16.0m、上幅は40cm前後、深さ23cm前後でほぼ一定している。

軸方向 全体ではN-34°-W前後になる。

備考 東側に隣接する16号溝との距離は最大でも1mに達しない。規模は類似するが形状は異なり、対になる溝とは想定しにくい。

遺物 出土していない。

20号溝 (第309・310図 P L-37)

位置 205-750Gから235-765Gにかけて。北西隅は調査区域外になる。南東側はC区溝群に続いている。

重複 12号溝と交差している。遺構確認段階で本溝が先出すると考えたが、断面での先後関係は確認していない。11号溝にも先出すると思われる。

形状 細かな蛇行が多いが全体では直線的に伸びている。底面には凹凸があるが、底面レベルは地山の傾斜に沿って南側に低く傾斜し、北隅とは10cmの比高差を生じている。

規模 調査できた範囲は全長32.8m、上幅45~80cm、深さ6~10cmで一定していない。

軸方向 全体ではN-26°-W前後となる。

備考 12号溝と同時存在はありえないが、埋没土は類似している。

遺物 出土していない。

23号溝 (第309・310図)

位置 220-765Gから225-765Gにかけて。15号溝の北側で部分的に確認できた溝である。さらに北側は調査区域外になる。

重複 15号溝との新旧関係は確認できていない。
形状 全容は不明であるが、南隅でわずかに西方へ湾曲しそうである。底面は不整だが広い。底面レベルには細かな凹凸がある。

規模 調査できた範囲では全長5.4m、上幅1.2m前後、深さ20cm前後になる。

軸方向 N-26°-W前後か。

備考 本溝の南側延長部分には同じ上幅規模のある溝が存在しない。15号溝との重複地点で途切れる可能性もあろう。

遺物 出土していない。

その他の溝 (D区)

19号溝 (第311図 PL-37)

位置 215-745 Gから215-755 Gにかけて。西隅は12号溝と合流した地点で途切れ、東隅は調査区域外となる。

重複 24号溝に後出している。20号溝にも後出するはずだが新旧関係は確認できていない。

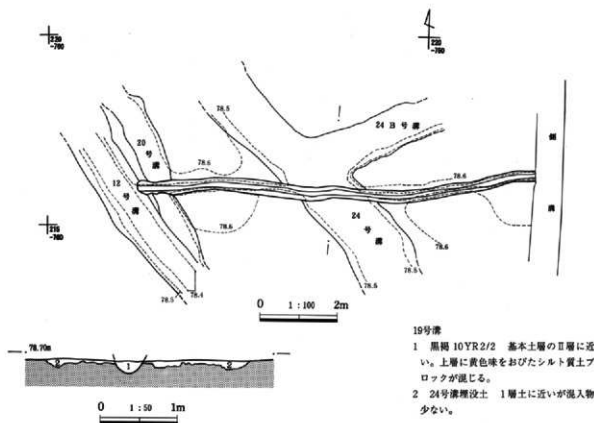
形状 緩やかな蛇行があり、東隅は北方へ弱く屈曲している。断面U字状で底面は狭く、上幅に対し深さがある。底面には凹凸があるが、底面レベルは全体では水平に近く、どちらか一方に傾斜するような傾向は認められない。

規模 調査できた範囲は全長10.6m、上幅35cm前後、深さ13-22cmである。

軸方向 N-89°-W、東隅はN-79°-E。

備考 埋設土より、天明三(1783)年以降の溝である。水性堆積の痕跡はなく、水路にはならないと思われる。大溝東側の溝群の中で途切れているが、埋設土は溝群の西側に位置する溝に近い。軸方向に本溝と関連しそうな溝は見当たらない。形状・規模も周辺の溝と共通点がない。本溝北側28mにある8号溝や49m北側にある4号溝とともに、近世以降の地割に関連する施設を想定している。

遺物 出土していない。



第311図 19号溝

21号溝 (第312図)

位置 275-755Gから275-760Gにかけて。西側は調査区域外になる。

重複 なし。

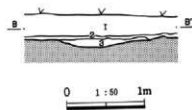
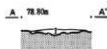
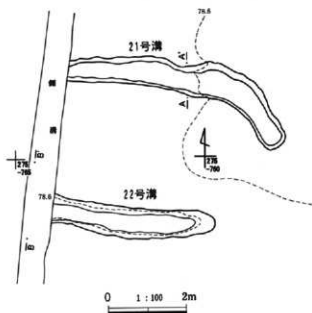
形状 東西方向に走行し、東隅のみ南側へ鋭く屈曲して途切れている。底面は凹凸が多く、掘り方のような形状である。底面レベルは西側が深くなっており、東隅とは約10cmの比高差を生じている。

規模 調査できた範囲では東西方向に4.2m、南側に2m屈曲し全長6.2m分確認できる。上幅は60~85cmで一定してない。深さは3~5cmほどしかない。

軸方向 直線部分ではN-85°-W前後になる。

備考 類似する溝は周辺には見当たらない。底面は凹凸が多く、埋没土に水性堆積の痕跡は認められない。水路ではないであろう。天明三(1783)年以降に埋没した施設である。

遺物 出土していない。



21号溝

1 暗褐色 10YR3/3 基本土層のII層に近い。

22号溝

2 黒褐色 10YR3/2 基本土層のII層に近い。A+Bの混入多く、しりとり強い。
3 暗褐色 10YR3/3 黒褐色土中に黄色味をおびるシルト小ブロックが混じる。A+Bを含むが基本土層のII層とは異なる。

第312図 21・22号溝

22号溝 (第312図)

位置 270-760G付近。西側は調査区域外になる。

重複 調査範囲にはない。西側調査区域外で5号溝と交差するはずである。

形状 全体はほぼ直線的だが、上端・下端とも整っていない。東側は緩やかに立ち上がって途切れている。底面は比較的広く、小さな凹凸が多い。底面レベルはほぼ水平である。

規模 調査できた範囲では全長4.9mまで確認できる。上幅は65~80cm、深さ10cm前後である。

軸方向 N-83°-W前後になる。

備考 21号溝同様、凹凸の多い底面の形状や埋没土から、水路ではないであろう。軸方向は21号溝に近いが埋没土は異なっている。天仁元(1108)年以降に埋没した施設である。

遺物 出土していない。

その他の溝 (D区)

24号溝 (第313図)

調査範囲の南側215-743G付近で東側へ直角に分岐する部分について、調査時の番号に重複があったので、本報告では24B溝として扱った。

位置 210-745Gから235-765Gにかけて。北西隅・南東隅とも調査区域外となる。24B溝は分岐した後、東側は調査区域外となる。

重複 10号溝に先出している。

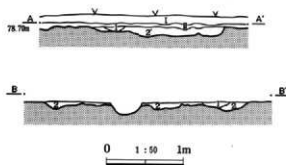
形状 24B溝との分岐位置付近で二段に屈曲しているが、他の箇所では直線的である。底面は細かな凹凸が多いが、レベルは24B溝部分を含めて概ね水平になっている。

規模 調査できた範囲では全長35m、上幅85-130cm、深さ10-15cmである。24B溝は全長6.5m分が確認されている。上幅は90cm前後である。

軸方向 N-28°-W。24B溝はN-65°-E。

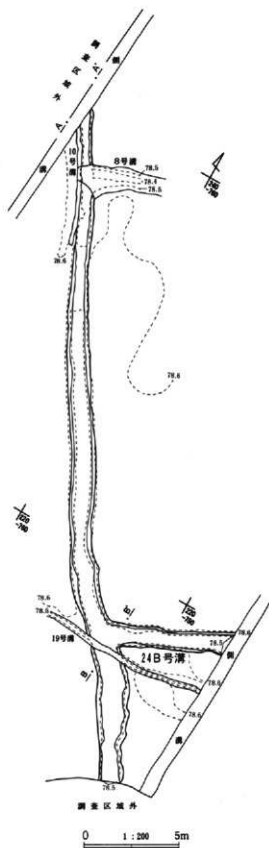
備考 24・24B溝はB断面で切り合いが確認できず、同時存在した溝と思われる。天仁元(1108)年以降の施設で、8号溝などと共に水田区画に関連するものと思われる。

遺物 出土していない。



24号溝

- 1 暗褐色土層 A-Bを少量含む10号溝埋没土。
- 2 暗褐色土層 A-B混じりの黒色土と黄褐色シルト質土がブロック状に混合する層。2'にはA-Bの混入多い。



第313図 24号溝

25号溝 (第314図)

位置 295-755 G から300-745 G にかけて。D区北端の微高地部分にある。

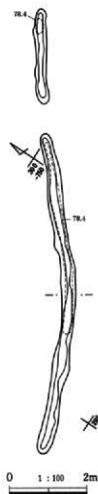
形状 途中で途切れるが、連続する溝と思われる。わずかに弧上に歪んでいる。南側に広がる古墳時代小区画水田横軸方向にほぼ平行している。南東隅の途切れる部分はこの水田の大畦延長線上にあたる。

規模 途切れる部分を含むと全長11.8m、上幅30cm前後である。底面には凹凸が多いが深さは4-7cmで、規則的な傾斜は見られない。

軸方向 北東側でN-50°-E、南西側でN-67°-E前後になる。

備考 天仁元(1108)年以前に掘設した溝である。古墳時代の小区画水田に関連する施設と思われる。

遺物 出土していない。



25号溝

1 灰黄褐 10YR4/2 基本土層のIV層に近いと思われるシルト質土と黒色土がブロック状に混合する粘性土層。

26号溝 (第314図)

位置 280-750 G から285-760 G にかけて。西側は調査区域外になる。

重複 古墳時代小区画水田に後出している。

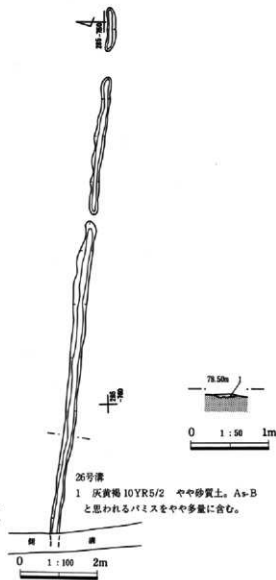
形状 ほほ直線的な溝だが、途中2ヶ所で途切れる部分がある。底面は不整で凹凸が多い。

規模 途切れる部分をつなぐと調査できた範囲では全長13.9mになる。上幅25-30cm前後、深さは3-9cmである。

軸方向 N-83°-W。

備考 天仁元(1108)年以降に埋没したと思われる。

遺物 出土していない。



26号溝

1 灰黄褐 10YR5/2 やや砂質土。A>Bと思われるバミスをやや多量に含む。

第314図 25号溝・26号溝

27～30号溝

D区南西隅の210-765Gから210-770Gにある。27～29号溝はC区溝群の延長にあり、30号溝のみ前記溝に直行している。古墳時代の小区画水田に後出しているが、水田の区画と軸方向は近似している。いずれの溝も調査区域外にかり全容は明らかにできていない。出土遺物もない。

27号溝 (第315図 P L-38)

重複 28号溝に後出か。

形状 細かな蛇行があるが全体ではほぼ直線的な溝である。4条の溝の中では幅・深さとも最大で、底面も広く平坦である。底面には緩やかな凹凸があり、中央やや南寄りに窪みがある。底面レベルは一方側に傾斜する傾向はないようである。

規模 調査できた範囲は全長5.3m、上幅75～85cm、深さ30cm前後である。

軸方向 N-38°-W。

備考 この地点の他の溝と埋没土が異なり、時期を隔てて後出する溝と思われる。

28号溝 (第315図 P L-38)

重複 27号溝に先出か。

形状 27号溝南西50cm前後の位置に、ほぼ平行して並んでいる。細く不明瞭な溝で小さな蛇行があるが、全体ではほぼ直線的な溝である。断面は皿底状で底面は狭い。底面レベルは全域でほぼ水平である。

規模 調査できた範囲は全長4.3m、上幅15～22cm、深さ7cm前後である。

軸方向 N-41°-W。

29号溝 (第315図 P L-38)

重複 30号溝に先出している。

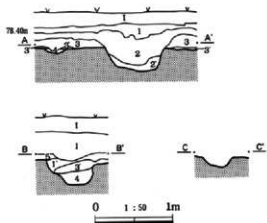
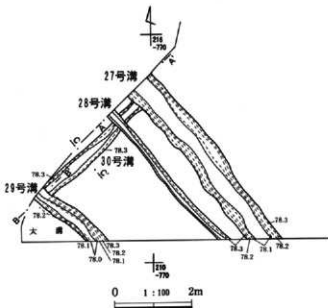
形状 狭い確認範囲であるが、北東側に張り出すように弧上に至っていて、C区北隅で確認された溝群に類似している。壁の立ち上がり形状は一定していない。底面は比較的平坦である。

規模 調査できた範囲では全長1.8m、上幅35～45

cm、深さ30cm前後である。

軸方向 N-50°-W近くまで西側に振れている可能性がある。

備考 確認面で大溝上端と20cmしか離れていない。



27～30号溝

- 1 黄褐色 10YR5/8 基本土層のII層にやや近いが、A_s-Bらしいバミスも混じる非粘性土層。斑鉄あり。1'ではA_s-Aはあまり見られない。
- 2 灰黄褐色 10YR5/2 黄褐色粘性土ブロックを主体に黒色土が混じる層。2'では粘性・しまりとも強い。
- 3 にぶい黄褐色 10YR5/4 泥流土と思われるシルト質土層。FPと思われるバミスを見える。3'はやや砂質で29号溝埋没土は黒色味強い。
- 4 黒 10YR2/1 A_s-Cを少量含む粘性土層。泥流下水田耕作土の混れ込み土を中心としている。
- 5 黄褐色 10YR5/3 砂質土。

第315図 27～30号溝

30号溝 (第315図 PL-38)

重複 29号溝に後出している。

形状 北西隅は27号溝の先で不明になる。南東隅は29号溝と重複して途切れている。ほぼ直線的な溝で、北東側ほど細く・浅くなる傾向がある。

規模 調査できた範囲は全長3.9m、上幅15~35cm、深さ7~10cmである。

軸方向 N-47°-E。

備考 大溝北東側にある各区の溝群の中にも、本溝のように溝群に直交して途切れる遺構はない。

31号溝 (第316図 PL-38)

位置 245-745Gから265-760Gにかけて。東西両側は調査区域外になる。

重複 古墳時代小区画水田に先出している。

形状 直線的な溝である。底面レベルは緩やかに波打つような凹凸があるが、全体では南東側に低く傾斜していて、北西隅とは5cmの比高差を生じている。

規模 調査できた範囲は全長18.0m、上幅45~55cm、深さ18~23cmである。

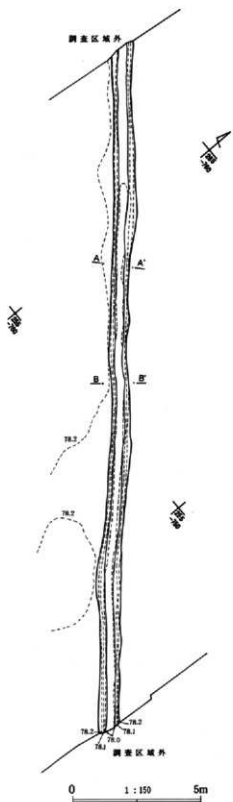
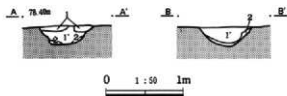
軸方向 N-49°-W。

備考 As-C混土下で水田の畦痕跡と共に並行して確認されている。FA下水田の大畦をトレースするような位置にある。本溝の北側で水田痕跡がより明瞭になっている。As-C混土下水田に伴う水路と考えられよう。遺物は出土していない。

31号溝

1 黒 10YR2/1 基本土層の母層に近い赤粘性土層。地山シルト質土を小ブロック状に含む。1'ではAs-Cの混入きわめて多い。

2 黒褐 7.5YR3/1 As-Cの混入の不均等な、やや粘性の強い層。



第316図 31号溝

32～35号溝

A_s-C混層下で確認された溝群である。蛇行が多く規格性に乏しいが、自然流路的でもなく、性格不明な遺構である。

32号溝 (第317図 P L-38)

位置 210-755 Gから210-770 Gにかけて。

重複 20号溝などの南西隅溝群に先出している。

形状 北側に弧状に張り出している。5号溝同様に円形を示唆するような形状だが、南側C区に本溝の続きは確認できない。底面には不規則な凹凸があり、最大8 cmの比高差を生じている。

規模 調査できた範囲は全長13.5 m。上幅80～100 cm、深さ20～30 cmである。

備考 砂粒の混入なく、水路としての使用痕跡は確認できない。区画溝としても不自然な用途不明の施設である。

遺物 出土していない。

33号溝 (第317図 P L-38)

位置 210-755 G。北隅は途切れ、南側は32号溝に合流している。

形状 短く不規則なうえ、底面の凹凸も多い。北隅は鋭く屈曲している。溝とするのが適切か疑問もある。32号溝より浅いが南隅で緩やかにレベルを下げ、同溝との合流点に段差は生じていない。

規模 調査できた範囲は全長2.7 m、上幅45 cm前後、深さ12～20 cmである。

軸方向 北隅の屈曲部分を除くと、N-4°-Eになる。

備考 溝とするのは疑問のある遺構である。

遺物 出土していない。

34号溝 (第317図 P L-38)

位置 215-755 Gから225-765 Gにかけて。西隅は調査区域外になる。東側は35号溝と合流している。

形状 蛇行の多い溝である。底面レベルも波打つような凹凸があり、5 cm以上の比高差を生じている。

35号溝との合流点付近は鋭く屈曲しているが、底面レベルに段差は生じていない。

規模 調査できた範囲は全長約18 mになる。上幅は80 cm前後、深さ35 cm前後でほぼ一定している。

軸方向 全体ではN-47°-W前後となろう。

備考 35号溝との合流直前に屈曲することから、同溝に後出すると遺構確認段階では想定していたが、埋没土に同溝との差異は認められず、同時存在とも考えられる。屈曲はあるが地山の傾斜に沿った走行となっている。

遺物 出土していない。

35号溝 (第317図 P L-38)

位置 210-750 Gから250-765 Gにかけて。西側・南側の両隅とも調査区域外となっている。

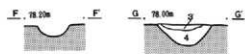
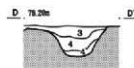
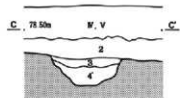
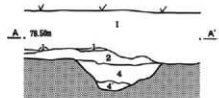
形状 中央で東側に張り出すように大きく湾曲し、34号溝との合流点でも屈曲している。底面レベルには小さな凹凸があるが、概ね南側に低く傾斜していて、北隅と10 cmの比高差を生じている。この傾斜は地山の傾斜よりは小さい。

規模 調査できた範囲は全長50 mにおよび、そのうち34号溝との合流点以南が7 mある。上幅は90～140 cmで、深さは40 cm前後である。下幅は一定していない。

軸方向 北側と南側でN-30°-W前後、中央付近でN-7°-W前後となろう。

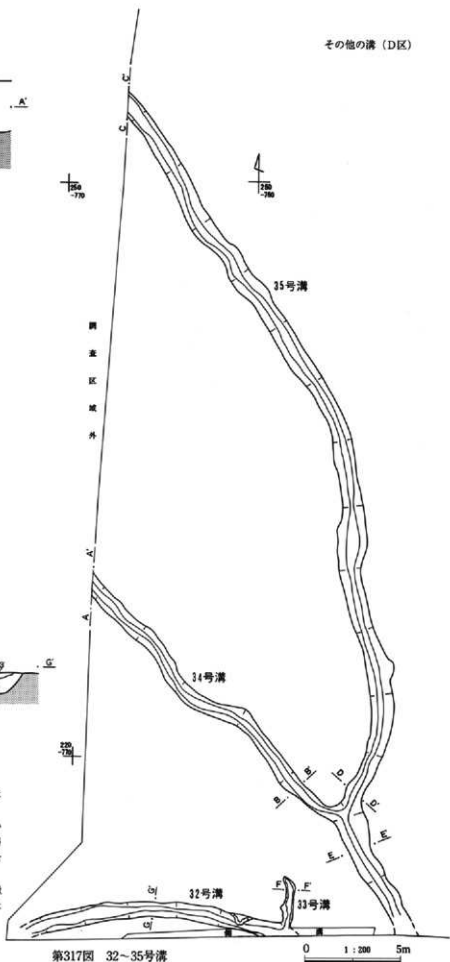
備考 蛇行が多い上に底面や壁の形状も一定していないが、自然流路とするには全体に壁の立ち上がりは鋭い。

遺物 出土していない。



32~35号溝

- 1 基本土層V層
- 2 基本土層VI層 A-Cの混入は下層ほど少ない。
- 3 黒 7.5YR2/1 基本土層の直層に近いと思われる粘性土層。3'には前橋泥流層に含まれる黒色味の強い鉱物粒を多く含む。
- 4 灰褐 7.5YR4/2 粒子の細かな均質緻密な土層。黒色鉱物を少量含む。4'には地山粘性土を小ブロック状に含む。



第317図 32~35号溝

36号溝 (第318図)

位置 西隅は260-765 Gから。東側は258-758 G付近で37号溝に合流している。

形状 37号溝に合流する直前で屈曲し、34号溝に類似している。37号溝より5cm前後浅い。

規模 調査できた範囲は全長9m、上幅1.2~0.9m、深さ35cm前後である。

軸方向 全体ではN-55°-W前後になる。

備考 形状から37号溝に後出すると思われるが埋没土に差異はない。遺物は出土していない。

37号溝 (第318図)

位置 280-755 Gから255-745 Gにかけて。東隅は調査区域外、北隅は途切れている。

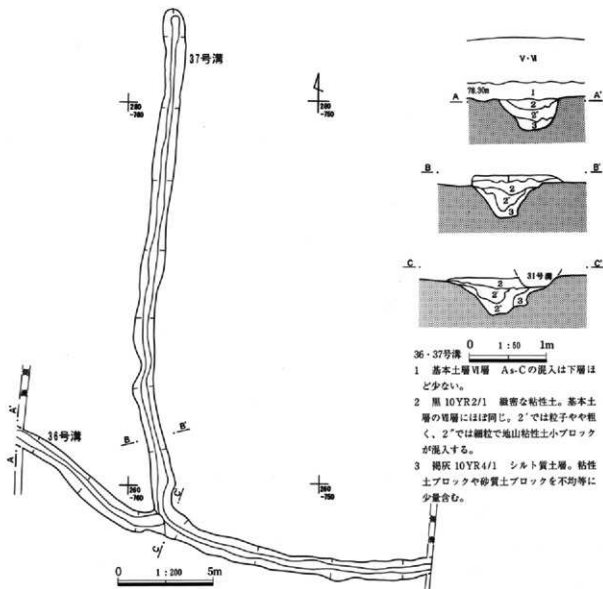
重複 31号溝に先出している。

形状 直角に近く屈曲し、C混下の溝としては形状・走行とも一定している。

規模 調査できた範囲は全長40m、上幅1m前後。

軸方向 北隅の直線的な部分ではN-6°-E、東隅はN-85°-W前後になる。

備考 人為的な溝である。遺物は出土していない。



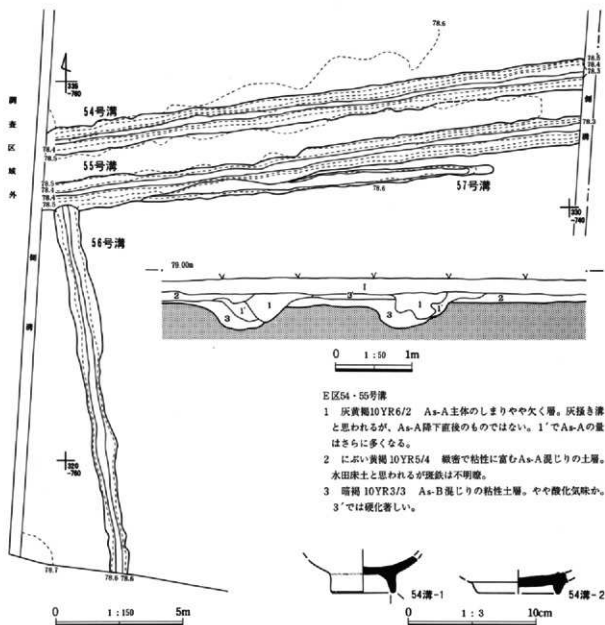
第318図 36・37号溝

E区の溝

擾乱が多いE区の溝は、途切れた部分が多くなっている。複数面の調査となったため、溝も調査面ごとに確認されており、古墳時代から江戸時代以降までの遺構が調査されている。古墳時代以降、水田として利用された地点であり、水路として使用されたものが多いと思われる。なお、取付道D区の続きから番号を付けたため、54号溝からの始まりである。

54～57号溝

As-A混土下の面で確認された溝が、As-B混土下面ではほぼ同じ位置から確認されている。天明三(1783)年をはさんで数度の掘り直しを行いながら長期間水田に伴う溝として使用されていた遺構であろう。54号溝と55号溝の間には、幅90～130cmにわたる部分に硬化が認められ、道路であることが確認できる。



第319図 54～57号溝および出土遺物

その他の溝 (E区)

54号溝 (第319図)

位置 330-760 Gから335-735 Gにかけて。両隅は調査区域外となっている。

形状 ほぼ直線的な溝である。底面は比較的平坦だが、底面レベルは東側に低く傾斜していて、西隅と8 cmの比高差を生じている。

規模 調査できた範囲は全長21.9 mで、As-A下では上幅1.1 m前後、深さ30-35 cmで一定している。As-B混土面でも上幅1-1.1 m、深さ25-35 cmで形状はどの地点でも近似している。

軸方向 N-82°-E。

備考 道の北側部分側溝にあたると思われるが、道幅に対して溝の規模が大き過ぎる。道部分に盛土の痕跡も認められない。As-B混土層で埋没した溝を掘り直して使用した後、As-Aの灰掻き溝として廃絶している。

遺物 埋没土内出土の近世の陶器碗2点を図示した。図示した以外に強いローリングを受けた土師器・須恵器の小片4片のほか、江戸時代の陶磁器片6片が出土している。

55号溝 (第319図)

位置 330-760 Gから330-735 Gにかけて。両隅は調査区域外となる。54号溝の南1 m前後に平行して並んでいる。

重複 57号溝の後に廃絶しているが、開削段階の新旧関係は把握できていない。56号溝には先行して開削されているようである。

形状 ほぼ直線的な溝である。底面レベルは54号溝とほぼ同じで、傾斜も同様に東側が8 cmほど低くなっている。

規模・軸方向 調査できた範囲では54号溝にほぼ同じとなっている。

備考 54号溝の南側に対になる溝で、埋没・掘り直し・廃絶の過程も同様である。

遺物 江戸時代の陶磁器小片が6片出土している。

56号溝 (第319図)

位置 315-755 Gから325-760 Gにかけて。北隅は56号溝と合流する。

重複 55号溝に先出か。

形状 弱く細かな蛇行がある。底面には弱い凹凸があるが、レベルにどちらか一方が深くなるような傾斜はないようである。56号溝より浅くなっている。

規模 調査できた範囲は全長14.4 m、上幅60-80 cm、深さ5-8 cmである。

軸方向 N-10°-W。

備考 55・57号溝と直交している。両溝との切り合いは確認できていない。57号溝とは規模が近似しており、埋没土にもAs-Aは見られない。同溝は直角に近く屈曲する同一の溝となる可能性がある。

遺物 出土していない。

57号溝 (第319図)

位置 330-760 Gから330-740 Gにかけて。西隅は55号溝に合流し、東隅は緩やかに立ち上がって途切れている。

重複 As-B直下の水田畦畔に後出している。

形状 ほぼ直線的な溝である。底面は比較的広い。

規模 調査できた範囲は全長約10 m、上幅35-55 cm、深さ3-7 cmである。

軸方向 N-85°-E前後になろう。

備考 As-B混土層下で顕著となった遺構でAs-Aは埋没土に含まれていない。55号溝より先に埋没している。

遺物 弱いローリングを受けた土師器・須恵器小片5片のほか、近世～近代の陶磁器小片7片を出土している。浅い遺構で55号溝との重複部分が広く、陶磁器類が本溝に伴うものか確定できない。

58～63号溝

F P 泥流下面 (基本土層VI層直上) で確認された小規模な溝群である。埋没土はIV・V層土に類似した泥流層土である。F A 下の小区画水田やAs-B下の水田の区画には無縁な軸方向にあるものが多い。

58号溝 (第320図)

位置 370-740 G から375-740 G にかけて。南側は攪乱で途切れている。

形状 南側で強い蛇行があるが、ほぼ直線的な溝である。底面レベルはほぼ水平だが、南側はごく浅くなっている。攪乱先の南側に本溝の延長部分は見つからない。

規模 調査できた範囲では全長4.8m、上幅20～30cm、深さ4～7cmだが南側は1cmしかない。

軸方向 N-5°-W。

備考 埋没土は基本土層のIV層に近い泥流土で、59～61号溝と異なっている。

遺物 出土していない。

59号溝 (第320図)

調査範囲の中ほどで攪乱によって一旦途切れている。この部分をはさんだ両側の走行に龍船はないが、底面に段差が生じており、両者が同一の溝と確定することはできない。

位置 370-745 G から380-735 G にかけて。北側・南側とも攪乱によって途切れている。

形状 調査範囲の西寄りで鋭く屈曲している。

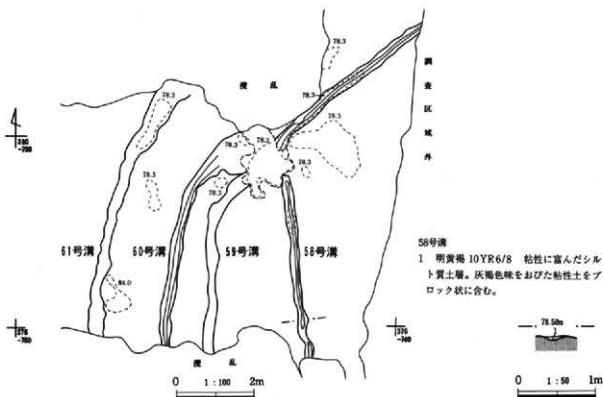
規模 調査できた範囲は全長10.9m、上幅30cm前後、深さは北側で8cm前後だが、南側では3cm前後しかなく、下幅は捉えられていない。

軸方向 南側でN-2°-E、北側でN-50°-E前後となろう。

備考 地山の傾斜や水田畦畔の軸方向と無縁な、性格不明な施設である。遺物は出土していない。

60号溝 (第320図)

位置 370-745 G から375-740 G にかけて。南北両側とも調査区域外になる。



第320図 58～61号溝

その他の溝 (E区)

形状 59号溝南側と並行するようにして確認され、規模や深さも近いが、屈曲はやや弱く、軸方向も異なっている。

規模 調査できた範囲は全長5.2m、上幅30cm前後、深さ3～5cmである。

軸方向 南側ではN-9°-E前後、北隅ではN-35°-Eになる。

備考 59号溝との間に硬化面は見られず、間隔も一定でない。道脇の側溝と推定する根拠は持たない。

遺物 出土していない。

61号溝 (第320図)

位置 370-745Gから380-745Gにかけて。南北両隅とも調査区域外となっている。

重複 F A下水田畦畔に後出している。

形状 西側に張り出すように湾曲し、細かな蛇行も多い。底面も凹凸が多く不整である。

規模 調査できた範囲は全長7.4m、上幅25～50cm、深さ2～5cmあるが、下幅を確認できない。

軸方向 南側ではN-14°-E前後となり、北隅は10°ほど屈曲している。

備考 屈曲や走行など59・60号溝と類似する部分もある。遺物は出土していない。

62号溝 (第321図)

位置 395-750Gから400-750Gにかけて。南北両隅とも攪乱で途切れている。

重複 F A下の小区画水田畦畔に後出している。

形状 蛇行の少ない直線的な溝である。軸方向は小区画水田の畦畔に近い。底面レベルはほぼ水平になっている。

規模 調査できた範囲は全長5.5m、上幅35cm、深さ1～4cmである。

軸方向 N-15°-W。

備考 水田の配置に合致しており、水路的な性格が想定されるが、攪乱の先で本溝の延長部分が確認されない。水路としては不自然である。

遺物 摩滅した土師器1片のみである。

63号溝 (第321図)

位置 365-755G。西隅は調査区域外となり、東隅は攪乱によって途切れている。

重複 水田より後出している。

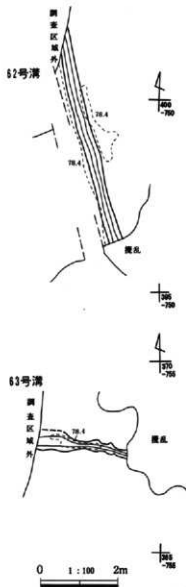
形状 狭い範囲で確認された不明瞭な溝で、全容は不明である。北側に張り出すようにわずかに湾曲している。底面は不整で凹凸は7cmの比高差がある。

規模 調査できた範囲は全長2.4m、上幅10～25cm、深さ1～9cmである。

軸方向 全体ではN-82°-E前後となろう。

備考 底面の凹凸が大きく、水路的ではない。

遺物 出土していない。



第321図 62号溝・63号溝

64号溝 (第322図)

A_s-C混下のトレンチ調査で確認した2本の溝を掘り広げて、鋭角に交わって1本の溝となることが判明した遺構である。調査段階で南側を65号溝としたが、本報告では全体を64号溝として扱う。

位置 375-735Gから580-755Gを經過して405-750Gまで。北側・東側は調査区域外となる。北側で一部上面の遺構で壊されているが、形状や走行から連続しているのは間違いなさそうである。

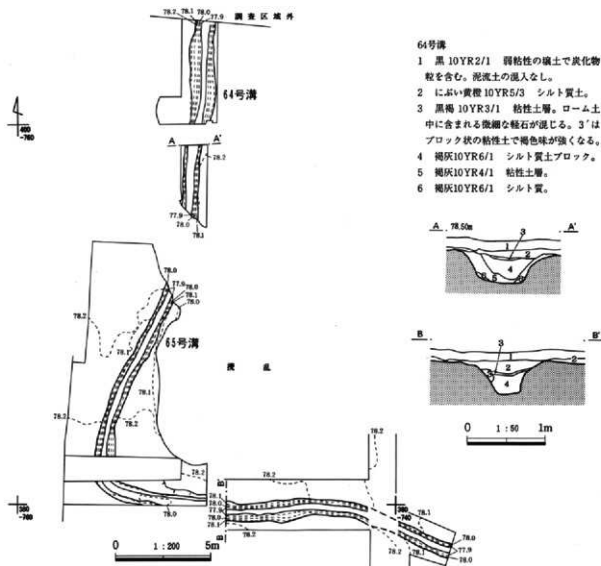
形状 南側の東西走行部分では蛇行している。南北走行部分では途中で屈曲しているが、直線的である。

底面は比較的幅広で平坦である。底面レベルは中央付近でやや高く、北側は地山の傾斜に進行して、最大10cm近く低くなっている。

規模 確認できる範囲では全長49.5m、上幅65-100cm、深さ22-48cmである。

軸方向 南側は全体ではN-80°-E前後になろう。北側は南半でN-24°-E、北半でN-5°-E前後である。

備考 上面の小区画水田とは軸方向があわない。規模から推測して水田に係わる水路と思われるが傾斜も不自然である。遺物は出土していない。



取付道の溝

A～Fの6地点の取付道部分は幅狭な調査区のため不明瞭な点が多いが、すべての区で溝を調査している。このうちD区部分は本線C区と共にすでに扱っており、取付道F区はⅢ-9の「近世道跡」の項で扱う。残る4地点で調査した溝について一括してこの節で扱う。

取付道A区

1号溝（第323図）

位置 095-695Gから095-700Gにかけて。大溝の上面で確認されている。西側・南側とも調査区域外になる。2・3号溝からは南西側に12m離れる単独の溝である。

重複 大溝に後出している。

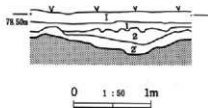
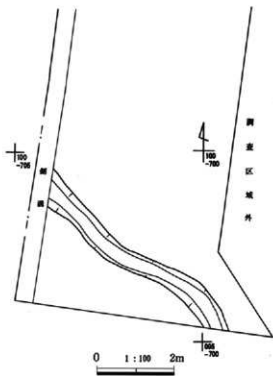
形状 蛇行のややきつい溝である。底面は不整で、明確な下幅は捉えにくい。底面のレベルにも凹凸があり、最大6cmの比高差が生じている。

規模 調査できた範囲は全長6m、上幅65～48cm、深さ10cm前後である。

軸方向 全体ではN-45°-W前後になろう。

備考 大溝の上面にあり、As-B混土層が含まれる遺構として確認されている。大溝埋没土との差異は確認段階から明瞭だった。大溝埋没過程の流路の一つとなる可能性もあるが、断面観察から水性堆積の痕跡は明らかにはできず、底面のレベルから水流を推測するのも難しい。

遺物 出土していない。



1号溝

- 1 黒褐色 10YR2/2 As-B混入の多い砂質土層。
- 2 暗褐色 10YR3/3 シルト質の粘性土層。2'では灰色味が強い。

第323図 1号溝

2・3号溝（第324図 P L-39）

3号溝に重複する南側の掘り直し部分を2号溝とした。部分的にしか確認できていない。

位置 110-695Gから115-700Gにかけて。

重複 畠サク状痕に後出している。

形状 3号溝は直線的で、底面は平坦で底面レベルはほぼ水平である。掘り直し部分にあたる2号溝は蛇行が大きく底面は狭い。東壁付近では不明瞭で溝状にはならない可能性もある。また、3号溝北側の断面には2号溝に先行する掘り直し部分と思われる堆積状態が確認できる。

規模 3号溝は調査範囲内で全長5.9m、上幅は最大2.2m、下幅は0.9m前後、深さ70cm前後である。2号溝は断面から上幅1.5m、深さ60cm近い規模が想定される。

軸方向 3号溝はN-48°-W。

備考 2号溝の断面上層にAs-A混じりの埋没土がわずかに確認できる。2～6号溝の中では最も新しい溝だが、天明三（1783）年にはほぼ埋没しきっていたことが分かる。

遺物 近世以降の磁器片や摩滅した土師器・中世銅類など7片の他、板碑片と思われる緑色片岩2点がある。

4号溝（第324図 P L-39）

位置 110-695Gから120-700Gにかけて。

形状 ほぼ直線的な浅い溝である。底面はほぼ平坦だが、南西側にわずかに低く傾斜している。

規模 調査範囲内で全長6.8m、上幅1.4m、下幅1.0m、深さ15～20cmである。

軸方向 N-36°-W。

備考 断面に緩やかな水性堆積の痕跡が観察できるが、平坦な底面の形状は水路的ではない。天仁元（1208）年以降の埋没である。

遺物 古墳時代の土師器6片を出土している。摩滅はほとんど見られないが、本溝の時期を示す遺物ではない。

5号溝（第324図 P L-39）

位置 115-695Gから120-700Gにかけて。4号溝の50～60cm北東にほぼ平行して並んでいる。

形状 ほぼ直線的な溝である。平行している4号溝に比べ幅は狭く、特に底面は狭いが深さがある。底面レベルはほぼ水平である。断面は中段に稜があり、緩やかに上面へ開いていて周辺の溝には見られない形状を呈している。

規模 調査範囲内で全長7.0m、上幅1.1m前後、下幅20～35cm、深さ40cm前後である。

軸方向 N-34°-W。

備考 4号溝同様に水性堆積の痕跡が明瞭であるが、埋没土は異なる。

遺物 出土していない。

6号溝（第324図）

位置 125-695Gから125-700Gにかけて。

重複 7号溝に後出している。

形状 小さな蛇行があるが、ほぼ直線的な溝である。底面の形状は一律でないが鍋底状の部分が多い。底面レベルはほぼ水平である。また底面には、深さ2cmほどの小さな窪みが部分的に見られる。

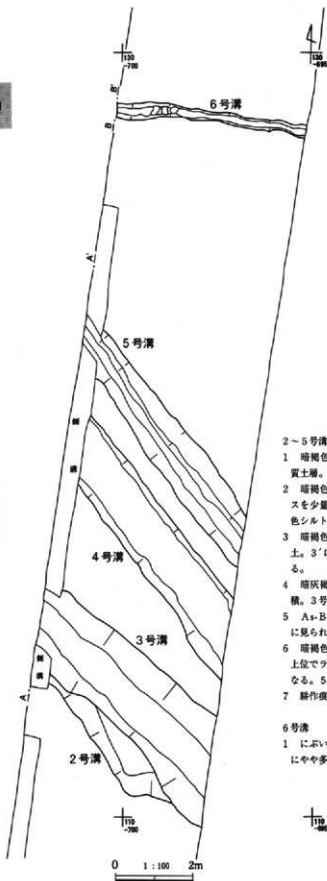
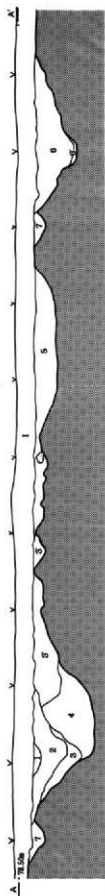
規模 調査範囲内で全長5.0m、上幅25～45cm、深さ15cm前後である。

軸方向 N-84°-W前後になろう。

備考 天明三（1783）年以降に埋没しており、周辺の溝群より新しい時期の遺構である。

遺物 出土していない。

その他の溝 (取付道A区)



2～5号溝

- 1 暗褐色土層 A-Aをまばらに含む砂質土層。
- 2 暗褐色土層 ニツ岳を給源とするバミス少量含む弱粘性土層。下位には黄褐色シルト質土が混じる。
- 3 暗褐色シルト質土層。2号溝下層埋没土。3'は3号溝の掘り直し部分と思われる。
- 4 暗灰褐色シルト質土層 ラミナ状に堆積。3号溝埋没土層。
- 5 A-A-B混じり土とシルト質土が互層状に見られる水性堆積土層。4号溝埋没土。
- 6 暗褐色シルト質土層 水性堆積土層で上位でラミナが明瞭。6'は灰色味が強くなる。5号溝埋没土。
- 7 耕作痕内の灰褐色シルト質土層。

6号溝

- 1 にふい黄褐色 10YR4/3 A-Aを不均等にやや多量に含む弱粘性土層。

第324図 2～6号溝

7号溝（第325図）

位置 125-695G。

重複 6号溝に先出している。

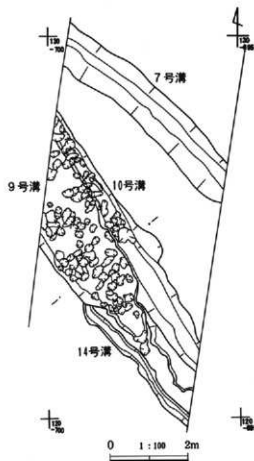
形状 緩やかな蛇行があるが、調査範囲内ではほぼ直線的な溝のようである。底面は皿底状で、底面レベルはほぼ水平である。

規模 調査範囲内で全長5.5m、上幅105cm、下幅30cm、深さ40cmでほぼ一定している。

軸方向 N-48°-W前後になる。

備考 規模は異なるが、南東側約12mにある3号溝と同じ軸方向にある。

遺物 出土していない。



9・10・14号溝（第325図 P L-39）

遺構確認段階で南東側の9号溝と北西側にある10号溝の2条の溝と考えたが、さらに南東側に小さな溝のあることがわかり14号溝とした。

位置 120-695Gから125-700Gにかけて。14号溝の南東側は、5号溝から約1mしか離れていない。大溝北西側にある溝群のうち、最も北西隅に位置する溝である。

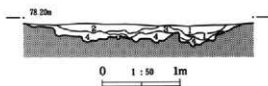
重複 9号溝は10号溝に先出しているようである。10号溝と14号溝の新旧関係は確認できなかった。

形状 9号溝は浅い底面に波打つような凹凸がある上に、掘削工具痕のような凹凸が全体に見られ、南東側で途切れてしまう。溝らしくない部分が多い。10号溝は調査範囲を通じて確認できる直線的な溝である。底面の凹凸は9号溝に属する部分であろう。14号溝は西壁の断面で確認できない蛇行のある細い溝で、9号溝の中で途切れるか、9号溝に先出していたものであろう。

規模 9号溝は調査範囲内で全長5.1m、上幅2.2m分が確認できる。10号溝は全長7.2m、上幅80cm前後になる。14号溝は全長4.0m、上幅20cm前後しかない。

軸方向 10号溝はN-31°-W、14号溝はN-40°-W前後になる。

遺物 出土していない。



9・10号溝

- 1 層灰 10YR4/1 10号溝埋設土。シルト質土層。黄色味をおびた砂粒以外の被覆物をほとんど含まない。1'では黄白色の粘性土ブロックの混入やや多い。
- 2 層灰 10YR4/1 9号溝上層埋設土。黄白色粘性土ブロックの混じる砂質土層。
- 3 暗褐色 10YR3/1 土質は1層土に近い。鉄分凝集が顕著。
- 4 地山のA-s-C混じり黒色土や灰色味の強い粘性土等がブロック状に混合する。

第325図 7・9・10・14号溝

11号溝（第326図 PL-39）

位置 142-695Gから145-690Gにかけて。南西隅は調査区域外、北東隅は12号溝と重なり不明瞭だが、調査区域外へ伸びるであろう。

重複 12号溝と重複しているが、新旧関係は確認できていない。

形状 細いが直線的な溝である。底面に深さ3cmほどの小さな窪みが部分的に見られる。底面レベルは南東側に低く傾斜しており、北西隅と7cmの比高差を生じている。

規模 調査範囲内で全長7.6m、上幅30cm前後、下幅12-18cm、深さ10cm前後である。

軸方向 N-51°-E前後である。

備考 大溝北西側の溝群とはほぼ直交する軸方向にあるが、この方向の溝は少なく、取付道内には例がない。

遺物 出土していない。

12号溝（第326図 PL-39）

位置 145-690Gから145-695Gにかけて。両隅とも調査区域外となる。13号溝の南側1.3m前後の位置に、ほぼ平行して並んでいる。

形状 弱い蛇行があるが、全体では直線的な溝と言える。底面は狭く断面はU字状である。底面レベルは水平である。

規模 調査範囲内で全長5.1m、上幅30cm前後、下幅8cm前後、深さ12cm前後である。

軸方向 N-86°-W前後である。

備考 13号溝とは規模が近似し、対になってほぼ東西方向に走行する道路側溝状であるが、両溝間に道路状の踏み固め面や盛土は確認できない。

遺物 出土していない。

13号溝（第326図 PL-39）

位置 145-690Gから145-695Gにかけて。両隅とも調査区域外となっている。

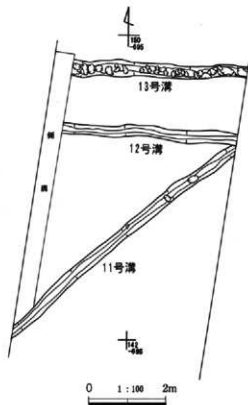
形状 わずかな蛇行が見られるが、ほぼ直線的な溝である。底面に深さ2-5cmの不規則な窪みが数多く見られる。掘削工具痕状のものやビット状のものなど様でないが、不明瞭なものが多い。

規模 調査範囲内で全長5.1m、上幅30-44cm、下幅12-20cm、深さ10cm前後である。

軸方向 N-88°-W。

備考 工具痕状の窪みは幅25cm前後で、溝の走行に斜めにあるものが多い。本溝の12・13号溝の西側延長部分にあたる本線C区部分は本溝にあたり確認できない。

遺物 出土していない。



第326図 11・12・13号溝

17・18・19号溝

2号溝と大溝の間の幅約3m部分に並んでいる2本の溝と、これを横切っている小規模な溝である。大溝北西側の溝群と同じ走行の溝であるが、古墳時代の小区画水田耕作土に相当する土層の下から確認されている。

17号溝（第327図）

位置 105-695Gから110-700Gにかけて。両隅とも調査区域外となっている。

重複 19号溝と重複しているが新旧関係は確認できていない。

形状 断面で確認するのが難しいような、わずかな窪み程度の浅い遺構である。西側は南東側に影らむように緩やかに湾曲しているが、東側は直線的である。直線的な部分から底面が一段下がっているが、全体の底面レベルではほぼ水平になっている。

規模 調査範囲内で全長6.4m、上幅15~50cm、下幅7~23cmと差が大きい。南西側ほど幅広になっている。深さは3cm前後しかない。

軸方向 東側の直線部分ではN-50°-W。

備考 北西隅では痕跡程度しか確認できない。途切れる可能性もあろう。

遺物 刷毛目のある台付甕となりそうな摩滅した土師器小片3片のみである。

18号溝（第327図）

位置 100-695Gから105-700Gにかけて。両隅とも調査区域外となっている。17号溝の南西60~80cmの位置に、平行するようにして並んでいる。

重複 19号溝に重複している。

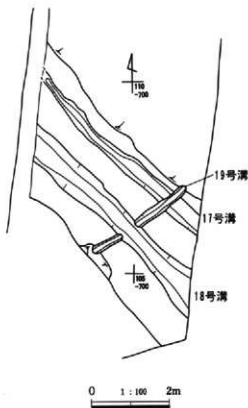
形状 17号溝とは対称的に、北東側に影らむようにしてわずかに湾曲している。底面レベルは地山の傾斜に沿って南東側に低く傾斜しており、北西隅と5cmの比高差を生じている。17号溝より10cm前後深くになっている。

規模 調査範囲内で全長6.2m、上幅55~80cm、下幅35cm前後で規模は一様ではない。深さは12cm前後である。

軸方向 北西側でN-52°-W、南東側でN-40°-W前後になる。

備考 確認できた相違は17号溝と同じだが、形状・規模は異なり、同時存在の対になる溝ではなさそうである。

遺物 北西側埋没土とその西側に散乱する破片から接合した古墳時代の土師器甕を第432図に示した。その他に刷毛目のある台付甕となりそうな摩滅した土師器小片1片がある。



第327図 17・18・19号溝

その他の溝（取付道A区）

19号溝（第327図）

位置 105-695 Gから105-700 Gにかけて。東隅は17号溝北西側の窪みの中で不明になり、西隅は大溝脇の壁崩落部分に合流している。

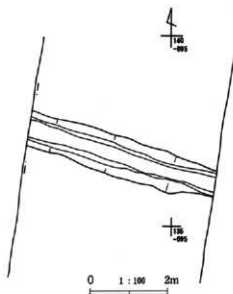
重複 大溝に先出している。17・18号溝と重複しているが新旧関係は確認できていない。

形状 ほほ直線的である。底面レベルは大溝側に向かって低く、わずかに傾斜している。

規模 調査範囲内で全長2.9m、上幅25cm、深さ7cm前後の小規模な溝である。

軸方向 N-55°-E前後である。

遺物 出土していない。



23号溝（第328図）

As-C混土層（基本土層第VI層）下面で、As-C混じりの埋没土の遺構として確認されている。Hr-F A層から約25cm下位にあたる。17・18号溝と共に取付道A区内で最も古い溝である。

位置 135-690 Gから135-695 Gにかけて。

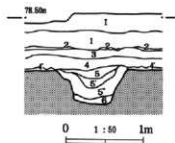
形状 直線的な溝である。底面は皿底上でやや狭く、断面はU字状を呈し、部分的に壁中段に弱い稜ができています。底面レベルは水平である。

規模 調査範囲内で全長5.1m確認できる。上幅90~105cm、下幅35cm前後、深さ40cm前後で全域ほほ一様な形状である。

軸方向 N-73°-W。

備考 埋没土のAs-Cの混入は少ないが、As-C混土層の上から開削されていることは断面からも確認できる。埋没土は自然堆積のようで、水性堆積の痕跡は確認できない。底面付近には壁崩落土の堆積がやや多く見られる。

遺物 摩滅しきって旧状がよく判らないような薄手の土師器が3片出土したのみである。



23号溝

- 1 基本土層のIV・V層に相当する泥炭層。
- 2 FA層 純度高いが降下火山灰に近い状態ではない。
- 3 暗褐色粘性土層 小区画水田耕作土。
- 4 As-C混じりの黒色土層 4'ではややシルト質土となるが、As-Cの量は多い。
- 5 黒褐色粘性土層 As-Cの混入は少ない。4'では色調淡くなり5'では粒徑粗くなる。
- 6 黒色粘性土層 灰色の粘土ブロックが混入する。

第328図 23号溝

取付道B区の溝

As-C混面の調査時に2本の溝を確認している。両溝ともAs-C混土を埋没土としている。上面にはFA泥流下の小区画水田が広がっているが、この水田畦畔の軸方向とは係わりのない走行である。

1号溝 (第329図 PL-39)

位置 195-725G。南北両隅は調査区域外。

形状 調査範囲内では直線的な溝である。南隅でやや東側に湾曲が始まる可能性がある。壁の立ち上がりは一定していない。底面レベルは地山の傾斜に逆行して北側に低く傾斜しており、南隅と3cmの比高差を生じている。

規模 調査できた範囲は全長4.1m、上幅85cm前後、下幅25cmではほぼ一定、深さ45cm前後である。

軸方向 N-2°-E。

備考 Hr-F A層の15cm下で確認されている。

遺物 鶏卵大の自然石数点以外、出土遺物はない。

2号溝 (第329図 PL-39)

位置 190-695G。1号溝の東側約31mの地点に平行した位置にある。南北両隅は調査区域外。

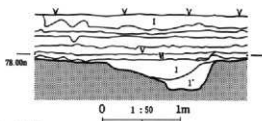
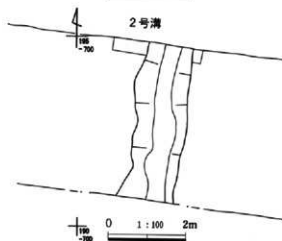
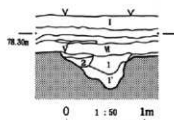
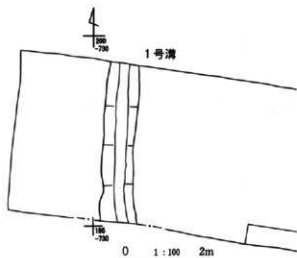
形状 蛇行があるが、全体ではほぼ直線的な溝である。壁の立ち上がりは一定せず、西側がより開き気味であるのは、掘り直しの可能性もあろう。底面レベルは水平になっている。

規模 調査できた範囲は全長4.1mである。上幅は130cm前後、下幅は35-50cmで一定でない。深さは40cm前後である。

軸方向 N-7°-E前後になろう。

備考 1・2号溝とも古墳時代の小区画水田に先出する施設であるが、水田の軸方向や地山の傾斜に係わりのない真北方向を軸方向としている。水成堆積の痕跡は確認できない。性格不明の遺構である。

遺物 出土していない。



1・2号溝

1 黒褐色土層 基本土層のV層に同じAs-C混じりの黒色土層であるが、混入物は少ない。1'では地山粘性土がブロック状に混じる。

2 暗褐色土層 ブロック状の地山粘性土。

第329図 1号溝(上)・2号溝(下)

取付道C区

1号溝（第330図 PL-39）

位置 285-670 Gから290-675 Gにかけて。取付道の北隅部分にあたる。東西両隅は調査区域外。

形状 はほぼ直線的な溝である。南側の広い溝と北側の深く狭い溝に分かれる。

規模 調査範囲内では全長4.9m、上幅は全体では1.7m前後、北側部分で80-100cmになる。深さは南側で13cm、北側はさらに10cm深くなっている。

軸方向 北側はN-88°-E。南側はこれより3°前後南側を向く可能性がある。

遺物 出土していない。

2号溝（第330図 PL-39）

位置 280-670 Gから280-675 Gにかけて。1号溝の南側6mに軸方向を若干違えて並んでいる。東西両隅は調査区域外になる。

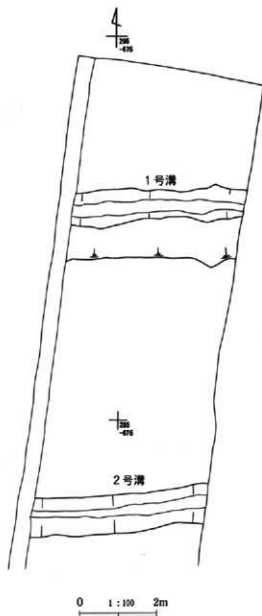
形状 直線的な溝である。底面は狭く、壁の立ち上がりは緩やかになっている。

規模 調査範囲内では全長5.0m、上幅1m前後である。下幅は15-30cmで東側ほど幅広になる傾向がある。底面レベルには3cm前後の凹凸がある。深さは30cm前後である。

軸方向 N-87°-E。

備考 軸方向や規模は1号溝北側に近似している。両溝の間には道路上の硬化部分は確認できない。また、道幅6m以上の道路側溝としては貧弱である。なお、2号溝南側には天明三（1783）年の浅間山降下軽石（As-A）を働き込んだ耕作痕が見られるが、この耕作痕の区画と本溝とは軸方向が合わない。

遺物 出土していない。



第330図 1・2号溝

3・5～7号溝

取付道C区の南西隅に軸方向をN-5°-W前後で平行に並ぶ溝群である。3号溝は6号溝の上に後出して開削されている。北隅は調査区域外となる。南側の延長を取付道A区で確認することはできない。

3号溝（第331図 P L-40）

位置 250-675Gから265-680Gにかけて。調査範囲内ではすべて6号溝上にある。

形状 直線的な浅い溝である。底面レベルには5cm近い凹凸があり、傾斜に沿って下がる傾向は認められない。底面上に幅25cm前後、深さ最大9cmの掘削工具痕状の窪みが並んでいる。

規模 調査できた範囲は全長13.4m、上幅30-42cm、6号溝底面からの深さ5-13cmである。

軸方向 N-8°-W。

遺物 銅製のキセル吸い口を図示した。その他には明治期以降の磁器片の出土が目立ち、近年まで開口していたことが分かる。

5号溝（第331図 P L-40）

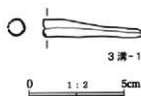
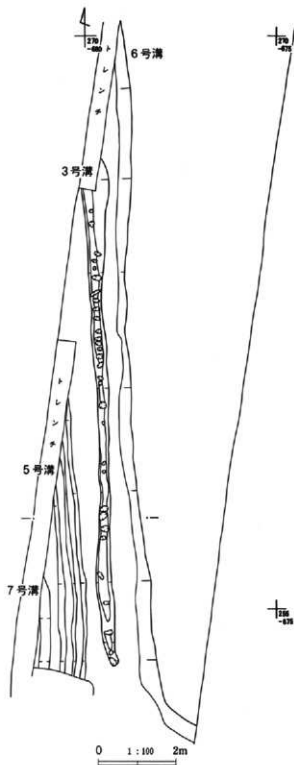
位置 250-680Gから255-680Gにかけて。

形状 南隅が西側にやや湾曲しているが、全体ではほぼ直線的な溝である。底面には波打つような凹凸があり、4cmの比高差が生じている。どちらか一方に傾斜する傾向は調査範囲内には認められない。

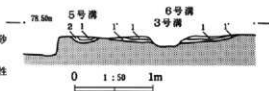
規模 調査できた範囲は全長5.4m、上幅40cm前後で南ほど幅広になる、深さ8cm前後である。

軸方向 南隅を除くとN-5°-W前後になる。

遺物 出土していない。



- 5・6号溝
- 1 昭和 10YR3/3 A_s-Bの混入の多い砂質土層。1'ではA_s-Bの量が減る。
 - 2 黒 10YR2/1 稗子のやや細かい弱粘性土層。A_s-Bをわずかに含む。



第331図 3・5～7号溝および出土遺物

6号溝（第331図 P L-40）

位置 250-675Gから270-675Gにかけて。5号溝の東側20cmの位置にある。

重複 3号溝に先出している。

形状 北半は小さく屈曲しているが、ほぼ直線の溝である。底面は平坦で全域ほぼ同レベルである。

規模 調査できた範囲は全長17.3m、上幅1.6~1.9mで南側ほど幅太になる。深さは6cm前後で、太い幅に比べて浅い。

軸方向 N-6°-W。
備考 3・5~7号の溝群中では唯一幅広の溝である。水路的ではないが、水田区画に沿った溝を何度も掘り直してできた溝群にあって、本溝が中心的な、最初に開削された溝と考えたい。

遺物 陶器鉢1点、鍋等の近世土器6点のほか、土師器や埴輪細片が出土。明治期以降の遺物は含まれないようである。

7号溝（第331図）

位置 254-681G付近。5号溝の西側25cmにほぼ平行に並んでいる。

形状 調査範囲内では東側へ膨らむように湾曲している。特に北隅で西側へ屈曲する可能性がある。底面レベルは南側へ低くわずかに傾斜していて、北隅と2cmの比高差を生じている。

規模 調査できた範囲は全長2.3m、上幅28cm前後、深さ3cm前後である。

軸方向 全体で眺めればN-2°-Wになる。

遺物 出土していない。

4号溝（第332図 P L-40）

位置 205-685Gから210-680Gにかけて。

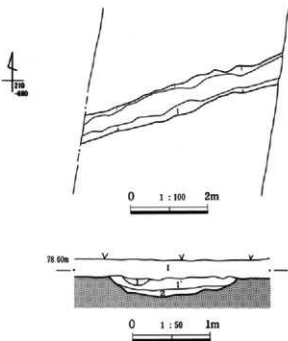
形状 直線のな溝である。底面は細かな凹凸があるが、幅広で比較的平坦である。底面レベルはほぼ水平になっている。

規模 調査できた範囲は全長5.6m、上幅80cm前後、深さ20cm前後である。

軸方向 N-74°-E。

備考 断面観察から水成堆積の痕跡は確認できない。上面埋没土にAs-Aを多量に含んでいる。底面付近にはAs-Bが多量にみられるが、埋没土中にはあまり見られない。比較的短期に埋め戻された可能性もあろう。

遺物 出土していない。



4号溝

- 1 におい黄褐 10YR4/3 As-Aの混入の多い非粘性土層。1'ではAs-Aは少なく、小礫等雑多な混入物が増える。
- 2 灰黄褐 10YR4/2 シルト質土層。粘源不明のバミス微粒を含む。

第332図 4号溝

取付道E区の溝

本線C区の大溝から南西方向に100m近く離れた一帯に大溝と近似した軸方向に並ぶ溝群が調査されている。南東側延長上では本線B1区につながるが、具体的に照合できる溝は確認できない。

3号溝 (第333・334図 P L-40)

位置 090-795 G から095-795 G にかけて。

重複 10-12・14号溝に後出している。

形状 直線的な溝である。底面には凹凸があり、4 cmの比高差ができています。

規模 調査できた範囲は全長5.3m、上幅75cm前後、下幅32cm前後、深さ40cm前後である。

軸方向 N-24°-W。

備考 基本土層第Ⅲ層下で確認した遺構であるが、天明三(1783)年以降に埋没した溝である。

遺物 出土していない。

7号溝 (第333・334図 P L-40)

位置 095-785 G。

形状 直線的な溝だが、南隅は東側へ小さく湾曲する可能性がある。底面レベルは南側に低く傾斜して、北隅と5 cmの比高差がある。

規模 調査できた範囲は全長4.3m、上幅35cm前後、下幅15cm前後、深さ20-30cmである。

軸方向 N-31°-W。

遺物 出土していない。

8号溝 (第333・334図)

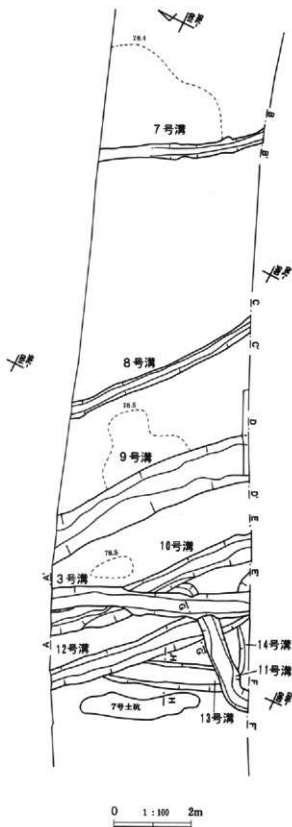
位置 095-790 G から095-795 G にかけて。

形状 はほぼ直線的な溝である。北隅で東側へ屈曲する可能性がある。底面は丸みがあり、底面レベルは水平である。

規模 調査できた範囲は全長5.2m、上幅32cm前後、下幅15cm前後、深さ10cm前後である。

軸方向 N-53°-W。

遺物 刷毛目のある土器甕胴部片を中心に土器器細片7片を出土している。



第333図 3・7-14号溝

9号溝 (第333・334図 PL-40)

位置 090-790 Gから095-795 Gにかけて。8号溝の2 m西側に平行するように並んでいる。

重複 なし。

形状 東側に影らむように弱く湾曲した溝で、下端にその傾向が強くなっている。西壁の立ち上がりが緩やかになっている。

規模 調査できた範囲では全長5.5m、上幅1 m前後で下幅は一律ではない。深さは30cm前後である。

軸方向 全体ではN-46°-W前後になろう。

遺物 時期不明の土師器小片2片のみ。

10号溝 (第333・334図 PL-40)

位置 090-795 Gから095-800 Gにかけて。

重複 3号溝に先出している。11号溝に後出すると思われるが、断面での確認はできていない。

形状 ほぼ直線的な溝である。底面には波打つような凹凸があり、8 cmの比高差を生じている。

規模 調査できた範囲は全長5.6m、上幅55cm前後、下幅18~25cmである。

軸方向 全体ではN-47°-W前後になろう。

遺物 奈良・平安時代の土師器2片を出土し、1片は図示した杯大破片である。

11号溝 (第333・334図)

位置 090-795 Gから090-800 Gにかけて。

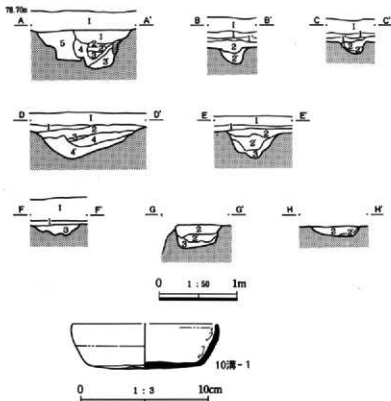
重複 3号溝に先出している。12号溝に後出すると思われるが、先後関係は確認できていない。

形状 溝群を横切ってクランク状に屈曲する溝である。底面レベルは西側に低く均等に傾斜して、東隅と5 cmの比高差を生じている。

規模 調査できた範囲は全長3.3 mまで確認できるが、10号溝に沿って北面へ伸びると思われる。上幅は50 cm、深さ12 cm前後である。

軸方向 中央部分ではN-45°-E。

遺物 時期不明の土師器微細片1片のみである。



- 1 黒褐色 10YR3/1 粒子の細かい粘性土層。A・A'と思われるバミスを含む。1'には2層土を小ブロック状に含む。
- 2 黒褐色 10YR3/2 水成堆積らしい粘性土でしまり強い層。輪郭不明の白色バミスを散見する。15号溝以外に共通して見られる。2'は黒色味強い。
- 3 黒褐色 2.5Y3/2 やや砂質な泥炭層。3'ではより砂質になり粒径も大きい。
- 4 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粘性のある泥炭層。一部でラミナ状に堆積する。4'ではローム状土が混じる。
- 5 暗褐色 10YR3/3 粘性のある泥炭層だが、乱れが多く、水成堆積的ではない。10号溝にのみ見られる。

第334図 3・7~14号溝断面および出土遺物

12号溝 (第333・334図 P L-40)

位置 090-795 G から095-800 G にかけて。10号溝の60cm西側に平行して並んでいる。

重複 3号溝に先出している。11・13・14号溝との先後関係は確認できていない。

形状 ほぼ直線的な溝である。底面には緩やかな凹凸があるが、南側へ低くわずかに傾斜している。

規模 調査できた範囲は全長5.4m、上幅60-72cm、下幅15-32cmで南側ほど幅広になっている。

軸方向 N-45°-W。

遺物 時期不明の土師器微細片1片のみである。

13号溝 (第333・334図)

位置 090-800 G。北側は12号溝、南側は11・14号溝に重複し、部分的な確認である。

形状 調査範囲では直線的な溝である。上幅に比して浅く、底面は皿底状で平坦になっている。

規模 調査できた範囲は全長2.6m、上幅70cm、下幅40cm、深さ10cm前後である。

軸方向 N-23°-W。周辺の溝群に比べ北側を向いている。

遺物 古式土師器と思われる小破片3片のみ。

14号溝 (第333・334図)

位置 090-795 G。南壁際でわずかに見られ、全容は不明である。3号溝東側に見られるコーナー部分が本溝の延長部分となると思われる。

規模 調査できた範囲は東隅を含めて全長2.5m、上幅26cm以上、深さ11cmである。

軸方向 N-60°-E前後か。

備考 13号溝が直角に屈曲したり、15号溝がクランク状に屈曲して本溝に合流する可能性もあろう。土坑状の遺構となることも考えられる。

遺物 古式土師器と思われる壺口縁1片のみ。

5号溝 (第335図)

位置 080-810 G から085-815 G にかけて。攪乱が多く、不明瞭な一画にある。6号溝の東側部分のさ

らに東側60cmの位置に、同溝とはほぼ平行して並んでいる。

形状 ほぼ直線的な溝だが、底面は不均等で、調査区中央と南隅で深くなり、北隅では不明瞭になる。

規模 調査できた範囲は全長4.0m、上幅40cm前後、深さ最大で8cmである。

軸方向 N-42°-W前後になる。

遺物 土師器細片4片、近世以降の陶器片2片のみの出土である。

6号溝 (第335図 P L-40)

位置 075-820 G から080-815 G にかけて。

重複 19号溝に後出すると思われるが先後関係は確認できていない。

形状 やや鋭角に曲がる鍵の手状の溝である。底面は広く平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。底面レベルには凹凸があり、10cm以上の比高差があるが、一方へ向うような傾斜は見られない。

規模 調査できた長さは東側4.5m、南側8.3mで、上幅2.7m前後、深さ50cm前後である。

軸方向 南側はN-63°-E、東側はN-38°-W。

備考 平面図からは方形周溝溝溝状だが、埋没土も遺物も中世以降のものである。

遺物 図示した東側出土の3点以外に、中世以降の焙烙や播鉢などの土器を中心に約40片出土している。やや大形の破片が多く、土師器や灰釉陶器碗なども混じっている。

19号溝 (第335図)

位置 075-825 G から080-815 G にかけて。北東側は6号溝に合流する。

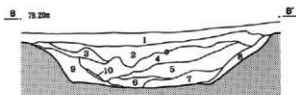
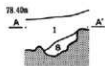
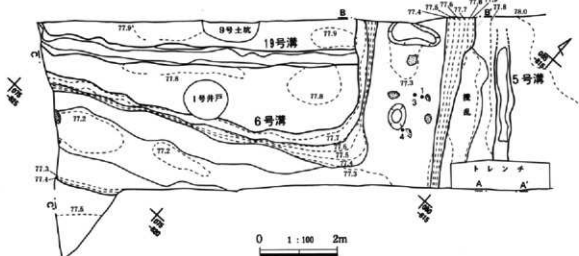
重複 6号溝に先出か。

形状 南西隅が北側に向って屈曲するが、他は直線的な溝である。皿底状の底面形状は一定していない。

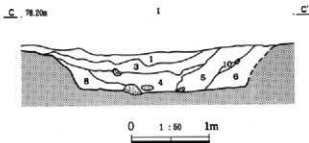
規模 調査できた範囲は全長8.2m、上幅40cm前後、深さ最大8cmだが2cm前後の部分が多い。

軸方向 直線部分はN-51°-E。

遺物 出土していない。



- 1 黒 10YR2/1 A+s-A混じりのややしまり強い砂質土層。
- 2 黒褐 10YR3/1 粗砂主体の層。斑鉄やや目立つ。
- 3 黒褐 10YR2/2 砂質土と粘性土の混合土層。粉濁不明の白色パミスを含む。
- 4 黒褐 10YR3/1 粘性土主体で川砂が不均等に混じる。
- 5 黒褐 10YR2/2
- 6 黒褐 10YR2/2 粗砂やローム小ブロックの混入がやや多い。
- 7 灰黄 2.5Y6/2 粘性土層。
- 8 黒褐 10YR2/2 6層に対応する。粒径の細かな砂質土層。混入物少ない。
- 9 褐灰 10YR4/1 砂質土層。ローム小ブロックが上面から流れ込むようにして混入する。
- 10 灰黄褐 10YR5/2 ロームブロック。



6溝-1 (1/3)



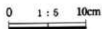
6溝-2



6溝-3



6溝-4



第335図 5・6・19号溝および出土遺物

4号溝（第336図 PL-40）

位置 080-805Gから085-810Gにかけて。5号溝の東側約3mの位置に平行して並んでいる。

形状 上端は蛇行しているが、底面は直線的な溝である。壁面は中段に稜があり、上方へ広く開いている。底面レベルは南側に低くわずかに傾斜していて北隅と4cmの比高差を生じている。

規模 調査できた範囲は全長4.9m、上幅3.6m前後、下幅30cm、深さ80cm前後である。

軸方向 N-46°-W。

備考 断面から水性堆積が確認できる。5・6号溝など近世と思われる遺構と共通した軸方向であるが、As-A降下時には埋没しきっている。

遺物 古式土師器・須恵器有台杯・焙烙底部など雑多な11片で、やや大形の破片も含まれる。

15号溝（第336図）

位置 090-800G。西側は16号溝に合流し、東側は11号溝直前で途切れている。

形状 東隅は南に向かって湾曲している。底面は平坦で、底面レベルは東隅付近が深くなっている。

規模 調査できた範囲は全長2.2m、上幅25cm前後、深さ10cmである。

備考 溝と呼ぶのに相応しいか疑問な遺構である。14号溝へと続く可能性もあろう。

遺物 細片5片のみで、すべて古式土師器らしい。

16号溝（第336図）

位置 090-800Gから090-805Gにかけて。

重複 15・18号溝と重複しているが先後関係は確認できていない。

形状 西側にわずかに膨らむように湾曲気味だが、ほぼ直線的な溝である。壁上半部は垂直に近い立ち上がりである。底面付近の形状は一様ではないが、中段に平坦面があり二段底状になる部分が目立っている。底面レベルには緩やかな凹凸があり、最大5cmの比高差を生じている。

規模 調査できた範囲は全長5.1m、上幅1.6m前後、

深さ60cm前後である。

軸方向 全体ではN-31°-W前後であろう。

備考 As-A降下時には埋没しきっている。

遺物 出土していない。

17号溝（第336図 PL-40）

位置 085-800Gから090-805Gにかけて。

重複 18号溝と重複しているが先後関係は確認できていない。

形状 直線的な溝である。壁の立ち上がりはややきつく、最上面で大きく開いている。底面は二段底状になっており、掘り直しの痕跡と思われる。底面レベルはほぼ水平である。

規模 調査できた範囲は全長5.1m、上幅1.5m前後、下幅20cm、深さ80cm前後である。

軸方向 N-30°-W。

備考 16号溝と対になるように並んでいるが、埋没土は大きく異なって、天明三年以降まで開口していたことが土層断面から確認できる。

遺物 小破片を中心とする土師器33片を出土している。古式土師器と思われる壺類胴部片が多いが、奈良・平安時代の杯類も混じっている。

18号溝（第336図）

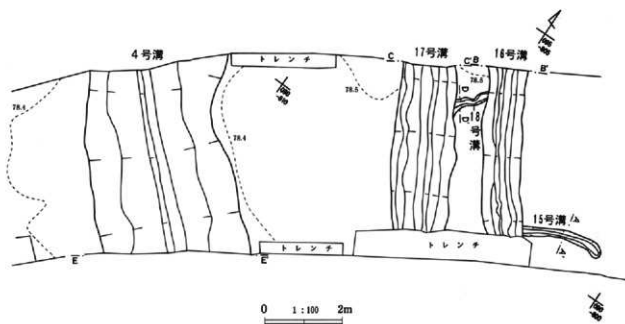
位置 090-805G。東側は16号溝、西側は17号溝に合流している。

形状 蛇行が強い。特に西隅は南側へ大きく湾曲している。底面は階段上に西側へ低く傾斜していて、東隅と10cm以上の比高差がある。

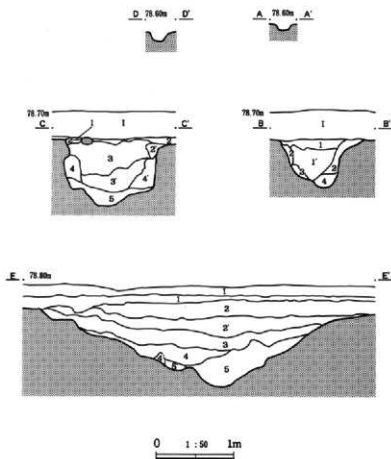
規模 全長約1m、上幅20cm前後、深さは東側で5cm、西側で20cmになる。

備考 溝と呼ぶのに相応しいか疑問な遺構である。

遺物 出土していない。



- 1 褐灰 10YR4/1 A_s-A 混じりのしまり強い非粘性土層。
- 2 黒褐 10YR3/2 起源不明の白色バミス少量含む弱粘性土層。2'にはA_s-Aらしいバミスを見出す。
- 3 黒褐 7.5YR3/1 起源不明のバミスの混じる粘性土層。混流層か。3'には粗砂がレンズ状に堆積している。
- 4 灰オリーブ 2.5Y5/2 粘性土と砂質土の混合土層で、斑鉄多い。4'には砂の混入多い。
- 5 黒褐 10YR3/1 粒種粗い砂質土中に、ローム小ブロックをやや多量に含む。5'には黒色粘性土ブロックが目立つ。



第336図 4・15~18号溝

8 掘立柱建物および柱列

表記の遺構は、遺跡全体で本線部分のA区からC区の範囲で、柱列3棟、掘立柱建物7棟が調査されている。壁穴住居の軒数や中世館跡の存在を考えると、軒数は少なく重複例もない。ピットの数は多いので、後世に壊された部分を含め、調査された以外にも多数の施設があったと考えられる。小規模な建物や柱列がほとんどであるが、B区で確認された建物は四面庇を持つ中世建物として特筆されるものである。

A1区の遺構

古墳時代と中世の溝で囲われた方形区画があり、横列状の遺構把握には特に留意した地点である。多数のピットが調査されているが、施設として捉えられたのは2基の柱列と2軒の掘立柱建物のみである。2号掘立柱建物は欠番である。

1号柱列 (第337図 P L-41)

位置 920-775G。並行する古墳時代の溝10・16号溝の間にあるが、軸方向は北方に振れて両溝とは異

なっている。付近にはピットが散在している。

規模 P1-P4間は芯芯距離で2.75mある。各ピットは等間隔になく、P2-P3間が特に短い。

軸方向 N-29°-W。

備考 各ピットとも埋没土は類似しているが、柱痕は明瞭ではない。20号ピットが本柱列の北側75cmの延長線上にあるが、ピットの形状や間隔など、すべて異なっている。

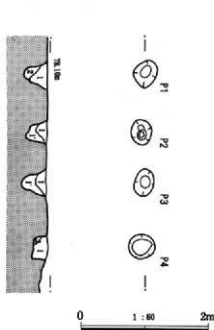
2号柱列 (第338図)

位置 910-770Gから915-775G。1号柱列の南側にあり、軸方向は1号柱列に近い。ピットが散在する一画であるが、際立って深さのある3本の柱穴が1列に並んでおり、2号柱列として扱った。

規模 3本のピットは芯芯距離で5.1mある。P2はP1-P3の中心より30cmP1側に寄っている。

軸方向 N-31°-W。

備考 P3断面に顕著な柱痕が見られる。P1も柱穴的な形状だが、P2は浅く柱穴とは確定できない形状である。



第337図 A1区1号柱列

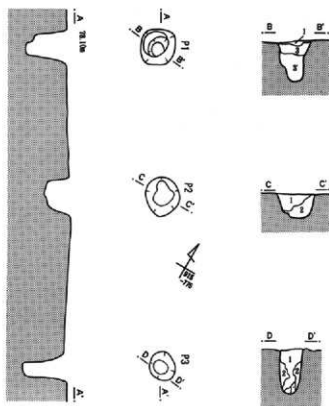
1号柱列 ピット計測表

No.	長径	短径	深さ(m)
P1	42	34	39
P2	39	33	31・37
P3	35	32	39
P4	42	38	22

1号柱列

- 黒埴10YR2/2 粒子の細かい腐蝕土質の微粘性土層。A₂-Cと思われるパミス散見。混入物少ないが、1'にはローム粒が混じる。
- 黒埴10YR3/2 粒子の細かい弱粘性土層で、ローム小ブロックが混じる。ややしまり欠く。
- にぶい黄埴10YR4/3 2層土とローム小ブロックの混合土層。

掘立柱建物および柱列 (A1区)



第338図 A1区2号柱列

2号柱列 ビット計測表

No	長径	短径	深さ(cm)
P 1	54	52	54・69
P 2	60	53	42
P 3	47	39	73

2号柱列

- 1 黒褐色10YR3/2 ややしまり欠く微粘性土層。ローム粒を少量不均等に含む。1'では混入物少なく黒色味増す。
- 2 にぶい黄褐色10YR4/3 1層土とロームブロックの混合土層。ややしまり欠く。
- 3 黒褐色10YR3/2 やや腐蝕土質の弱粘性土中に白色粘土ブロックが少量混じる。3'では粘土の混入多い。

1号掘立柱建物 (第339図 PL-41)

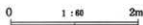
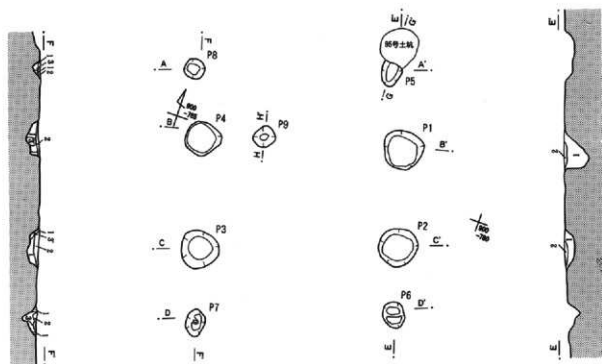
位置 895・900-780 G。1・2号溝が作る古墳時代の方形区画の外になる。4号溝が作る中世館区画内にあるが、4号溝の軸方向とはつながりがない。

形状・規模 当初P1～P4による4本の大型柱穴からなる1号掘立柱建物と、規模の小さなP5～P8からなる2号掘立柱建物の、重複する2棟の建物を検討していたが、これらを併せた8本の柱穴からなる建物とするのが妥当とした。すなわちP5～P8を庇とし、南北2面庇のある1間×1間の南面する建物になると考えた。庇を含めた建物の規模は芯芯間で梁行3.9m、桁行3.1mになる。庇の張り出しは南北とも1.1m前後である。

重複 95号土坑に先出している。96・98号土坑とも重複するが新旧は不明。42号住居とは接している。

主軸方向 N-19°-W。

備考 北側の庇P5とP8は他の柱穴の配置より西へ逸れている。南面だけの庇となる可能性もあろう。また、庇付きの建物としては柱穴規模が貧弱で、いずれの柱穴とも柱痕も不明瞭である。本施設を建物とすること自体に懸念も残る。



1号掘立柱建物 ピット計測表			
No	長径	短径	深さ (cm)
P 1	60	57	37
P 2	60	59	15
P 3	59	57	18
P 4	56	49	22
P 5	(36)	30	12
P 6	41	33	9・19
P 7	43	30	11・19
P 8	33	30	22
P 9	34	28	25

1号掘立柱建物

- 1 黒褐色土層 弱粘性土で褐色土を不明瞭なブロック状に含む。
- 2 暗灰褐色土層 粒子の細かな弱粘性土層。混入物少ない。
- 3 黒色土層 混入物の少ない、やや腐蝕土質の層。3'にはローム小ブロックやパミスの混入やや多い。

第339図 A1区1号掘立柱建物

3号掘立柱建物 (第340図 PL-41)

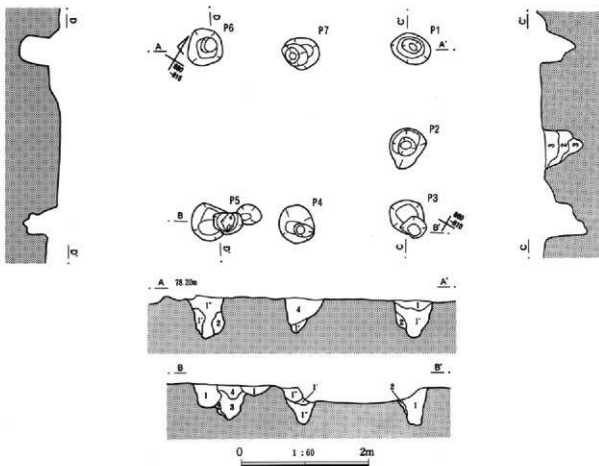
位置 855・860-810G。A1区南西側の古墳時代方形区画内西隅付近はピットが最も集中して確認できた一画である。付近のピットは深く、柱痕の残るものが多いのが特徴である。古墳時代の方形区画に伴う建物を把握するため、確認には特に留意した一画であったが、建物として確認できたのは本建物1棟のみである。この一画のピットは、古墳時代の区画内にも見られることや堅穴住居との重複が少ないことなどから、古代の施設である可能性もあろう。

形状・規模 深さ50cm以上のピットを並べて見つかった建物である。各柱穴とも底面に柱痕状の窪みがある。規模は芯芯距離で桁行3.2m・梁行2.7mで2間×2間の建物だが、西側のみ1間になっている。配置はやや不規則で、桁方向では東側のP1-P7間・P3-P4間では1.8mだが、西側では1.4m前後となっている。

重複 9・10・43号土坑に先出すると思われる。

主軸方向 N-32°-W。

備考 軸方向も古代の遺構群に近い数値である。



3号掘立柱建物 ピット計測表

No	長径	短径	深さ(cm)
P1	62	44	42・60
P2	65	57	47・62
P3	67	54	43・55
P4	58	53	39・60
P5	(60)	58	26・57
P6	58	54	58・66
P7	54	53	28・54

3号掘立柱建物

- 黒褐色 10YR3/2 やや粗粒の黒色微粘性土中にローム小ブロックやローム粒を散見する。A_s-Cを少量含む。1'では混入物少なく、1''ではローム土の混入やや多い。
- にぶい黄褐色 10YR4/3 ロームブロックと黒色弱粘性土との混合土。
- 暗褐色 10YR3/3 やや粗粒の黒色弱粘性土中に、ロームブロックが不均等に混じる。パミスをほとんど含まない。
- 黒褐色 10YR3/2 1層土に近いが、A_s-Cの混入やや多く、焼土粒を散見している。

第340図 A1区3号掘立柱建物

A2区の遺構

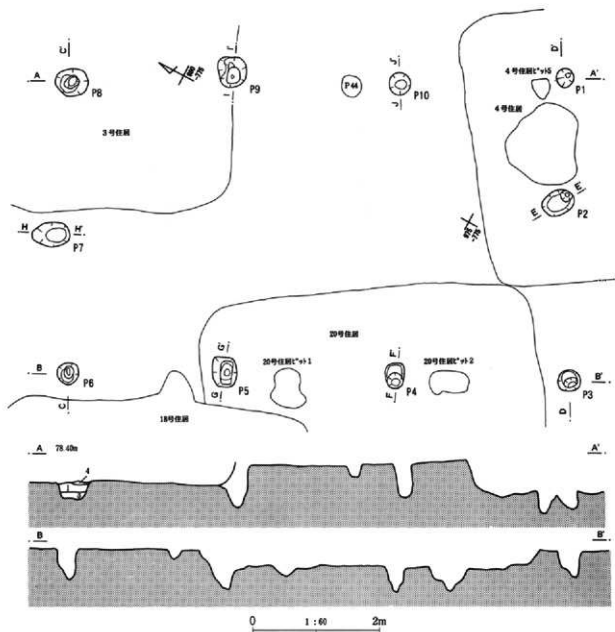
ピット数はA1区に比べて少ない。柱列は確認できないが、掘立柱建物はA1区と同数の2軒を調査できた。

1号掘立柱建物(第341図 P L-41)

B区1号掘立柱建物に次ぐ規模の遺構である。竪穴住居との重複が多く、掘立柱建物としての把握が遅れ、住居との新旧関係把握には不備が多い。

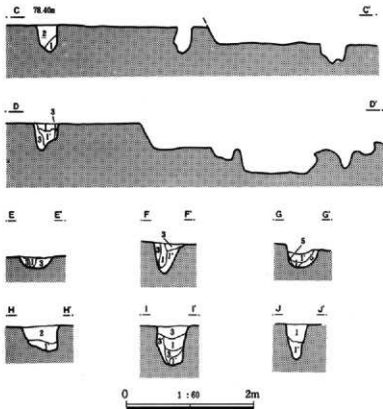
位置 970-770Gから980-775G。古墳時代の1号溝の北東側約8.5mに平行して並ぶように建っている。

形状・規模 梁行2間×桁行3間と想定される。ただし、P2とP7は若干位置が逸れるうえ、特にP2は4号住居の主柱穴と区別ができない。1間×3間の建物となる可能性も十分考慮したい。芯芯間桁方向は8.9m、各柱穴間は2.6~2.7mになる。梁方向は南西側4.6mなのに対し北東側4.8mでやや開



第341図 A2区1号掘立柱建物

掘立柱建物および柱列 (A2区)



1号掘立柱建物		ビット計測表	
No	長径	短径	深さ(cm)
P 1	32	28	29
P 2	52	39	17・22
P 3	36	35	30・41
P 4	39	31	27・44
P 5	47	40	26・31
P 6	35	34	33・48
P 7	62	37	40
P 8	52	44	23・28
P 9	47	40	67
P 10	36	33	57

1号掘立柱建物

- 黒縄10YR3/2 ローム小ブロックの混じる弱粘性土層。しまりやや強い。1'ではロームブロックがやや大粒になる。
- 黒縄10YR2/2 バミスの混入多い非粘性土層。
- 暗褐色10YR3/3 粒子の細かい粘性土層。ローム粒を少量、霏降り状に含む。3'ではローム粒多い。
- 黒縄10YR2/3 ローム小ブロックの混じる3号住居貼り床層。
- にぶい黄褐色10YR5/4 ローム土と暗褐色の粘性土との混合土層。

第342図 A2区1号掘立柱建物断面

いている。各柱穴の間隔は一定でない。また、各柱穴の平面形も一定でなく、P1・P3・P6・P8の四隅の柱穴が円形なのに対し、P4・P5は隅丸長方形を呈している。

重複 P4・P5は20号住居に後出している。P8は3号住居に先出している可能性がある。

主軸方向 N-61°-E。

備考 南西側に面した建物で1号溝に桁方向を揃えている。堅穴住居などその他の遺構とも軸方向に関連があり、古代の遺構と考えたい。

2号掘立柱建物 (第343図)

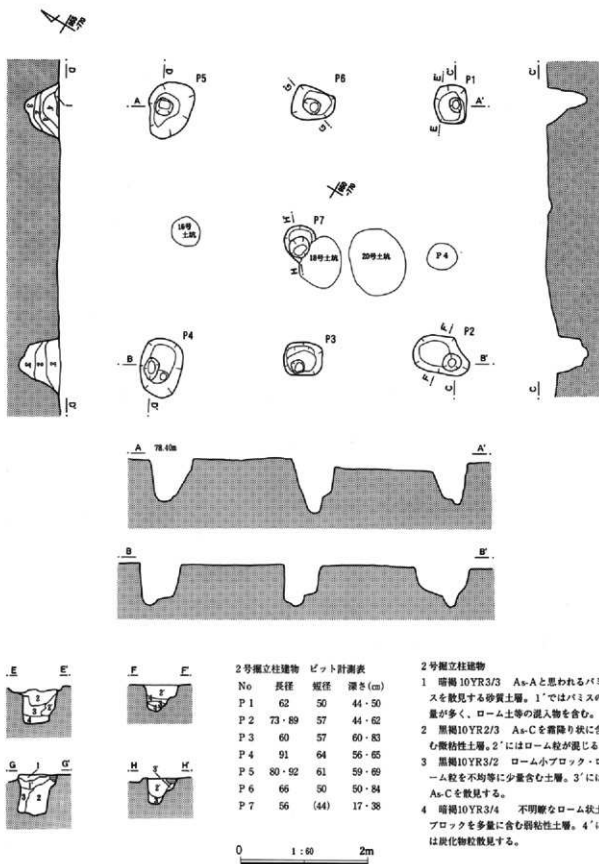
位置 945-765Gから950-770G。A2区内ではビットの多い一画にある。規模の大きなビットの並びで、容易に確認されている。

形状・規模 1間×2間の掘立柱建物を想定したが、中央束柱となる位置にP7がある。この柱穴は規模が異なり本建物に伴うものとは思われないが、重要な位置にあるため、合わせて掲載した。南西に面する建物と思われる。規模は芯芯距離で梁行4.0m、桁行4.75mである。6本のビットは平面形が隅丸長方形に近く、A区他の建物とは異なっている。断面から柱痕は観察できないが、底面に柱痕状の窪みが見られ、深さも類似している。

重複 直接重複していないが16・18・20号土坑、4号ビットが建物区画内にある。新旧は不明である。

主軸方向 N-56°-E。

備考 時期決定の根拠となる資料は得られていない。1間×2間の全体形状は中世的であるが、個々の柱穴の平面形は奈良時代的である。軸方向も古代の遺構群に近いが、やや東側に振れ過ぎている。



第343図 A2区2号掘立柱建物

B区の遺構

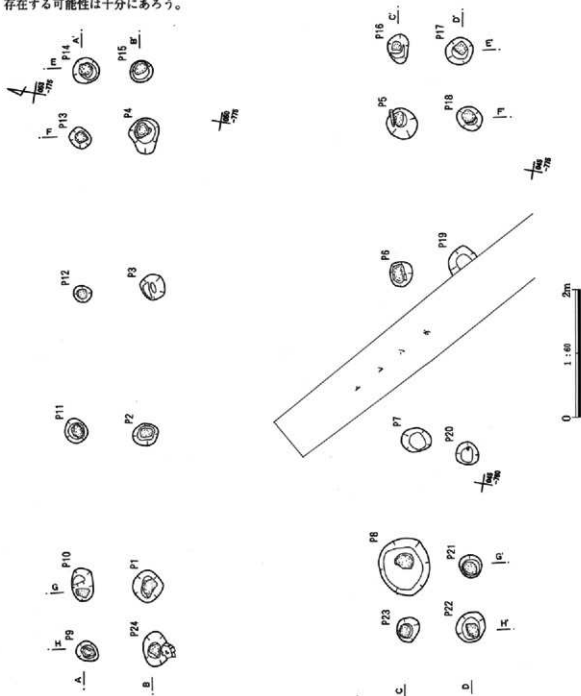
B区で集中してピットが見つかったのはB1区の西側である。表土を剥がし、基本土層のVI層上面まで達した段階で、溝状の遺構とともにピット群が確認されている。建物として把握できたのは1棟だけであったが、同様の柱穴や耕作土内に礎石上の礎の混入が数多く見られ、調査区域外に広がる別建物の存在する可能性は十分にありう。

B区1号掘立柱建物 (第344~346図 PL-42)

礎石状礎の据えてあるピットの並びから、四面庇のある本道跡最大の建物が把握できた。

位置 045-775・780G他。

形状・規模 1間×3間で四面庇の付く大型建物である。桁方向と梁方向が直交せず、平行四辺形気味

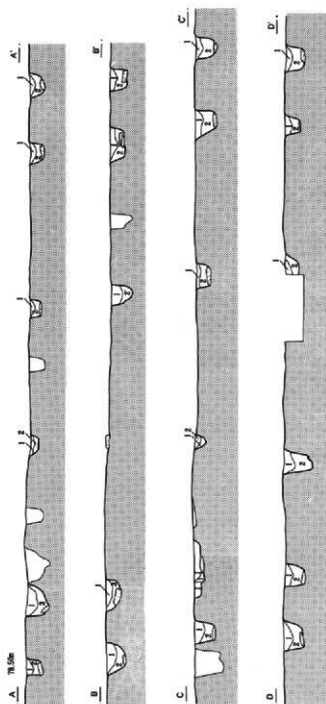


第344図 B区1号掘立柱建物

に至っている。柱穴の配置は北側では規則的で、中央がやや狭く、東西で等間隔になっている。芯芯距離で、P1-P2とP3-P4間は約2.5m、P2-P3間は2.2mになる。南側はP8が土坑に壊されていて不明瞭だが、大きく乱れていて、特にP19-

P20間は開いている。底の張り出しはほぼ1.1mで四辺とも一定している。底を含めた規模は芯芯距離で梁行6.05m、桁行9.15mになる。

重覆 3号土坑に先出し、8・11・16号溝には後出している。その他に4号土坑も直接重覆してはいな

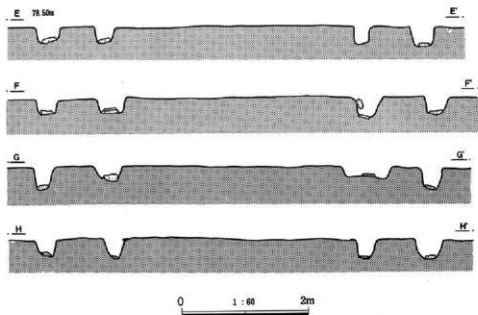


第345図 B区1号掘立柱建物断面(1)

1号掘立柱建物		ピット計測表	
No	長径	短径	深さ(cm) (石上・底)
P 1	46	45	12・15
P 2	40	36	0・6
P 3	39	37	-・36
P 4	57	47	13・26
P 5	47	46	30・34
P 6	38	34	16・22
P 7	47	38	-・25
P 8	-	-	10・17
P 9	35	30	18・30
P10	51	34	21・34
P11	39	36	13・22
P12	28	25	13・25
P13	34	31	17・22
P14	40	40	16・24
P15	36	34	17・23
P16	47	33	29・33
P17	45	39	27・33
P18	41	36	20・27
P19	47	(28)	-・21
P20	38	36	-・44
P21	36	36	27・33
P22	48	45	26・34
P23	39	35	28・31
P24	55	38	24・32

1号掘立柱建物

- 1 黒褐色土層 A・Cと思われるバミスを露降り状に含む、しまり強い層。ローム粒を少量含む。
- 2 黒褐色土層 やや粒子の細かい弱粘性土層。炭化物粒を少量含む。2'ではローム小ブロックが混じる。
- 3 暗褐色土層 2層土と微細塵まじりの砂の混合土層。溝上のみに見られる。



第346図 B区1号掘立柱建物断面(2)

いが建物の区画内にある。

主軸方向 梁方向は柱列N-12'-Wだが、桁方向を元に歪みを修正するとN-10'-W前後となる。

備考 各柱穴には掘り方の底面付近に扁平な川原石が置かれているものが多い。礎は長軸25cm前後・厚み6cm未満で平面楕円形状のものが多く、球形状の礎は使用していない。主柱穴と庇部分で礎の規模に差はないようである。礎石下に柱痕は見られず、当初から礎を敷くための柱穴であったようだ。P3・P7・P19・P20には礎石は見られないが、形状は他の柱穴と変わらない。またP8部分は土坑に壊され、礎石だけが残されたようである。P19は試掘時のトレンチで一部を壊されていて、1m南側のトレンチ埋め土内から見つかった礎が本柱穴に伴う礎石であった可能性がある。出土遺物はない。

小論 建物の企画・規模や土層から、本建物は中世の所産と考えられる。A1区にある中世方形館北隅から北へ50m離れているうえ、軸方向も一致しないので、館に先行する建物となる可能性もあろう。

1号掘立柱建物跡の特徴を要約すれば、①規模および四面庇②梁間-1間③掘立柱穴内礎石据えであ

る。①については、階層、機能上、ある程度の特権階層と主要建物である点が、②については高崎市域の傾向として、又首組、草屋根建物を推定でき、③については②の特徴と共に中世でも15世紀初頭以前に多い建物傾向にある。

この建物跡は、遺跡地の西方延長上にある慈眼寺より南東約650mにある。慈眼寺は、現在も4ha以上の伽藍、墓地を含む寺地を有し、来歴はともかく、寺伝の法具類、紙本類に鎌倉時代頃からの寺運の高まりを認め、14世紀には足利尊氏の寄進状なども伝存する。この建物跡に西接して南南東から北北西に向う古道往還(市道)があり、往時において、おそらくは、道沿いに小規模な町屋が形成されていたであろう。その際、建物跡の字名称が大門であるところから、町屋の末端、もしくは大門とした総門外脇の位置にこの場所が相当することになる。①・③の特徴からくるある程度の特権の意味は、慈眼寺の係わりとも考えられる。

C区の遺構

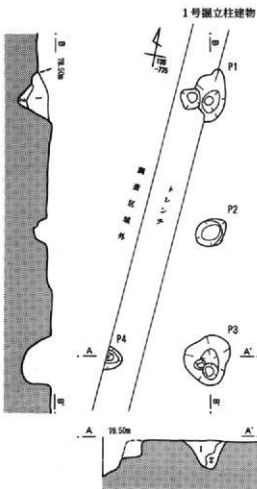
当区は竪穴住居が8世紀以降に一時的に展開する地点である。ピットの確認は少ないが、掘立柱建物2棟と柱列1基を調査している。軸方向に竪穴住居との関連が見られるが、いずれも時期は不明である。

1号柱列 (第347図)

位置 130-765G。6号住居の東側に接している。

1号掘立柱建物の東側3.1mにあり同建物のP2とは直線的につながる位置にある。

規模 P1-P3間は芯芯距離で2.2mある。



1号掘立柱建物

1 暗褐色土層 F P柱と黄褐色シルト質土ブロックを不均等に含む。人為的な埋め戻し土と思われる。

2 暗黄褐色土層 黄褐色のシルト質土の混入多い人為的な埋め戻し土層。2'ではシルト質土ブロックの混入多い。

0 1:60 2m

主軸方向 N-75°-E。

備考 1号掘立柱建物の軸方向に垂直に並んだ柱列で、同建物と同時存在する構造的施設を想定した。ただし、柱痕は不明瞭である。

1号掘立柱建物 (第347図 PL-41)

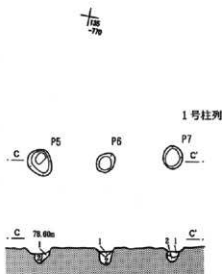
位置 130-770G。

規模 南北4.2m、東西1.7m以上。

重複 6号住居に後出している。

主軸方向 N-12°-W。

備考 竪穴住居が4軒集中していた4区南側の西側で確認された。東の3本の側柱列が確認されたものと思われるが、大半は調査区域外となり、不明瞭な



1号掘立柱建物 ピット計測表

No	長径	短径	深さ(cm)	1号柱列	ピット計測表		
P 1	72	50	55	No	長径	短径	深さ(cm)
P 1'	31	(24)	52	P 1	43	37	8・12
P 2	52	43	21	P 2	34	27	6
P 3	78	75	43・49	P 3	36	32	7
P 4	(25)	38	27				

1号柱列

1 黄褐 10YR5/6 F Pを少量含む粒子の

細かな弱粘性土層。

2 におい黄褐 10YR5/4 1層土と暗褐色粘性土の混合土層。

第347図 C区1号掘立柱建物および柱列

遺構である。東側の列はほぼ等間隔で、芯芯間で柱間2.1mなのに対し、南側のP3-P4間が1.7mと短く、不規則な配置となっている。P1とP3は複数のピットが重複したような平面形状だが、断面観察では重複の様子や抜柱痕は確認できなかった。上方へ偏って大きく開いている柱穴が多く、抜柱痕となる可能性は考えたい。

2号掘立柱建物 ピット計画表

No	長径	短径	深さ (cm)
P1	37	32	27
P2	46	35	25
P3	33	31	24
P4	35	33	31
P5	23	22	20
P6	27	24	17
P7	44	38	62

2号掘立柱建物 (第348図 PL-41)

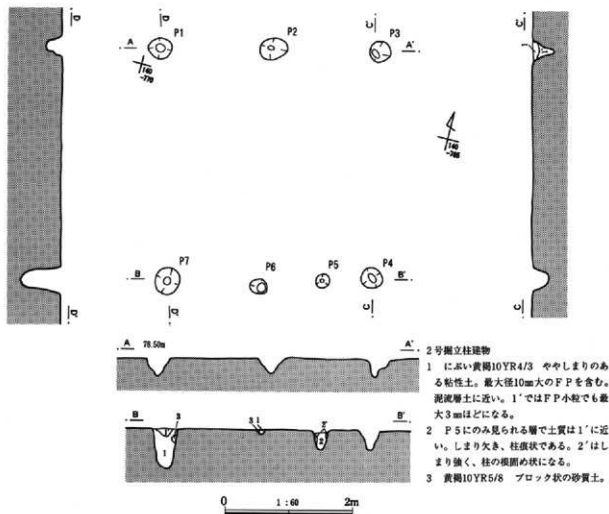
位置 135・140-765G。

形状・規模 梁行1間3.6m×桁行2間3.4m (南側では3間3.3m)の変則的な建物である。各柱穴の規模も一様でなく、四隅の柱穴には深いものが多いが、P6は柱穴として扱うことにも問題がある。

重複 直接の切り合いはないが、35・62号土坑、25号溝などが、建物区画内にある。

主軸方向 N-13°-W。

備考 軸方向が1号掘立柱建物に近く、近接した時期の遺構とも考えられるが、形状はかなり異なっている。



第348図 C区2号掘立柱建物

9 井戸

A1区で7基、A2区7基、B区4基、取付道E区1基で併せて19基の井戸を調査した。古代の集落から中世・近世の時期まで遺構がある点を考慮すると、井戸の数は少ないと言える。

本遺跡の井戸は比較的点在する傾向にあり、大きなまとまりはない。井戸枠や石組みなどの施設が残存していたり、これらの痕跡が確認できるものもなかった。湧水面が浅いため、深く掘り込まれたものもなく、井戸とするには問題のある遺構も含まれている。時期が確定できるものも少ない。

図示した以外に、本文429頁の粘土探掘坑は、井戸としてしばらく使われた古代の施設と考えられる。

埋没土の観察については、374頁の土坑における土層分類に準拠した。ただし、井戸特有の埋没土については断面図に①・②のように個別の土層を使って井戸毎に説明を加えた。

出土遺物は371頁以降にまとめて掲載した。古代の土器の混入が多いのは付近に集落が広がっていたため、井戸の時期決定に使えらると思われる資料は少ない。

A1区1号井戸 (第349図 P L-43)

位置 830-815G。調査範囲の西隣の傾斜面にあり、他の遺構から離れた位置にあり、重複はない。

形状 隅丸方形。底面付近も方形である。壁はやや開き気味で、直線的に立ち上がっている。

規模 120×115cm、深さ117cm。

埋没土 短時間に埋もれたようで、人為的に埋め戻された可能性が高い。底面付近の埋没土に腐蝕土が多いが、水が貯まったような痕跡は顕著ではない。壁面に湧水層は観察できず、タナ落ちの痕跡もなく、井戸として使われたか不明である。

遺物 図示できた遺物はない。土師器小片11片の出土があり、薄手変形部片中心である。

A1区2号井戸 (第349・353図 P L-43)

位置 905-775G。中世の方形区画溝である4号溝の内側、5号溝の外側にあたる区画にある。

形状 平面はほぼ円形。断面は漏斗状で底面は平坦である。底面付近で湧水層に達している。

規模 160×150cm、深さ165cm。

埋没土 上面に純層に近いAs-Aが堆積しているが、層厚がほぼ均等で、堆積したテフラが陥没したものであると思われ江戸時代の遺構とは即断できない。中層以下は礫が多く詳細な断面観察はできなかったが、礫は投げ込んだような状態で出土している。

重複 31号住居に後出している。

遺物 礫石1点を図示した。その他は古手中心の古墳時代の土師器約20片で、S字口縁に大破片がある。須恵器変形部の大破片、近世磁器片1片の他、上層から中層にかけては礫の出土も多い。

A1区3号井戸 (第349・353図 P L-43)

位置 900・905-775G。

形状 平面方形に近いものであったと思われるが、南側壁は井戸水を汲み上げる際に削られた痕跡が顕著で大きく抉られている。底面は平坦だが狭く、断面は逆台形になる。

規模 181×135cm、深さ133cm。

埋没土 多量の礫と湧水のため詳細な土層の記録を取れなかった。底面付近は湧水層に達している。

重複 11号溝に先出する。30号土坑と重複するが新旧不明である。30号土坑は水の汲み上げ痕の中心から逸れるが、本井戸の作業場的な施設となる可能性もある。

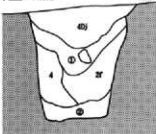
遺物 埋没土出土のかわらけ1点を図示した。その他に古墳時代前期から平安末まで土師器約60片があり、平安後期の遺物が目立つ。主に南側から投げ込まれた状態で多量の礫が出土している。河原石が中心で人頭サイズを越える礫もある。

井戸

A1区1号井戸



77.80m



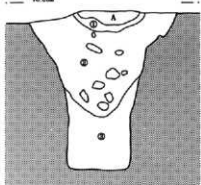
A1区1号井戸

- ① 黒褐色10YR3/2 混入物のすくない固粘性土層。やや腐蝕質の土層。
- ② 黒褐色5YR3/2 しまり欠く腐蝕質の土層炭化物粒の混入もやや多い。

A1区2号井戸



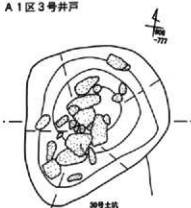
78.20m



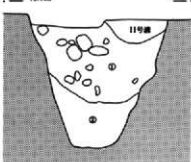
A1区2号井戸

- ① 暗褐色10YR3/3 上下両層の土が混合する中間的な土層。炭化物粒を含む。
- ② 黒褐色10YR2/2 やや粒子の細かい非粘性土層。腐蝕質な土でしまり欠く。礫の混入が多いが、他の混入物は少ない。
- ③ ②層と土質は同じだが、礫をほとんど含まない。

A1区3号井戸



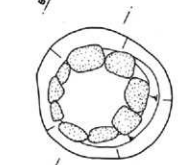
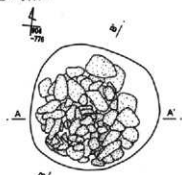
78.10m



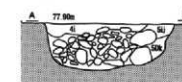
A1区3号井戸

- ① 黒褐色10YR2/2 しまり欠くやや砂質土層。礫の混入多く、ローム小ブロックが少量混入する。
- ② やや腐蝕質土となる。礫の混入は極めて少ない。

A1区4号井戸



77.90m



0 1:40 1m

第349図 A1区1～4号井戸

A 1区 4号井戸 (第349・353図 PL-43)

位置 900-770・775G。3号井戸の東側2mにある。井戸は離れて確認される例が多い本遺跡にあっては、近接した発見例である。重複遺構はない。

形状 やや歪んだ円形を呈している。

規模 140×136cm、深さ48cm。

埋没土 礫の量が多く、詳細な土層の観察はできなかった。人為的な埋没土である。

備考 確認面近くまで、川原石が人為的に充填された状態で、積み上げてあった。これを取り除くと、へりを囲むような川原石による石組みがみられた。井戸番号を付けて掘りすすめたが、湧水面には届かずに底面となってしまった。底面に石敷きは見られないが、3号井戸と関連する洗い場のような作業施設も想定されよう。

遺物 礫群中に混じっていた砥石1点を図示した。その他に土師器小破片7片がある。

A 1区 5号井戸 (第350図 PL-44)

位置 910-790・795G。4号溝が作る中世館区画の外側にある。

形状 平面は方形に近いものであったと思われる。南側に井戸水を汲み上げる際にできた、壁が削られた痕跡がある。底面直上で湧水面に達している。底面は狭く不整である。壁の崩落がすすんで、当初の規模よりかなり大きくなっている可能性がある。

規模 137×124cm、深さ119cm。

埋没土 人為的に短期間に埋め戻されたと思われる。水を貯めた痕跡は不明瞭である。

遺物 土師器微細片約10片が出土しているが、刷毛目のある甕胴部片が中心である。

A 1区 6号井戸 (第350・353図 PL-44)

位置 870-785G。5号溝が作る中世館の2重区画の内側にある。南側が広くっており、水の汲み上げで壁が削られた可能性がある。遺構の少ない一画にあり、重複はない。

形状 南北に長い卵形となっているが、底面は方形

に近い。断面は漏斗状なのだが、間口の広さに比べて著しく浅い。底面付近で湧水層に達している。

規模 207×162cm、深さ90cm。

埋没土 底面付近は自然堆積、中位以上は礫混じりの土で人為的に埋め戻されている。礫は人頭大のものから拳大のものまで混在している。

遺物 図示した3点は時期が混在している。他に土師器中心に約120片で平安須恵器碗・長頸壺片が混じっている。投げ込まれた礫の出土が顕著である。

A 1区 7号井戸 (第350図 PL-44)

位置 870-785G。6号井戸に隣接している。

形状 底面の平面形状は台形に近い方形で、開口部平面も同様と想定される。底面は湧水層を約40cm掘り抜いていて、一部にタナ落ちが見られる。

規模 94×90cm、深さ85cm。

埋没土 上半は人為的に埋め戻されている。

遺物 土師器・須恵器小片3片のみである。

A 2区 1号井戸 (第350・353図 PL-44)

位置 955-770・775G。

形状 平面、底面とも方形に近い。断面は漏斗状であるが、底面の広い遺構である。底面は湧水層を約40cm掘り抜いていて、一部にタナ落ちが見られる。

規模 140×135cm、深さ134cm。

重複 9号住居に後出している。

埋没土 底面付近には黒色土や砂が水平に近い堆積をしており、井戸として一定期間使われていたことが窺える。

遺物 下層出土の土師器壺を図示した。

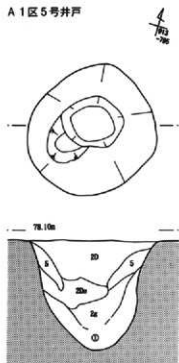
A 2区 2号井戸 (第350図 PL-45)

位置 945-760Gから950-765G。東隅は調査区域外で、完掘はできなかった。

形状 平面は長方形に近いものであったと思われる、そのまま垂直に掘り下げられている。底面中央が皿底状に僅かに窪んでいる。湧水層を50cm以上掘り抜いているが、タナ落ち等の、壁の崩落は少ない。

井戸

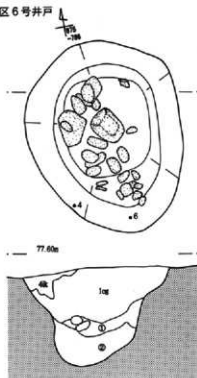
A 1区5号井戸



A 1区5号井戸

- ① 2層土中に腐蝕土質の黒色土が混じる。

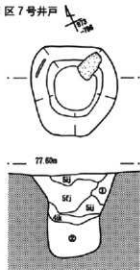
A 1区6号井戸



A 1区6号井戸

- ① 黄褐2.5Y5/3 粘性土と砂質土の混合土。ロームブロックを不均等に含む。
② ①層土に比べローム土の混入少なく、腐蝕質土となる井戸底面の堆積土層。

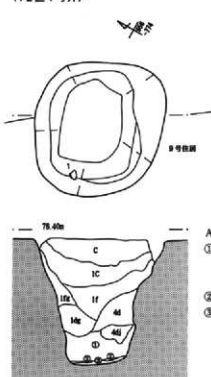
A 1区7号井戸



A 1区7号井戸

- ① 粘土ブロック、および崩壊したローム層。
② におい黄褐10YR7/2 大粒のロームや粘土ブロック中に礫の混じりあまりなく土層。腐蝕質土の混じる底面堆積土。

A 2区1号井戸

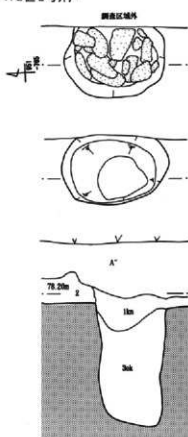


A 2区1号井戸

- ① 黒褐10YR2/3 腐蝕質のあまり欠く土層。ローム粒混じりの土が塊状に堆積する部分がある。
② 炭化物粒を含む粒子の細かな腐蝕質土。
③ 粗粒砂。塊状に堆積している。

0 1:40 1m

A 2区2号井戸



第350図 A 1区5～7号・A 2区1・2号井戸

規模 112×(72) cm、深さ135cm。

埋没土 上面から多量の礫が投げ込まれたような状態で出土し、断面は明確にできなかった部分が多い。As-Aの混入する層の下から部分的に落ち込みが確認されているが、このAs-Aは上層埋没土か後世の陥没であるか区別できなかった。

遺物 土器類の出土はない。大きな礫の出土が顕著である。

A 2区4号井戸 (第351・354図 P L-45)

位置 000-760 G。

形状 平面・底面とも不整形になっている。崩落がすすんで旧状はあまり留めていないものと思われる。西側の壁は特に削られていて、水を汲み出した痕跡の可能性が高い。湧水面を約20cm掘り込んでいる。

規模 175×138cm、深さ125cm。

埋没土 上層では焼土や炭化物粒の混入が目立つが、レンズ状に近い堆積状態が観察される。自然埋没したものと思われる。下層は砂質土が水平に近い堆積状態である。

遺物 6点の土器を图示した。壺2点、ミニチュア2点など堅穴住居のセットと異なる遺物の構成が目立つ。图示した以外の土器も古式土器類である。

A 2区5号井戸 (第351・354図 P L-45)

位置 990-770・775 G。

形状 開口部・底面ともに平面形状は楕円形に近い。底面は平坦で広い。断面はほぼ垂直に掘り下げられている。壁の崩落もあまり見られず、旧状を比較的留めているものと思われる。底面付近で湧水層に達している。

規模 100×86cm、深さ94cm。

埋没土 底面付近は砂泥じり腐蝕土の水平堆積層が見られ、一定期間、水が貯まっていたことが窺える。水平堆積層の最上層に多量の焼土・灰が見られることが特徴である。

遺物 3点を图示した。本遺跡では出土例がきわめて少ない羽口と思われる破片の出土が特筆される。

A 2区6号井戸 (第351図 P L-45)

位置 935-770 G。

形状 開口部は楕円形に近い形状で、東側に大きく開いている。その東に確認面下35cmの位置に杭を打った痕跡と思われる深さ60cmの小ピットが2基あるが、井戸に伴うか後出するものかは確認できていない。断面は漏斗状に上方で開いている。底面は平坦である。

規模 133×116cm、深さ120cm。

埋没土 上面にAs-Bを多量に含んだ層が見られる。降下によるパミスではないが、降下に近い時期の再堆積あるいは人為的な埋め戻しによるものと思われる。下層にはローム壁が垂直に崩落している。

遺物 出土していない。

A 2区7号井戸 (第351・354図 P L-45)

位置 020・025-780 G。

形状 平面は円形に近い。底面は狭いうえ平坦ではない。断面は漏斗状だが、中段の縁はテラスに近くになっている。湧水面下で幅を細く掘り下げている。

規模 185×168cm、深さ124cm。

埋没土 下段部分では水平に近い堆積をしている。壁の崩落土と思われるロームや粘土の混入は少ない。

重複 7号溝に先出している。

遺物 埋没土出土の土器壺小片を图示した。

A 2区8号井戸 (第351・354図 P L-45)

位置 945-785 G。16号溝の調査時に、同溝に先出する遺構として確認されている。

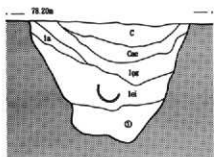
形状 上面・底面とも楕円形を呈している。不整なプランであるが、壁の崩落の痕跡は埋没土や壁の残存状態にも明確には現れない。底面は比較的平坦である。残存部分では垂直に壁の立ち上がりである。底面付近で湧水面に達している。

規模 137×124cm、深さ130cm。

埋没土 人為的に短期間に埋め戻されたと思われる。底面付近の埋没土にもロームブロックの混入が多く、井戸として不自然である。

井戸

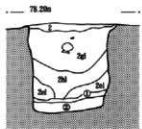
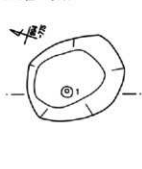
A 2区4号井戸



A 2区4号井戸

- ① 黒褐10YR5/1 砂質土層で、腐蝕質土の混入多い。部分的に織状の水平堆積も見られる。

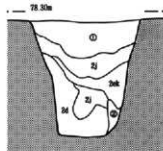
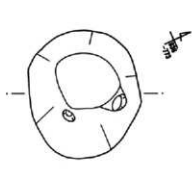
A 2区5号井戸



A 2区5号井戸

- ① 橙10YR7/6 鮮やかな色調の粘土を主体とする層。灰の混入も多く、しまり欠く。
② 黒褐10YR2/2 砂を主体に腐蝕質土の混入多い水平堆積層。

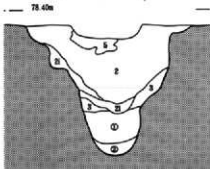
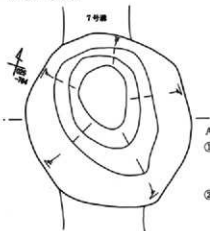
A 2区6号井戸



A 2区6号井戸

- ① 黒褐2.5Y3/2 A+Bを主体とする層。灰を含まず純層ではないが、降下に近い時期の2次的堆積層と思われる。
② 崩落したロームブロック。

A 2区7号井戸



A 2区7号井戸

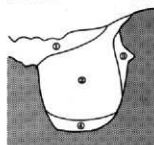
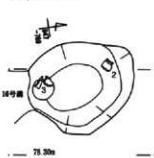
- ① 黒10YR1.7/1 他の遺構にもあまり見られない細粒の強粘性土。粘土と腐蝕質土の混合土か。
② 黒褐10YR2/3 砂質土主体で腐蝕土が混じる。ローム状土小ブロックも混じる。

A 2区8号井戸

- ① 黒褐色の16号漆喰没土。
② 黒10YR1.7/1 粒子の細かな弱粘性土で、しまりあり。混入物は少ない。
③ ②層と同質の土に、ローム粒や粘土小ブロックが混じる。
④ ローム粒・ローム小ブロックと腐蝕質土との混合土。

0 1:40 1m

A 2区8号井戸



第351図 A 2区4～8号井戸

重複 16号溝に先出している。

遺物 土師器壺・ミニチュアのセットの出土があり、A2区4号井戸と共通している。

B区1号井戸(第352図 PL-46)

位置 040-775G。四面庇のある1号掘立柱建物正面の南側3mの位置にある。東西に走行する6・22号溝と9号溝の交点部分にあたる。

形状 平面は円形を呈している。湧水面を60cm以上掘り抜いている。開口部に比べて底面は狭い。断面は逆台形状になっている。壁の崩落がすすんで、上面は当初の規模よりかなり大きくなっている可能性がある。

規模 205×198cm、深さ150cm。B区では最も大きな井戸である。

埋没土 湧水が激しく、断面の詳細な観察はできていない。礫の混入がやや多かった。

重複 6・9・22号溝に重複している。断面に切り合いは確認できない。同時に存在したか、井戸が後出したことになる。

遺物 1号掘立柱建物と同じ中世の遺構と想定しているが、土師器小片約40片が出土しているのみで、それ以外の出土遺物はなかった。

B1区2号井戸(第352図 PL-46)

位置 035-765G。1・3号井戸の南東8mの位置に、離れている。

形状 黒色土中では確認できず、ローム土上で約35cm掘り下げた精査時に見つかった遺構である。当初は土坑を想定していた遺構であるが、底面は湧水面を掘り抜いており井戸として扱った。ローム上面でのプランは円形で、底面は狭くやや歪んでいる。

規模 82×76m、深さ83cm(ローム面上)。黒色土面で確認できていれば深さ1.1m以上となる。

埋没土 レンズ状に近い堆積状態が認められる。水を貯めた痕跡は不明瞭である。

遺物 出土していない。

B区3号井戸(第352図 PL-46)

位置 040-770G。1号井戸の東側3mの地点にある。1号掘立柱建物南東隅からは南側へ1mしか離れていない。

形状 平面形は開口部で円形だが、底面では方形に近いものである。当初、土坑を想定して掘り下げたが、底面は湧水面に達しており、2号井戸同様に井戸として扱った。

規模 137×124cm、深さ78cm。

埋没土 レンズ状に近い堆積が観察され、自然堆積している。水を貯めた痕跡は不明瞭である。やや浅く、井戸として扱うには疑問な点もある。

遺物 断面に図示した大礫は、1号掘立柱建物に見られた扁平な礎石とは異なる。他に準大の円礫が多数出土している。

B区4号井戸(第352図 PL-46)

位置 065-755・760G。B2区に1基だけ存在する井戸である。

形状 当初、土坑を想定して掘り下げたが、湧水面まで達しているの、井戸とした遺構である。開口部はほぼ円形を呈し、底部まで垂直に近く掘り下げられている。底面は皿底状に中央がやや深くなり、比較的広い。

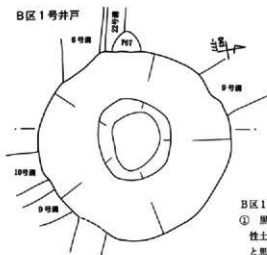
規模 88×80cm、深さ61cm。

埋没土 上面まで水平に近い堆積を繰り返しているが、水を貯めた痕跡は不明瞭である。井戸として扱うには疑問な点である。

遺物 出土していない。

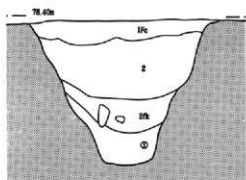
井戸

B区1号井戸

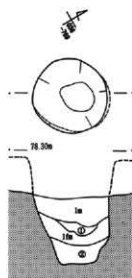


B区1号井戸

- ① 黒褐色10YR3/1 ややしまり欠く弱粘性土層で、開口部付近の地山の混入土層と思われる。炭化物粒の混入多い。



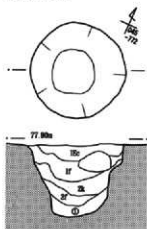
B区2号井戸



B区2号井戸

- ① 黒褐色10YR3/1 砂粒中心に腐蝕質土が混じる。一時井戸底部となった可能性あり。
② 褐色10YR4/1 砂粒の多い粘性強い土層。井戸底部の埋没土であるが、腐蝕の堆積状態は観察されない。

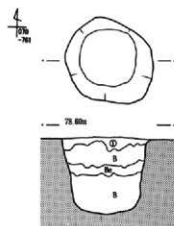
B区3号井戸



B区3号井戸

- ① 黒褐色10YR2/2 しまり欠く弱粘性土層で腐蝕質土がブロック状に混入している。

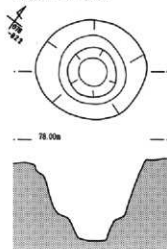
B区4号井戸



B区4号井戸

- ① 黒褐色7.5YR2/2 A+Bを主体とする砂質土層。火山灰は確認できず、プライマリな層ではない。

取付道E区1号井戸



0 1 : 40 1m

第352図 B区1～4号・取付道E区1号井戸

取付通E区1号井戸 (第352図 PL-46)

位置 075-820G。A区・B区以外では唯一の調査例である。直角に近い屈曲をする6号溝の内側にあり、一部同溝と重複している。

形状 上面は楕円に近い歪んだ円形を呈しているが、底面は円形である。

規模 115×102、深さ87cm (ローム面上)。

埋没土 湧水が激しく、断面の観察はできなかった。

遺物 出土していない。

A1区



2井戸-1



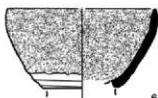
3井戸-1



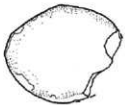
4井戸-1



6井戸-1

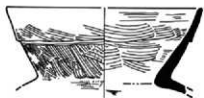


6井戸-2

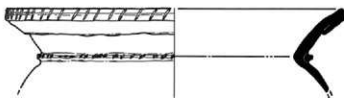


6井戸-3

A2区



1井戸-1

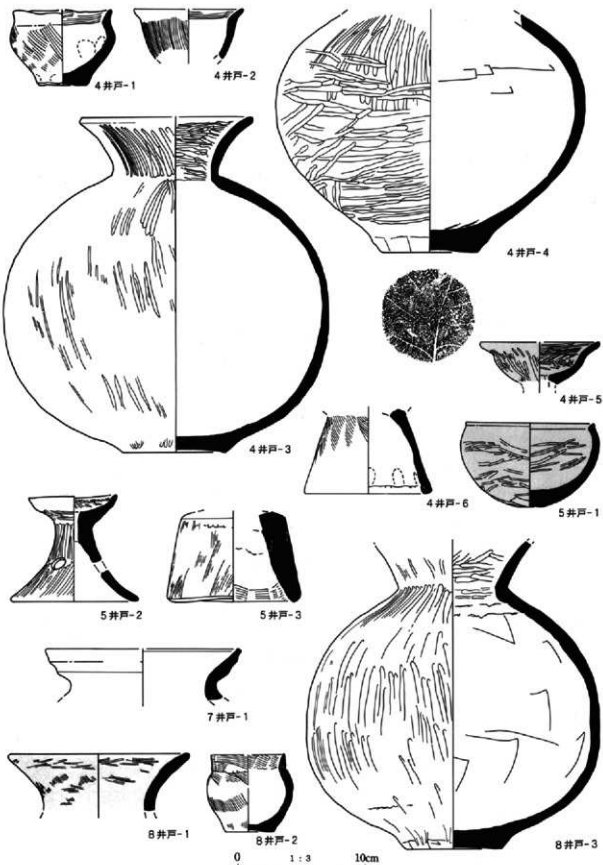


1井戸-2



第353図 井戸出土遺物(1)

井戸



第354圖 井戸出土遺物(2)

10 土坑・ピット・その他

a 墓坑 (第355図 P L-52)

遺構確認段階で110号土坑と名付け、半載して掘り下げるうち六道銭が出土した。本遺跡では墓坑と推定できる唯一の遺構である。

位置 879-785G。中世館二重堀の内堀になる5号溝の区画内にある。上面の削平が深く、遺構の残存状態は悪い一画である。

重複 109号土坑と重複するが、新旧は不明である。

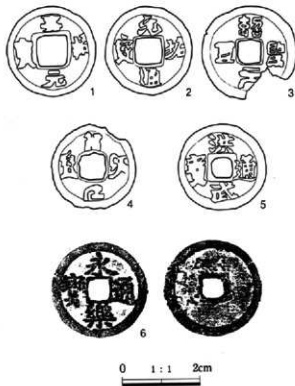
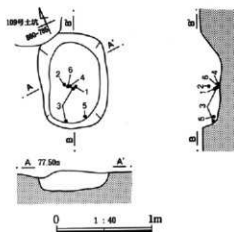
軸方向 N-18°-E。磁北には向いていない。中世館の区画溝の南北走行部分により近い値である。

規模 100cm×81cm 深さ21cm

埋没土 色調は灰黄褐10YR4/2。しまりの強い粘性土のほは単一土層。斑鉄がやや多い。骨や歯の検出に努めたが確認できなかった。炭化物等の混入物もほとんどなく、墓坑らしくない埋没土である。

遺物の出土状態 古銭はいずれも銅銭で、墓坑中央と南壁直下の二カ所に別れて出土している。中央の銭は底面に近い高さの出土が多い。3は二つのブロック遺物が接合したものである。埋葬後に攪乱を受けていると考えるべきであろう。

銭は錆が著しく、メタル部分まで浸食しており、6以外は銭種の判別が難しく、採拓もできなかった。図はX線写真から作成したものである。これによって4以外の銭種が判明した。表面はすべて無文である。宋銭と明銭が混在し、永楽通寶を初鋳年代の下限としている。



第355図 墓坑および出土遺物

	銭種	初鋳年代	計測値 径(縦・横)×孔×厚×重 (mm・g)	備考
1	嘉祐元寶か	1057	24.48・24.58×7.68×1.30× 2.18	一部欠く 下の字は「元」か。左は「寶」
2	元祐通寶か	1094	23.95・23.82×6.60×1.64× 2.13	
3	紹聖元寶か	1093	24.28・24.86×6.49×1.32× (1.95)	
4	不明		23.80・22.81×6.64×2.18× (2.42)	
5	洪武通寶	1368	23.49・23.94×4.79×1.47× 2.18	
6	永樂通寶	1403	25.23・25.67×5.39×1.20× 2.30	

b 土坑 (第356~372・374~382図 PL-47~58)

調査段階で土坑として扱った遺構は、ほとんどが性格の不明なものである。このうち、墓と判ったものや陥穴・柱穴と想定できたものは別に扱った。また、調査中に倒木痕となったものや明治時代以降の施設と確認できたものは除外した。発掘現場で付けた土坑番号は調査時や整理作業での検証後にも変更を加えなかったため、欠番を数多く生じている。この結果A1区136基、A2区38基、B1区5基、C区27基、D区1基、E区8基、取付道C区7基、取付道E区5基、取付道F区2基の併せて249基を掲載してある。出土遺物については396頁以降に一括して記した。また、写真図版には明治以降の施設として除外した土坑の一部についても掲載した。

A1区にある大型の円形土坑と長方形土坑については393~395頁に別途集成した。

個別土坑の内容については402頁以下の一覧表にまとめて記した。ここでは遺構番号順の扱いとなっている。出土遺物については、破片についても記録した。特にA区の土坑は古代の集落の上に築かれているものが多く、土師器・須臾器が大半となっているが、土坑の時期を想定するものではない。

土坑の土層註については共通記号を作成した。以下の通りである。

・基本的な土層分類については算用数字を使って表わした。

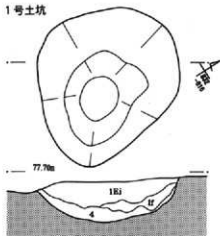
- 1 黒褐10YR3/2 やや砂質の土に雑多な混入物を含む。しまり強い。
- 2 黒褐10YR2/2 しまり強い弱粘性土。
- 3 暗褐10YR3/3 粒子の細かな弱粘性土。ローム粒を含む。
- 4 暗黄褐 ローム粒やロームブロックと黒色土の混合土。
- 5 にぶい黄褐10YR4/3 やや粒子の細かな粘性土。ローム土状の不明瞭な粘性土の黒色土が混入する。

・混入するパミスについて大文字アルファベットを使って表わした。

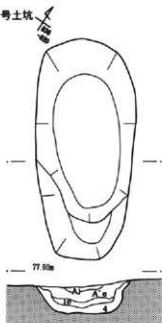
- A As-A軽石を1割前後含み、ザクザクした感触となる暗褐色土。基本土層のII層にあたり、本遺跡では最も軽石の密度の高いものである。
- A' A軽石を2~3パーセント含むもので、大半は降下に近い段階の耕作土と思われる。
- A'' A軽石の混入は1%に満たない。基本土層のI層に近い。
- B As-B軽石を含むやや腐蝕土質の黒色土。基本土層のIII層にあたる。
- C As-C軽石の混じる黒色味の強い土層。その他の混入物少ない。基本土層のVI層にあたる。
- D 細別できないが、浅間を給源とする小粒のパミスをやや多く混入する。
- E 細別できないパミス等を含む。
- F 榛名山二ツ岳を給源とするパミスを含む。
- G F FまたはF Aの混じる洪水堆積土。粒子細かく粘性あり。基本土層のIV・V層にあたる。
- ・その他に混入物やしまり、粘性等の特徴をつけ加えるために下記の記号を補助的に使用した。
- a 焼土粒の混入多い。 b 焼土粒を少量含む。
- c 炭化物粒や黒色灰の混入やや多い。
- d 径2cm以上の大粒ロームブロック含む。
- e 径1cm前後のロームブロック含む。
- f 径2~3mmのローム小ブロック含む。
- g ローム粒を多量に含む。
- h ローム粒を少量含む。
- i 粘土ブロックを含む。
- j しまり強い。 k しまり弱い。
- l 粘性土。 m 弱粘性土。 n 非粘性土。
- この番号は9節の井戸やd項のピットでも共通して使用した。なお、現代の耕作土層にあたる箇所(基本土層I層)には土層記号はつけなかった。

A1区

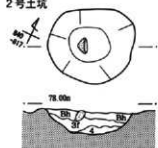
1号土坑



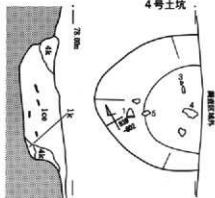
3号土坑



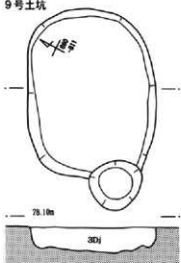
2号土坑



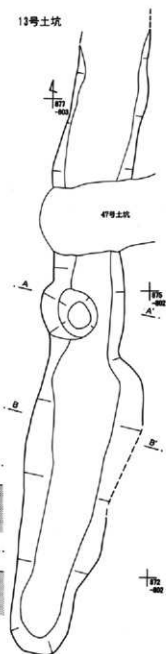
4号土坑



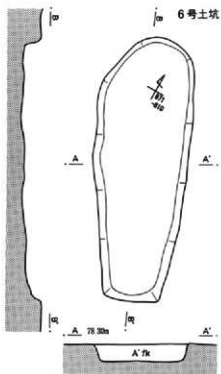
9号土坑



13号土坑



6号土坑

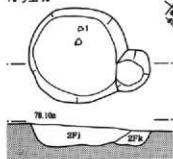


0 1 : 40 1m

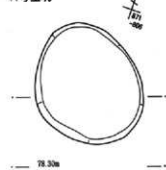
第356图 土坑(1)

土坑 (A1区)

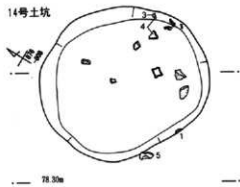
10号土坑



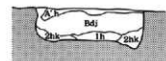
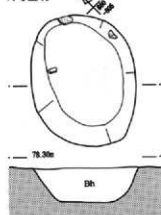
11号土坑



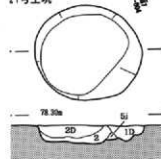
14号土坑



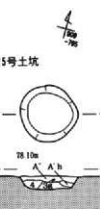
16号土坑



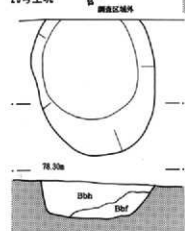
21号土坑



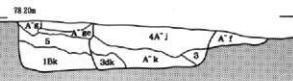
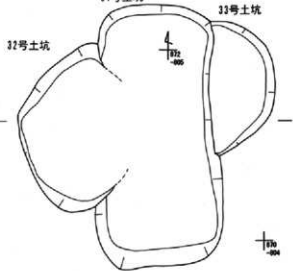
25号土坑



23号土坑

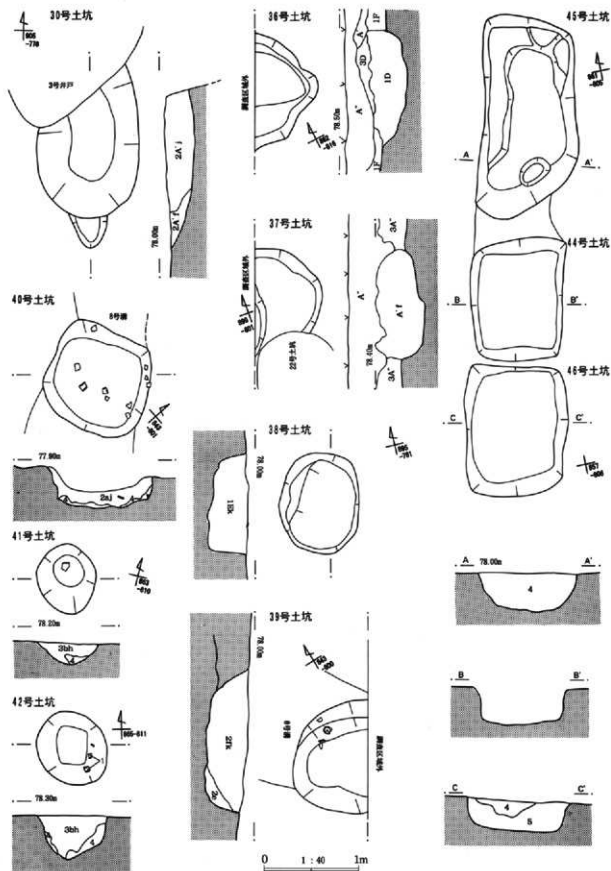


31号土坑



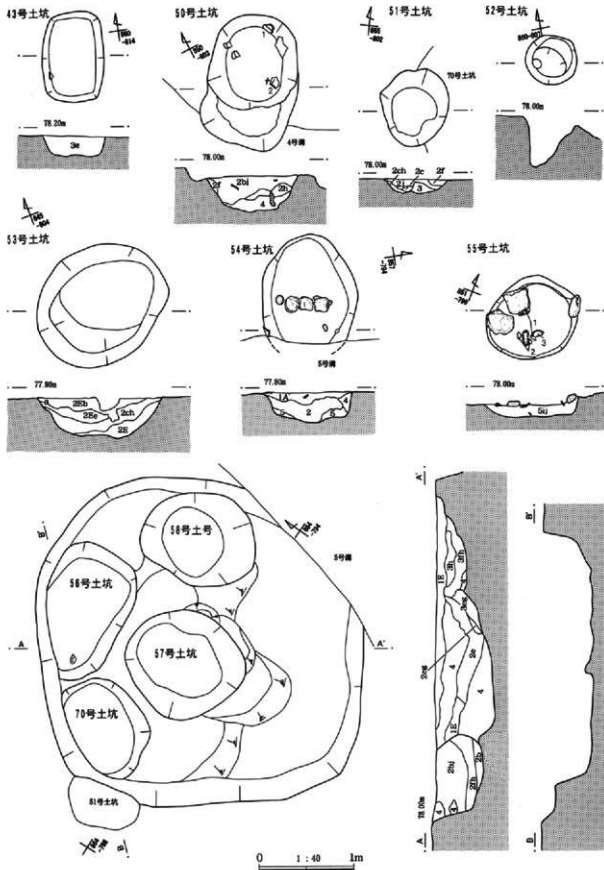
0 1:40 1m

第357图 土坑(2)

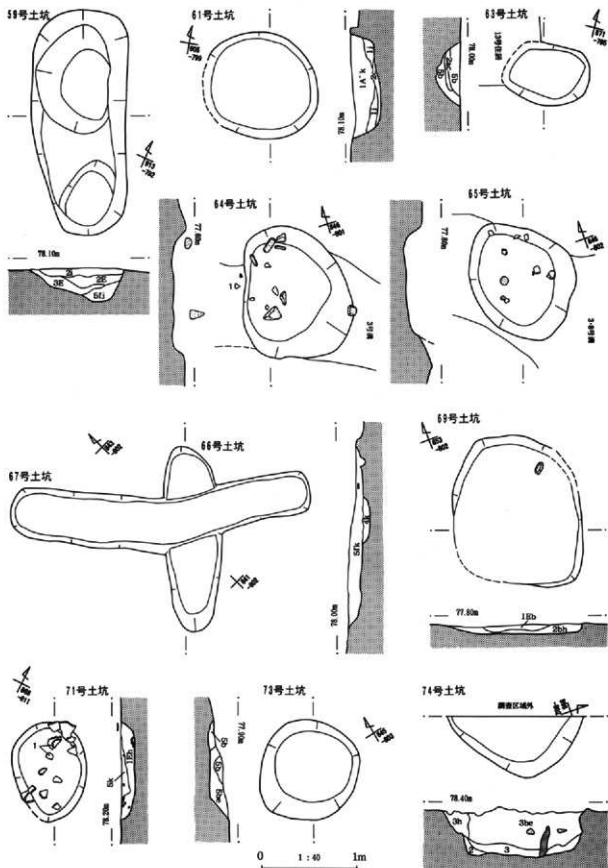


第358图 土坑(3)

土坑 (A1区)



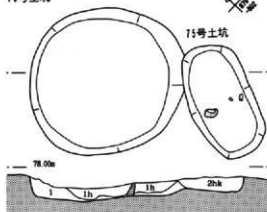
第359图 土坑(4)



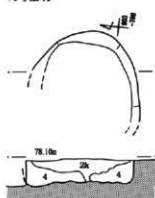
第360图 土坑(5)

土坑 (A1区)

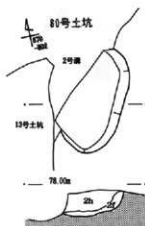
76号土坑



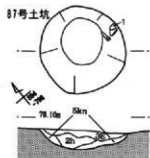
78号土坑



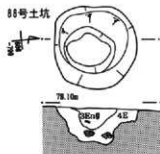
80号土坑



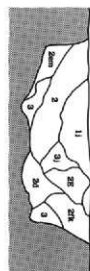
87号土坑



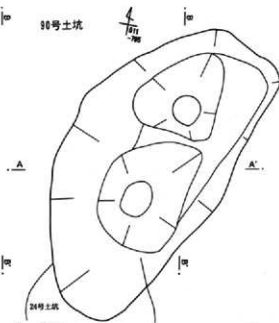
88号土坑



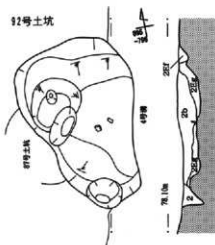
89号土坑



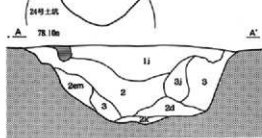
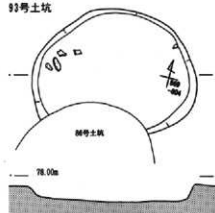
90号土坑



92号土坑

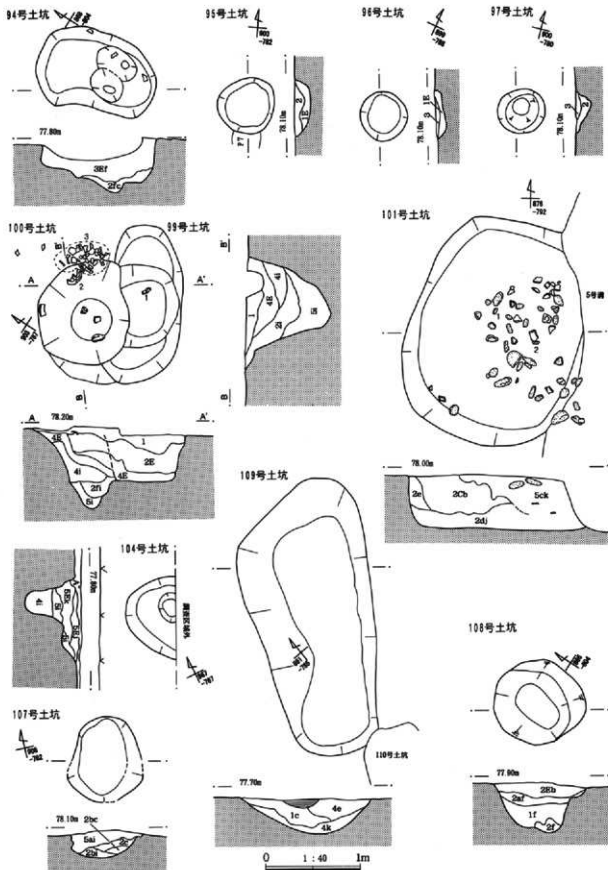


93号土坑



0 1:40 1m

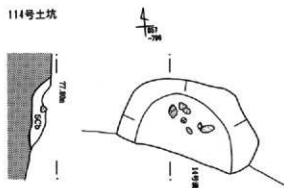
第361图 土坑(6)



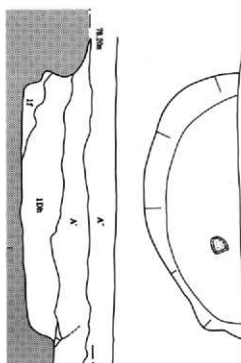
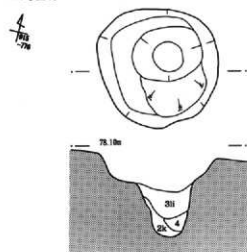
第362图 土坑(7)

土坑 (A1区)

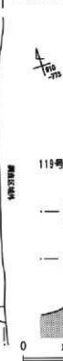
114号土坑



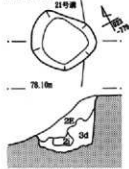
115号土坑



116号土坑

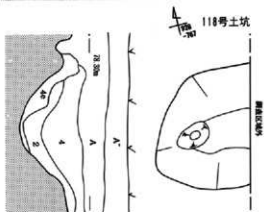
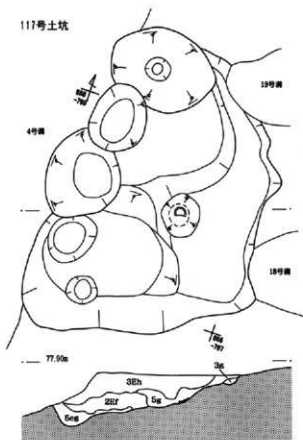


119号土坑



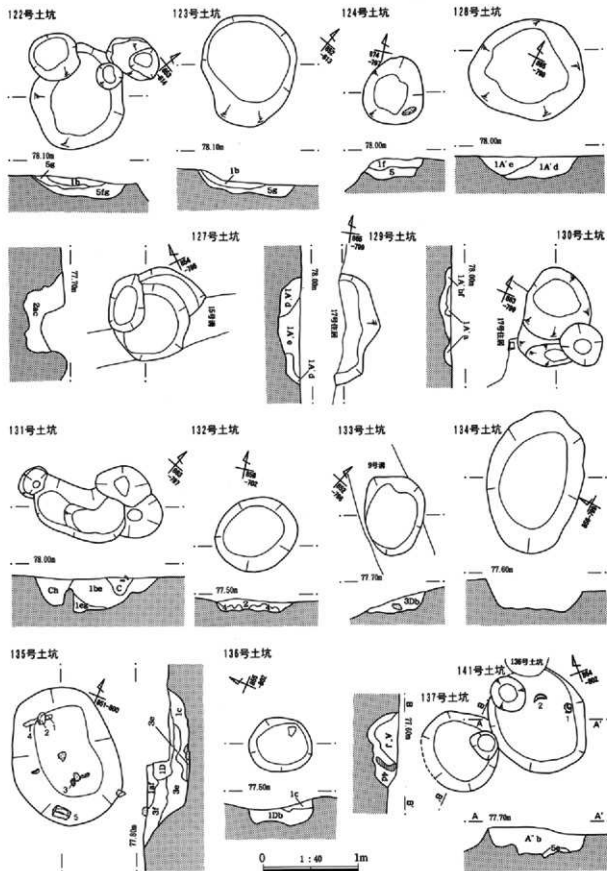
121号土坑

117号土坑



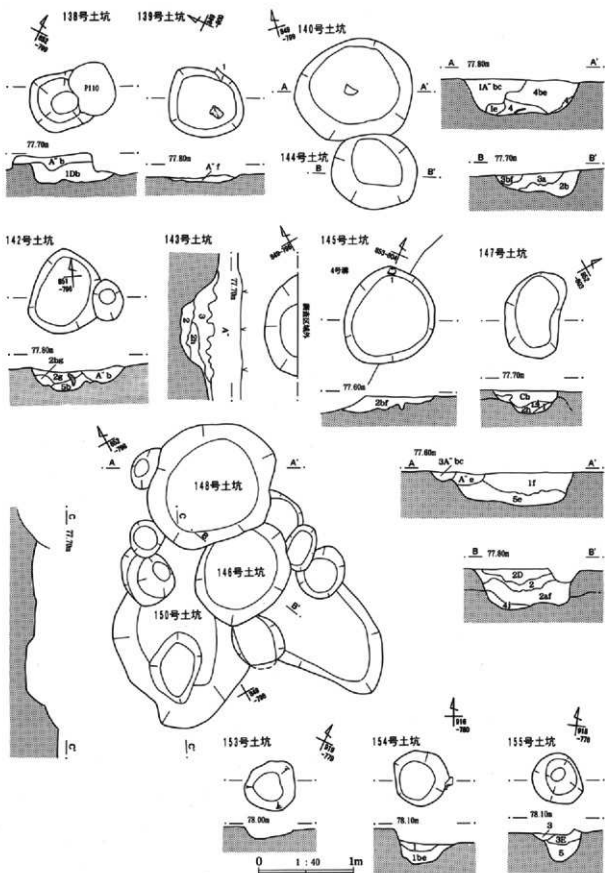
118号土坑

第363图 土坑(8)



第364图 土坑(9)

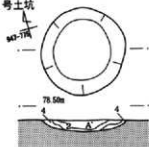
土坑 (A1区)



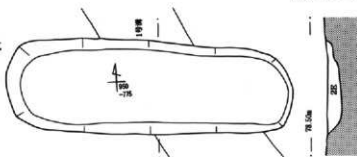
第365图 土坑(10)

A2区

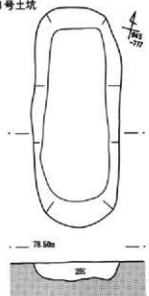
1号土坑



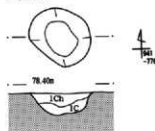
2号土坑



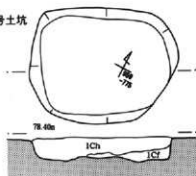
3号土坑



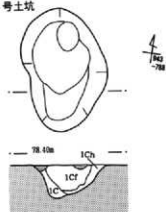
5号土坑



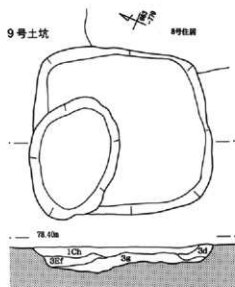
6号土坑



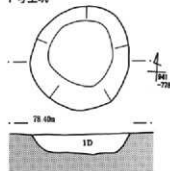
8号土坑



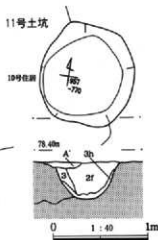
9号土坑



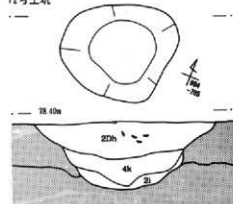
7号土坑



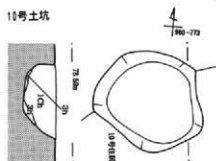
11号土坑



12号土坑



10号土坑

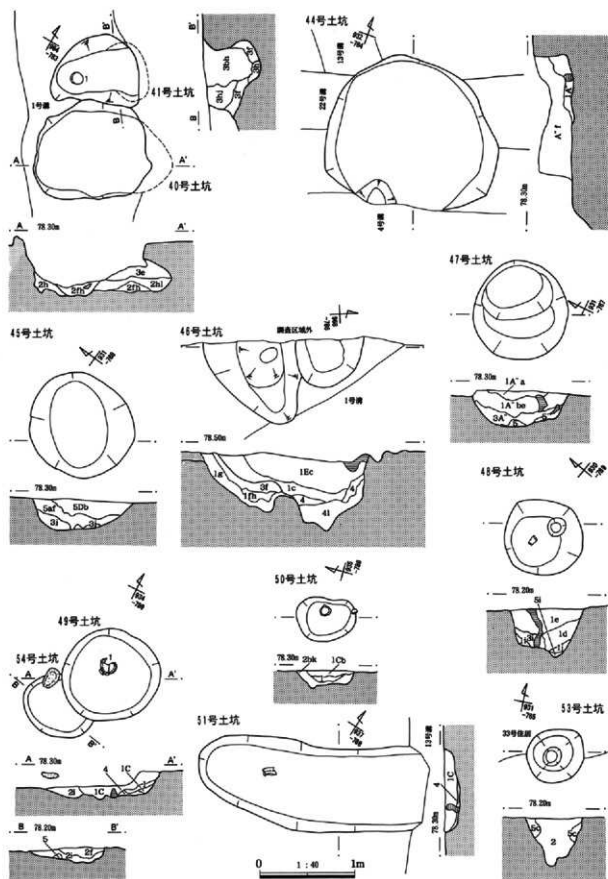


第366图 土坑(11)

土坑 (A2区)



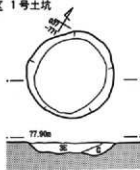
第367图 土坑(12)



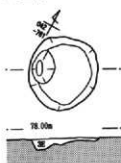
第368图 土坑(13)

土坑 (B·C区)

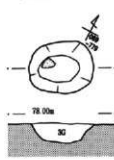
B区 1号土坑



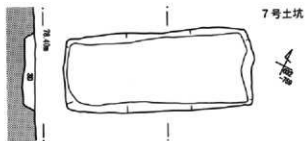
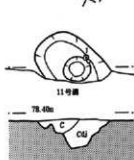
4号土坑



5号土坑

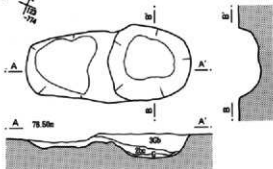


8号土坑

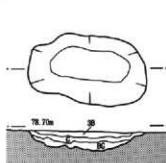


7号土坑

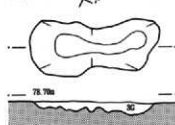
C区 18号土坑



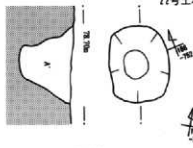
20号土坑



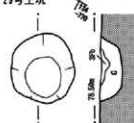
21号土坑



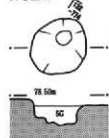
22号土坑



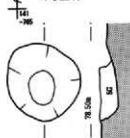
29号土坑



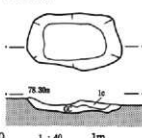
39号土坑



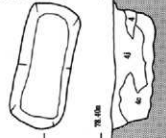
40号土坑



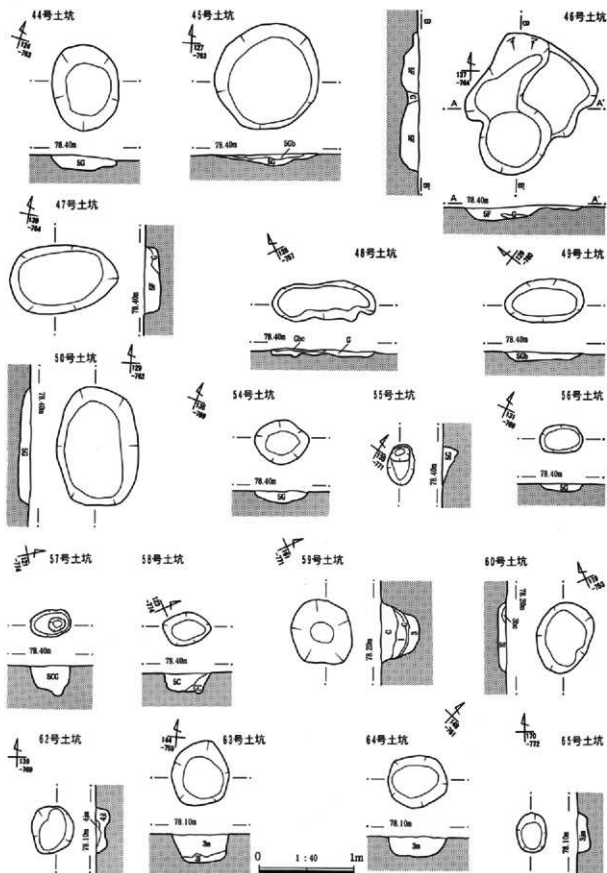
43号土坑



42号土坑



第369图 土坑(14)

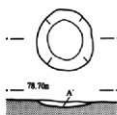


第370图 土坑(15)

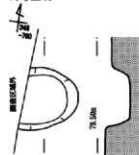
土坑 (D区·取付道C区)

D区

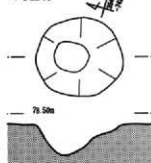
3号土坑



70号土坑

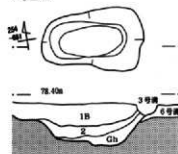


72号土坑



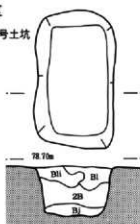
取付道C区

1号土坑

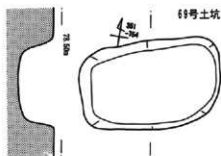


E区

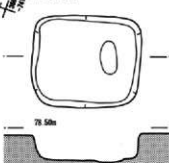
67号土坑



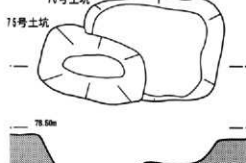
68号土坑



74号土坑



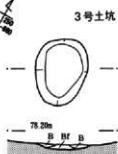
76号土坑



2号土坑



3号土坑



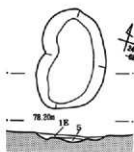
4号土坑



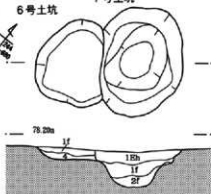
0 1:40 1m

第371图 土坑(16)

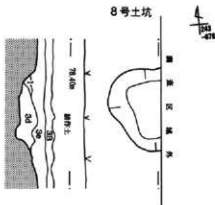
5号土坑



6号土坑 7号土坑

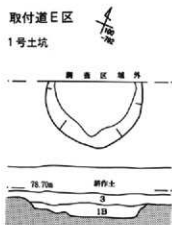


8号土坑

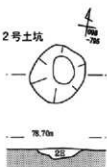


取付道E区

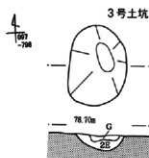
1号土坑



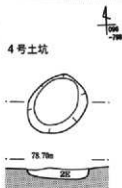
2号土坑



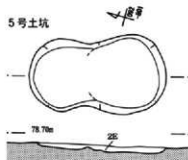
3号土坑



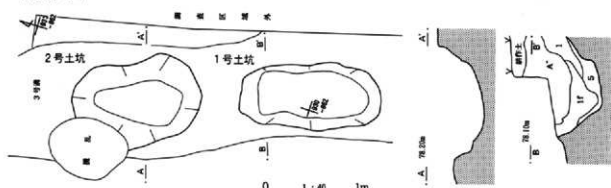
4号土坑



5号土坑



取付道F区



第372图 土坑(17)

長方形土坑 (第374・377図 PL-47-51)

平面形が幅は50cm前後なのに、長軸方向が2～3m前後と著しく長い長方形となり、底面が比較的平坦な土坑を集成した。短軸方向の断面形状は逆台形となっている。埋没土の観察から人為的に短時間に埋め戻されているようである。

種イモ類の貯蔵穴として近世以降の土坑と考えられている、ヨーカン土坑などと俗称されることのある遺構であるが、12・20号土坑などAs-Aを埋没土に観察できないものもある。円形土坑とはおよそ同じ位置に築かれていて、重複例では長方形土坑が後出している。

軸方向に類似性が顕著で、長軸を東西にとる12・20・34・60・98号土坑と、長軸を南北にとる84・85号土坑とがある。

円形土坑 (第374～379図 PL-47・48・50・51)

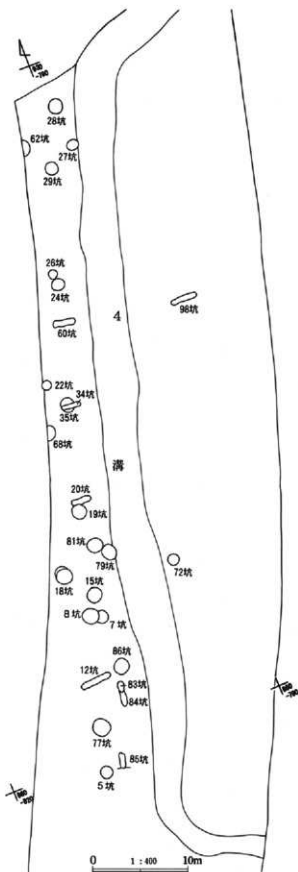
A1区に見られる平面が径90～150cm前後の円形で、底面が平坦な土坑を集成した。埋没土の観察からAs-A降下(1783年)以前に埋没したと判断できるものが大半である。主に4号溝の西側に位置し、同溝とは重複しない。館の区画ができた中世以降のものとは推測され、堅穴住居には後出している。

深さがあり、フラスコ形の断面形状が確認できるものをA類とした。いずれもAs-A降下以前に埋没している。形状から貯蔵穴的な用途の遺構と考えたい。15・18・19・35・62・68・79号土坑が該当する。このうち18号土坑は同類の遺構が重複するもので、18A・18Bの2基の土坑に分けた。

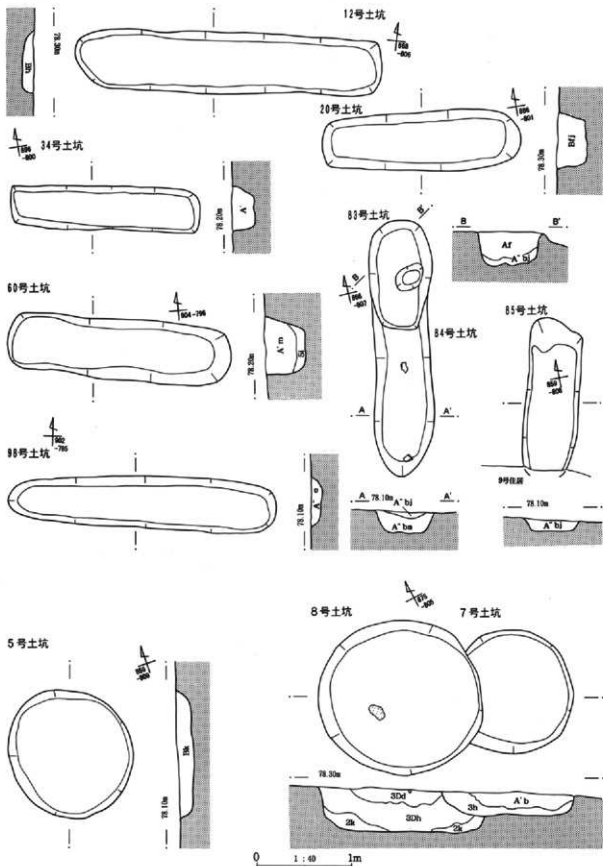
浅くて形状が不明瞭だが、A類同様の断面形状をもった土坑となる可能性のあるものをB類とした。5・7・8・27・28・29・81号土坑が該当する。このうち7・8号土坑は重複している。

底面がやや狭くなるものをC類とした。22・24・26・72・77号土坑が該当する。22・26号土坑は特に径の小さな土坑であるが、どちらもAs-A混じりの土が埋没土の主体となっている。

これらの土坑は4号溝の西側に圧倒的に集中しており、土地利用の特徴を示唆する遺構である。

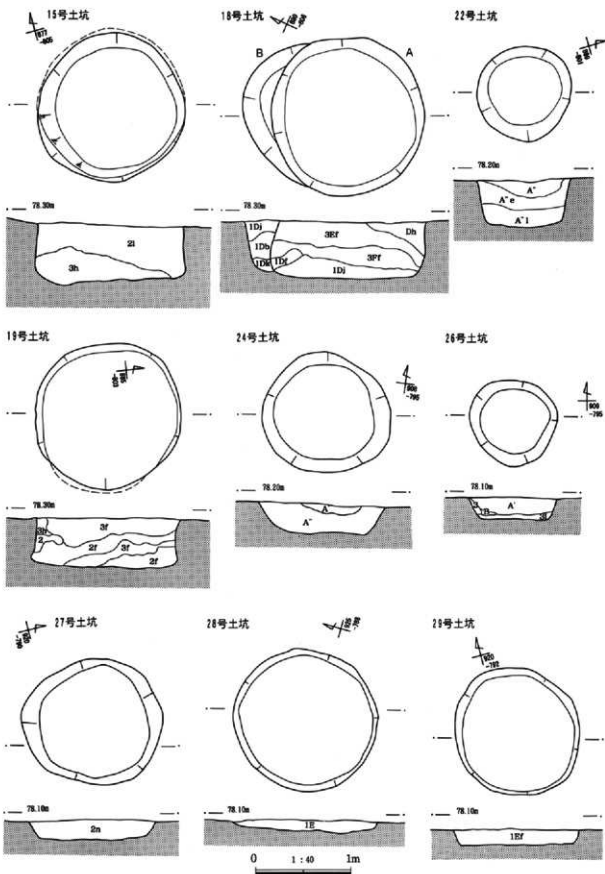


第373図 長方形・円形土坑配置図

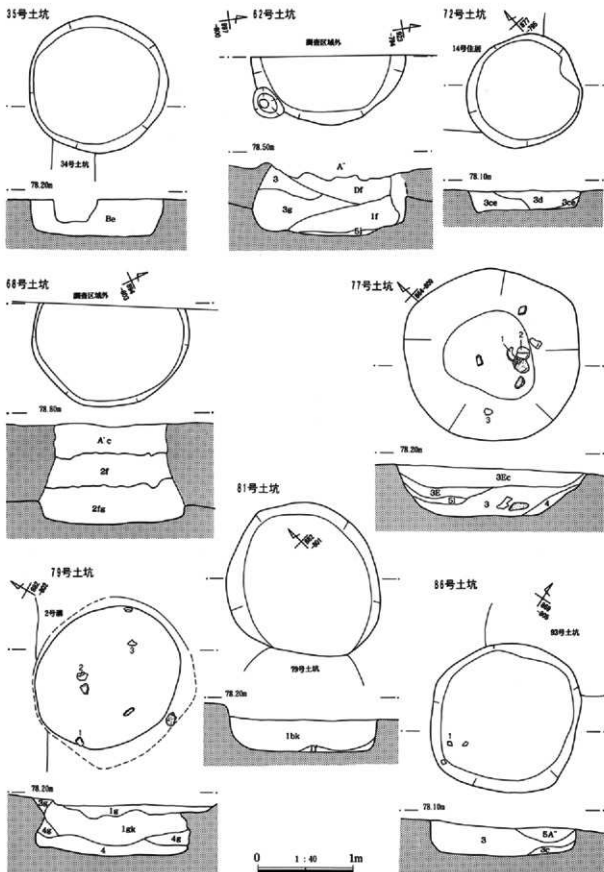


第374図 長方形・円形土坑(1)

円形土坑

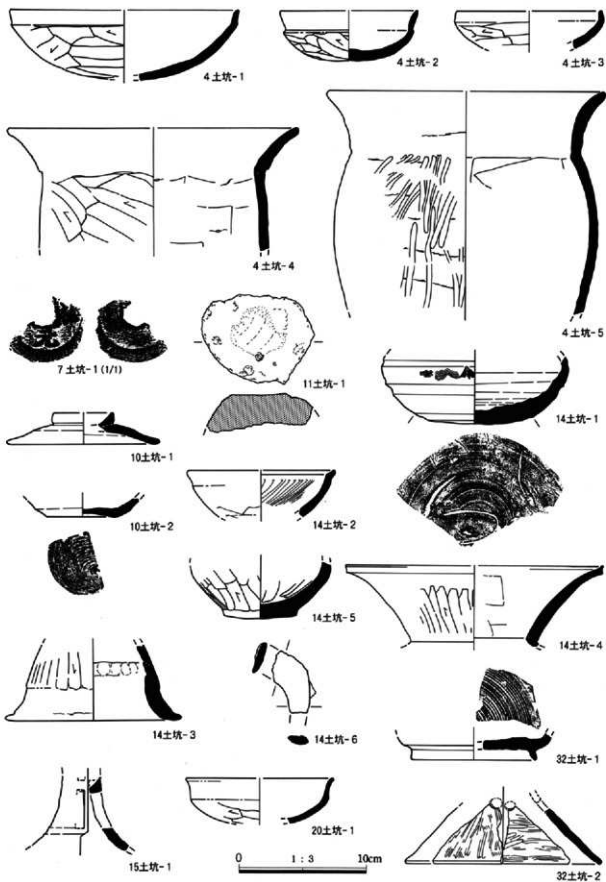


第375图 円形土坑(2)

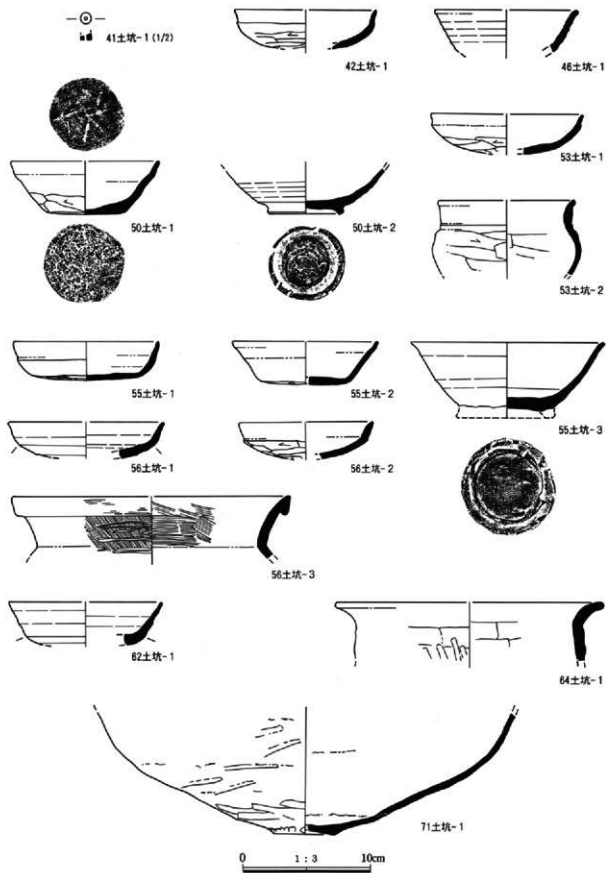


第376图 円形土坑(3)

土坑出土遺物 (A1区)

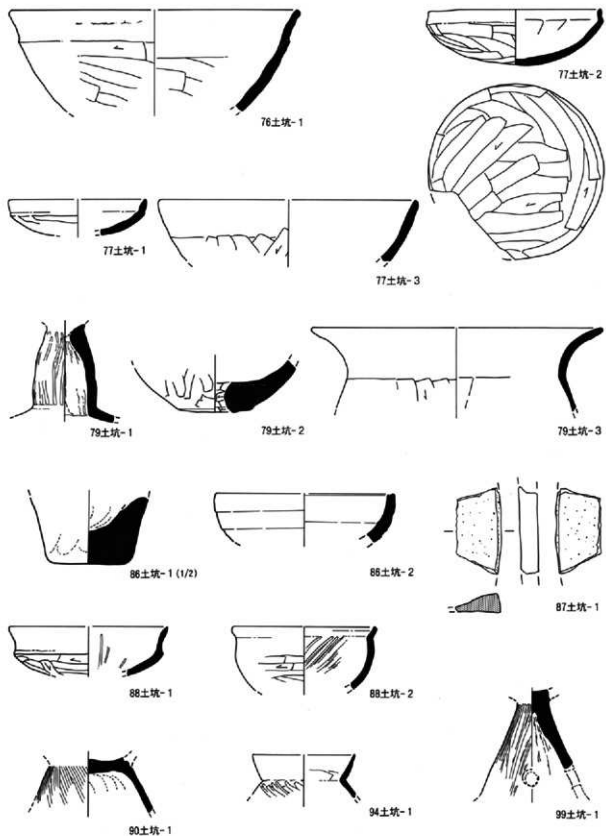


第377图 土坑出土遺物(1)

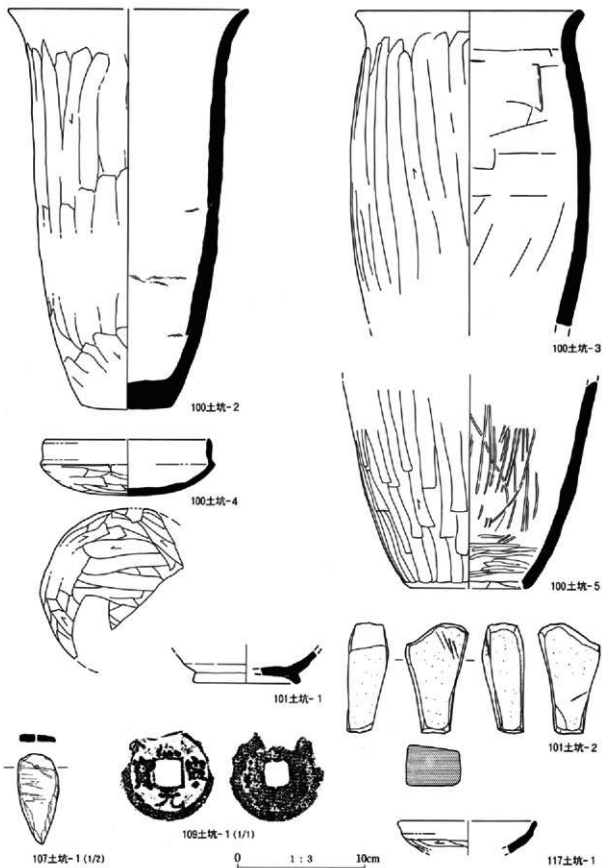


第378图 土坑出土遺物(2)

土坑出土遺物 (A 1区)

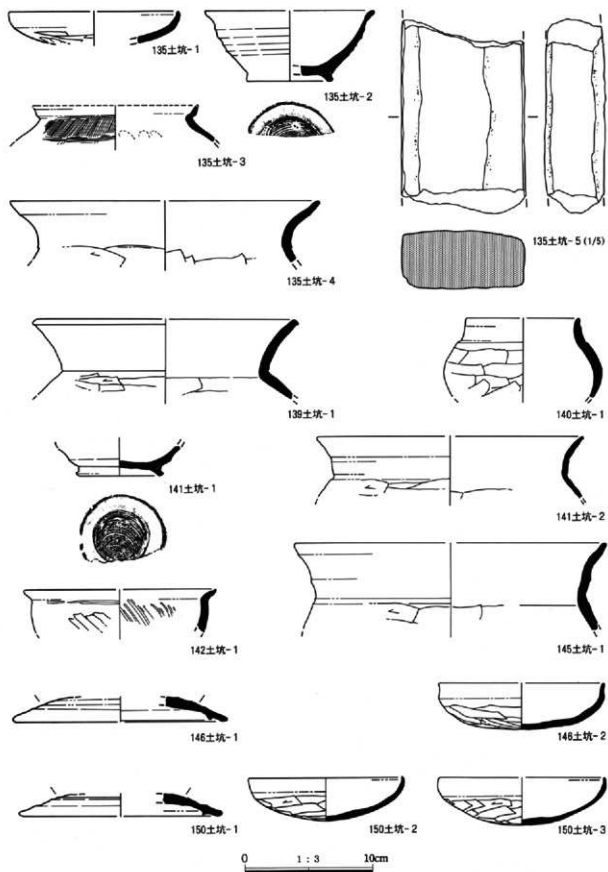


第379图 土坑出土遺物(3)



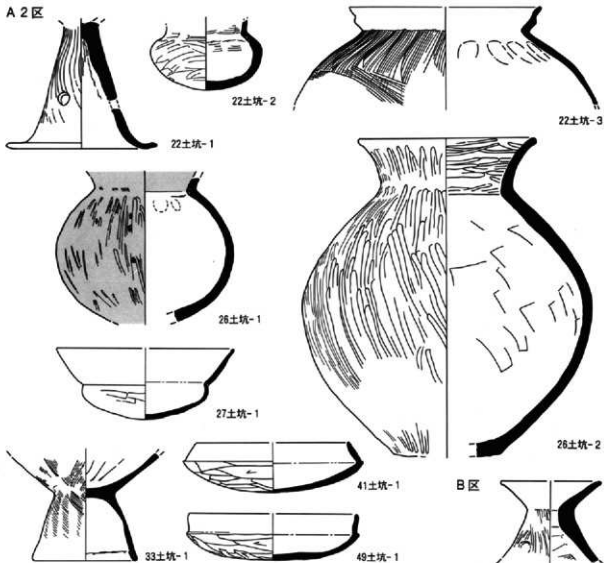
第380图 土坑出土遺物(4)

土坑出土遺物 (A 1区)



第381圖 土坑出土遺物(5)

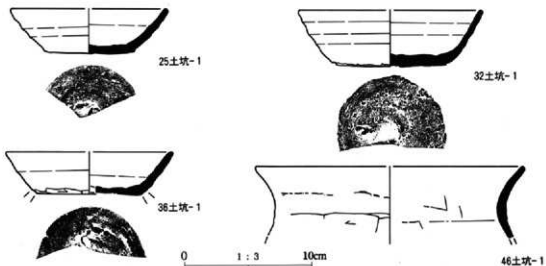
A 2 区



B 区



C 区



第382图 土坑出土遺物 (6)

土坑一覧 (A1区)

A1区土坑一覧

番号 グリッド	平面形 軸方向	長軸×短軸 深さ (mm)	出土遺物	重複・備考
1 830-815	不整形 N-41° -W	173 × 150 47	古墳時代後期の土師器中心に約 150 片。	
2 835-840-815	不整形円形 N-70° -E	90 × 80 26	古墳時代の土師器・須恵器 10 数片。	
3 830-835-815	楕円長方形 N-35° -W	232 × 100 38	古墳時代の小破片約 20 片。	重複する 2 基の土坑の可能性。南側の浅い新しい部分は天明 3 年以降。
4 835-800	楕円形か N-64° -W	(114) × 142 35	横軸杯や高杯などの土師器破片など約 170 片。長瀬製鋼部の大破片混じる。	東側半分は調査区域外。遺物は焼土・灰と共に出土する傾向。
5 855-805-810	円形		土師器・須恵器の破片のみ約 60 片。	中世の遺構か。円形土坑 B 類。
6 865-870-805	不整形長方形 N-25° -W	278 × 105 18	土師器・須恵器が約 150 片。小破片がほとんど。	35 号住居に後出。
7 870-800	円形	130 × (97) 25	古墳時代前期から平安時代まで混じる。約 110 片で小破片がほとんど。	8 号土坑に後出。円形土坑 B 類。
8 870-805	円形	173 × 162 48	古墳時代の土師器主体で約 130 片。厚手土師器製鋼部や須恵器製に大破片あり。	円形土坑 B 類。
9 855-810	楕円長方形 N-65° -E	213 × 135 29	土師器・須恵器の小破片のみ約 50 片。	ビツト状の遺構と重複。新旧不明。
10 855-810	不整形円形	108 × 100 25	古墳時代前期から平安までの雑多な小破片約 60 片。	ビツト状の遺構に後出。
11 865-870-805	不整形円形 N-40° -W	128 × 100 26	古墳時代中心で刷毛目のある破片が目立つ。約 120 片。	
12 865-805	円形 N-85° -E	324 × 71 14	古墳時代の小破片約 100 片。	
13 870-875-800	不整形 N-10° -W	(600) × 132 40	古墳時代前期から奈良時代の小破片約 30 片。近世陶片 2 片。	溝の可能性。北隣は不明瞭。
14 870-875-805	不整形円形	128 × 100 26	古墳時代の土師器主体の約 100 片。大破片も混じる。	
15 875-800	円形	156 × 155 65	古墳時代前期から平安時代まで雑多。小破片中心に約 170 片。	円形土坑 A 類。
16 875-800	不整形長方形 N-30° -E	137 × 110 35	なし。	埋没土より、中世の遺構か。
17 860-805	不整形円形 N-90°	350 × 80 19	古墳時代前期の破片が中心で、奈良時代まで混じる。約 60 片。	22・26 号住居に後出。
18A 875-805	円形	167 × 162 60	古墳時代前期から奈良時代まで。須恵器製に大破片混じる。約 280 片。	当初 1 基の土坑として掘り下げたものを、調査中に 2 基に変更。円形土坑 A 類。
18B 875-805	円形か	(150) × 30 55	A 号土坑に同じ。	B 号先出→A 号後出。
19 880-800	円形	155 × 152 50	古墳時代後期の土師器小破片を中心に約 110 片。	19 号住居に後出。円形土坑 A 類。
20 885-800	不整形円形 N-80° -W	210 × 65 30	古墳時代後期から奈良時代にかけて。土師器・須恵器約 200 片。	
21 885-800	不整形円形	113 × 100 52	薄手土師器製鋼部 7 片。	重複する 2 基の遺構の可能性。
22 895-800	円形	(145) × 130 42	古墳時代の土師器製鋼部小破片中心に約 30 片。近世陶片 2 片。	円形土坑 C 類。
23 895-800	楕円形か N-70° -W	(136) × 125 33	古墳時代の土師器中心に約 60 片。	8 号住居に後出。西隣は調査区域外。埋没土より、中世の遺構か。
24 905-795	円形		古墳時代の土師器中心に約 20 片。	円形土坑 C 類。
25 905-790-795	円形	60 × 59 13	古墳時代前期の小破片 4 片。	天明 3 年以降。
26 905-795	円形		土師器と思われる微細片のみ。	円形土坑 C 類。
27 915-920-785	円形		土師器小破片のみ 10 数片。	27～29 号土坑の 3 基は埋没土が共通している。円形土坑 B 類。
28 920-785	円形	154 × 150 14	土師器小破片のみ 10 片。	10 号住居に後出。円形土坑 B 類。

番号 グリッド	平面形 軸方向	長軸×短軸 長さ (cm)	出土遺物	重複・備考
29 915-790	円形	135 × 110 17	古墳時代末から奈良時代にかけての土師器小破片約 50 片。	10 号住居に後出。円形土坑 B 類。
30 900-775	楕円形 N-0°	(160) × 110 32	土師器と思われる微細片のみ。	3 号井戸と重複。先出または同時存在の可能性。
31 870-805	隅丸方形 N-3° -E	275 × (137) 50	古墳時代前期から平安時代まで雑多。約 280 片。厚手の土師器壺胴部に大破片。	32・33 号土坑に後出。天明 3 年以降。
32 870-805	方形か N-8° -E	175 × (108) 53	古墳時代から奈良時代までの約 50 片。古墳時代前期の土器に大破片あり。	
33 870-800	円形か	140 × (70) 17	古墳時代後期の土師器小破片約 250 片。	
34 895-795	円形 N-80° -W	200 × 50 24	古墳時代の小破片約 40 片。	35 号土坑に後出。天明 3 年以降。
35 895-795	円形	147 × 145 40	古墳時代の小破片約 30 片。	円形土坑 A 類。
36 860-815	不整形 N-62° -W	(124) × (66) 28	なし。	5 号住居に後出。
37 895-800	円形か N-0°	(116) × (73) 23	古墳時代から奈良時代の小破片約 20 片。近世陶片 1 片。	西側半分は調査区域外。22 号土坑に後出か。天明 3 年以降。
38 890-780	不整形長方形 N-24° -E	106 × 85 41	横楕円大破片 2 片。	底面不整。
39 840-800	不整形 N-60° -W	(120) × (80) 46	厚手の土師器壺胴部小破片約 10 片。	8 号溝に後出。
40 840-800	不整形 N-60° -W	124 × 114 44	奈良時代の約 70 片。土師器・須恵器とも杯盤に大破片。	12 号住居・8 号溝に後出。天明 3 年。
41 860-810	不整形円形 N-13° -W	74 × 62 24	奈良時代の約 50 片。土師器の厚手甕に大破片。	白玉 2。
42 860-810	不整形円形	77 × 74 47	小破片のみ約 50 片。奈良時代の須恵器目立つ。	
43 855-810	不整形長方形 N-6° -W	95 × 65 22	近世陶片混じりの雑多な微細片のみ約 30 片。	
44 855-805	長方形 N-11° -E	128 × 112 40	古墳時代の土師器微細片約 20 片。	44 ~ 46 号土坑は連続する一連の遺構の可能性。
45 855-860-805	不整形 N-10° -E	213 × 131 40	古墳時代の土師器中心に埴輪片混じる。約 50 片。	26 号住居に後出。
46 855-805	長方形 N-10° -E	148 × 120 36	古墳時代から平安時代の小破片約 50 片。	
50 845-800	不整形長方形 N-38° -E	143 × 105 38	平安時代中心の約 120 片。	4 号溝と重複。新旧不明。底部は二段になり、重複する 2 基の土坑の可能性。
51 860-795	不整形円形 N-23° -E	80 × 73 16	なし。	70 号土坑に後出。底面不整。
52 855-805	円形	54 × 52 53	なし。	柱穴の可能性。
53 840-800	不整形円形 N-68° -E	130 × 90 40	古墳時代土師器中心に約 40 片。やや厚手の壺胴部や杯底層の大破片あり。	12 号住居に後出。
54 855-790	楕円形か N-80° -W	(135) × 102 31	奈良時代から平安時代の小破片約 30 片。	5 号溝に先出。1 層は同溝の埋土か。継群も同溝施設の可能性。
55 850-795	不整形円形 N-20° -W	95 × 87 20	古墳時代前期から平安時代までの雑多な小破片約 80 片。	135 号土坑に後出。底面は 44 号住居床面と同レベルにあり。
56 865-795	吉形 N-87° -E	(140) × (95) 52	古墳時代中心に約 270 片。厚手の土師器壺胴部破片あり。	56 ~ 58・70 号土坑は壺穴住居を想定して掘り下げた遺構を、土坑群に修正。他にも数基の土坑があるか。
57 860-795	不整形 N-5° -W	117 × 106 62	古墳時代前期から平安時代までの雑多な小破片約 100 片。縄文土器片混じる。	56 号土坑に先出。
58 860-865-790	不整形円形 N-36° -W	122 × 98 22	土師器微細片約 100 片。刷毛目のある破片やや目立つ。	57 号土坑に先出。
59 910-790	円形	237 × 103 35	土師器微細片および近世陶片 1 片。	
60 900-795	円形	235 × 77 45	古墳時代の小破片約 20 片。	
61 900-795	不整形円形	117 × 110 32	なし。	23 号住居に後出。

土坑一覽 (A1区)

番号 グリッド	平面形 軸方向	長軸×短軸 深さ (cm)	出土遺物	重複・備考
62 920-790	円形	(164)×(73) 30	古墳時代らしい微細片のみ10数片。	西側は調査区域外。深さ52cmのビットと重複。新旧不明だが同時存在の可能性。円形土坑A類。
63 870-795	不整形 N-66°-E	(90)×(66) 26	古墳時代前期・中期の細片・小破片のみ約60片。	13号住居に後出か。
64 845-800	不整形 N-21°-E	140×118 14	古墳時代の土師器片。厚手の丸、丸底気味の杯など約10片。	3号溝に重複。新旧不明。
65 845-800	不整形円形 N-20°-E	120×112 20	やや厚手の土師器燻刷部小破片数片。	3・8号溝に重複。新旧不明。
66 840-800	長円形 N-40°-E	195×60 14	土師器燻刷部のみ数片。	67号土坑に先出。
67 840-800	不整形 N-50°-W	316×70 20	古墳時代から平安時代までの雑多な小破片約20片。近後部頭の陶片1片。	12号住居・66号土坑に後出。
68 890-800	円形 N-67°-W	167×108 25	なし。	8号住居に後出。西側は調査区域外。円形土坑A類。
69 850-800	不整形 N-20°-E	160×138 10	平安時代の小破片中心に約240片。厚手の土師器燻・須恵器や目立つ。	44号住居に後出。
70 860-795	円形 N-20°-E	(110)×(75) 40	なし。	
71 860-865-810	楕円形 N-23°-W	103×80 15	古墳時代後期の土師器燻刷部破片中心に約100片。	
72 875-795	円形	124×120 23	古墳時代の土師器小破片約20片。	14号住居に後出。円形土坑C類。
73 845-840-800	不整形	105×105 22	なし。	12号住居に後出。
74 890-895-800	方形か N-72°-W	(143)×(63) 49	古墳時代後期の小破片中心に約70片。	8号住居に後出。西側は調査区域外。
75 875-800	長方形 N-23°-E	125×77 16	古墳時代の土師器小破片約30片。近後部片1片。	遺構上面で76号土坑に後出することを確認。
76 875-800	円形 N-47°-E	164×156 28	古墳時代中心に雑多な破片約270片。	75号土坑に先出か。円形土坑B類の可能性。
77 860-805	円形 N-49°-E	185×180 52	網毛目の土器目立つが、雑多な小破片約80片。	円形土坑C類。
78 900-795	楕円形か	-×(114) 30	古墳時代前期のやや目立つ小破片約20片。	23号住居に後出か。西半は不明確。
79 880-800	円形 N-73°-E	(183)×(173) 62	古墳時代前期のやや目立つ小破片約70片。	2号溝に後出。円形土坑A類。
80 875-800	不明	(110)×(78) 30	なし。	2号溝に後出。北半は不明。
81 880-800	円形 N-47°-E	163×160 33	古墳時代前期のやや目立つ小破片約90片。	円形土坑B類。
83 865-805	長方形 N-12°-E	113×67 35	古墳時代から奈良時代までの約20片。	長方形土坑。84号土坑に後出。天明3年以降。
84 860-865-805	長方形 N-13°-E	205×62 23	83号土坑に同じ。	長方形土坑。
85 855-805	長方形 N-13°-E	(160)×64 15	なし。	長方形土坑。9号住居に後出。
86 865-805-800	円形 N-34°-W	156×156 40	古墳時代前期から平安時代まで雑多な約180片。	93号土坑に後出か。円形土坑B類。
87 890-795	不整形円形 N-42°-E	93×90 20	土師器燻刷部数片。	92号土坑と重複。新旧不明。
88 885-795	不整形円形	87×85 40	古墳時代中期中心の約60片。丸底気味の土師器燻や内側口縁に大破片あり。	
89 885-795	不整形円形 N-63°-E	78×68 38	土師器燻刷部や高杯の目立つ約30片。	
90 905-910-795	不整形楕円形 N-22°-E	308×241 82・76	古墳時代前期から奈良時代の約40片。	24号土坑に後出。調査時に側面傾斜を想定した遺構だが、底面確認でき、土坑とする。
92 890-795	不整形 N-19°-W	180×32 28	土師器燻刷部のみ。	87号土坑と重複。新旧不明。底面不整。
93 865-800-805	楕円形 N-48°-E	175×(99) 20	奈良時代の須恵器杯・土師器燻5片。	86号土坑に先出か。

番号 グリッド	平面形 軸方向	長軸×短軸 深さ(cm)	出土遺物	重複・備考
94 865-800	不整形長方形 N-10° -W	128×98 56	古墳時代前期から平安時代まで雑多な約280片。大破片も混じる。	ビット状の握り込みも同時存在。
95 900-780	円形	60×60 18	硝毛目の土師器細片3片。	ビット7に後出か。
96 895-785	円形	52×52 8	土師器小破片約90片。	
97 895-780	円形	51×48 16	なし。	底面狭い。
98 900-780	隅丸長方形 N-89° -W	285×60 12	土師器微細片8片。	長方形土坑。浅く不明瞭。
99 900-785	楕円形 N-38° -W	163×(98) 50・21	やや厚手の土師器長胴燗部碎片中心に約70片。	100号土坑に後出。底面二段で2基の土坑が重複する可能性。
100 900-785	不整形 N-38° -W	(127)×(96) 89	やや厚手の土師器燗部約20片。	
101 870-875-790	隅丸長方形 N-10° -E	242×(190) 56	須恵器有台杯等平安時代の遺物の目立つ約130片。	5号溝に先出。出土する群は5号溝に伴うものか。
104 865-785	楕円形か N-65° -W	(88)×(53) 60	なし。	東側は調査区域外。先出のビットと後続する土坑が重複したものか。
107 905-780	不整形 N-29° -E	90×80 29	筒形模造品3。古墳時代後期から奈良時代中心の約40片。	31号住居に後出。調査段階では住居を想定した焼土・灰の多い遺構。
108 865-800	円形	97×90 52	なし。	浅い円形の土坑が上面に重複する可能性あり。
109 880-780-785	不整形長方形 N-23° -E	292×148 38	古墳時代の土師器約130片。近世～近代の陶片2片。	墓坑に重複する。
114 855-795	円形か N-65° -W	(150)×(100) 23	奈良時代の土師器・須恵器杯に大破片。他は小破片約20片。	14号溝に先出。43号住居に後出。
115 910-770	不整形 N-13° -W	125×122 88・34	土師器微細片約10片。	
116 905-910-770	円形か N-17° -E	(280)×(102) 74	古墳時代の要中心。	東側は調査区域外。底面は白色粘性土層まで掘り下げであり、比較的平ら。
117 865-795	不整形 N-21° -W	323×277 56	古墳時代の要約10片。	18・19号溝に伴う施設の可能性。底面には土坑状の掘り方が混ざる。
118 925-765	楕円形か N-85° -E	(129)×(100) 46	なし。	東側は調査区域外。
119 920-775	台形気味	67×61 60	なし。	ビット群中にあるが、他のビットとは形状異なる。21号溝に先出か。
121 855-810-815	方形か N-6° -W	105×105 40	土師器微細片約10片。1点だけ高杯の大破片あり。	中世以降か。ビット状の遺構が重なったものか。43号土坑に重複。
122 850-810	楕円形か N-54° -W	110×102 25	薄手の土師器燗部破片中心に約20片。	ビットと重複。新旧不明。中世以降か。
123 850-810	不整形円形 N-39° -W	117×100 29	横飯杯に大破片。他は燗部細小破片。	中世以降か。
124 870-795	扇形 N-7° -E	71×64 23	土師器微細片のみ。	4号溝に後出か。
125 875-795	不整形	41×36 20	奈良時代の土師器杯1片。	底面も不整。
127 850-795	円形か	98×80 43		15号溝に先出。複数の土坑の重複か。底面不整。掘設土は住居のものに近い。
128 860-865-795	不整形円形 N-13° -W	123×105 23		天明3年以降。
129 860-795	不明	(127)×(50) 27		17号住居に後出。天明3年以降。
130 860-795	不整形 N-7° -W	103×78 12	なし。	天明3年以降。数基の土坑やビットの重複か。
131 860-795	不整形 N-56° -E	136×80 39	なし。	数基の土坑やビットの重複か。底面不整。
132 855-800	不整形楕円形 N-47° -E	88×79 11	なし。	
133 850-795	長方形か N-17° -W	82×64 22	古墳時代の古手の小破片約10片。	9号溝に後出か。

土坑一覧 (A1・A2区)

番号 グリッド	平面形 軸方向	長軸×短軸 深さ (cm)	出土遺物	重複・備考
134 855-795	不整形円形 N-71° -E	150×102 33	なし。	
135 850-795-800	隅丸長方形 N-40° -W	114×117 33	平安時代の古土土師器・須恵器中心に約250片。	
136 850-800	楕円形 N-25° -W	68×57 28	薄手の土師器壺・鉢など約80片。	
137 850-800	隅丸台形 N-9° -E	88×(78) 33	古墳時代後期から奈良時代の土師器中心に約40片。	141号土坑に後出。新旧不明。
138 850-795	方形 N-25° -E	80×74 22	古墳時代後期から平安時代前半の土師器壺を中心に約40片。	ビット110に先出。
139 845-800	不整形台形 N-18° -E	76×73 9	なし。	天明3年以降。
140 845-795	楕円形 N-36° -E	124×110 37	古墳時代の土師器壺中心に約20片。	144号土坑と重複。新旧不明。底面平坦。
141 850-800	楕円形 N-8° -E	(112)×100 32	平安時代の約90片。須恵器杯に大破片あり。	
142 850-795	隅丸長方形 N-20° -E	90×76 26	薄手の土師器壺と刷毛目破片中心に約90片。	天明3年以降のビットに先出。
143 845-795	不明	(106)×(35) 21	なし。	東側大半は調査区域外。
144 845-795	楕円形 N-64° -W	91×(74) 28	土師器微細片のみ10数片。	
145 850-800	卵形 N-8° -E	102×96 18	奈良時代・平安時代の土師器10数片。	4号溝に先出か。
146 850-795	楕円形 N-17° -E	(110)×(90) 43	土師器小片約20片。	148・150号土坑に後出。
147 850-800	不整形	91×59 24		
148 850-795	楕円形 N-4° -E	(145)×(127) 35	須恵器壺胴部1片。	150号土坑の他、数基の土坑やビットと重複する。
150 845-850-795	不整形 N-28° -E	(160)×(120) 34	古墳時代後期から奈良時代の約80片。土師器壺胴部の大破片あり。	148号土坑の他、数基の土坑やビットと重複する。
152 865-785	不整形円形	43×40 35		
153 915-775	不整形円形	55×51 13		
154 915-780	円形	60×59 37		30号住居に後出。
155 915-775	円形 N-8° -W	54×53 35		30号住居に後出。

A2区土坑一覧

番号 グリッド	平面形 軸方向	長軸×短軸 深さ (cm)	出土遺物	重複・備考
1 945-770	円形 N-15° -E	42×89 13	土師器壺の小片約20片。刷毛目のある壺破片混じる。	天明3年以降。
2 950-775	隅丸長方形 N-86° -W	302×99 33	古墳時代の土師器約20片。	1号溝に後出。
3 940-775	隅丸長方形 N-12° -W	230×91 20	古墳時代前期の小片・微細片約30片。刷毛目のある壺多い。	
5 940-775	不整形円形 N-45° -W	67×52 22		
6 955-775	不整形長方形 N-62° -E	155×122 25	刷毛目のある壺中心に約30片。S字口破片目立つ。	
7 940-775	楕円形 N-28° -E	111×101 21		
8 940-775	不整形 N-12° -E	128×79 34		

番号 グリッド	平面形 軸方向	長軸×短軸	出土遺物	重複・備考
9 960-780	隅丸方形 N-23° -W	190×170 26	古墳時代の小～中片約40片。壺腹の割部 片目立つ。	8号住居に後出。方形壺穴状遺構に似た平面だが、底 面は凹凸多く不整。
10 955-770	不整形 N-37° -W	110×86 35		10号住居に後出。
11 955-765	不整形 N-3° -W	103×100 37		10号住居に後出。
12 990-785	不整形			12号住居に後出。
13 960-775	不整楕円形 N-68° -E	148×128 18		3号ピットに先出。8号住居に後出。
14 955-770	不整形 N-29° -W	93×90 104		10号住居に後出。礎の大半は住居床面レベルより高 い位置での出土。
16 950-770	円形		網毛目のある壺割部片2片。	柱穴の可能性あり。
17 950-770	不整形			近代以降。写真のみ。
18 945-770	脚形 N-59° -E	80×58 17	古墳時代前期の3片。	7号ピットと重複。新旧不明。
19 945-770	方形			近代以降。写真のみ。
20 945-770	楕円形 N-47° -E	103×89 15		底面に細かな凹凸多い。
21 945-770	不整形			
22 950-765	円形 N-46° -W	65×59 46	古墳時代前期中心の小～中片約50片。網 毛目多く、上半1/4面体の大破片あり。	柱穴の可能性。
23	隅丸方形		古墳時代の約100片。壺口縁の大破片あり。 網毛目も多い。	
24 940-765	不整形 N-39° -W	61×54 36	土師器器台と叩きのある須恵製割部片。	
25 935-765	不整形 N-62° -W	63×60 49		
26 960-765	楕円形 N-38° -E	73×66 24	古墳時代後期の12片。長割葉と横楕杯に 大破片。	
27 950-765	不整形		古墳時代の小～微細片約20片。	底面は方形に近い。
28 955-760	不整形 N-40° -E	89×70 17		
32 940-770	隅丸長方形 N-28° -W	106×76 66	古墳時代前期の20片。横楕杯・長割葉の 大破片あり。	東・南壁下に不自然な横穴状の掘り込みあり。動物糞 穴の可能性も。
33 945-765	不整形長方形 N-37° -E	53×45 46	網毛目付壺台部の大破片。	柱穴の可能性あり。
34 950-765	楕円形 N-9° -W	60×49 53	古墳時代の小片5片。	
35 945-765	楕円形 N-54° -W	50×45 41	古墳時代の3片。	
37 985-775	不整形 N-7° -E	90×85 28		1号住居と重複。新旧不明。
38 005-785	円形か N-85° -W	103×(37) 33	古墳時代後期の8片。壺底部の大破片あり。	16号住居に後出。東側は調査区域外。
40 960-780	N-57° -E	(125)×95 54		41号住居に後出。
41 960-780	N-48° -E	(90)×60 60		
43 960-785	隅丸長方形 N-90°	162×88 23		西隔は調査区域外。
44 930-780	不整形 N-70° -E	183×(155) 42		33号住居・2号溝に後出。天明3年以降。円形土坑B 類の可能性。

土坑一覽 (A2・B・C区)

番号 グリッド	平面形 軸方向	長軸×短軸 深さ(cm)	出土遺物	重複・備考
45 930-785	不整形 N-25° -E	113×102 34	古墳時代後期の小破片約 50 片。模倣杯数個あり。	底面は楕円形を呈している。
46 965-785	楕円形か N-3° -E	169×86 82	土師器の小片～微細片 12 片。	西側は調査区域外。
47 930-785	不整形 N-61° -E	106×100 35	土師器小片 15 片。古墳時代後期中心か。	底面は二段底状になる。
48 930-785	不整形 N-35° -W	87×79 51		底面の東隅に小さな窪みあり。
49 930-785	円形	104×97 29		54 号土坑に接出。
50 935-785	不整形 N-14° -W	62×43 20		
51 935-785	不整形 N-62° -E	(245)×87 16		
53 930-780	不整形 N-28° -E	65×59 50		33 号住居に接出。柱穴の可能性。
54 930-785	楕円形 N-78° -W	78×(61) 12		49 号土坑に接出。

B1 区土坑

番号 グリッド	平面形 軸方向	長軸×短軸 深さ(cm)	出土遺物	重複・備考
1 035-770	楕円形 N-21° -E	94×90 15	古式土師器小破片のみ 9 片。	8 号溝に接出している。
4 040-780	円形 N-10° -W	77×72 12		11 号溝に接出している。底面不整。
5 065-775	不整形 N-54° -E	69×55 20	古墳時代と思われる土師器小片 5 片。	
7 030-760	方形 N-60° -E	200×86 12		長方形土坑のタイプに含まれるものか。混入するバリスは Aa-A の可能性あり。
8 049-50-780	長方形か N-23° -E	-×(55) 14・(32)	網目のある台付甕の台部小片 1 片。	基本土層 V 層下の遺構。壑穴住居に伴う遺構の可能性あり。

C 区土坑一覽

番号 グリッド	平面形 軸方向	長軸×短軸 深さ(cm)	出土遺物	重複・備考
15 122-772	長楕円形 N-69° -E	158×75 25	薄手の土師器小片約 50 片。平安初期の杯大破片 1 片。	地山は FP 泥流面。重複する 2 基の土坑の可能性。
20 191-754	不整形楕円形 N-41° -W	124×70 23		ブロック状の層状土で、人為的な埋め戻しの可能性。
21 190-753	不整形 N-24° -W	134×39 11		底面不整。
22 188-752	不整形長方形 N-21° -E	80×63 58		底面は円形。
29 133-770	楕円形 N-35° -W	73×67 26		FP 泥流面の品サク状後に接出する。底面平坦。
39 131-773	不整形楕円形 N-4° -E	64×55 39	薄手土師器胴部・平底杯底部中～小片 10 片。	底面不整。
40 140-760	不整形 N-44° -W	82×74 23		
42 110-760	隅丸長方形 N-55° -W	130×57 44	摩滅した土師器胴部片 2 片、蓋部微細片 4 片。	人為的な短期間の埋め戻し。底面は平坦だが細かな凹凸多い。
43 117-766	隅丸長方形 N-82° -E	100×54 10	土師器微細片 2 片。	
44 123-762	不整形楕円形 N-24° -W	90×70 16		
45 126-762	不整形 N-24° -W	113×109 10		底面不整。

番号 グリッド	軸方向 平面形	長軸×短軸 深さ(cm)	出土遺物	重複・備考
46 136-763	円形+方形	147 × 125 24	土師器小片約 30 片。	2 基以上の土坑の重複か。
47 138-763	不整楕円形 N-77° -E	115 × 71 15		FP の混入多い。底面は平坦。
48 127-756	不整形 N-64° -W	110 × 34 8		平面はきわめて不整で底面も凹凸大きい。耕作痕となる可能性もあろう。
49 128-760	楕円形 N-37° -W	84 × 46 9		
50 128-762	不整長方形 N-5° -W	124 × 86 16		やや大粒の FP の混入多い。底面は平坦だが、東・南側へ低く傾斜している。
54 134-770	不整楕円形 N-73° -E	57 × 46 12		
55 134-770	楕円形 N-34° -W	42 × 28 16		FP は細粒。柱穴の可能性あり。
56 130-768	楕円形 N-24° -W	46 × 27 7	土師器微細片 1 片。	
57 121-773	楕円形 N-3° -W	43 × 29 34		底面に柱痕状の窪みがあるが、断面からは柱痕を確認できない。
58 123-773	不整楕円形 N-23° -E	50 × 36 19		
59 160-770	不整隅丸方形 N-65° -W	66 × 64 41		埋設土は水平堆積で、一部でラミナ状。堅穴住居の貯蔵穴に似た形状を呈している。
60 118-753	不整楕円形 N-54° -E	74 × 56 9		底面は平坦。
62 138-768	不整形 N-5° -W	48 × 45 19		2 基の遺構が重複する可能性があるが、断面から切り合いは確認できない。
63 143-758	不整楕円形 N-9° -E	70 × 60 31		
64 147-760	不整楕円形 N-46° -E	61 × 56 20		底面は平坦。
65 169-772	楕円形 N-2° -E	42 × 30 11		底面は南へ低く傾斜している。

D 区土坑一覧

番号 グリッド	軸方向 平面形	長軸×短軸 深さ(cm)	出土遺物	重複・備考
3 301-753	楕円形	65 × 59 6		底面は皿底状。天明 3 年 (1783) 以降。

E 区土坑一覧

番号 グリッド	軸方向 平面形	長軸×短軸 深さ(cm)	出土遺物	重複・備考
67 356-757	隅丸長方形 N-11° -W	145 × 80 54		底面は広く平坦。
69 350-753	隅丸長方形 N-73° -E	149 × 94 40		底面は広く平坦。
70 346-759	楕円形小 N-87° -E			西側半分は調査区域外。
71 354-743	隅丸長方形 N-72° -E	320 × 123 36		
72 354-752	不整形 N-15° -W	92 × 81 35		
74 366-741	長方形 N-18° -W	124 × 98 31 [34]		底面は平坦だが、南側に深さ 3 cm の不整な窪みあり。
75 374-743	不整長方形 N-16° -W	112 × 66 41		
76 373-743	長方形 N-29° -W	148 × 110 36		

土坑一覧（取付道C・E・F区）

取付道C区土坑一覧

番号 グリッド	平面形 軸方向	長軸×短軸 深さ(cm)	出土遺物	重複・備考
1 250-680	不整長方形 N-80° -W	107×58 23	かわらけ底碎片1片。礫大の自然石3点。	1・3号溝に先出し6号溝に後出する。
2 251-679	不整長方形 N-2° -W	121×50 17・24		底面は二段底状。
3 249-679	卵形 N-14° -W	71×55 7		
4 246-679	方形か N-25° -E	79×75 16		底面の形状から本来は平面方形だったと思われる。
5 245-679	不整楕円形 N-9° -W	103×69		底面不整。
6 244-679	不整形	90×(65) 12		
7 244-679	不整楕円形 N-35° -W	117×(92) 40		6号土坑に後出。底面は二段底状。
8 242-678	不明	92×(57) 21		東側大半は調査区域外。底面不整。

取付道E区土坑一覧

番号 グリッド	平面形 軸方向	長軸×短軸 深さ(cm)	出土遺物	重複・備考
1 099-791	不整円形か	102×- 12	時期不明の土師器斐細片1片。	北側は調査区域外。底面は平坦。
2 097-795	不整方形 N-24° -E	58×53 10		
3 096-797	不整楕円形 N-20° -E	83×57 15		底面は狭い楕圓と底面とで軸方向が異なる。計測値は上面の数値。
4 095-798	楕円形 N-32° -E	56×53 10		
5 091-801	楕円形 N-14° -W	142×83 7	古墳時代の土師器斐細片2片。	重複する2基の円形土坑と思われる。

取付道F区土坑一覧

番号 グリッド	平面形 軸方向	長軸×短軸 深さ(cm)	出土遺物	重複・備考
1 927-863	不整長方形 N-13° -W	143×68 52	古墳時代と思われる土師器6片。	3号溝に後出か。
2 929-864	不整楕円形 N-11° -W	138×88 48		

c 粘土採掘坑 (第383図 PL-46)

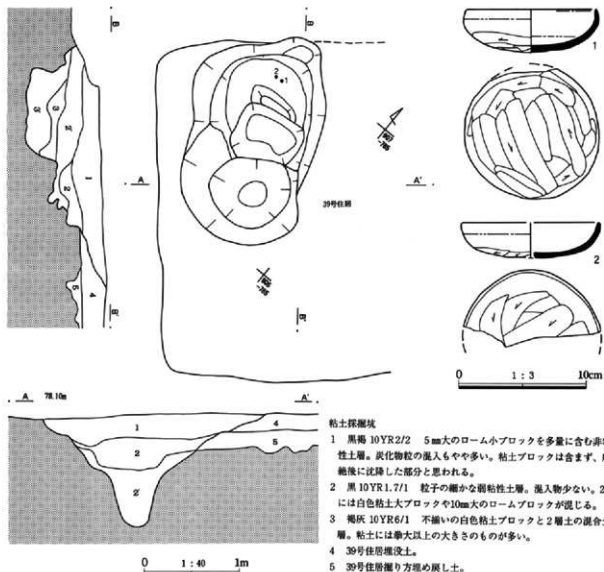
A1区39号住居調査中に確認した、当初は井戸を想定した遺構である。本坑を掘り放った際の灰白色粘土が39号住居の北隅に積まれており、粘土採掘のための坑と判断した。

位置 905-785G。39号住居の北西壁を壊さずに掘削されている。

規模 住居床面レベルで長軸2.2m×短軸1.4m、深さ北側48cm、南側77cm。

備考 灰白色粘土は39号住居の床直上に積み上げてあり、坑掘削が住居床面レベルから始められている

ことが確認できる。ただし、本坑の立ち上がりが39号住居埋没土(本坑掘削土を多量に含む)を切っているため、粘土採掘後、一時的に井戸として使われている可能性があろう。掘削された粘土量は推定0.5m³ほどである。粘土は須恵器が焼成できるほど良質なものであるが、カマド構築材が推定されるが、本遺跡で調査したカマドに粘土の使用例は少ない。出土遺物 北隅の底面から若干浮いた状態で出土した土師器杯2点を図示した。1は完形だが、39号住居とはほぼ同時期の遺物であろう。他にも土師器の出土があるが、39号住居からの流れ込みと思われる。



第383図 粘土採掘坑および出土遺物

d ピット (第384~395図 PL-41)

ピットとして扱う遺構について、明確な基準を設定していない。概ね外径50cm以下の円形・方形の小型遺構で、柱穴を想定できそうなものを対象とした。ただし、表土が中層以下にまで入り込んでいるものは遺構として扱わず除外した。この中から掘立柱建物や柱列となったものをさらに除外した。この結果、A1区で96基(付けられた番号は125まで)、A2区35基(同59番まで)、B区49基(同73番まで・1区4基、2区46基)、C区42基(同64番まで)、計222基のピットをこの項で扱っている。

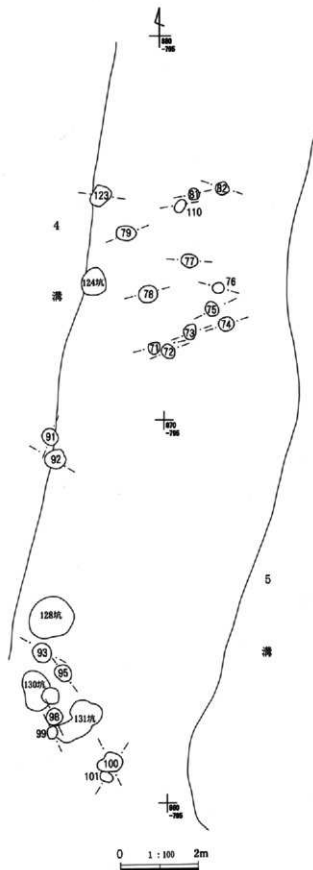
単独のピットとして掘り下げた後に、掘立柱建物や柱列として把握できたものは、それぞれの項に記載し、各建物や柱列内毎に新たに番号を付けた。発掘調査段階で付けたピット番号は変更せずに掲載したので、明治期以降と確認されて報告から除外したピットを含め、欠番を多数生じている。

各ピットの測図はこのあとの415頁以降に、出土一覧表は424頁以降に一括して掲載した。

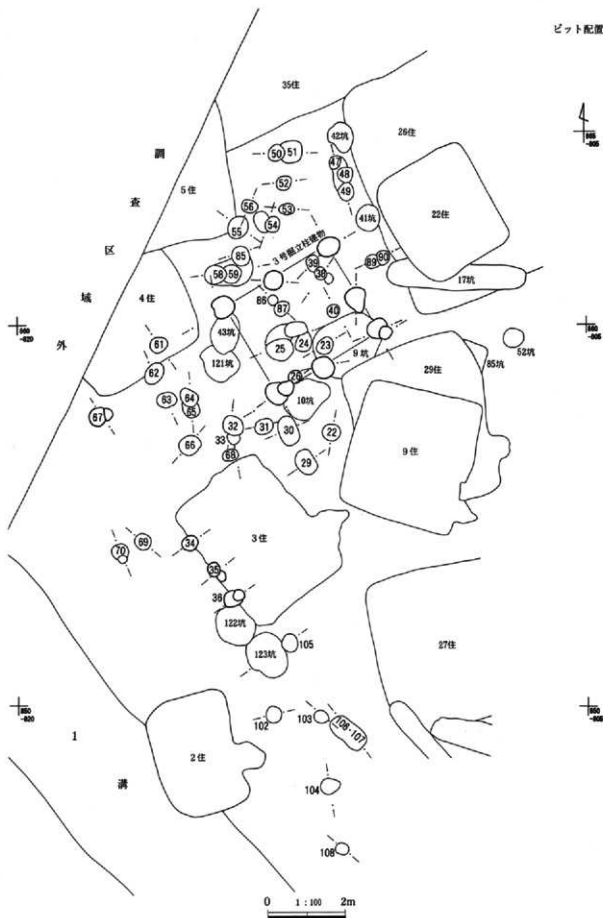
埋没土層の注記については本文374頁の土坑と共通した番号を使用した。

A1区では天明三年以降のピットが数多く見られたが、A2区ではほとんど見られない。C区のピットにはF Pの混入の観察されるものが多いが、地山中のバミスの混入と思われる、古墳時代の遺構と特定できるものではない。なお同区のピットは浅い物が多く、柱穴よりは耕作痕に近そうな遺構もある。

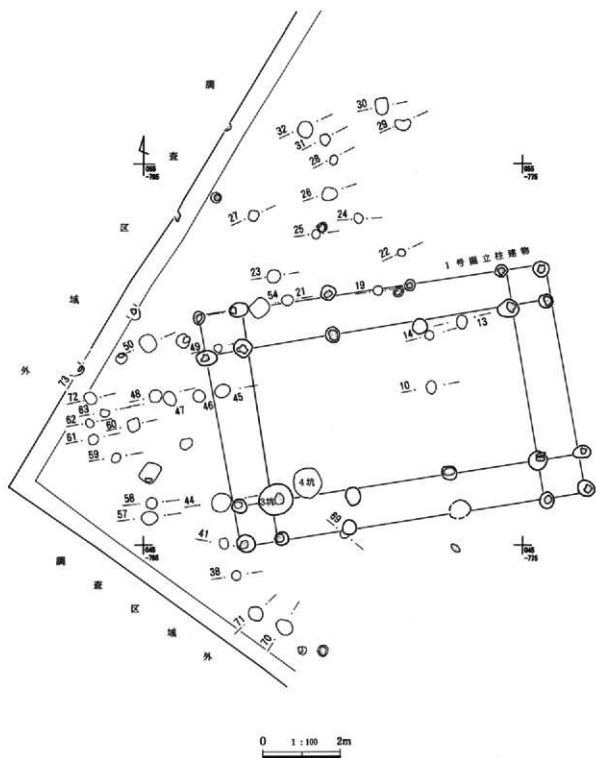
第384~386図はA1区とB1区に見られたピットの集中確認地点の略図である。第384図は古墳時代方形区画北西縁部中央付近にあたる。竪穴住居の途切れる一面にやや深めのピットが散在していたが、建物を復元することはできなかった。第385図は古墳時代方形区画西隅付近で3号掘立柱建物以外にも深いピットが多数確認できている。第386図周辺は中世の四面庇建物周辺のピット群である。1号建物として確認できた以外にも礎石状のピットがあり、他の建物の存在も推定される。



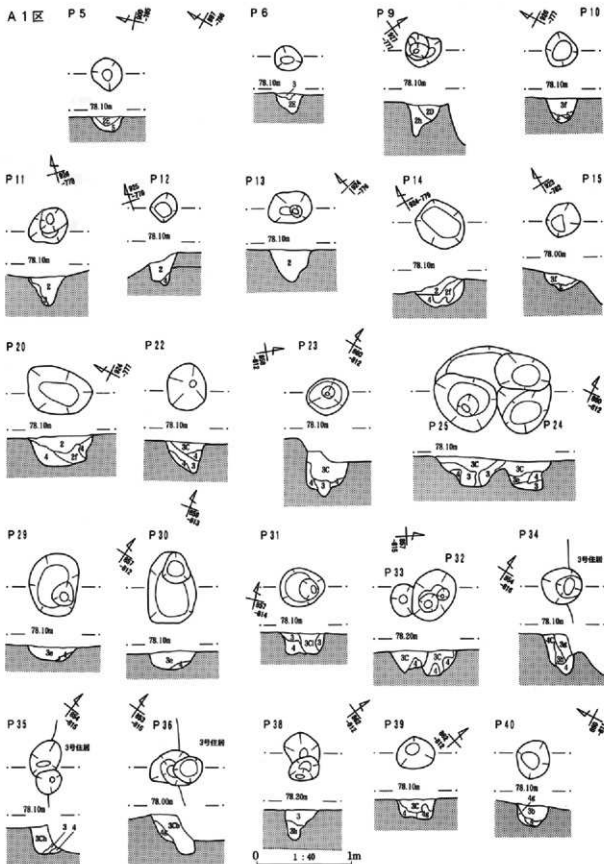
第384図 A1区ピット配置(1)



第385図 A1区ビット配置(2)

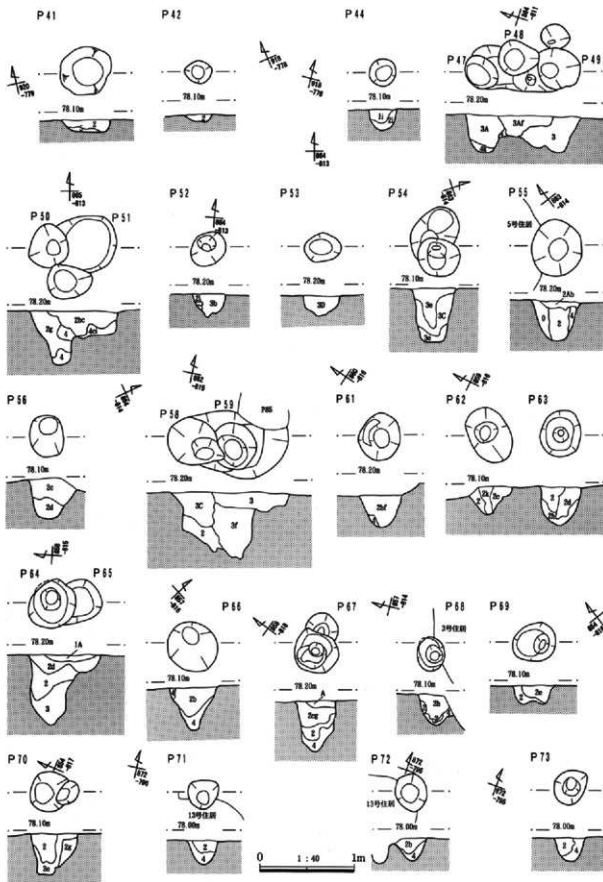


第386図 B1区ビット配置

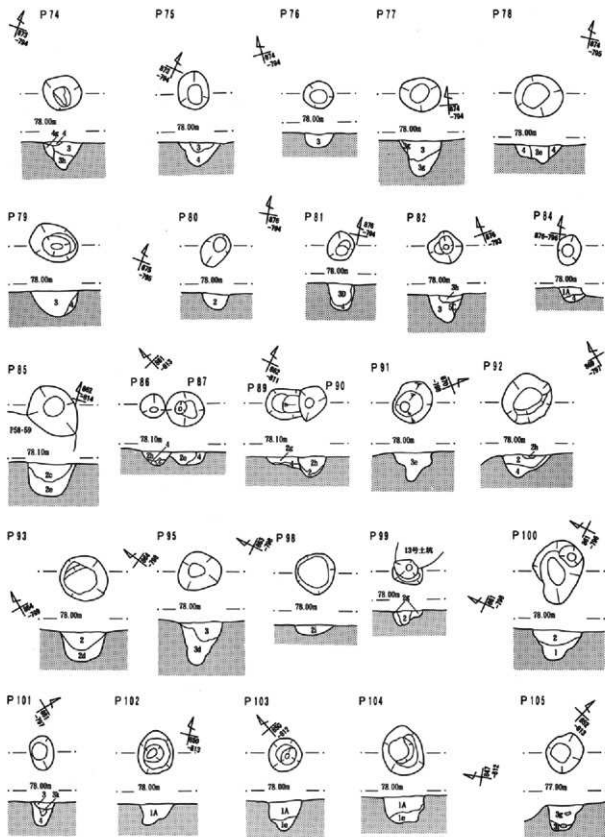


第387図 ピット(1)

ピット (A1区)



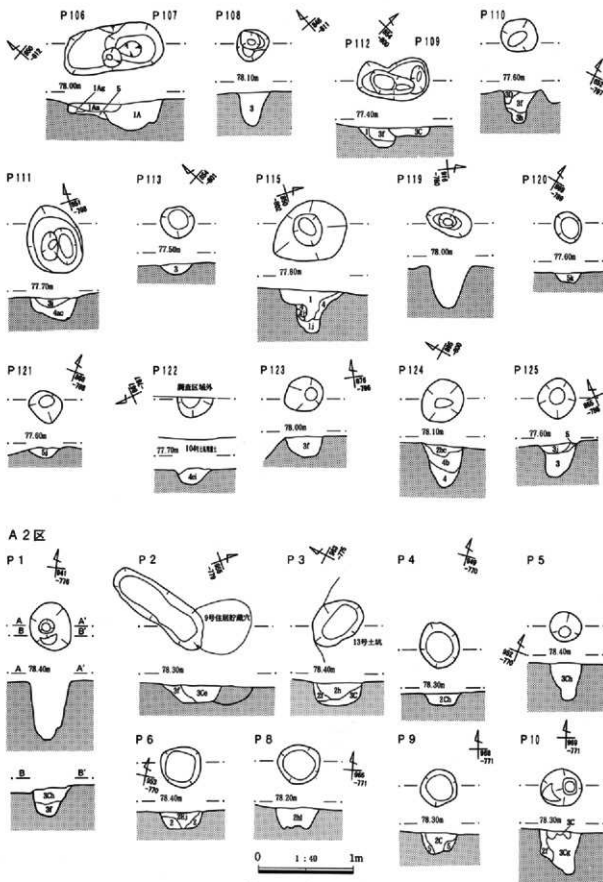
第386図 ピット(2)



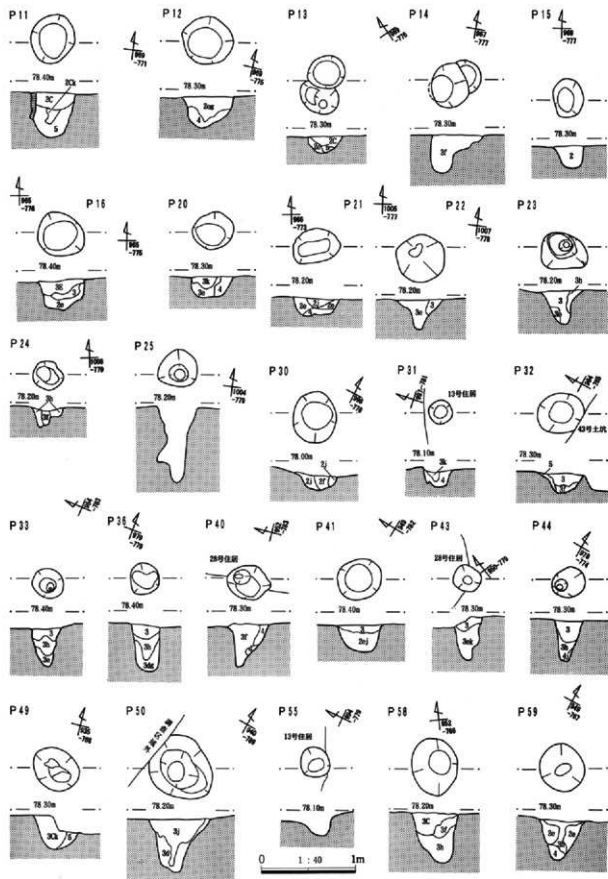
0 1:40 1m

第389図 ビット(3)

ピット (A1・A2区)



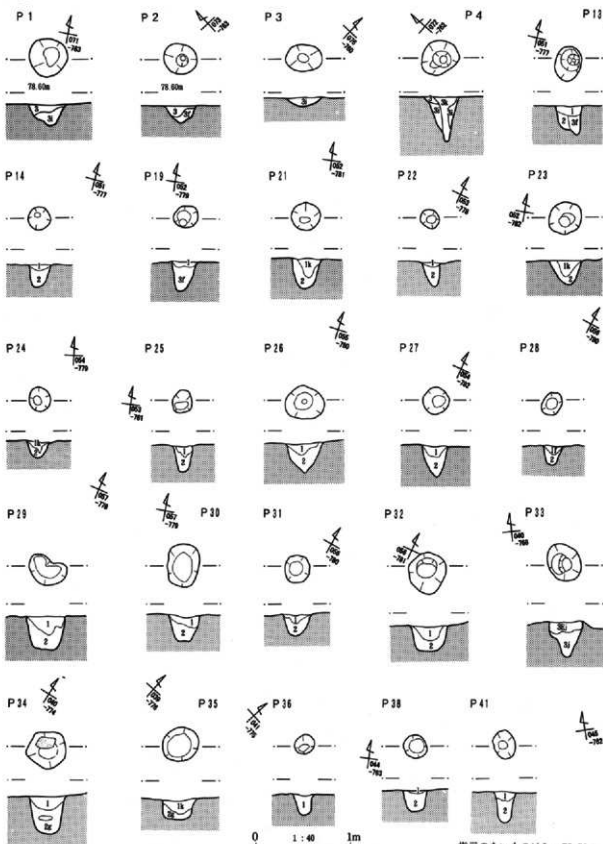
第390図 ピット(4)



第391図 ピット(5)

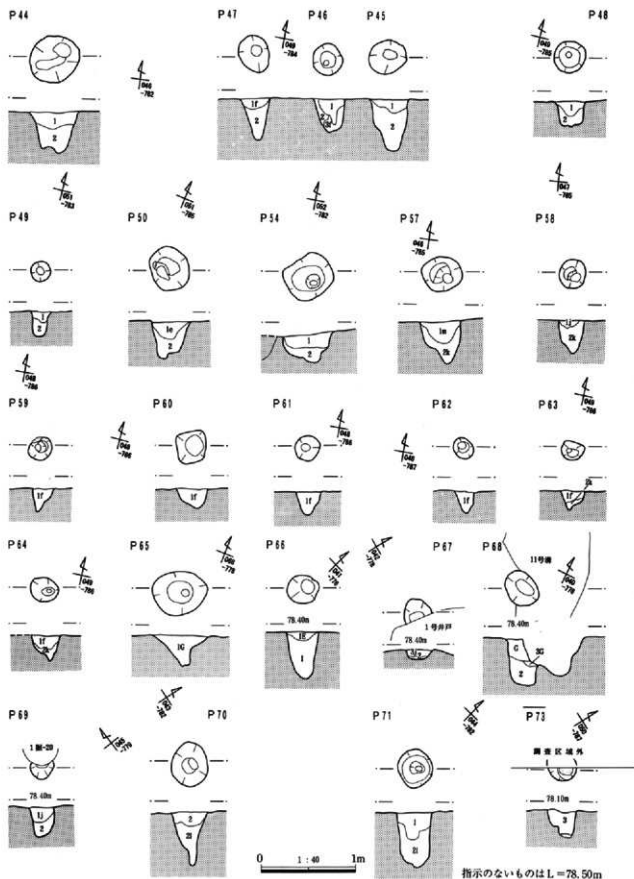
ピット (B1区)

B区



指示のないものはL=78.50m

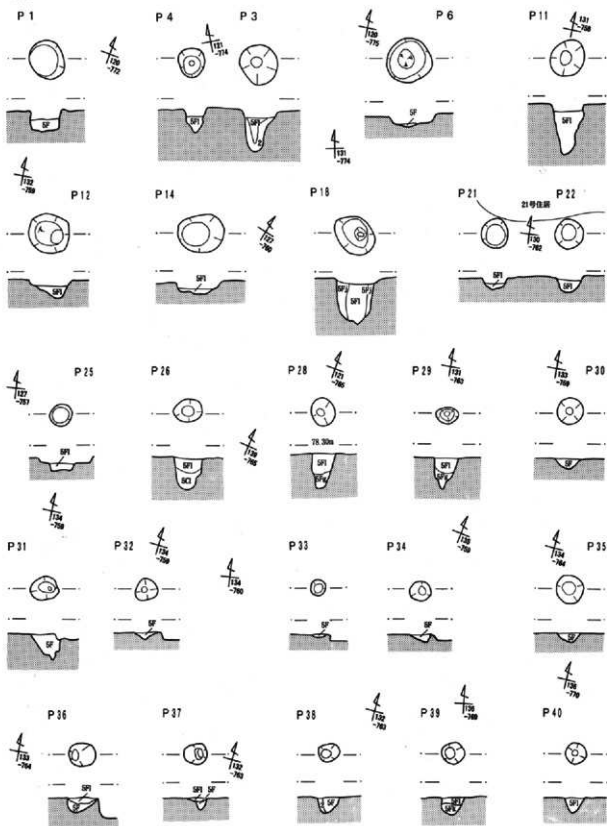
第392図 ピット (6)



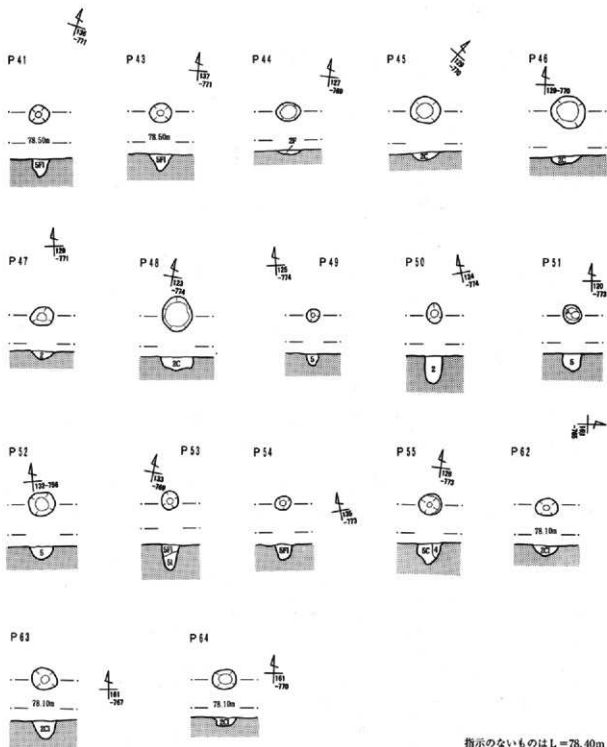
第393図 ビット (7)

ピット (CR)

C区



第394図 ピット (8)



第395図 ビット(9)

ビット一覧 (A1区)

ビット一覧

A1区

No	位置	平面形	長軸×短軸×深さ	出土遺物	備考	
5	900-783	不整形	36 × 34 × 16	古墳時代の土師器小片 2片		
6	896-785	不整形	30 × 28 × 20		重複ビットまたは抜柱痕あり。	
9	927-777	不整形	45 × 40 × 36			
10	925-776	不整形	35 × 32 × 25			
11	925-778	不整形	42 × 38 × 30			
12	924-778	隅円台形	30 × 28 × 35			
13	924-776	楕円形	48 × 32 × 33		21号層に先出か。	
14	923-778	楕円形	55 × 40 × 30			
15	922-775 781	楕円形	36 × 35 × 17			
20	926-776	不整形楕円形	70 × 50 × 32			
22	857-811	不整形	50 × 40 × 40	土師器 3片		柱状の窪みあり。 25号ビットに先出。他に1基ビットあり。 柱状の窪みあり。 底面に窪みがあるが柱状ではない。
23	859-812	楕円形	41 × 41 × 40			
24	859-811	双円形	80 × 68 × 30	土師器小片約 20片		
25	859-811	不整形楕円形	72 × 55 × 34	24号ビットと一括		
29	856-812	不整形楕円形	67 × 60 × 17	古墳時代の土師器 16片		
30	857-813	不整形	80 × 57 × 17	土師器細片 5片		
31	857-813	楕円形	47 × 42 × 22	土師器杯小片 2片		
32	857-814	楕円形	53 × 48 × 22	土師器小片 2片		
33	857-814	円形	35 × (22) × 21			
34	853-810 6	楕円形	43 × 37 × 41			
35	853-814	楕円形	50 × 46 × 35		3号住居に先出か。他に1基ビットあり。 3号住居に先出か。柱状の窪みあり。 重複する2基のビット。 4号層は地山との区別不明瞭。 4号層は地山との区別不明瞭。	
36	852-814	楕円形	50 × 46 × 42			
38	861/850-810	楕円形	50 × 46 × 31	土師器 5片		
39	861-812	不整形楕円形	40 × 35 × 20	土師器壺中心に 15片		
40	860-811	不整形	41 × 37 × 26	土師器微細片 4片		
41	860-810	不整形	56 × 50 × 12			
42	860-810	円形	28 × 25 × 7			
44	917-778	円形	29 × 28 × 21			
47	864-811	不整形楕円形	70 × 50 × 40	雑多な土師器約 20片		
48	864-811	卵形	40 × 37 × 20	47号ビットと一括		
49	863-811	楕円形	65 × 55 × 33	47号ビットと一括	47号ビットに先出。 重複ビットあり。土坑状。 パミスはAs-Aか。	
50	864-813	不整形	47 × 43 × 55	奈良時代中心の土師器約 40片		
51	864-813	楕円形か	(63) × 60 × 25	50号ビットと一括		
52	863-813	不整形	38 × 38 × 25			
53	863-812	楕円形	40 × 30 × 20	1		
54	862-813	隅円方形	72 × 55 × 56	古墳・奈良時代の土師器 14片		
55	862-814	円形	60 × 55 × 42			
56	863-814	隅円方形	42 × 38 × 38	土師器・須恵器小片 8片		
58	861-814	楕円形	63 × 50 × 67	奈良平安時代の土師器 6片		
59	861-814	楕円形	47 × (45) × 67	58号ビットと一括		
61	859-815	円形	50 × 44 × 35	奈良時代中心の土師器須恵約 30片	4号住居に後出。 断面に柱痕あり。 断面に柱痕あり。 65号ビットに重複、先後不明。 64号ビットの抜柱痕の可能性。	
62	858-815	楕円形	56 × 52 × 40	土師器微細片 2片		
63	858-815	楕円形	52 × 42 × 44			
64	858-815	不整形	52 × 50 × 74	土師器小片 4片		
65	857-815	隅丸方形か	51 × (42) × 20	土師器小片 3片		
66	856-815	楕円形	56 × 52 × 45	奈良時代の土師器・須恵器 3片		
67	857-818	隅丸方形か	64 × 50 × 53	土師器割片 3片		
68	856-814	楕円形	36 × 30 × 33			
69	854-816	楕円形	47 × 40 × 21	古墳時代の土師器小片 4片		
70	854-817	隅丸方形か	50 × 42 × 44			
71	872-795	不整形	32 × 30 × 25		13号住居に後出か。 13号住居に後出か。	
72	871-795	不整形	40 × 36 × 24			
73	872-794	不整形	40 × 32 × 24			
74	872-793	不整形楕円形	42 × 38 × 32			
75	873-793	楕円形	40 × 37 × 27			
76	873-793	不整形	31 × 28 × 15			
77	874-794	楕円形	43 × 37 × 40			
78	873-795	楕円形	50 × 45 × 20			

No	位置	平面形	長軸×短軸×深さ	出土遺物	備考
79	875-795	楕円形	52 × 40 × 27	横俵杯 1片 土師器微細片 5片 土師器小片 3片	パミスは Aa-A か。 72号土坑に重複。天明三年以降。
80	875-794	楕円形	35 × 30 × 18		
81	875-794	不整円形	30 × 28 × 30		
82	876-793	不整円形	35 × 35 × 30		
84	875-795	楕円形	33 × 25 × 15		
85	861-814	不整楕円形	56 × 50 × 36		
86	860-813	円形	26 × 24 × 15		
87	860-812-3	不整円形	38 × 38 × 12		
89	861-810	隅円長方形	(42) × 36 × 12		
90	861-810	楕形	38 × 30 × 20		
91	869-797-8	不整楕円形	45 × 43 × 40	古墳時代の土師器 12片 土師器微細片 5片 古墳時代前期の小片 4片 古墳時代の土師器小片 4片	断面は直底状。柱穴ではない。
92	868-9-797	不整楕円形	60 × 55 × 23		
93	863-4-798	不整円形	52 × 48 × 40		
95	863-798	不整円形	45 × 45 × 45		
98	862-797-8	不整円形	44 × 42 × 10		
99	861-797-8	不整楕円形	32 × (26) × 30		
100	860-1-796	不整形	67 × 50 × 32		
101	860-796	楕円形	34 × (29) × 25		
102	849-813	楕円形	48 × 38 × 23		
103	849-811-2	円形	36 × 34 × 32		
104	847-811-2	楕円形	52 × 45 × 30	古墳時代後期中心の土師器 8片	天明3年以降。
105	831-812	不整楕円形	43 × 38 × 30		
106	849-811	長方形か	53 × (43) × 7		
107	849-811	長方形か	62 × 50 × 32		
108	846-811	不整円形	35 × 32 × 35		
109	853-799	不整形	(42) × 42 × 20		
110	851-2-798-9	不整円形	40 × 38 × 35		
111	850-797	楕円形	75 × 56 × 24		
112	853-799	長方形か	60 × 40 × 22		
113	853-801	不整円形	35 × 33 × 12		
115	849-50-801	楕円形	84 × 63 × 45	土師器約 20片	断面に柱痕あり。 底面直底状で柱穴らしくない。 104号土坑に重複。重層は調査区域外。
119	915-6-779	楕円形	46 × 32 × 45		
120	868-787	楕円形	33 × 28 × 10		
121	867-788	不整方形	35 × 35 × 11		
122	866-787	円形か	38 × (20) × 16		
123	875-6-796	楕円形	40 × 36 × 22		
124	894-800	楕円形	45 × 43 × 47		
125	865-788	円形	43 × 40 × 32		

A2区

No	位置	平面形	長軸×短軸×深さ	出土遺物	備考
1	940-775-6	不整円形	50 × 43 × 61	土師器小片 10片	柱痕状の窪みあり。 複数のビットを想定したが、土坑状の遺構となる。 13号土坑に後出。 2号副立柱建物区画内にある。
2	955-778-9	長円形	114 × 34 × 38		
3	962-775	楕円形	59 × 42 × 45		
4	948-769-70	楕円形	47 × 42 × 17		
5	952-769	円形			
6	939-778	隅丸方形	43 × 42 × 19	断面に柱痕か。 柱痕状の窪みあり。 断面に柱痕あり。	
8	965-6-771	不整円形	44 × 41 × 21		
9	967-771	不整円形	39 × 37 × 25		
10	968-771	楕円形	43 × 40 × 46		
11	969-771	楕円形	52 × 46 × 44		
12	969-775	不整円形	51 × 49 × 32		
13	968-777-8	楕円形	61 × 30 × 20		
14	966-777	円形	55 × 42 × 43		
15	967-776	楕円形	40 × 31 × 23		
16	964-775	楕円形	52 × 45 × 29		重複する2基のびつ。 重複ビットまたは狭柱痕あり。
20	965-774	不整円形	43 × 37 × 22		
21	965-772	楕円形	49 × 35 × 29		
22	004-779	不整円形	53 × 50 × 32		
					柱痕状の窪みあり。

ピット一覧 (A2区・B1区)

No	位置	平面形	長軸×短軸×深さ	出土遺物	備考
23	006-777	不整形円形	49×41×37		底面・断面に柱痕あり。
24	007-779	不整形円形	31×29×20		断面に柱痕あり。
25	004-779	不整形円形	41×38×79		壁面に崩落の痕跡あり。柱痕あり。
30	995-777	楕円形	54×44×15		
31	996-781	円形	25×25×21		
32	963-4-785	楕円形	49×42×25		43号土坑に先出。
33	953-4-783	不整形円形	34×30×56		
36	978-778	円形	32×31×46		
40	951-783	不整形楕円形	46×36×50		
41	948-9-782	楕円形	48×42×21		
43	950-779	不整形	30×25×21	土師器小片2片	28号住居と重複。
44	977-773-4	楕円形	36×29×43		柱痕状の窪みあり。
49	934-788	楕円形	50×43×40		
50	939-789	不整形楕円形	[69]×60×59		西隣は調査区域外。
55	993-4-779	楕円形	34×31×16		
58	951-766	楕円形	60×48×55		
59	948-766	楕円形	50×46×47		断面に柱痕あり。

B1区

No	位置	平面形	長軸×短軸×深さ	出土遺物	備考
1	070-763	円形	40×40×25		
2	072-763	楕円形	35×31×29		
3	075-760	楕円形	39×27×11		底面皿底状で柱穴らしくはない。
4	071-762	不正楕円形	40×35×51	土師器小片1片	断面に柱痕あり。
13	050-776	楕円形	36×26×36		断面・底面に柱痕あり。
14	050-777	円形	25×23×33		
19	051-778	円形	26×23×33		柱痕状の窪みあり。
21	051-781	円形	30×30×29		断面に柱痕状の落ち込みあり。
22	052-778	楕円形	21×18×31		
23	052-781	楕円形	37×32×31		
24	053-779	楕円形	27×22×19		
25	053-780	楕円形	25×20×29		
26	054-780	不整形楕円形	42×35×34		底面中央が細く窪む。
27	053-782	不整形円形	27×27×34		
28	055-780	楕円形	26×19×22		
29	055-778	不整形	38×25×35	土師器細片・小片5片	2基のピットが重複する可能性。底面平坦。
30	056-778	不整形長方形	44×32×26	土師器杯小片1片	底面平坦。
31	055-780	円形	29×26×22	土師器小片2片	底面比較的平坦。
32	039-780	卵形	44×37×28	土師器小片1片	
33	039-767	楕円形	41×34×38		
34	039-773	不整形円形	42×38×43		下層に扁平な礫が水平に据えた柱穴になる。。
35	038-775	楕円形	40×34×21		底面平坦。
36	041-774	楕円形	22×18×22		
38	044-782	円形	25×23×24		
41	044-782	楕円形	30×22×33		
44	046-782	楕円形	55×47×45		二重底が切り合いは断面に表れない。
45	048-782	楕円形	40×35×54	土師器小片2片	
46	048-783	円形	34×30×34	土師器小片1片	柱痕状の窪みあり。
47	048-784	楕円形	40×30×48		
48	048-784	円形	34×32×30		柱痕状のわずかな窪みあり。
49	050-783	円形	22×20×26		
50	050-784	円形	46×41×41		柱痕状の窪みあり。
54	051-781	隅四方形	52×43×39	土師器小片1片	柱痕状の窪みあり。
57	045-784	隅四方形	43×35×47	土師器小片1片	柱痕状の窪みあり。
58	046-784	楕円形	31×28×37	土師器細片1片	柱痕状の窪みあり。
59	047-785	楕円形	27×22×24		上面壁際に細長い窪みあり。柱痕状の窪みあり。
60	048-785	隅四方形	32×30×21		
61	047-786	不整形円形	27×24×25		
62	048-786	楕円形	24×18×28		

No	位置	平面形	長軸×短軸×深さ	出土建物	備考
63	048 - 785	不整楕円形	25 × 20 × 22	土師器細片 1片	柱痕状の窪みあり。 柱痕状の窪みあり。
64	048 - 786	楕円形	30 × 25 × 26		
65	067 - 778	楕円形	58 × 44 × 34		
66	040 - 776	楕円形	35 × 30 × 49		
67	042 - 777	楕円形か	- × - × (11)		
68	039 - 778	楕円形	40 × 30 × 51	土師器小片 1片 土師器小片 3片	1号井戸と重複するが新田不明。 11号溝に先出している。底面平坦。 1号竪立柱建物に先出している。 杖を打ち込んだような深い窪みあり。 柱痕状の窪みあり。 底面に扁平な礎を据えた柱状になる。
69	045 - 779	円形か	- × - × (32)		
70	042 - 781	楕円形	47 × 37 × 56		
71	043 - 782	円形	41 × 36 × 58		
72	049 - 786	円形か	- × - × (28)		

C区

No	位置	平面形	長軸×短軸×深さ	出土建物	備考
1	119 - 772	楕円形	42 × 33 × 24	土師器・須恵器の微細片 3片	地山はIV層。 断面に柱痕の可能性のある痕跡あり。地山はIV層。 地山はIV層。 地山は二段底状地山はIV層。。
2	121 - 773		58 × 32 × 10		
3	120 - 773	不整楕円形	43 × 37 × 44		
4	120 - 774	不整楕円形	32 × 25 × 26		
6	119 - 774	不整楕円形	50 × 47 × 13		
10	121 - 763		32 × 32 × 8		
11	130 - 757	楕円形	40 × 35 × 57		
12	131 - 758	楕円形	48 × 42 × 29		
13	127 - 757		30 × 27 × 8		
14	126 - 760	不整楕円形	48 × 38 × 14		
18	130 - 773	楕円形	47 × 35 × 50		
21	129 - 762	不整楕円形	33 × 28 × 13		
22	130 - 761	不整楕円形	33 × 30 × 18		
25	126 - 756	円形	23 × 22 × 7		
26	139 - 765	楕円形	38 × 25 × 34		
28	120 - 764	楕円形	39 × 24 × 36		
29	130 - 762	不整楕円形	33 × 17 × 33		
30	132 - 758	円形	27 × 27 × 10		
31	133 - 758	不整楕円形	30 × 24 × 28		
32	133 - 758	不整楕円形	25 × 20 × 7		
33	134 - 759	不整楕円形	17 × 15 × 3		
34	134 - 759	不整楕円形	23 × 20 × 9		
35	133 - 763	不整楕円形	31 × 28 × 13		
36	133 - 763	楕円形	28 × 24 × 15		
37	131 - 763	楕円形	24 × 20 × 12		
38	131 - 763	楕円形	23 × 18 × 16		
39	135 - 769	不整楕円形	25 × 23 × 17		
40	135 - 769	円形	23 × 22 × 16		
41	135 - 771	円形	21 × 20 × 20		
43	136 - 771	円形	23 × 21 × 18		
45	128 - 769	楕円形	30 × 26 × 10		
46	128 - 769	不整楕円形	37 × 32 × 12		
47	128 - 771	不整楕円形	26 × 20 × 8		
48	122 - 773	楕円形	37 × 32 × 14		
49	124 - 773	円形	14 × 13 × 12		
50	123 - 774	楕円形	21 × 16 × 28		
51	119 - 773	円形	21 × 19 × 18		
52	131 - 755	不整楕円形	27 × 24 × 17		
53	132 - 768	円形	20 × 18 × 28		
54	135 - 773	楕円形	18 × 15 × 16		
55	127 - 773	円形	24 × 21 × 22		
62	160 - 764	楕円形	23 × 17 × 12		
63	161 - 767	楕円形	30 × 22 × 20		
64	160 - 770	楕円形	26 × 20 × 10		

11 本線部分の水田と耕作溝群

下滝天水遺跡で確認された水田遺構は天明三(1783)年のAs-A層下、天仁元(1108)年のAs-B層下とこのテフラを耕作したAs-B混土層内、5世紀末から6世紀初頭と推定されるHr-FA層下、4世紀初頭と推定されるAs-C下混土層下の併せて5面におよぶ。本線はC区からE区にかけて、取付道ではA~C区で各時期の水田を調査しているが、本項では本線と取付道で分けた上で、上層からの水田遺構を各面毎に記載した。

As-A下水田

ここでは、土地利用の変遷を知るうえで、前・後の状況も併せて説明しておきたい。

地租改正前代の絵図(明治初期以前)によると遺跡地周辺の水田地帯中に数ヶ所の小池が、描かれていた。1ヶ所は、榎町北Ⅲ遺跡付近、いま1ヶ所は、その南側である。調査前、E区の南半は水田であったが、その北西端に溝が生育し、池跡の存在が示唆されるところがあった。調査の結果、池跡は第396図のように東西約14m、南北約11m、深さ約40cm(調査面から)の短長方形を呈していた。残念ながら後世のゴミ穴：黒土取りなどによる擾乱がその付近で顕著なため、入・出水施設について不明瞭であった。なお下滝天水は、C区の小字名称によるが、その由来について、地元の方々に天水溜池に起因するか否か伺ってみたが明確ではなかった。

As-A混土の水田は、現在の水田耕作土直下に、別の連続酸化斑層(地域で床土^{とこ}という)があり、前出の擾乱により、E区の北半では不明、南半では全域に広がっていた。その左証に長大な東・西壁面土層図を、As-C混土下まで作成したが紙面の都合で省略した。

As-A軽石下水田は、軽石で覆われ、確実に無没水田と呼べる状態の場所は次のとおりである。第430図E区上部の右端、標高78.5mの等高線がかかる東へ一段下がる水田面、同図中央部右端の水田と注記されたAs-B下水田畦を踏襲した畦以東の水田

面、第379図右寄りの南北畦(-67,745ライン付近)以東の水田面であった。溝跡は、55・57号溝跡とそれに挟まれたE区道跡がAs-Aに埋没し、削平を受けていたものの、両溝の北側と南側に直線的に溝と並走するように畦跡もしくは畦直下の還元斑が存在していた。さらにE区東・西壁土層断面の所見も加えれば、E区の南半には全面As-A直下水田の全面存在が推定される。

水利については、地形上、北端に位置する榎町北Ⅲ遺跡において、As-A下面もしくは同混土層の標高値が南下りの地勢の高所で78.8m、低所で78.6m。E区では少しずつ南上がりの地勢となり、北辺から中央にかけ、78.5m、南辺で78.6mである。こうした場合の水準値は、以下の黒色土が経年圧縮を受けた状態に影響されたりもするが、E区ではAs-C混土層以下が薄く、黒色土圧縮に伴う経年変化は少ないと考えられる場所であった。そのため地勢は、榎町北Ⅲ遺跡では南下り、E区ではおおむね北下りの地勢にあるとしてよい。そのことにより、水流の方向は、E区北東の水田では、北から南、西から東へ、中ほどの54号溝までの面では北から南、西から東へ、排水は54号溝へ、57号溝から以南の面では、南から北へ、西から東へ、その排水は57号溝へ行なると推定しておきたい。その推定の場合、南側は、さらに以南に水路の存在が必要となり、おそらくは、以南を東西に通過する高崎市道直下に水路が存在していたのではないだろうか。

As-Aについての問題点は、降下堆積が泥流等の流水に伴い堆積したのが問われるところである。この地帯のAs-A泥流・火砕流の流出は、「利根川の変流と砂質土の堆積」『宿横手三波川遺跡、西横手遺跡群』当団2002.3で触れたように決壊は、利根川右岸沿いの西横手町北端の凹地カ所からと考えられるが、E区のAs-A堆積層直下に、砂質土や粘性土の堆積はなく軽石の堆積は、降下によると考えた。

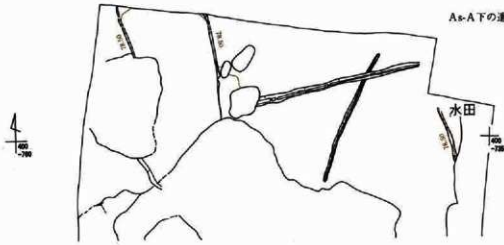
As-B混土層

As-B混土層の意味は、As-A降下前代からAs-B降下直後までのAs-Bが耕作など様々な原因により攪乱を受け、多かれ少なかれ軽石が土中に含まれている層のことを指す。特に調査時には、順堆積して視認できる場合は良いが、困難な時は、壁切り鎌を用い、削られた軽石の質感、爪で軽石が潰れるか否かなどを目安にAs-A・Bの区別を行なったりもする。E区の場合は、純堆積が薄いため多くの場面でそうした確認法を用いた。

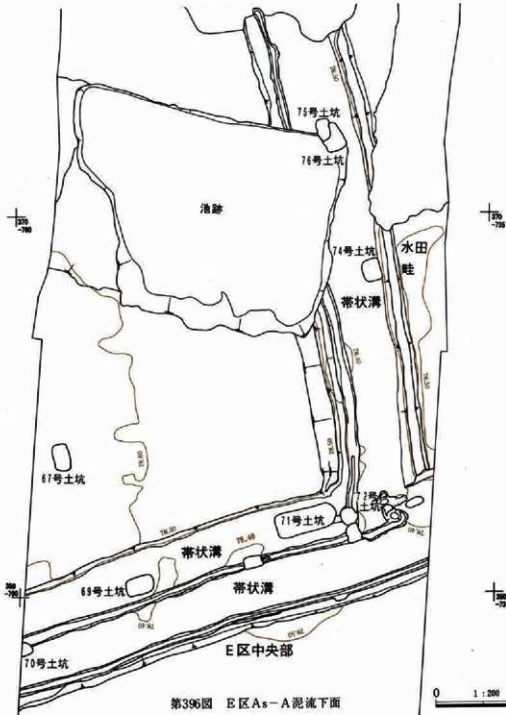
As-B混土水田は、前述のAs-A下水田としたほぼ同じ場所で、それはE区北東端の78.5mの等高線が沿う水田、第396図右寄りに水田畦と注記した南北畦以東の場所に、第399図右側の南北畦以東ではAs-A下水田と同じ場所である。しかし、As-B混土の時期は12世紀初頭から天明三年の18世紀末に至る長期のため継続的に水田が営まれたかは疑問である。次にE区中程の状況を見ながら、その疑問を以下に考えたい。中程の35,350ライン以北にある帯状の溝と35,395ラインの間にAs-B下水田の存在は明確でなく、その理由の大半は、後世の池跡、黒色土の抜取りなどの攪乱と、帯状の溝の存在によるためであった。帯状の溝は、E区北西辺から南南東に偏しながら進み、中程でT状に90°東西に分岐して設けられ、第396図に示したとおりである。東西に進む場所では幅約6m、調査面より約15cmの深さである。北壁西端付近では幅約4.3m、深さ約15cmである。東西の帯状の溝の中央を東西に同期か、それ以前の重複関係にある小規模溝が存在している。この帯状の溝は、東辺でAs-B下水田畦と並行して設けられ、ある場面では、前代の区画を意識し設けられている。埋土には、流水が多い場合などに存在する砂質土の堆積が顕著ではないが、前出の東辺畦の存在と、南辺でも以南水田との間に部分的に畦の痕跡を認め、利水のために設けられた可能性は否定できない。その一方で、67号土坑を除く、69・70・71・72・74・75・76号土坑が、この溝中に存在している。中でも71号土坑は、隅丸長方形を呈し、埋土最

下部にやや締りがあり、この地方でいう半穴形態をとる。円形の72号土坑を除く、他の土坑も隅丸長方形を呈し、長さこそ72号土坑ほどはないが、深さや壁面形状、埋土下方がやや締まる特徴は共通し、ほぼ同様の機能を果たすため、特に地下水位の低い時期か時代に設けられたと考えたい。帯状の溝・土坑とも遺物に時期を示す資料の出土はないので埋土の質感および近世陶・磁器の多用化の点なども考慮すると中世の所産を考えたい。

このほかE区の35,335ライン以南でも、As-B混土を埋土とする掘立柱穴が、数条を単位とする欄列状に14穴が認められ、その一部は柱列目筋の通りが良く農耕に伴う欄列とは考え難いためAs-B混土の時期に水田化していない時期もあったと考えたい。水田化が明瞭となるのは、55・57号溝と両溝に挟まれたE区道路の段階で両溝とも、As-Aにより埋没した時期があり、その後、復旧されているが、同時に道も機能している。As-A埋没前代の55・57号溝は、北側と南側に畦跡が部分的に見出されている。55・57号溝中の出土遺物は、圧倒的に18世紀代の陶磁器が多く、17世紀まで遡る可能性のある肥前磁器がわずか含まれる。そのため、E区南半の高所まで水田化することが明確となるのは17世紀頃である。17世紀初頭には、慶長7年に開墾が始められた天狗岩用水は、（この附近は滝川という）慶長15年（1610）に玉村町まで通水されていて、周辺灌漑の主水源をなしていたことと有機的な関係があるかもしれない。



E区上部



E区中央部

第396図 E区As-A泥流下面

As-B下水田 (第397~400図)

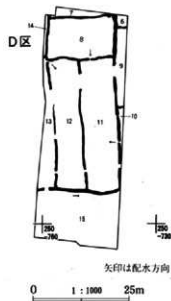
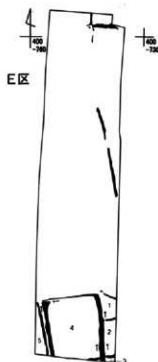
調査区北半のD・E区で、浅間山降下軽石As-Bに覆われた田面と畦の一部が検出された。As-Bの堆積は全般的に薄く、E区北半やD区南端部では一次堆積物が明瞭でない。同一耕土が確認できるにもかかわらず、調査区北部や、中央のB・C区で水田面が確認できなかったのは、このような事情による。東西南北の畦走向から、条里型水田区画であることが明瞭だが、「坪」復元可能な大畦や水路は検出されなかった。D・E区での検出面は、連続する同一水田面と認められるので、ここでは北から南にかけて、畦による区画を1~15まで通番で呼称して述べることにする。

第1~3区画は、南北方向の畦で西側の第4区画と分けられ、さらに東西方向の畦で分割された区画である。この東西畦は、幅50cm前後、高さ5cm以下と小規模で、遺存状況も不良であった。第1区画は、N-60°-Wに傾く畦で台形ないしは三角形の小区画を形成すると考えられる。第2区画は、南北9.5mの方形区画である。第3区画は、E区南東端にあって、形状は不明である。第2区画との間に50cm幅の水口が設けられている。第1区画と第3区画の田面標高差は5cmで、第2区画の田面はその中位にある。

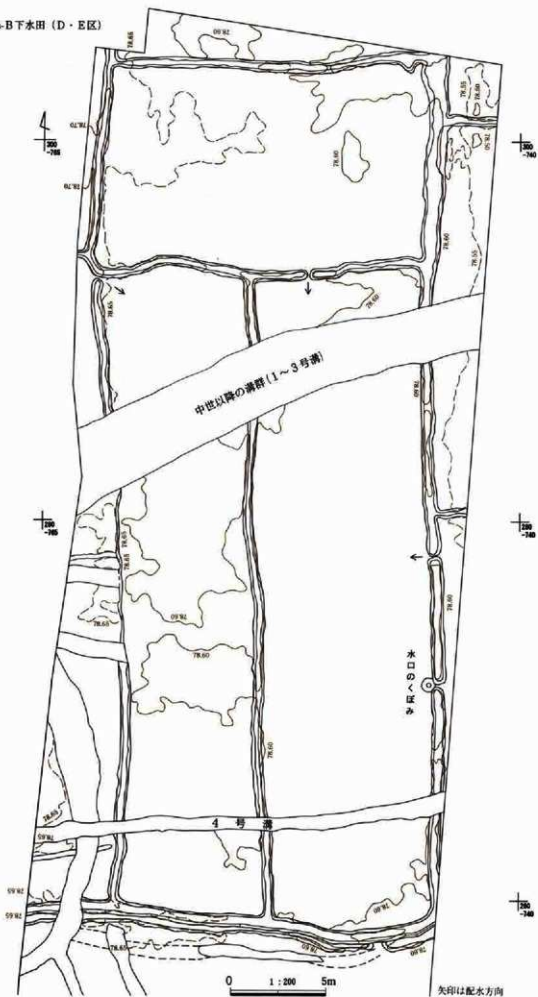
第4区画は、南北に延びる2条の畦と、わずかに確認できる東西畦の痕跡から、南北17m、東西15~13mの方形に画される。面積は212m²強を測る。田面は南東で一ヶ所窪む部分が認められるが、ほぼ平坦で田面標高は78.65~78.60mを測る。東に隣接する第1~3区画とはほぼ同レベルながら、畦で区切らなくとも漏水可能だったことが判る。なお、南半中央に、幅60cm前後の浅い溝状の窪みがあり、As-Bの一次堆積物が見られた。配水効率を図るために手を加えたものだろうか。

第5区画は、E区南西端にあり、第4区画とはほぼ同規模、同形状を呈すると思われる。田面標高は78.65~78.70mと、東側区画よりも5cm前後高い。

D・E区 As-B		下水田計測表			
区画	標高m	面積m ²	区画	標高m	面積m ²
1			9		
2			10		
3			11	78.610	294.00
4	78.650	(210.65)	12	78.620	228.20
5			13		
6			14		
7			15	78.630	
8	78.640	172.6			



第397図 D・E区As-B下水田全体図



第4区画と第5区画を画する南北畦は、幅2m前後と広く、中央に幅60cm～1mほどの溝が走る。調査段階で56号溝と呼称した。溝底面は平坦で、78.60mの標高を測り、両側区画の田面より5cm近く低い。小規模ながら水路としての役割を果たしたと考えていいだろう。溝の底面レベルが均等で、また地形全体の傾斜が東方向に向くので、この56号溝による配水方向は確定できない。溝の末端部は、中世以降の東西道路跡に伴う側溝に切られていて、判然としな

い。D区では、第6～15区画が検出された。そのうち、第6・7区画は調査対象外にあたっていて、規模や形状は判明しない。ただし、南北畦の走向から、E区で検出された第3区画の南に第6区画、第4区画の南に第7区画が隣接したと考えていい。

第8区画は、東西18m、南北11mの長方形で、南を画す畦がやや蛇行する。東西を画す南北方向の畦は、ほぼ直線的に延び、そのまま第9・11・12・13区画を分ける境界となる。第8区画と異なり、第11～13区画は、南北に長い長方形を呈し、南北方向で35m、東西方向で9～8mを測る。東隣には調査区東縁に沿って、第6・9・10区画が確認できるが、南北方向で約21m前後とやや短い。なお、D区中央の第15区画は東西を画する南北畦が見られないことから、調査区内では最も大きい区画となる可能性が高い。ただし、その南限は微高地状に標高が高くなっており、後世の耕作が及んでいて、畦が確認できなかった。

田面標高は、第8・13区画が78.65m前後、第11区画は78.55m前後を測る。第11～13区画が南北に長い長方形区画で並列するのは、東西20m間で比高約10cmという、東に傾斜する原地形を考慮しての方策と考えていいだろう。ただし、東端の第10区画が再び高くなる傾向がうかがえるので、この第11・12区画の部分が最も低い部分といえる。

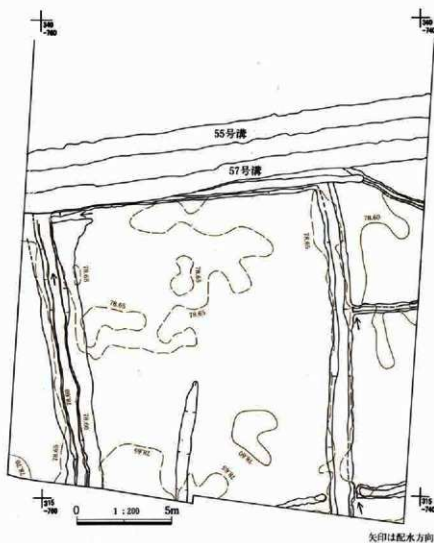
D区における畦は、平均して幅60cm前後、田面との比高は3～10cmである。断面は低い台形状で、頂部はAs-B降下以後の耕作等によって削平された可

能性も高い。だが、As-Bの一次堆積によって覆われた部分についても、後述する古墳時代の水田畦畔に比べて著しく平坦な印象を受ける。なお、第15区画を北辺の東西畦は、田面との比高が10cmを超える部分が多く、他の畦にくらべて遺存状況が良好であった。さらに、畦の南側に沿って浅い溝が見られた。これは地形的にやや高い南側からの表面水を集めて、東方向へ効率よく流下させるための配慮だったと考えられよう。

水口は、畦の交差部分、ないしは中央付近に設けられ、一定していないのは、田面標高の微妙な高低差を反映しているからだろう。なお第10区画と第11区画を分ける南北畦中央に設けられた水口では、11区画側に円形の窪みが見られることから、水流は10→11区画と考えたい。

田面は全般的に平坦で、耕作痕や稲株痕は確認できない。第6・9区画には、南北畦のすぐ脇に若干盛り上がった帯状部が残し、その上を踏みつぶしたような小円形の窪みが集中して凹凸が著しい部分が見られる(写真図版P L-70参照)。断面で確認したところ、フラットな田面より黒味の強い粘質土で、深くまで不均質であることから、故意に踏みこねた場所ではないかと考えられる。

第8・11・12・15区画からは、明瞭なヒトの歩行痕が認められている。ここでは、その方向がある程度判明した第11・12区画での状況を図示した(第400図)。これによれば、距離の短い東西の往復方向に歩行した様子がうかがえ、また、一人がジグザグ状、あるいは二人が交差する方向と見られる部分がある。第15区画の境界となる東西畦では、畦に沿って東側へ歩行したようだ。また、水口部分では不定方向の足跡が集中してみられる。ヒトの足跡の大きさは、遺存状態の良好なもので、長さ23～25cm、最大幅7～9cmに集中する。大部分が成人と考えていいだろう。ウマの馬蹄痕も認められるが、明確な形状を示すものは少ない。その歩行方向は一定しておらず、農作業との直接的な関連はみだしにくい。馬蹄痕の大きさから推定できる仔馬の存否は明確で



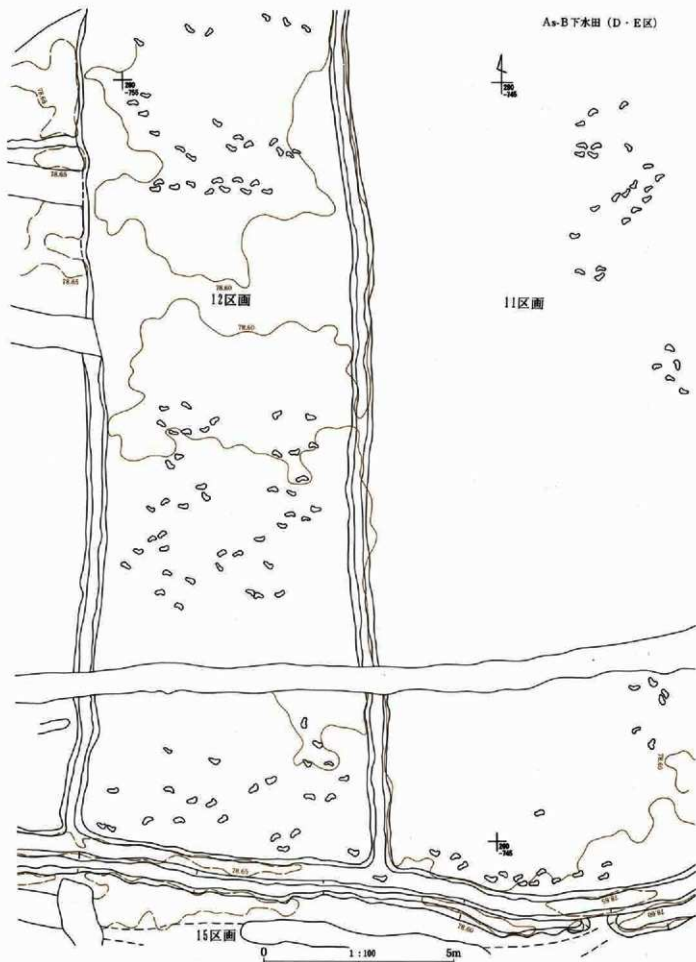
第399図 E区As-B下水田 (南半)

なかったことを、付け加えておく。

ここで検出されたヒトの足跡から、具体的な農作業を復元するのは難しい。As-Bを降らした浅間山の噴火は、天仁元年(1108年)旧暦七月、との記録があるから、降下直前の作業とすれば、田植えから除草あたりまでが考えられよう。あるいは、降雨による崩れた畦や水口の補修・点検なども含まれるだろう。だが、歩行痕に規則性が少ないことから田植えとは考えにくい。ウマの馬蹄痕が残ることも気になる。水田作業とは無関係の可能性も十分に考え得る。

耕土は、田面から5～8cmの層厚で粘性の強い黒

色土、その下位に10cm前後の層厚で灰色がかった暗褐色粘質土が見られる。耕土と考えられるのはここまでで、さらにその下層には6世紀代の榛名山噴火によるテフラ層が堆積し、基盤層となっている。下位の耕土層にあたる暗褐色粘質土には網目状あるいは樹枝状の酸化鉄凝集斑紋が認められるので、乾田であったことが判明する。荒起こし段階では、この暗褐色粘質土層まで耕起すると考えられるが、腐植有機物が大量に含まれる表層部分の黒色粘質土と比較的明瞭に分層できることから、捏ねる、ならす等の表層作業は、この土層部分に限られていたと考えたい。



第400図 D区As-B下水田に残るヒト足痕

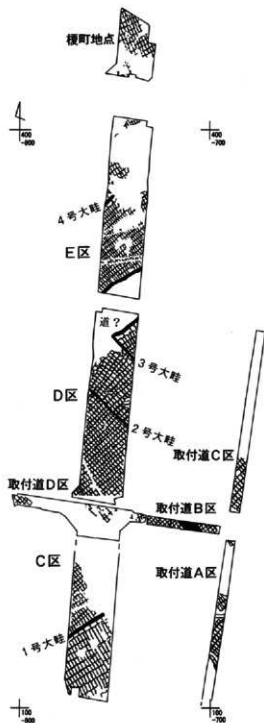
Hr-F A 下木田 (第401~413図)

C・D・E区からHr-F Aに覆われた水田跡が検出された。第V章に述べるように、このHr-F Aは降下テフラであることが確認されている。このC~E区間は南北約300mに及ぶが、南北方向ではほとんど地形変化がみられないため、さらに水田が広がっていたと思われる。それは、北方に連続して続く上滝榎町北遺跡、宿横手三波川遺跡、西横手遺跡群と1.2km離れた現利根川まで展開することが、発掘調査によって明らかにされている。ただし、本遺跡から約700m離れた現滝川の両岸は微高地であったらしく、開田されなかったか、あるいは存在したとしても発掘調査では確認されていない。一方、南限については、本遺跡B区附近にあると思われる。古墳時代以降の居住域となっているA区は、井野川左岸まで自然堤防となっていて、水田跡は検出されていない。西限もやはり、本遺跡から約150m離れた井野川左岸の自然堤防付近までと考えられる。東限は佐波郡玉村町のほぼ全域に広がることが判明しており、部分的に自然堤防状の微高地などで断続することが想定されるにしても、ほぼ東西6kmにわたって、水田が存在したと考えられる。さらに、現利根川の流路が中世以前には現広瀬川低地帯にあったことを考えれば、地形を分断する河川がない限り前橋市南部から伊勢崎市南部にまで続く広大な低地域がその範囲として想定できよう。その意味で本遺跡は、広大な水田域の南西端の部分にあたと考えていい。

水田区画の形状と規模、面積

水田跡の区画は、大畦で大区画を区切り内部を極小区画としている。大区画を構成する大畦はC区で1号大畦、D区で2号・3号大畦、E区で4号大畦が確認されている。各々の方位と規模は以下の通りである。

- | | | |
|------|---------|-------|
| 1号大畦 | N-55°-E | 幅1.7m |
| 2号大畦 | N-45°-W | 幅1.1m |
| 3号大畦 | N-50°-E | 幅1.1m |
| 4号大畦 | N-45°-E | 幅1.5m |



第401図 Hr-F A 下木田全体図

これらの大畦はその方向から、水田をおおむね方形区画に区切っていることが明らかで、2号大畦と3号大畦の間隔が30m弱であるほかは、大畦間距離は判明しない。ただし、D区北端で3号大畦に直交する方向の帯状微高地があり、これが大畦を兼ねた道状施設だったとすると、平行して走る1号大畦との間隔は約120m、4号大畦との間隔は約50mを測ることになる。このことから、大畦による大区画の規模はかならずしも一定していなかったと類推することができよう。方向が東西南北でなく、45°-50°の角度で傾いているのは、北西から南東方向に緩傾斜する地形とこれに沿った水路走行に合わせたためと考えられる。北方に連続する先述の各遺跡においても、同様の状況がうかがえる。この点は西暦1108年の浅間山噴出火山灰As-Bに覆われた水田と対比する上で、重要な相違点として注目しておきたい。

なお、大畦の高さは20cm前後まで確認できるが、本来の畦上面は後世の耕作によって削平されたと推測されるから、それ以上は不明である。同様に断面形についても、「灌鉢形」か上面が平坦な「台形」かは判明しない。また、大畦を「畦道」として利用したことは大いに考えられるが、その証拠となるような踏み固めや足跡などの痕跡は確認できない。

1号大畦の両岸では、交差する畦が切れて水口が開けられている(第73-90区画)。特に北西側では明瞭であり、北からの溢水を集めて大畦にそって流したと考えられる。その場合の水流は、約17m間で5-6cmの田面標高差があることから、北東→南西と想定される。しかし、南東側では田面標高の高低差が5cm前後で、中央の第88区画が低い。このことから、調査区内で見える限り北東-南西の水流は、必ずしも一定であったとはいきれない。

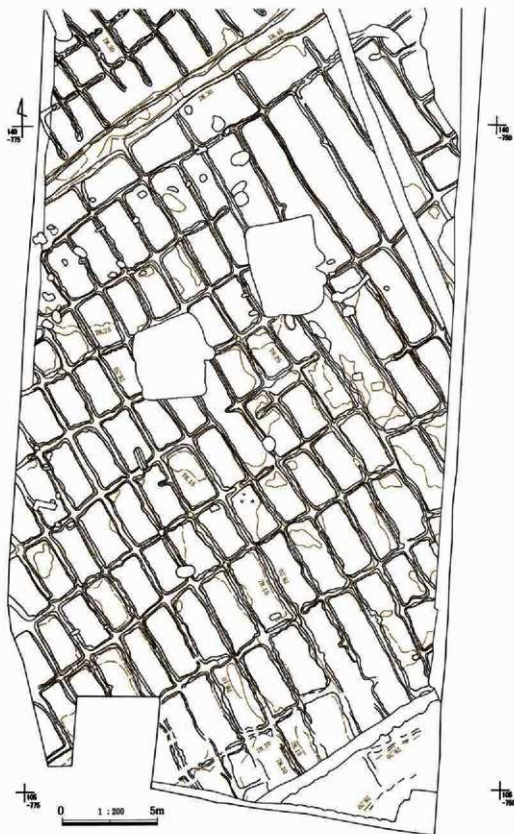
2号-4号大畦では、極小区画を構成する畦が直接分岐して1号大畦のような水口は見られない。

D区北西端では水田区画が検出されなかったが、微高地状になっているため、本来水田化されなかったか、あるいは後世に削平されてしまったと想定さ

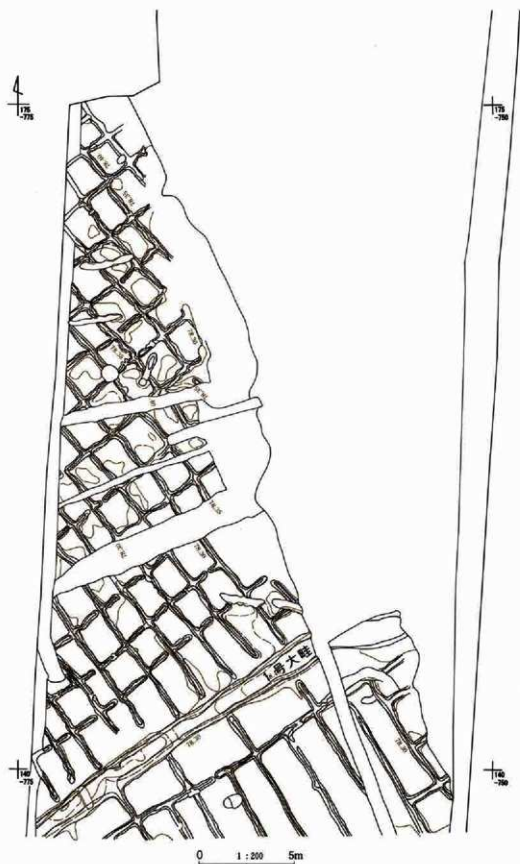
れた。この部分で、極小区画(第1-4区画)と小規模な溝で挟まれた帯状の高まりが確認された(第406図)。確認された帯状の空間地は、ゆるく蛇行して南西から北東に延びており、先述したように1号大畦及び4号大畦とはほぼ同一方向で大区画を構成すると考えられる。検出された幅は5-4mを測り、大畦の規模を大きく凌ぐ。上面や盛り土は全く残っていないが、その規模と走向から水田内を貫通する主要道と想定することが許されよう。ここでは「道状施設」と呼ぶこととする。この中間地点の南側からは、幅10cmほどの水口を設けて3号大畦が延びる。道状施設の北側で検出された小溝は幅5-8cmで、途中で断絶部分がみられる。南西端はちょうど3号大畦の北西延長上にあたる。断絶する形態から水路ではなく、むしろ道状施設の排水路的な性格と考えたい。この道状施設のさらに北西側は標高がやや高くなっていて15mほどの幅をもつ帯状微高地が残る。E区で検出された水田区画の南東限が、この微高地に沿って整然と並び、畦との接点では水口も認められる。このことから、この帯状微高地は自然地形を利用した大区画であった可能性が高い。道状施設も含めればその幅は20mにも及ぶが、人為的な構造物とは考えられないため、方眼区画を構成することとはなかったと考えたい。この帯状微高地の走向は緩く蛇行しているが、その両岸では、削平などの若干の整形をして平坦な田面と整った区画をつくり出したと考えられる。

水田面の標高は、C区南端の78.10mが最低値を示し、E区の帯状微高地北辺に沿った区画の78.46mが最高値を示す。平均値はC区の1号大畦以南が78.21m、C区1号大畦以北が78.31m、D区2号大畦以南が78.32m、D区2号大畦と3号大畦間が48.35m、D区3号大畦以北-帯状微高地間が78.33m、E区の帯状微高地-4号大畦間が78.41mとなっている。このうち、C区1号大畦以北とD区2号大畦以南の間は連続する同一大区画と考えられ、標高差も1cmしかない。平均標高値でみれば、大区画相互の比高は5-10cm、15m幅の帯状微高地の

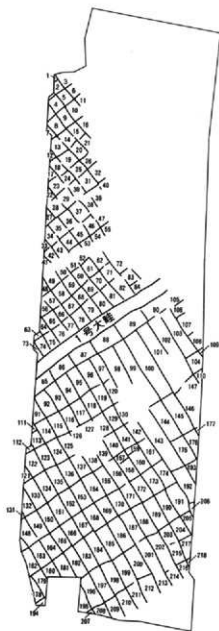
Hr-FA下水田(本線部分)



第402図 C区Hr-FA下水田(南半)



第403図 C区Hr-FA下水田 (北半)



第404图 C区Hr-FA F水田区画名称

C区Hr-FA F水田計測表

標高m	面積m ²	標高m	面積m ²	標高m	面積m ²
1 78.400		73 78.275		147 78.295	
2 78.365	1.05+	74 78.27	2.72+	148 78.160	3.71+
3 78.310		75 78.290	2.39+	149 78.190	
4 78.350	2.14+	76 78.300	3.65+	150 78.180	
5 78.390	1.68	77 78.290	2.53+	151 78.190	4.08
6 78.350		78 78.300	4.08+	152 78.175	3.88
7 78.320		79 78.310	4.32+	153 78.170	4.28
8 78.340	2.61+	80 78.315	4.37+	154 78.175	3.99
9 78.34	2.26	81 78.320	4.19+	155 78.205	3.93
10 78.32	2.78+	82 78.295	4.65+	156 78.200	4.61+
11 78.32		83 78.310	2.18+	157 78.220	4.13
12 78.325		84 78.310	1.92+	158 78.230	4.62
13 78.33	2.58+	85 78.310		159 78.220	
14 78.35	2.27	86 78.270		160 78.255	4.3+
15 78.34	2.00	87 78.270	4.39+	161 78.235	
16 78.31		88 78.245	5.11+	162 78.165	3.77+
17 78.315		89 78.260	7.91+	163 78.140	4.20
18 78.315	2.11+	90 78.260	4.64+	164 78.170	
19 78.32	2.81	91 78.300		165 78.155	3.47
20 78.32	2.21	92 78.360	3.96	166 78.180	3.57
21 78.32		93 78.315	4.17	167 78.165	3.46
22 78.305		94 78.225	4.68	168 78.165	3.91
23 78.3	2.62+	95 78.245	4.48	169 78.175	3.22
24 78.29	1.04	96 78.245	4.82	170 78.175	3.99
25 78.315	2.12	97 78.270	4.79	171 78.205	3.66
26 78.32	1.79+	98 78.270		172 78.225	4.01
27 78.31		99 78.225	14.09+	173 78.230	3.64
28 78.3	2.73+	100 78.225	14.94	174 78.245	3.91
29 78.3	3.15	101 78.290	13.35+	175 78.265	4.09
30 78.31	2.03	102 78.275	12.47+	176 78.285	4.14+
31 78.33	2.84	103 78.300	8.34	177 78.265	
32 78.305	2.28+	104 78.300	2.91+	178 78.140	4.6+
33 78.29		105 78.360		179 78.150	
34 78.305	2.04+	106 78.335		180 78.165	
35 78.285	2.87	107 78.302		181 78.145	
36 78.31	2.95	108 78.310		182 78.140	
37 78.31	3.07	109 78.320		183 78.155	
38 78.325		110 78.142		184 78.135	4.325+
39 78.35		111 78.215		185 78.140	4.94
40 78.29		112 78.205		186 78.160	
41 78.27		113 78.240	4.23+	187 78.170	5.54
42 78.285	1.6+	114 78.210	3.01	188 78.180	6.18
43 78.305	1.97+	115 78.210	3.59	189 78.195	4.93
44 78.315	2.68	116 78.205	3.53	190 78.235	5.49
45 78.315	2.54	117 78.225	3.45	191 78.255	5.37
46 78.31	2.28	118 78.235	3.62	192 78.260	4.6+
47 78.3		119 78.250	3.68	193 78.240	5.75+
48 78.275		120 78.260	2.69+	194 78.155	
49 78.275		121 78.220		195 78.130	
50 78.31	1.35	122 78.195	4.22+	196 78.140	
51 78.3		123 78.200	4.05	197 78.140	
52 78.315		124 78.210	3.67	198 78.155	4.581+
53 78.33		125 78.195	2.82+	199 78.145	5.64
54 78.32		126 78.220	3.22+	200 78.150	
55 78.325		129 78.235	3.43	201 78.135	4.9+
56 78.255		130 78.265		202 78.150	8.51+
57 78.29	2.07	131 78.155		203 78.150	8.51+
58 78.3	3.16	132 78.200		204 78.175	6.50
59 78.28	2.53	133 78.175	4.53+	205 78.205	2.76+
60 78.275	2.56	134 78.200	4.05	206 78.210	
61 78.29	2.29	135 78.185	3.48	207 78.145	
62 78.295		136 78.175	4.20	208 78.140	
63 78.265		137 78.195	3.6+	209 78.135	
64 78.265	1.29+	138 78.200		210 78.100	
65 78.26	2.47	139 78.200		211 78.150	
66 78.27	1.56	140 78.215	3.95	212 78.145	3.792+
67 78.3	2.47	141 78.245	3.12	213 78.165	
68 78.28	2.16	142 78.245	3.64+	214 78.190	4.872+
69 78.25	1.98	143 78.240		215 78.160	
70 78.305	2.11	144 78.255	7.62	216 78.150	
71 78.3	2.84	145 78.270	7.69	217 78.150	2.65+
72 78.33		146 78.305	7.85+	218 78.165	

南北区画間でも6~8cmを測る。地形は平均標高値からみれば全体的に南東方向へ緩傾斜するといえるが、比高差は小さくほぼ平坦といってもいい。大区画にみる規模の違いは、一見平坦に見える田面での微地形の変化にあわせた区割りを行ったものと推測される。

極小区画の形状は、正方形と長方形が見られる。C区の1号大畦以南、D区2号大畦以北については長方形、C区1号大畦以北~D区2号大畦以南は正方形の区画を採用している。長方形の区画は、北西~南東方向に長く、規模からすれば正方形の極小区画二連分ほどに相当する。C区の1号大畦南側については、大畦にそって細長い区画(第85~90区画)となっており、さらに水口が設けられることから、大畦に沿った配水を意図したものでなかろうか。なお、1号大畦南側の第98~103区画、第143~146区画は隣接する長方形区画の2~3連分に匹敵する細長い区画としている。これは畦の形状や田面の状況が他と同一であることから、そのまま小区画として機能したと考えていい。極小区画の面積は表に示した。大区画ごとの面積平均値は、帯状微高地以北のE区では1,954㎡、D区の2号大畦~3号大畦間が2,495㎡、D区2号大畦以南~C区1号大畦以北が2,203㎡、C区1号大畦以南が4,611㎡である。これによれば、C区の1号大畦以南が最も面積が大きく、規模の大きい細長い区画であるが、先述のように標高差に大きな違いはない。田面を画する畦の走向は、いずれも大畦ないし帯状微高地縁辺の走向に平行して設けられており、縦横が整った方眼状になる。

極小区画の畦は、大畦と異なり直接Hr-F Aに覆われていたので、埋没当時の形状を止めていると考えていい。田面からの高さは遺存状況の良い部分で10cm弱、下端幅は10~30cmで20cm前後が平均的な規模である。畦の断面形状は台形~灌鉢形で、片側ないしは両側にしばしば溝状に窪んだ部分を残す。これは畦を造るために耕土を寄せた結果と考えられる。なお、畦上には足跡の集中や硬化面、その他に

目立つ痕跡は見られず、その意味で畦に湛水以外の目的は考えにくい。

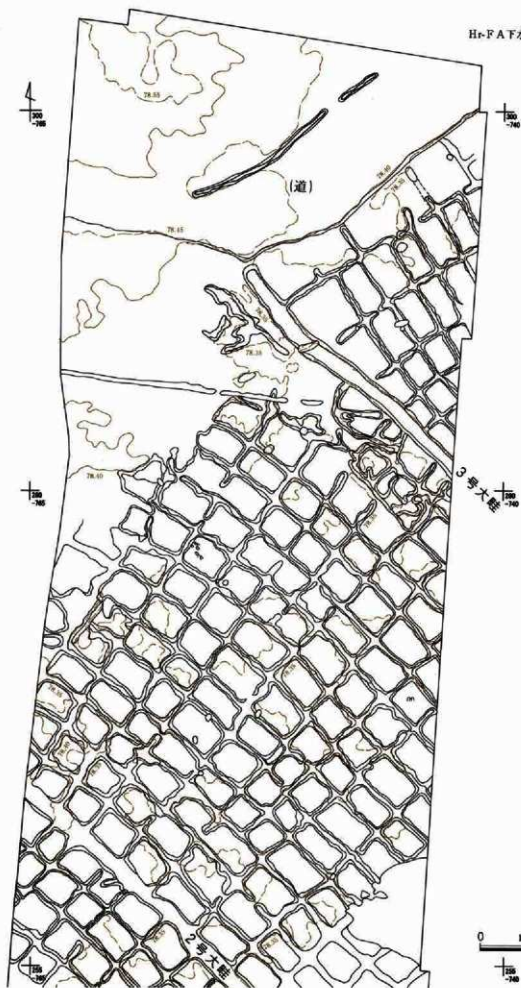
田面の状況は均質で平坦であり、少なくとも調査区内においては耕作痕などの凹凸面を残してはいない。特記されるのはヒト及びウマの足跡で、C区南半部では明瞭な足跡が残されていた(第412図)。ヒトの足跡は第202区画から第215区画方向(東方)に数歩分歩いた形跡が認められる。厳密な意味で同一人物のモノと認定するのは困難であるが、左右交互で直線上に並び歩幅70~80cmであることから、同一人物の歩行跡と推定した。足跡の大きさは、Hr-F Aの堆積した状況で計測したところ、つま先から踵まで20~25cmを測る。最大値を参考とするなら、現代人とさほど変わらないことになる。ウマの足跡(蹄跡)は楕円形ないしは片側が欠けた楕円形にテフラが体積した状況で確認され、先端が鋭角に磨り込む小穴として検出される。遺存状況が良好であれば前脚と後脚、左右脚の判別が可能であるが、ここでは明瞭でなかった。第187区画で見られるように、反する方向の足跡が集中しており、歩行の状況は確認できない。また、C区南端で畦にそって北東方向に向いた足跡列が検出されたが、遺存状況が不良で歩行跡であるとの認定は難しい。畦を潰した足跡もあることから、極小区画が完成された状態以後の痕跡であるのは間違いない。従って、これらは水田耕起とは無関係である。ヒト、ウマともに、これらの足跡から農作業との関係を想定することは難しい。

耕土は黒褐色の粘質土で、10cm前後の厚層をもつ。その下層には古墳時代初頭に降下した浅間山テフラAs-Cを含む黒色土が堆積する。この両者の土質は基本的に変わらないが、上層の耕土は黄褐色シルト土塊や小ブロック状のテフラの混入など、人為的に攪拌されたとの印象が強い。畦の盛土部分は同様の土のなかに黄褐色シルト質土の小塊を比較的多く含む。このシルト質土にはHr-F Aと非常に近似する火山灰やバミスが見られる。水田面を覆うテフラが一次堆積のHr-F Aと確認されたことから、この盛土中の土塊の解釈が難しい。Hr-F A降下が時間を

Hr-FA下水田（本線部分）

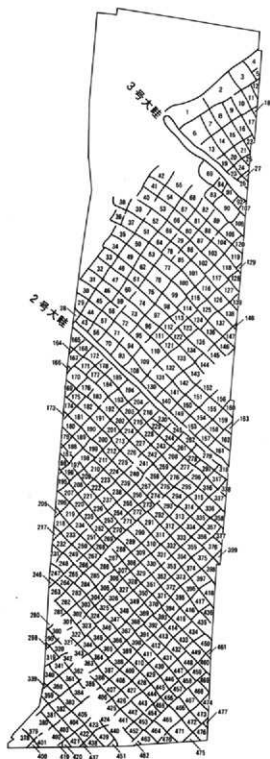


Hr-FA下水田（本線部分）



第406图 D区Hr-FA下水田（北半）

0 1:200 5m

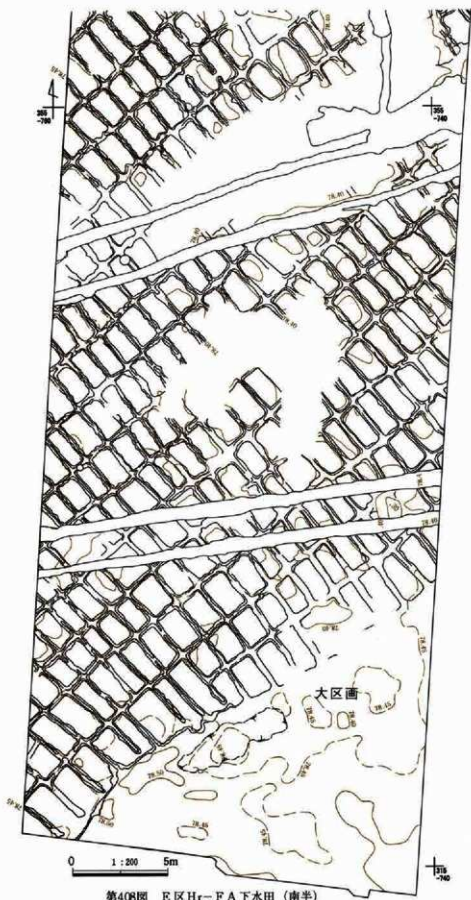


第407图 D区Hr-FA下水田区画名称

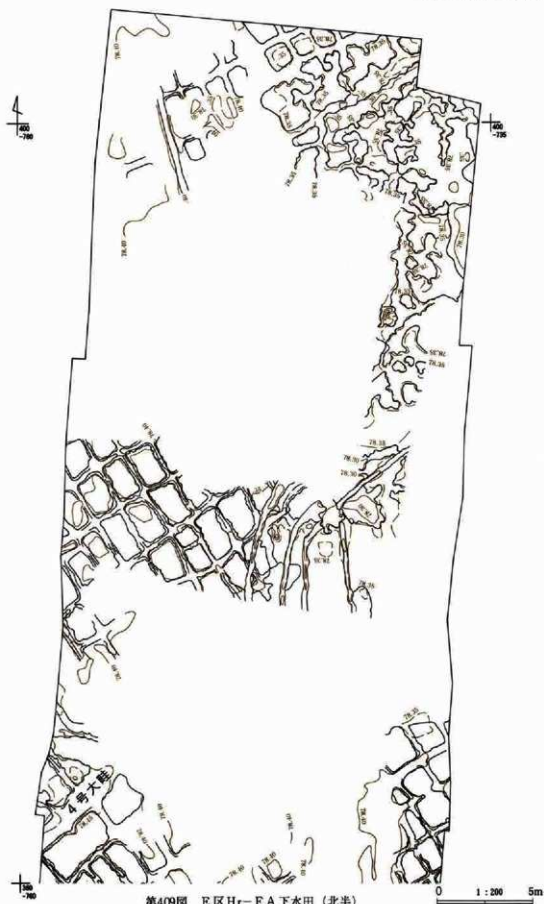
D区Hr-FA下水田計測表

圖番m	面積m ²	圖番m	面積m ²		
1	78.350	10.52	73	78.380	2.74
2	78.360	2.58	74	78.380	3.07
3	78.340	5.93	75	78.360	2.84
4	78.340		76	78.350	4.13
5			77	78.350	3.74
6	78.310	7.25+	78	78.350	2.07
7	78.315	3.07	79	78.360	2.01
8	78.340	3.86	80	78.360	2.29
9	78.350	2.46	81	78.350	2.22
10	78.340	3.03	82	78.360	3.28
11	78.340	2.46+	83	78.350	1.33
12	78.330		84		
13	78.315	3.92+	85	78.330	1.86
14	78.310	2.99	86	78.360	1.67
15	78.310	2.68	87	78.370	2.42
16	78.310	2.58	88	78.340	2.11
17	78.320		89	78.340	3.32
18			90	78.350	3.88
19	78.330	1.71+	91	78.350	
20	78.320	1.64	92	78.340	
21	78.310	1.81	93	78.360	2.82+
22			94	78.340	2.95
23	78.320	1.02+	95	78.340	2.57
24	78.310	1.63+	96	78.345	2.2
25	78.310		97	78.360	3.08
26	78.320	1.16+	98	78.370	2.33
27			99	78.350	3.38
28	78.390		100	78.340	2.94
29	78.400	1.69+	101	78.340	3.32
30	78.370	2.3+	102	78.340	2.58
31	78.360	2.38	103	78.360	3.28
32	78.360	1.83	104	78.360	2.35
33	78.340	1.60	105	78.360	2.94
34	78.350	3.08	106	78.340	2.06+
35	78.360	2.22	107	78.340	
36	78.370	1.40	108	78.365	2.83+
37	78.360	2.78	109	78.350	3.22
38	78.370	2.52	110	78.350	1.95
39	78.360	3.34	111	78.340	1.76
40	78.360	2.79	112	78.340	1.86
41	78.360	2.65	113	78.340	1.52
42	78.350	2.74+	114	78.340	2.27
43	78.390	1.69+	115	78.330	2.32
44	78.410	1.88	116	78.330	2.67
45	78.390	1.96	117	78.330	3.1
46	78.360	2.62	118	78.330	3.22
47	78.360	3.11	119	78.340	2.66+
48	78.350	2.74	120	78.340	
49	78.350	3.04	121	78.330	1.84
50	78.370	2.66	122	78.336	1.14
51	78.370	2.94	123	78.340	2.17
52	78.360	3.10	124	78.340	1.88
53	78.360	3.12	125	78.350	2.26
54	78.360	2.75	126	78.340	2.6
55	78.360	3.94+	127	78.320	2.5
56	78.370	1.85+	128	78.320	
57	78.370	1.83	129		
58	78.380	1.98	130	78.340	2.73+
59	78.380	1.51	131	78.360	3.24
60	78.360	2.17	132	78.350	3.56
61	78.350	1.77	133	78.338	3.88
62	78.360	2.83	134	78.328	2.65
63	78.360	2.89	135	78.320	3.72
64	78.360	2.34	136	78.310	2.34
65	78.370	2.38	137	78.320	3.58
66	78.360	2.54	138	78.310	2.94+
67	78.350	2.56	139		
68	78.360	3.88+	140	78.333	2.7+
69	78.330		141	78.340	2.15
70	78.360	2.74+	142	78.355	3.42
71	78.340	2.33	143	78.350	2.34+
72	78.360	2.58	144		2.23+

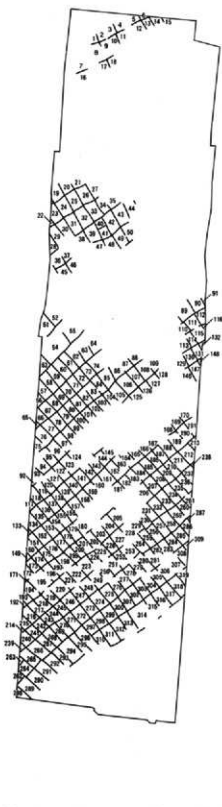
	標高m	面積㎡		標高m	面積㎡		標高m	面積㎡		標高m	面積㎡		標高m	面積㎡		標高m	面積㎡
145		1.96+	217			289	78.333	3.00	361	78.336	2.25	433	78.310	1.94			
146	78.300	2.2	218	78.335	2.07+	290	78.240	2.92	362			434	78.318	2.35			
147	78.310		219	78.325	2.70	291	78.303	3.03	363	78.316	1.69+	435		2.18+			
148			220	78.335	2.00	292	78.298	2.49	364	78.313	2.22	436		1.42+			
149	78.335	1.86+	221	78.335	2.34	293	78.300	2.25	365	78.313	2.18	437					
150	78.340	2.08	222	78.333	1.84	294	78.315	2.08	366	78.305	2.04	438	78.310	1.62+			
151	78.335	2.68	223	78.330	2.58	295	78.315	2.69	367	78.305	1.92	439	78.310	2.66+			
152			224	78.340	2.10	296	78.313	2.26	368	78.300	1.93	440					
153	78.330	2.09+	225	78.335	2.54	297	78.310	1.47	369	78.290	1.98	441	78.298	2.29+			
154	78.335	2.37	226	78.340	2.37	298			370	78.290	1.67	442	78.300	2.81			
155	78.333	3.02	227	78.328	2.39	299		0.83+	371	78.310	1.66	443	78.300	2.98			
156		*	228	78.335	2.37	300			372	78.318	1.92	444	78.300	1.97			
157	78.333	1.87+	229	78.338	1.68	301			373	78.320	1.93	445	78.310	1.96			
158		2.07	230	78.338	1.52+	302	78.313	2.44	374	78.310	2.20	446	78.315	1.97			
159	78.323	2.84+	231	78.340		303	78.310	1.94	375	78.318	2.74	447	78.320	2.12			
160			232	78.338	2.07+	304	78.295	1.81	376	78.315	2.76+	448	78.313	2.18			
161	78.326	3+	233	78.333	2.04	305	78.310	2.17	377			449	78.313	2.33			
162		2.01+	234		2.01	306	78.323	1.70	378	78.320	2.04+	450	78.313	2.48+			
163			235	78.315	1.87	307	78.320	1.57	379	78.338	2.02+	451					
164			236	78.325	2.40	308	78.315	1.83	380		1.18+	452	78.298	1.88			
165	78.390	1.85+	237	78.323	2.33	309	78.313	1.96	381	78.323	2.36	453	78.298	1.86			
166			238	78.318	2.53	310	78.318	1.94	382	78.325	2.63	454	78.296	1.74			
167	78.376	1.56+	239	78.328	2.16	311	78.290	2.07	383	78.325	2.64	455	78.278	1.37			
168	78.373	1.37+	240	78.326	2.24	312	78.295	2.23	384	78.330	2.52	456	78.295	1.48			
169			241	78.330	1.80	313	78.288	2.67	385			457	78.310	1.46			
170	78.370	2.9+	242	78.328	2.03	314	78.300	2.40	386	78.330	2.07	458	78.318	1.68			
171	78.370	2.41	243	78.328	2.14	315	78.300	2.17	387	78.300	2.45	459	78.315	1.80			
172	78.366	2.19+	244	78.335	1.77	316	78.310	1.91	388	78.310	2.11	460		1.62+			
173			245	78.333	1.13+	317	78.313	1.68	389	78.298	2.33	461					
174	78.360		246			318		1.12+	390	78.310	1.90	462					
175	78.365	1.54	247		1.84+	319		1.77+	391	78.300	1.89	463		2.4+			
176	78.360	2.12	248	78.340	2.31	320	78.320	1.67	392	78.280	2.04	464	78.270	2.86			
177	78.363	1.90	249	78.338	2.21	321			393	78.300	1.70	465	78.260	4.44			
178		1.41+	250	78.325	2.05	322		2.04+	394	78.313	2.45	466	78.280	2.62			
179		1.35+	251	78.310	1.99	323	78.318	2.30	395	78.323	2.52	467	78.300	2.89			
180	78.370	2.58+	252	78.315	1.82	324	78.310	1.81	396	78.333	1.83	468	78.316	1.82			
181	78.363	2.64	253	78.313	2.29	325	78.295	1.96	397	78.323	2.73	469		1.49+			
182	78.345	2.63	254	78.316	2.15	326	78.300	2.53	398		2.91+	470		1.38+			
183	78.340	2.50	255	78.313	2.48	327	78.313	2.05	399			471	78.260	3.98+			
184	78.350	3.19	256	78.323	2.29	328	78.315	1.66	400			472	78.263	2.40			
185	78.363	3.03+	257	78.316	2.21	329	78.313	2.30	401		1.98+	473		2.56+			
186		1.04+	258	78.330	2.76	330	78.318	2.55	402		1.69+	474					
187	78.360	1.62+	259	78.323	2.60	331	78.320	2.48	403	78.313		475					
188	78.345	2.35	260	78.325	2.84	332	78.300	2.13	404	78.320	2.65	476					
189	78.340	2.02	261	78.333	2.16	333	78.290	2.76	405	78.316	2.21	476		2.15+			
190	78.348	2.49	262	78.333	1.34+	334	78.285	2.46	406		1.15						
191	78.340	2.36	263	78.333	2.04+	335	78.283	2.19	407		2.08						
192	78.335	2.50	264	78.310	1.70	336	78.285	2.65	408	78.323	2.65						
193	78.340	2.41	265	78.330	2.13	337		2.79+	409	78.310	2.45						
194	78.346	3.11+	266	78.326	1.91	338			410	78.315	2.44						
195	78.363	1.61+	267	78.330	1.83	339			411	78.300	2.24						
196	78.350	1.55	268	78.335	1.42	340	78.350	2.01+	412	78.300	2.30						
197	78.350	1.22	269	78.315	1.25	341		2.14	413	78.300	2.20						
198	78.330	2.38	270	78.315	1.63	342		0.98+	414	78.300	1.92						
199	78.340	2.30	271	78.290	1.56	343		0.61+	415	78.318	2.54						
200	78.343	2.10	272	78.300	1.78	344	78.310	1.86	416	78.316	2.23						
201	78.340	1.92	273	78.315	1.32	345	78.313	2.44	417	78.300	2.66						
202	78.335	1.84	274	78.315	1.71	346	78.310	2.52	418	78.316	2.72+						
203	78.335	1.99	275	78.323	1.85	347	78.310	2.40	419								
204	78.350	2.18+	276	78.325	2.05	348	78.290	2.84	420								
205			277	78.320	2.34	349	78.293	2.43	421	78.313	1.78+						
206	78.333	1.97	278	78.325	1.20	350	78.290	1.79	422	78.310	1.80						
207	78.340	1.88	279	78.328	3.09+	351		1.87	423	78.310	1.72+						
208	78.323	2.01	280			352	78.325	2.13	424								
209	78.338	1.39	281			353	78.310	2.50	425		1.27+						
210	78.318	2.10	282	78.320	2.40	354	78.300	2.53	426	78.316	2.10						
211	78.350	1.77	283	78.310	2.51	355	78.300	2.79	427	78.316	1.87						
212	78.335	1.94	284	78.318	2.25	356	78.293	2.25	428	78.313	2.40						
213	78.338	2.01	285	78.323	2.44	357	78.290	2.21	429	78.315	2.33						
214	78.333	1.96	286	78.330	2.51	358	78.290	1.71+	430	78.313	2.39						
215	78.333	2.00	287	78.326	2.29	359	78.326	1.92+	431	78.310	2.22						
216		2.54	288	78.333	2.47	360	78.335	2.43	432	78.310	2.11						



第408图 E区Hr-FA下水田 (南半)



第409圖 E区Hr-FA下水田 (北半)

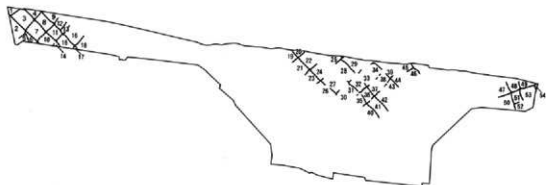


第410图 E区Hr-FA下水田区画名称

E区Hr-FA下水田計測表

標高m	面積m ²	標高m	面積m ²	標高m	面積m ²
73	78.42	1.52	145		
74	78.39	1.824+	146	78.4	
75	78.430	1.179+	147	78.38	1.67+
76	78.430	2.683+	148		
77	78.420	2.171	149		
78	78.430	2.048	150	78.420	1.573+
79	78.410	1.733	151	78.430	1.429+
80	78.420	1.467	152	78.430	2.480
81	78.400	1.835	153	78.420	2.043
82	78.410	1.547	154	78.400	1.520
83	78.4	1.973	155	78.430	1.941
84	78.37	1.851	156	78.410	1.621
85	78.42	2.304+	157	78.410	1.784+
86	78.41	1.104+	158	78.400	2.296+
87	78.395		159		1.285+
88	78.39		160		0.693+
89	78.39	2.8+	161	78.380	2.357+
90	78.36	1.9+	162	78.390	2.091
91			163	78.410	1.952+
92			164	78.380	1.611+
93		0.971+	165	78.400	0.971+
94	78.42	1.915+	166	78.410	0.576+
95	78.42	2.171+	167		
96	78.418	2.485	168	78.400	
97	78.42	2.037	169	78.390	0.901+
98	78.4	1.952	170		0.936+
99	78.41	1.36	171		
100	78.42	1.468	172	78.415	1.045+
101	78.41	1.611	173	78.420	1.218+
102	78.41	1.275	174	78.420	1.589
103	78.41	2.312	175	78.400	1.280
104	78.39	1.163	176	78.440	2.101
105	78.41	2.155	177	78.400	1.672
106	78.4	2.295	178	78.400	1.397
107	78.4	1.965	179	78.390	1.665
108	78.39	2.475+	180	78.370	1.68+
109	78.39		181		
110	78.4	0.53+	182		0.782+
111	78.38	1.67	183	78.400	0.661+
112	78.37	1.27+	184	78.380	1.835
113	78.4	0.73+	185	78.400	1.768
114	78.37	0.9+	186	78.390	1.627
115	78.38	2.37+	187	78.380	1.664
116			188	78.400	2.075+
117		0.379+	189	78.370	2.485+
118	78.43	1.493+	190	78.380	2.048+
119	78.43	1.552+	191	78.395	2.272+
120	78.43	1.312+	192		0.016+
121	78.43	2.347	193	78.415	1.136+
122	78.42	1.989	194	78.400	1.952+
123	78.39	2.432	195	78.395	4.469+
124	78.415		196	78.423	1.749
125	78.395	1.2+	197	78.415	1.360
126	78.39	1.131+	198	78.420	2.101
127	78.39	1.461+	199	78.400	1.461
128	78.39		200	78.400	1.168
129			201	78.370	1.755
130	78.36	1.67	202	78.380	1.8+
131	78.38	1.33+	203	78.400	2.171+
132			204	78.390	2.656+
133			205	78.390	2.155+
134	78.42	1.781+	206		0.752+
135	78.42	1.717	207	78.390	2.096
136	78.43	1.707	208	78.390	1.696
137	78.41	1.691	209	78.390	1.760
138	78.42	1.659	210	78.390	1.723
139	78.41	2.272	211	78.410	2.496
140	78.4	1.909	212	78.400	2.48+
141	78.4	2.059	213		0.581+
142	78.41	1.579+	214		
143	78.41	1.915+	215	78.400	0.997+
144	78.4	1.397	216	78.390	1.941+

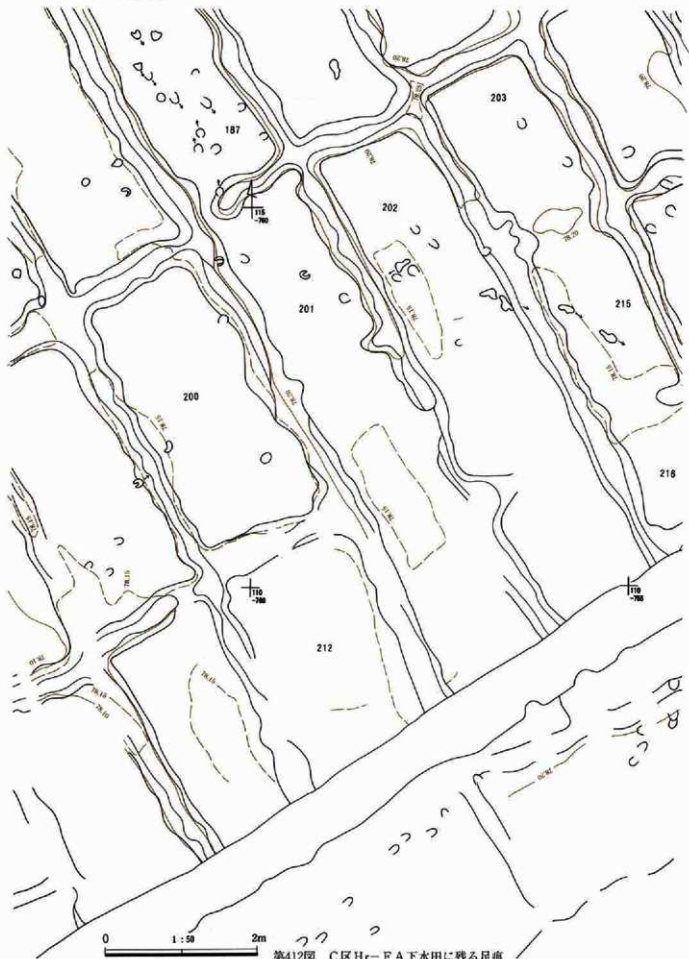
標高m	面積㎡	標高m	面積㎡	標高m	面積㎡	標高m	面積㎡	標高m	面積㎡					
217	78.410	1.429	238			259	78.390	2.058	280	78.395	2.144*	300	78.400	1.771
218	78.420	1.867	239			260	78.410	1.616*	281	78.400	1.701*	301	78.460	1.712
219	78.400	1.872*	240	78.450	1.659*	261	78.390	0.853*	282	78.400	0.875*	302	78.400	2.115
220	78.400	3.195*	241	78.410	1.344	262		0.416*	283	78.410	1.804*	303	78.380	1.553
221	78.420	1.761	242	78.400	1.376	263		0.236*	284	78.390	2.021	304	78.390	1.749*
222	78.420	2.400	243	78.430	1.961	264	78.410	1.776*	285	78.390	1.984*	305	78.430	1.563*
223	78.395	2.277	244	78.420	1.509	265	78.430	2.512*	286	78.410	1.066*	306	78.410	1.413*
224	78.390	0.992*	245	78.440	1.376	266	78.430	3.099	287			307	78.400	1.61*
225	78.390	1.691*	246	78.430	2.460	267	78.420	1.840	288	78.410		308	78.390	1.627*
226	78.410	1.541	247	78.440	1.940	268	78.410	2.261	289	78.430	4.117*	309		
227	78.390	1.664*	248	78.410	2.245	269	78.415	1.616	290	78.410	3.184*	310	78.420	1.611*
228			249	78.415	2.581*	270	78.400	1.952	291	78.440	2.616*	311	78.420	2.491
229		0.331*	250	78.410	1.349*	271	78.410	1.925	292	78.460	2.496*	312	78.400	2.379*
230		0.8*	251	78.410	2.181	272	78.430	2.480	293	78.440	1.616*	313	78.420	2.344*
231	78.380	1.445*	252	78.400	0.901	273	78.410	2.197	294	78.450	4.283	314	78.400	4.144*
232	78.400	2.304	253	78.375	2.795*	274	78.430	2.629	295	78.425	2.219*	315	78.420	2.128*
233	78.370	2.160	254	78.380	1.707*	275	78.410	2.240	296	78.410	3.237*	316	78.430	2.373*
234	78.360	1.973	255	78.400	1.717	276	78.390	1.445	297	78.400	1.717	317	78.420	2.656
235	78.390	1.781	256	78.400	1.861	277	78.405	1.786	298	78.410	2.021	318	78.420	2.352*
236	78.390	1.739*	257	78.400	2.064	278	78.400	1.685	299	78.410	2.154	319		1.256*
237	78.390	1.406*	258	78.400	2.347	279	78.410	1.264*						



第411図 C区・取付道D区Hr-FA下水田区画名称

C区・取付道 D区Hr-FA下水田計列表

標高m	面積㎡	標高m	面積㎡	標高m	面積㎡	標高m	面積㎡	標高m	面積㎡					
1	0.567*	12	78.450	0.794*	23	78.310	1.811*	34		44	0.773*			
2	78.450	1.904*	13	78.478	0.394*	24	78.300	1.498*	35	78.260	0.56*	45	78.320	0.576*
3	78.490	2.939*	14			25	78.320	0.923*	36	78.270	1.25	46		0.912*
4			15	78.430	1.851*	26			37	78.290	0.928*	47		1.568*
5			16	78.460	2.38*	27	78.310	1.967*	38		0.923*	48	78.330	1.36*
6	78.450	0.539*	17			28	78.300	2.683*	39		0.832*	49		1.376*
7	78.470	2.66	18	78.460	2.184*	29	78.300	1.579*	40		1.157*	50	78.360	2.773*
8	78.460	2.22	19		0.956*	30	78.310	1.024*	41	78.300	2.523*	51	78.330	0.98
9		0.981*	20	78.320	0.571*	31			42	78.310	1.66*	52		
10	78.44	1.776*	21		1.627*	32	78.295	1.52*	43		2.139*	53		0.987*
11		1.66	22	78.330	1.792*	33		0.32*						



第412図 C区Hr-FA下水田に残る足痕